

和田岩坪遺跡

— 和歌山平野農地防災事業 名草排水機場建設工事に伴う発掘調査報告書 —

2020年2月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

和田岩坪遺跡

— 和歌山平野農地防災事業 名草排水機場建設工事に伴う発掘調査報告書 —

2020年2月

公益財団法人 和歌山県文化財センター



調査遺構全景（真上上空から：モザイク写真）左側が北

序

和歌山市和田所在の和田岩坪遺跡は、和歌山県北部を西流する和田川の流れによって形成された低湿なラグーン性低地から小丘陵に挟まれた浅い開析谷に位置しています。

和田岩坪遺跡の北東側には神前遺跡や井辺遺跡など、東側には和田遺跡や和田Ⅱ遺跡などの弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が展開しています。遺跡の西側に位置する丈六山の山塊には和田古墳群が、北東に位置する福飯ヶ峯の山塊には井辺八幡山古墳を含む井辺前山古墳群が所在しており、集落と墓域の解明が期待されているところです。また、和田岩坪遺跡の立地する和田川周辺には、県内でも著名な河南条里・和田川条里が広がり、古代から中世にかけての開発史の中でも注目される地域の一つに挙げられます。

公益財団法人和歌山県文化財センターでは、和歌山平野農地防災事業 名草排水機場建設工事に伴い平成30年度に和田岩坪遺跡の発掘調査を実施しました。ここでは、弥生時代から鎌倉時代に断続的に続く生活遺構や自然流路（川）を発見し、往時の一景観を明らかにすることができました。

平成31年度（令和元年度）に出土遺物等整理業務を行い、このたびその成果をまとめることができましたので、発掘調査報告書として刊行する次第です。本書が県民の皆様のみなならず、広く一般の活用に資することができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の作成にあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に対し厚くお礼申しあげます。

令和2年2月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 櫻井敏雄

例言

- 1 本書は、和歌山県和歌山市和田に所在する和田岩坪遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、和歌山平野農地防災事業 名草排水機場建設工事に先立つもので、平成 30 年度に発掘調査業務を行い、同 31 年度（令和元年度）に出土遺物等整理業務を実施した。
- 3 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、近畿農政局の委託を受けた公益財団法人和歌山文化財センターが、和歌山県教育委員会の指導のもとに実施した。
- 4 発掘調査及び出土遺物等整理業務に要した経費は、近畿農政局が負担した。
- 5 現地調査に際し、近畿農政局和歌山平野農地防災事業所をはじめ、和歌山市・関係機関及び和田地区自治会・隣接する地元の方々から多大なご協力を得た。
- 6 発掘調査及び出土遺物等整理業務に際し、以下の方々からご助言を得た。記して、謝意を表す次第である。
大木 要（和歌山市）、大野左千夫（元和歌山市教育委員会）、佐々木由香（明治大学黒曜石研究センター）、西村 歩（歴史館いずみさの）、能城修一（明治大学黒曜石研究センター）、前田仁暉（京都大学大学院）、村上由美子（京都大学総合博物館）（所属は当時）
- 7 本書は、土井が執筆・編集した。但し、付章第 1 節は、能城修一、佐々木由香、村上由美子、前田仁暉氏に、第 2 節は金原美奈子に執筆して頂いた。
- 8 写真図版に使用した遺構写真及び遺物写真は、土井が撮影した。
- 9 発掘調査及び出土遺物等整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査・出土遺物等整理業務の調査組織は、以下に示すとおりである。

調査組織

事務局	平成 30 年度	平成 31 年度（令和元年度）
事務局長	井上 挙宏	井上 挙宏
事務局次長	———	寺本 就一
管理課長	井上 挙宏	井上 挙宏
埋蔵文化財課		
埋蔵文化財課長	丹野 拓	丹野 拓
発掘調査業務・出土遺物等整理業務担当		
副主査	土井 孝之	土井 孝之

凡例

- 1 遺構実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第 VI 系（世界測地系）に基づき、値は m 単位で使用している。また、図面に示した北方位は、座標北を示す。
- 2 遺構実測図の基準高は、東京湾標準潮位（T.P. +）表示である。
- 3 座標北は、磁北から 6° 54′ 13″ 東偏する。また、座標北は、真北から 0° 26′ 47″ 西偏する。
- 4 発掘調査及び整理作業で使用した調査コードは、以下のとおりである。
18-01・302 （2018 年度－和歌山市・和田岩坪遺跡）
出土遺物・記録資料の整理に当って、全て上記の調査コードを使用している。
- 5 本書における地区名及び遺構番号は、全て調査時のものをそのまま使用した。
- 6 本書の遺構・断面土層実測図は、特に縮尺を統一していないが、各々に明示している。
- 7 遺物番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。
- 8 遺物実測図の縮尺は、土器類は原則として 1/4 で、それ以外の場合は必要に応じて縮尺を明示している。遺物写真の縮尺は、特に統一していない。
- 9 調査時の土層の色調・土壌の粒径区分及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修 小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（2010 年版）を使用した。
土層名で 2 種類以上の記載のある場合は、前者が主体で、後者が副になることを示す。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 位置と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3節 既往の調査と文献史料	9
第3章 発掘調査の方法と資料整理	10
第1節 調査現場の記録作業等	10
1 遺構番号及び出土遺物登録番号	10
2 写真撮影作業	10
3 実測図作成作業	10
4 航空写真撮影・基準点測量	10
第2節 出土遺物等資料の整理	11
1 出土遺物応急整理	11
2 出土遺物等整理業務	11
第3節 調査区の設定	13
1 地区割	13
2 調査方法	14
第4章 調査成果	15
第1節 2区の調査成果	15
1 2区の調査概要	15
2 基本層序と遺構面	15
3 各遺構の調査成果	17
(1) 弥生時代前期の検出遺構	17
(2) 古墳時代の検出遺構	22
(3) 鎌倉時代の検出遺構	22
第2節 1区の調査結果	36
1 1区の調査概要	36
2 各遺構の調査成果	36
第5章 まとめ	56
出土遺物一覧	61
付章	
第1節 和田岩坪遺跡出土木材の樹種	75
第2節 和田岩坪遺跡における大型種実同定	85

写真図版 検出遺構・出土遺物

報告書抄録・奥付

挿図目次

図1 和歌山平野と周辺の地形分類図 ……………	3	図27 2区 出土遺物実測図1 ……………	33
図2 古墳時代の和歌山平野と和田岩坪遺跡の位置 ……	4	図28 2区 出土遺物実測図2 ……………	34
図3 和田岩坪遺跡と周辺の地形分類図 ……………	4	図29 2区 出土遺物実測図3 ……………	35
図4 和田岩坪遺跡と周辺の遺跡 ……………	6	図30 1-1区の基本層序(1自然流路: 調査区南壁断面土層) ……………	37
図5 区画割模式図(1km区画) ……………	13	図31 1-1区・1-2区 1自然流路第6層系堆積層内 遺物等検出・出土状況図 ……………	38
図6 調査位置と区画割(100m区画) ……………	13	図32 1-1区 調査区北壁断面土層図(1自然流路) ……	39
図7 調査範囲と地区割(4m区画) ……………	14	図33 1-2区の基本層序(1自然流路:調査区 南壁断面土層) ……………	40
図8 2-1区の基本層序(調査区南壁断面土層) ……………	15	図34 2-1区・2-3区 1自然流路東側肩口等 断面土層実測図……………	41
図9 調査遺構全体図 ……………	16	図35 1-1区 1自然流路第6層系堆積層内 篩状木杭列等実測図 ……………	42
図10 2-1区 12土坑実測図 ……………	17	図36 1-1区 1自然流路内 3木組み構造物実測図 ……	44
図11 2-3区 102・109土坑実測図……………	18	図37 1区 1・2自然流路出土遺物実測図 ……………	45
図12 2-3区 107土坑実測図 ……………	19	図38 1区 1自然流路出土遺物実測図1 ……………	46
図13 2-3区 147土坑実測図 ……………	20	図39 1区 1自然流路出土遺物実測図2 ……………	47
図14 2-3区 143溝実測図 ……………	21	図40 1区 1自然流路出土遺物実測図3 ……………	48
図15 2-1区 13区画溝、2-3区 112区画溝断面 土層実測図……………	23	図41 1区 1自然流路出土遺物実測図4 ……………	49
図16 2-1区 14・15土坑実測図 ……………	24	図42 1区 1自然流路出土遺物実測図5 ……………	50
図17 2-3区 123土坑実測図 ……………	25	図43 1区 1自然流路出土遺物実測図6 ……………	51
図18 2-1区 17土坑実測図 ……………	25	図44 1区 1自然流路出土石器・石製品実測図 ……………	52
図19 2-1区 16水溜実測図 ……………	26	図45 1区 1自然流路出土木器・木製品実測図1 ……	53
図20 2-3区 105土坑実測図 ……………	27	図46 1区 1自然流路出土木器・木製品実測図2 ……	54
図21 2-3区 144・148土坑実測図 ……………	28	図47 1区 1自然流路出土木製品実測図 ……………	55
図22 2-1区 63柱穴実測図 ……………	28	図48 土錘の法量分布 ……………	59
図23 2-3区 103溝断面土層実測図 ……………	29		
図24 2-1区 92土坑実測図 ……………	30		
図25 2-1区・2-2区 掘立柱柱穴実測図 ……………	31		
図26 2-2区の基本層序(調査区北壁・ 西壁断面土層) ……………	32		

表目次

表1 発掘調査・出土遺物等整理業務工程 ……………	2	表3 土錘法量計測値一覧 ……………	59
表2 和田岩坪遺跡と周辺の遺跡地名一覧 ……………	7		

写真目次

写真1 土壌検査のための試料採取 ……………	2	写真8 坂田遺跡出土の琴柱形石製品……………	8
写真2 1区 1自然流路掘削状況(北西から)…………	2	写真9 神前遺跡2011-7・8区(北東から) ……	9
写真3 現地公開の開催状況……………	2	写真10 1区 1自然流路遺物等出土状況図 作成状況……………	10
写真4 神前遺跡と和田岩坪遺跡遠景 (北北東から)……………	5	写真11 遺物の洗浄作業 ……………	11
写真5 神前遺跡出土の弥生土器……………	5	写真12 遺物への注記作業 ……………	11
写真6 和田遺跡と和田岩坪遺跡遠景(東から) ……	8	写真13 樹種同定のための切片採取作業 ……………	12
写真7 坂田遺跡と竈山神社(北から) ……………	8		

付章 図・表・写真目次

第1節

表1 和田岩坪遺跡出土木製品類と自然木の樹種…………… 80	写真3 和田岩坪遺跡出土木材の顕微鏡写真(3)…………… 83
写真1 和田岩坪遺跡出土木材の顕微鏡写真(1)…………… 81	写真4 和田岩坪遺跡出土木材の顕微鏡写真(4)…………… 84
写真2 和田岩坪遺跡出土木材の顕微鏡写真(2)…………… 82	

第2節

表1 和田岩坪遺跡における種実同定結果…………… 88	表2 和田岩坪遺跡におけるモモ核の計測値…………… 89
図1 モモ核の計測値分布…………… 89	写真1 和田岩坪遺跡の種実…………… 90

写真図版目次

巻頭写真図版 調査遺構全景(真上上空から:モザイク写真)	3	2-1区 B8v13 84 隅円方形状痕跡検出状況(北北東から)
写真図版1 調査地遠景・調査前の現況		写真図版8 検出遺構 2区
1 調査地遠景(北から)		1 2-1区 13区画溝完掘状況(北北東から)
2 1区 調査前の現況(北北東から)		2 2-1区 B8t・u16 13区画溝調査区南壁東西断面土層(北西から)
3 2区 調査前の現況(北北東から)		3 2-1区 B8s・t・u15 13区画溝東西断面土層(南南西から)
写真図版2 検出遺構 2区		4 2-3区 B8u11・12 112区画溝南北断面土層(東南東寄り東から)
1 2-1区 調査遺構全景(北北東寄り北上空から)		写真図版9 検出遺構 2区
2 2-1区 調査遺構全景(東北東から)		1 2-1区 B8r・s14 14・15土坑上層下位遺物等出土状況(東南東から)
3 2-1区 調査遺構全景(西北西から)		2 2-1区 B8r・s14 14・15土坑上層下位遺物等出土状況(北北東から)
写真図版3 検出遺構 2区		3 2-1区 B8r・s14 14・15土坑上半東西断面土層(南南西から)
1 2-3区 調査遺構全景(真上上空から)		4 2-1区 B8r・s14 14・15土坑下半東西断面土層(南南西から)
2 2-3区南半側 調査遺構全景(西北西寄り西から)		写真図版10 検出遺構 2区
3 2-3区北半側 調査遺構全景(北北東寄り北から)		1 2-1区 B8r・s16 16水溜硬化面完掘状況と調査区東壁断面土層(西北西から)
写真図版4 検出遺構 2区		2 2-1区 B8r・s16 16水溜調査区東壁断面土層(断ち割り後:西北西から)
1 2-3区南半東側 調査遺構全景(東南東から)		3 2-3区 B8s12 123土坑完掘状況(東から)
2 2-1区 B8s16 12土坑完掘状況と調査区東・南壁断面土層(北西から)		写真図版11 検出遺構 2区
3 2-1区 B8s16 12土坑北東-南西断面土層(北西から)		1 2-1区 B8x14・15 92土坑完掘状況(西北西から)
写真図版5 検出遺構 2区		2 2-1区 B8x14・15 92土坑南北断面土層(東南東から)
1 2-3区 B8q・r12 102・109土坑完掘状況(東南東寄り東から)		3 2-3区 B8s12 123土坑東西断面土層(南から)
2 2-3区 B8q・r12 109土坑に伴う標石か(東南東寄り東から)		4 2-1区 B8u14 63柱穴根石検出状況(南南西から)
3 2-3区 B8q・r12 109土坑東西断面土層(南から)		5 2-3区 B8s・t11 144土坑完掘状況(北北西寄り北から)
写真図版6 検出遺構 2区		6 2-3区 B8s・t11 144土坑南北断面土層(西南西寄り西から)
1 2-3区 B8s12 107土坑完掘状況(東南東から)		
2 2-3区 143溝完掘状況(北北東寄り北から)		
3 2-3区 B8s・t11 143溝東西断面土層(南南西寄り南から)		
4 2-3区 B8t12 143溝東西断面土層(南南西寄り南から)		
写真図版7 検出遺構 2区		
1 2-3区 B8s12 147土坑完掘状況(北東から)		
2 2-3区 B8s12 147土坑北東-南西断面土層(北西から)		

- 7 2-1区 B8s13・14 17 土坑完掘状況（南から）
- 8 2-1区 B8s13・14 17 土坑東西断面土層（南から）
- 9 2-3区 B8r10 103 溝南北断面土層（東寄り東南東から）
- 10 2-3区 B8s10 103 溝調査区西壁断面土層（東寄り東南東から）

写真図版 12 検出遺構 2区

- 1 2-2区 調査区全景（南東から）
- 2 2-2区 B8y16 調査区北壁断面土層（南南西から）
- 3 2-2区 B8y16 調査区西壁断面土層（東南東から）

写真図版 13 検出遺構 1区

- 1 1-1区・1-2区 調査地と周辺部の状況（北北東上空から）
- 2 1-1区 1 自然流路第6層系堆積層内 遺物等検出・出土状況（北北西寄り北から）
- 3 1-1区 1 自然流路第6層系堆積層内 遺物等検出・出土状況（南南西から）

写真図版 14 検出遺構 1区

- 1 1-1区 1 自然流路第6層系堆積層内 箒状木杭列等検出状況（西北西から）
- 2 1-1区 1 自然流路第6層系堆積層内 箒状木杭列等検出状況（東南東から）
- 3 1-1区 C8a12・13 1 自然流路第6層系堆積層内 箒状木杭列等検出状況細部（北北東から）

写真図版 15 検出遺構 1区

- 1 1-1区 調査区北壁断面土層（西南西から）
- 2 1-1区 B8v11・w10・11（調査区北東側） 調査区北壁断面土層細部（西南西から）
- 3 1-1区 C8a・b9（調査区北西側） 調査区北壁断面土層細部（南東から）

写真図版 16 検出遺構 1・2区

- 1 2-3区 B8v11 1 自然流路東肩口調査区北壁断面土層細部（南南西から）
- 2 1-1区 C8a・b14 調査区南壁上半部断面土層細部（北北東から）
- 3 1-1区 C8a・b14 1 自然流路 調査区南壁下半部断面土層細部（北北東から）

写真図版 17 検出遺構 1区

- 1 1-1区 C8b12 中央～南半 1 自然流路第6層系堆積層下端6-3内遺物等出土状況（北北東から）

- 2 1-1区 C8b11 南端 1 自然流路第6層系堆積層内 3木組み構造物 検出状況（東南東から）
- 3 1-1区 C8b11 南端 1 自然流路第6層系堆積層内 3木組み構造物 杭断ち割り状況（東南東から）

写真図版 18 検出遺構 1区

- 1 1-1区 C8a10 南端 1 自然流路第6層系堆積層内 農具W8出土状況（東から）
- 2 1-1区 C8a・b11 南端 1 自然流路第6層系堆積層内 建築部材W16出土状況（南東から）
- 3 1-1区 C8a13 北東半 1 自然流路第6層系堆積層内 建築部材W17出土状況（北北西から）

写真図版 19 検出遺構 1区

- 1 1-1区 C8a10 西側法面 1 自然流路第6層系堆積層内 遺物等出土状況（東から）
- 2・3 1-1区 B8y11 北東隅 1 自然流路第6層系堆積層内 土木材W23 検出状況（南東から）
- 4 1-1区 C8a12 中央EWトレンチ南壁断面土層（手前、基盤層断ち割り）（北北東寄り北から）

写真図版 20 検出遺構 1区

- 1 1-2区 1 自然流路第6層系堆積層内 遺物等出土状況（西北西から）
- 2 1-2区 B8w10 調査区南壁断面土層細部（北北東から）
- 3 1-2区 B8w9 南東隅 1 自然流路第6層系堆積層内 農具W1出土状況（北北西から）

写真図版 21 2-1区・2-2区・2-3区 遺構他出土遺物

写真図版 22 2-1区 遺構出土遺物 1

写真図版 23 2-1区 遺構出土遺物 2

写真図版 24 1区 1・2 自然流路出土遺物

写真図版 25 1区 1 自然流路出土遺物 1

写真図版 26 1区 1 自然流路出土遺物 2

写真図版 27 1区 1 自然流路出土遺物 3

写真図版 28 1区 1 自然流路出土遺物 4

写真図版 29 1区 1 自然流路出土石器・石製品

写真図版 30 1区 1 自然流路出土木器・木製品 1

写真図版 31 1区 1 自然流路出土木器・木製品 2

写真図版 32 1区 1 自然流路出土木製品

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

排水機場及び排水路は、和田川流域（和歌山市）や貴志川流域（紀の川市）などの各小河川流域の大
雨等による湛水被害から農地を守り、地域農業の発展のため建設され機能している。和歌山市和田に位
置する現有の名草排水機場は、平成元年度～同3年度にかけて建設され、隣接する名草川から和田川へ
の排水機能を担っている。

和田川流域には、名草排水機場の他、上流側に岡崎排水機場、米田排水機場が、排水路として名草排水路、
米田排水路、中溝安原支線水路などが機能しており、近年の流域内の宅地開発などによる排水流出量の
増加により、降雨時には排水能力が不足し、農地等の湛水被害が生じている。このため、近畿農政局和
歌山平野農地防災事業所は、排水機場及び排水路の改修・新設を行い、湛水被害を未然に防止、または
軽減する目的で農業生産の維持及び農業経営の円滑化を進めている。

このような役目を担って近畿農政局和歌山平野農地防災事業所では、和歌山平野農地防災事業の一環
として、今回、この名草排水機場施設の老朽化と排水能力の改善向上を目的として、現有の施設の東側
隣接地に新しい排水機場を建設する名草排水機場建設工事が計画されたが、その事業予定地が埋蔵文化
財包蔵地「和田岩坪遺跡」（図4の302）内に位置するため、平成29年8月21日付け29近和第226号で
近畿農政局和歌山平野農地防災事業所長により、和歌山県教育委員会へ文化財保護法第94条第1項の規
定に基づく通知が行われ、これに対し、平成29年9月4日付け文第04050002号の（58）で確認調査を必
要とする旨の通知を和歌山県教育委員会が行った。

以上を受けて、平成30年1月18日付け29近和第226号－2で近畿農政局和歌山平野農地防災事業所
長より和歌山県教育委員会に発掘調査の依頼があり、平成30年2月20日付け文第04060004号の（24）で
和歌山県教育委員会がこれを受諾し、和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課（以下、県文化遺産課）で
名草排水機場建設工事に伴う第1次確認調査が平成30年3月時点で試掘調査が可能な範囲について、平
成30年3月26日～3月27日に実施された。引き続き、平成30年4月4付け近和第16号で近畿農政局
和歌山平野農地防災事業所長より和歌山県教育委員会に発掘調査の依頼があり、平成30年5月16日付
け文第05140004号の（3）で和歌山県教育委員会がこれを受諾し、県文化遺産課で名草排水機場建設工
事に伴う第2次確認調査が平成30年6月11日～6月12日に実施された。

その結果、和歌山県教育委員会により事業予定地について記録保存目的の本発掘調査が必要と判断さ
れた。そこで、和歌山県教育委員会の指導のもと、当文化財センターが「平成30年度 和歌山平野農地
防災事業 名草排水機場建設工事に伴う和田岩坪遺跡発掘調査委託業務」として近畿農政局よりこれ
を受託し、本発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過（表1、写真1～3）

発掘調査は、工事請負方式で実施し、「和歌山平野農地防災事業 名草排水機場建設工事に伴う和田岩
坪遺跡発掘調査工事」として福興建設株式会社に、基準点測量及び航空写真測量は「和歌山平野農地防
災事業 名草排水機場建設工事に伴う和田岩坪遺跡発掘調査業務に係る航空写真測量・基準点測量委託
業務」として有限会社ヤマニシに再委託して実施した。

発掘調査工事は、平成30年10月22日より現地の準備作業を開始し、同時に一般社団法人和歌山県薬

表1 発掘調査・出土遺物等整理業務工程

業務	年度	平成30年度(2018年度)												平成31・令和元年度(2019年度)											
	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
発掘調査	工程	契約期間																							
		発掘期間																							
出土遺物等整理 報告書印刷期間含む														契約期間											
														業務期間											

剤師会による土壌検査のための土壌試料採取(写真1)を行い、その後、平成31年1月18日付けで掘削排土置き場を確保するため当初の区画割を変更して調査を進めた。調査対象地の遺構面は1面で、1-1区・1-2区を平成30年12月19日にラジコンヘリコプターを使用して航空写真測量を行った。2-1区を第2回目として平成31年1月29日に、2-3区を第3回目として平成31年2月21日に航空写真測量を実施した。調査記録作業の終了後に埋め戻しを行い、平成31年3月6日に現地での調査を終了した。本調査面積は、921.0㎡である。



写真1 土壌検査のための試料採取



写真2 1区 1自然流路掘削状況(北西から)

また、現地での発掘調査と併行して、当文化財センターの事務局整理棟で出土遺物の応急整理作業(主に出土遺物洗浄作業)を行った。

この他、普及活動として、周辺住民の方々を対象とした現地公開(説明会)を平成31年2月2日(土)に実施し、2-1区を中心として本遺跡の調査内容及び出土遺物の説明等を行った。当日は好天に恵まれ、76名の参加者を得た(写真3)。

また、平成31年2月4日(月)には、地元の和歌山市立三田小学校5年生68名、6年生59名と引率の先生方の見学を受け入れ、学級毎に説明を行った。



写真3 現地公開の開催状況

第2章 位置と環境

第1節 位置と地理的環境 (図1～3)

和田岩坪遺跡 (図4の302) は、和歌山市和田小字岩坪に所在し、現行の行政的な遺跡範囲 (『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』2007年) は、東西約150m、南北約330mに広がる。

和歌山市は、和歌山県の北西部に位置し、北は大阪府との府県境となる和泉山脈が東西に延びる。その麓には大台ヶ原を源流とする紀の川が西流し、和歌山市の西部で紀伊水道に注いでいる。

紀の川北岸で中央構造線が東西に横断し、この断層によって北側の内帯と南側の外帯とに分けられる。内帯は、砂岩・泥岩の互層からなる和泉層群であり、当遺跡が位置している外帯は結晶片岩を主体とする三波川変成帯で構成されている。

和田岩坪遺跡は、紀の川南岸の和歌山平野南東部の和田盆地縁辺部に位置し、和歌山市山東地区から西流する和田川により形成された低湿なラグーン性低地から小丘陵に挟まれた浅い開析谷に立地する。和田盆地はかつての構造運動によって生じた溺れ谷で、周囲の独立丘陵は、地盤の沈降が生じる以前の山頂部である。また、和田盆地は、縄文海進時には湾となっていたと推測され、紀の川本流の堆積作用は及ばず三角州下位面となり、長期間入江であったと推測される。

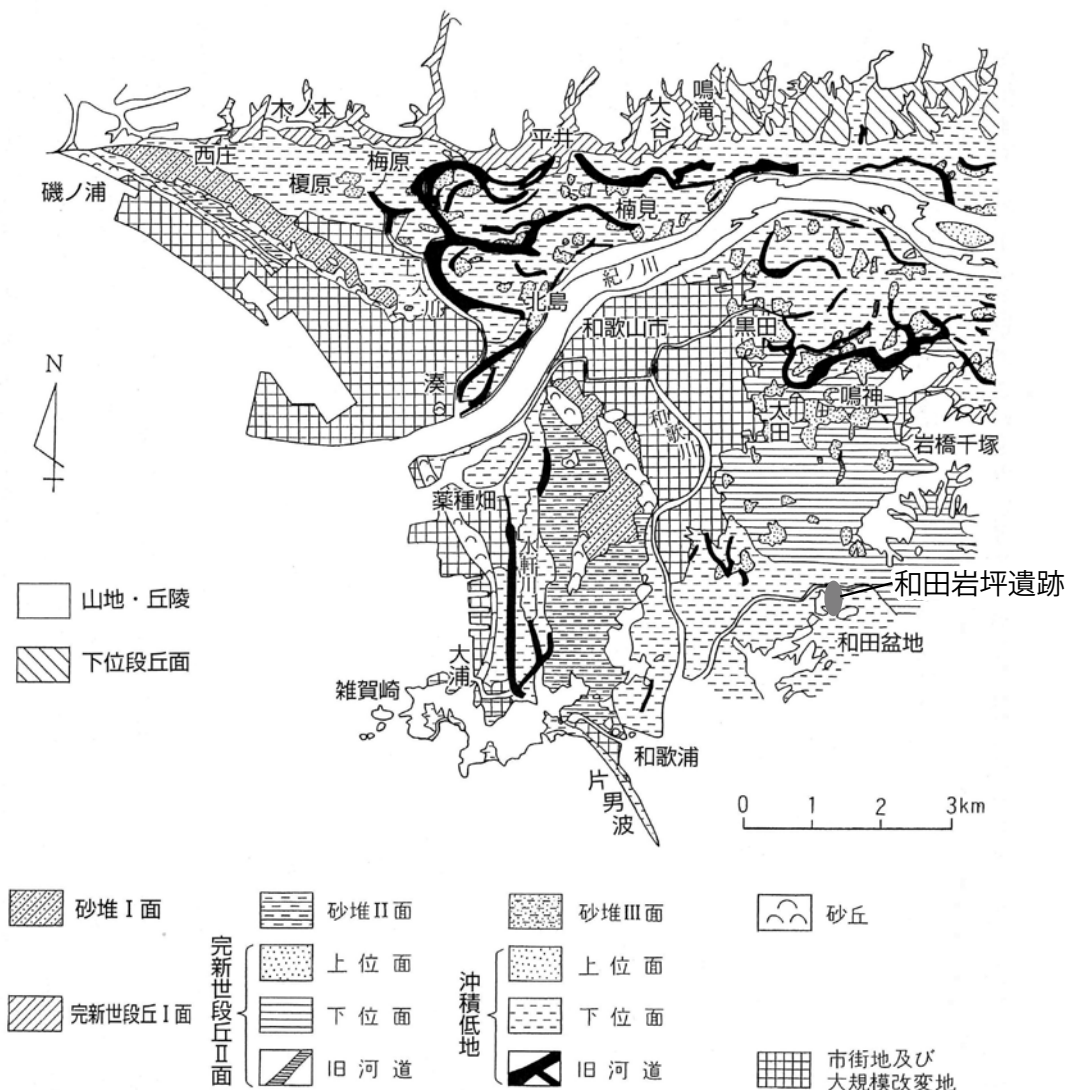


図1 和歌山平野と周辺の地形分類図 (出典1を一部改変)

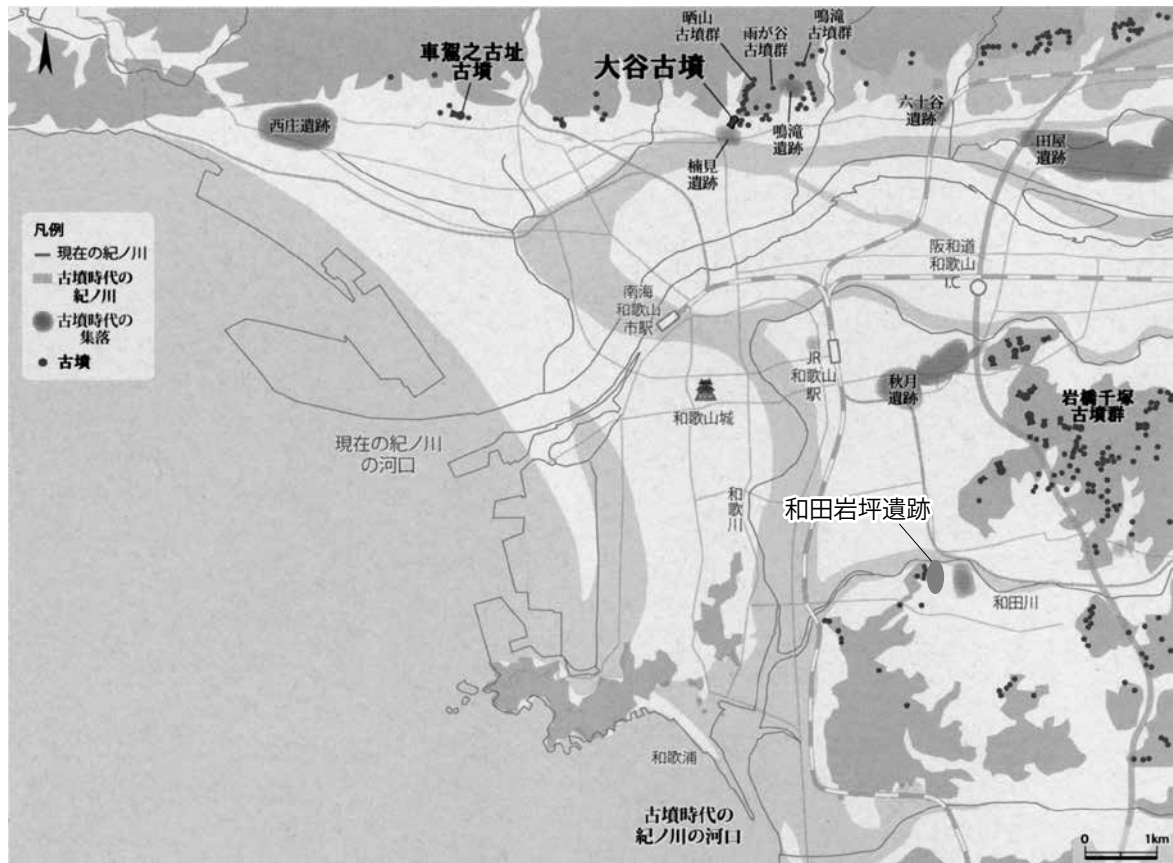


図2 古墳時代の和歌山平野と和田岩坪遺跡の位置 (出典2を一部改変)

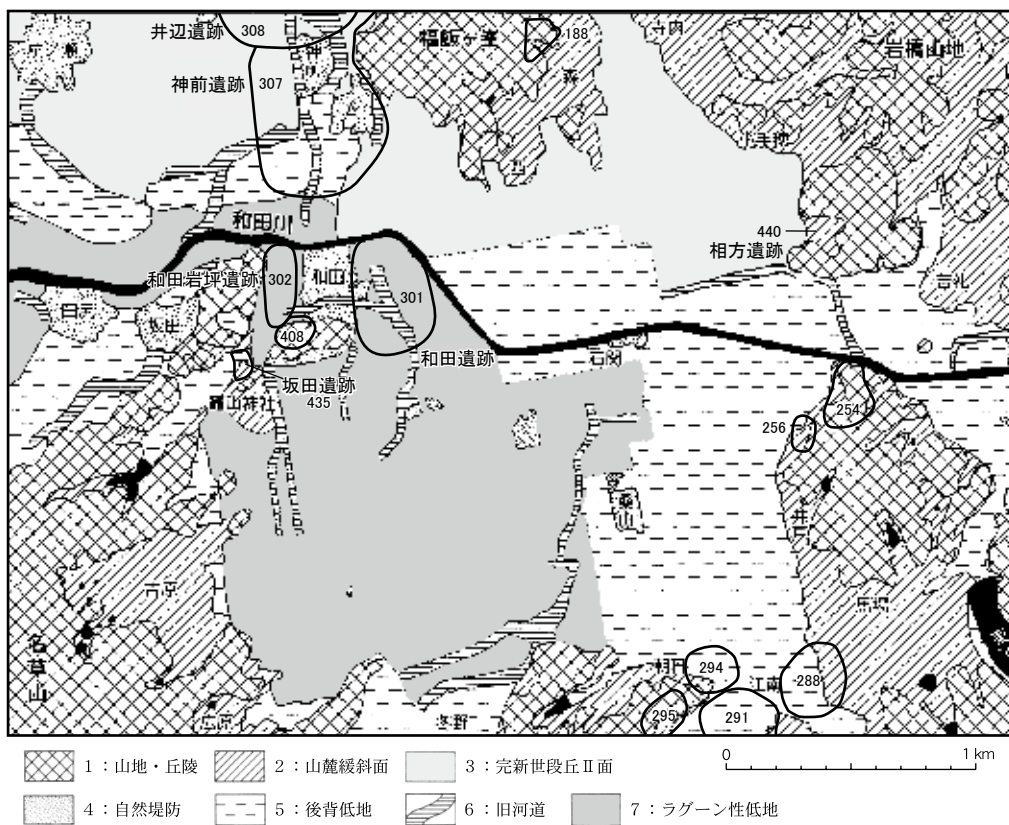


図3 和田岩坪遺跡と周辺の地形分類図(1:30,000) (出典3を一部改変)

今回の調査地は、周知の和田岩坪遺跡の範囲の北端に位置しており、調査地西側には、名草山（228.7 m）の支脈の丈六山（北端は「べつち山」「ベトチャマ」（32.1 m）と称される）を背負い、南東側には雨霧山（アマギリサン）（24.4 m）を望む。調査地の北側に隣接して古墳時代に起源をもつ宮井用水の支線坂田水路が西流する。また、周辺一帯は河南条里（和田条里区）が良好に残り、小字名にも当時の地割名や坪名が残る。調査地周辺の現況は、宅地化が進むが遺跡の南側には水田や畑地が一面に広がっている。

第2節 歴史的環境（図4、表2、写真4～9）

和田岩坪遺跡（302）が所在する紀の川南岸の和歌山平野南東域には、国の特別史跡である岩橋千塚古墳群（185）をはじめ、周辺の丘陵に多くの古墳群が所在する。また、丘陵麓部から平野部にかけては弥生時代以後の集落や古墳など多くの遺跡が展開している。以下、周辺の遺跡について概観する。

縄文時代 縄文時代には、低丘陵の裾部に貝塚が形成される。主な遺跡としては、禰宜貝塚、鳴神貝塚（317）、吉礼貝塚、岡崎縄文遺跡（309）などが挙げられる。岡崎縄文遺跡では、縄文時代後期～晩期の土器や石鏃・石匙・磨製石器・石錘などが出土し、ハマグリを主とした貝層とその下にカキのみの貝層が確認されている。また、鳴神貝塚は近畿地方で初めて確認された貝塚で、昭和6年に国の史跡に指定されており、縄文時代晩期の土壙墓からは抜歯された女性の伸展葬人骨が確認されている。

弥生時代 弥生時代には前期から中期にかけて紀の川南岸の沖積平野部で多くの遺跡が展開する。主な遺跡は、JR和歌山駅東側に所在する太田・黒田遺跡（327）をはじめ、秋月遺跡（331）、井辺遺跡（308）、神前遺跡（307）、和田遺跡（301）などがある。太田・黒田遺跡では、弥生時代前期から中期にかけての竪穴建物跡などが多数検出されている。また、県内最大級の弥生時代の集落跡と考えられている。遺物は、多量の弥生土器と共にシカや高床建物を線刻した絵画土器、また、遺跡東側の河川改修工事に伴い外縁付紐式1式四区袈裟襷文銅鐸も出土している。

和田岩坪遺跡の北東側に位置する神前遺跡（写真4・5）では、弥生時代前期から中期にかけての10条以上の平行する溝や土坑が検出されている。複数の平行する溝は、地形の起伏に沿って北北東側から南西方向に延び、水路の機能をもつものと考えられている。

一方、弥生時代中期後葉から後期前半にかけては、平野部での遺跡の展開が激減し、周辺部の丘陵部で滝ヶ峯遺跡や橘谷遺跡などの高地性集落が見られるようになる。弥生時代後期後半になると、再び平野部で集落が見られるようになり、太田・黒田遺跡と和田岩坪遺跡の間には、秋月遺跡、津秦遺跡（332）、津秦Ⅱ遺跡（407）、井辺遺跡、神前遺跡などが存在する。また、東側には和田遺跡が存在する。多くの遺跡では、



写真4 神前遺跡と和田岩坪遺跡遠景（北北東から）



写真5 神前遺跡出土の弥生土器

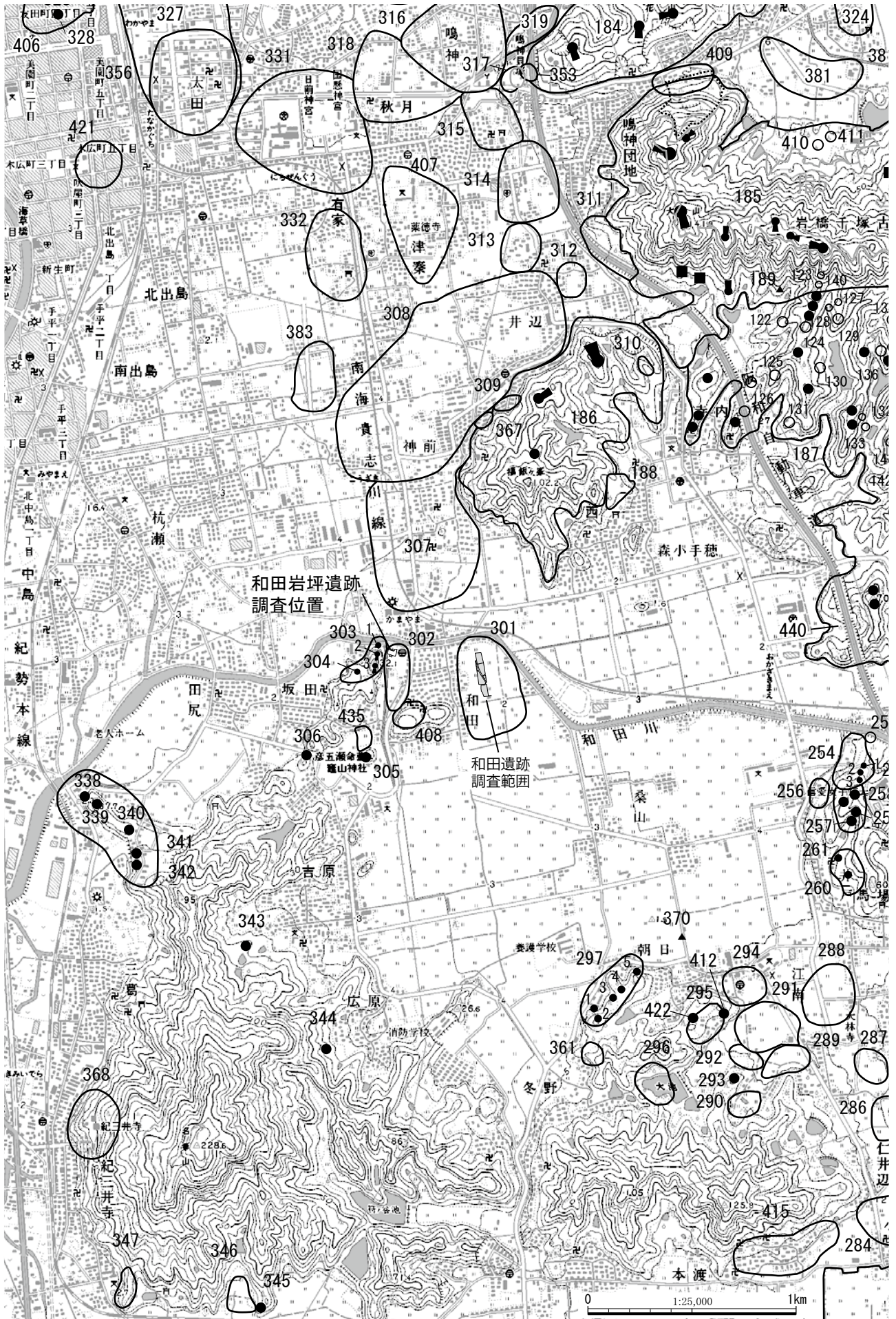


図4 和田岩坪遺跡と周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	立地	摘要
184	花山古墳群	鳴神・岩橋・栗栖	古墳群	古墳	山腹	前方後円墳9基、円墳89基からなる
185	岩橋千塚古墳群	岩橋・鳴神・井辺・寺内	古墳群	古墳	山腹	前方後円墳13基、方墳4基、円墳455基からなる
186	井辺前山古墳群	井辺・岡崎・寺内・神前・西・森小手穂	古墳群	古墳	山腹	前方後円墳15基、円墳60基からなる
187	寺内古墳群	寺内・森小手穂・吉礼	古墳群	古墳	山腹	円墳33基からなる
188	森小手穂遺跡	森小手穂	散布地	古墳～中世	丘陵	須恵器、土師器、瓦等
189	寺内ナイフ形石器出土地	寺内	出土地	旧石器	丘陵	横剥ナイフ形石器
252・253	千石山古墳群	井戸	古墳群	古墳	丘陵	円墳4基
254	菖蒲谷遺跡	井戸	散布地	弥生～古墳	丘陵	方形周溝墓、台状墓、土師器、須恵器
256	千石山遺跡	井戸	散布地	弥生	丘陵斜面	弥生土器
257～259	井戸古墳群	相坂	古墳群	古墳	丘陵	円墳3基
260	馬場古墳群	相坂	古墳群	古墳	丘陵	2基
261	馬場遺跡	相坂	散布地	弥生	丘陵斜面	弥生土器
284	仁井辺遺跡	小瀬田	散布地	古墳	平地	土師器、須恵器
286	粟勝寺遺跡	粟勝寺	散布地	弥生	台地	弥生土器(壺、高坏)、石斧
287	松原I遺跡	松原	散布地	古墳?	丘陵端	土師器、須恵器
288	松原II遺跡	松原	散布地	古墳?	丘陵	土師器、須恵器
289	粟師谷遺跡	江南	散布地	縄文～江戸	丘陵	縄文土器、石鏃
290	江南遺跡	江南	散布地	古墳	丘陵	須恵器、土師器、瓦
291	曾垣田遺跡	江南	散布地	古墳～鎌倉	丘陵端	土師器(壺、甕、鉢)、須恵器、黒色土器、瓦器
292	曾垣田II遺跡	江南	散布地	古墳?	丘陵端	土師器
293	曾垣田古墳	江南	古墳	古墳	丘陵端	箱式石棺群
294	城の前II遺跡	朝日	散布地	古墳、中世?	丘陵端	須恵器、瓦器
295	城の前I遺跡	朝日	古墳、散布地	古墳	丘陵端	円墳か、土師器、黒色土器、須恵器、ガラス玉
296	大池遺跡	朝日	散布地	中世?	池畔	瓦器、土師器、播鉢、大池の西～南沿岸
297	赤津古墳群	朝日	古墳群	古墳	丘陵	5基からなる
298	吉礼貝塚	吉礼	貝塚	縄文	丘陵麓	貝類(ハマグリ、カキ、ハイ貝等)、縄文土器、土製耳飾、石器(石匙、石鏃、石錘、石斧)、獣骨
301	和田遺跡	和田	散布地	弥生～奈良	沖積地	掘立柱建物、井戸、土坑、土坑列、溝、弥生土器、土師器、須恵器、石器(石鏃、石庖丁)・石製品、木製品
302	和田岩坪遺跡	和田	散布地	弥生～古墳 鎌倉	沖積地	弥生土器、土師器、須恵器、土師器、瓦器、石器、木製品
303・304	和田古墳群	和田	古墳群	古墳	丘陵	4基
305	竈山神社古墳	和田	古墳	古墳	丘陵	円墳
306	坂田地蔵山古墳	坂田	古墳	古墳	丘陵	円墳?、横穴式石室、直刀、須恵器
307	神前遺跡	神前	集落跡 用水路	弥生～江戸	沖積地	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦、石器(石鏃、石庖丁、石斧)、紡錘車
308	井辺遺跡	井辺・神前	集落跡 墳墓	弥生～古墳	沖積地	竪穴建物、土坑、溝、前方後方形周溝墓、方形周溝墓、自然流路、弥生土器、土師器、須恵器、各種木製品
309	岡崎縄文遺跡	井辺	散布地	縄文	丘陵端	縄文土器、石器多数
310	森小手穂埴輪窯跡	森小手穂	窯跡	古墳	山麓	埴輪(円筒、形象)
311	大日山I遺跡	井辺	集落跡	古墳～奈良	丘陵端	竪穴建物、掘立柱建物、土師器(壺、小型壺、甕、高坏、坏、甗)、須恵器(坏、高坏)、鳥形土器、滑石製勾玉、有孔円板
312	井辺I遺跡	井辺	散布地	弥生～古墳	平地	弥生土器、土師器
313	井辺II遺跡	井辺	散布地	弥生～古墳	平地	弥生土器、土師器、須恵器
314	鳴神II遺跡	鳴神	用水路跡	弥生～平安	平地	弥生土器、土師器、須恵器、木製品
315	鳴神III遺跡	鳴神	散布地	弥生	平地	土師器、須恵器
316	鳴神IV遺跡	鳴神	散布地	弥生～江戸	平地	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶磁器、土師器、瓦、製塩土器
317	鳴神貝塚	鳴神	貝塚、墓	縄文～弥生	丘陵麓	縄文土器、骨製品、人骨、弥生土器
318	鳴神V遺跡	鳴神	集落跡 墳墓	弥生～平安	平地	竪穴建物、掘立柱建物、方形周溝墓、水田状遺構、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶磁器、耳環、硯、滑石製模造品(勾玉、白玉)
319	音浦遺跡	鳴神	集落跡	古墳	平地	竪穴建物、掘立柱建物、溝、土師器(壺、小型壺、甕、高坏、坏、甗)、有孔円板、須恵器(壺、高坏、坏、甗)、石製紡錘車
324	高橋神社遺跡	岩橋	散布地		平地	土師器
327	太田・黒田遺跡	太田・黒田	集落跡	弥生～江戸	沖積地	竪穴建物、土師器、溝、弥生土器(壺、甕、高坏、鉢、器台等多量)、石器(石鏃、石庖丁、石錘、石斧等)、外縁付紐I式四区袈裟文銅鐸
328	吉田窯跡	吉田	窯跡	奈良	沖積地	土師器、須恵器
331	秋月遺跡	秋月	墳墓・古墳・ 屋敷地	弥生～江戸	沖積地	前方後円形周溝墓、方形周溝墓、円形周溝墓、土師器、井戸、土坑、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦、滑石製勾玉・白玉、ガラス小玉
332	津秦遺跡	津秦	散布地	弥生	沖積地	弥生土器、サスカイト
338	アンドの鼻古墳	三葛	古墳	古墳	丘陵	組合式石棺、土師器(壺)
339～342	三田古墳群	三葛	古墳群	古墳	丘陵	4基
343	吉原古墳	吉原	古墳	古墳	丘陵	前方後円墳?
344	広原古墳	広原	古墳	古墳	丘陵	円墳、横穴式石室
345	内原古墳	内原	古墳	古墳	丘陵	円墳、土師器
346	内原遺跡	内原	散布地	古墳	丘陵	土師器
347	名草貝塚	紀三井寺	貝塚	弥生～	丘陵	弥生土器、土師器、須恵器、土師器、石錘、貝類(ハマグリ、バイ貝、アサリ、オキシジミ等)
353	興徳寺跡	鳴神	寺院跡	中世	花山丘陵の 南西斜面	瓦、宝篋印塔、五輪塔
356	太田城跡	太田	城館跡	安土桃山	沖積地	土塁、堀、土師器、陶磁器、鉄砲弾
361	冬野遺跡	冬野	散布地	中世	丘陵麓	土師器(坏、皿)、土師質土器(カマド、土釜)
367	井辺III遺跡	井辺	散布地	縄文	丘陵麓	縄文土器
368	紀三井寺遺跡	紀三井寺	寺院跡		丘陵斜面	
370	朝日石棺出土地	朝日	出土地	弥生	平地	石棺
381	岩橋II遺跡	岩橋	散布地	古墳～室町	平地	サスカイト、土師器、須恵器、瓦器
383	神前II遺跡	神前	散布地	古墳～室町	沖積地	土師器、須恵器、土師器、土師器
406	友田町遺跡	友田町	集落跡?	弥生～平安	沖積地	溝、須恵器、土師器、黒色土器
407	津秦II遺跡	津秦	散布地	古墳～奈良	沖積地	土師器、須恵器
408	和田II遺跡	和田	集落跡?	弥生	丘陵	溝状遺構、弥生土器
409	岩橋III遺跡	岩橋	散布地	平安、江戸	丘陵端	土坑、小穴群、土師器、黒色土器
412	城ノ前1号墳	朝日	古墳	古墳	丘陵	円墳、周溝状遺構、横穴式石室、須恵器、土師器、黒色土器、土釜
415	本渡遺跡	本渡	散布地	古墳～平安	丘陵裾	須恵器(甕、壺、高坏)
421	木広町遺跡	木広町	散布地	弥生	沖積地	弥生土器(穿孔壺)
422	朝日蔵骨器出土地	朝日	墳墓	奈良	山腹	須恵器壺(蔵骨器)、短頸壺(外容器)
435	坂田遺跡	坂田	集落跡	弥生～室町	沖積地	掘立柱建物、土坑、井戸、溝、弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、陶磁器、琴柱形石製品、勾玉、有孔円板

遺跡内での調査履歴有り

和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地地名表』2007年3月31日
発行を一部改変・補筆

弥生時代後期後半から終末期にかけて再び遺構・遺物が認められ、古墳時代前期に継続して集落が展開する。

井辺遺跡では、遺跡範囲の北東側で弥生時代後期後半から古墳時代前期を主体とした竪穴建物跡・周溝墓が多数検出され、居住域の南東端（丘陵裾）を這う位置に自然流路が存在する。また、複数の居住域の間を縫うように西側中央位置で大量の土器・木器・木製品が埋没した自然流路が検出されている。

古墳時代 古墳時代には、岩橋千塚古墳群（185）を始め、多くの古墳群が形成される。また、古墳時代の集落遺跡として音浦遺跡（319）、鳴神Ⅱ遺跡（314）、鳴神Ⅴ遺跡（318）、大日山Ⅰ遺跡（311）、秋月遺跡、井辺遺跡、神前遺跡、和田遺跡（写真6）があり、和田岩坪遺跡の南側には坂田遺跡（435・写真7）が展開する。

岩橋千塚古墳群は、岩橋山塊に築かれた古墳群で各支群を含めて総数は数百基に及ぶものとされている。古墳の築造は、4世紀後半から7世紀前半まで継続し、6世紀の主要な石室の構造は岩橋型石室とよばれる横穴式石室に石柵や石梁をもつものが見られる。和田岩坪遺跡の今回の調査地から北東側に約1.5kmには、岩橋千塚古墳群の一支群と位置付けられる井辺前山古墳群（186）が形成される。鳴神Ⅴ遺跡では、竪穴建物跡や掘立柱建物跡の他、大規模な溝が検出されている。また、音浦遺跡においても大規模な溝が検出され、和歌山平野を灌漑する現在の宮井用水路に平行するように掘削されていることから宮井用水路の起源と考えられている。秋月遺跡では、遺跡の東半側で居住域がみられ、西半側で墓域が確認され、県内最古の前方後円墳形低墳丘墓が検出されている。和田岩坪遺跡の今回の調査地から南側約500mには竈山神社が鎮座し、和歌山県唯一の陵墓される「彦五瀬命墓」竈山神社古墳（305）が所在する。この竈山神社に隣接する北側には坂田遺跡（写真7）が所在し、古墳の存在を示唆する琴柱形石製品（写真8）が出土している。平成25年度の和歌山市文化スポーツ振興財団の調査で、その存在を裏付けるように古墳時代中期後半の古墳周溝が見つかった。

また、和田岩坪遺跡の調査地の西側に隣接する名草山の支脈の丈六山（北端は「べつち山」「ベトチャマ」と称される）には、和田古墳群（303・304）が、南西側に約600m離れて坂田地蔵山古墳（306）が、南西側に約1.5km離れてアンドの鼻古墳（338）・三田古墳群（339～342）が形成されている。



写真6 和田遺跡と和田岩坪遺跡遠景（東から）



写真7 坂田遺跡と竈山神社（北から）



写真8 坂田遺跡出土の琴柱形石製品

古代 古代の遺跡としては、鳴神V遺跡、太田・黒田遺跡、薬勝寺廃寺が見られ、日前宮・国懸宮、竈山神社が創建される。鳴神V遺跡では、奈良時代から平安時代の官衙の存在を窺わせる円面硯や初期貿易陶磁器、緑釉陶器などが出土している。また、太田・黒田遺跡では奈良時代の井戸が検出され和銅開珎 42 枚、万年通寶 4 枚が出土している。日前宮は紀伊国一宮として『延喜式神名帳』にその名が見られ、日前宮より南側一帯には、河南条里と呼ばれる条里型地割が良好に残り、地割方位はN-5° ~ 6.5° -W である。

中世 中世以降にも、太田・黒田遺跡、秋月遺跡、鳴神V遺跡などで遺構や遺物が見られる。神前遺跡では、掘立柱建物跡が検出されている。また、幅約 7 m 以上の大溝（写真 9 矢印）が検出されており、現在の宮井用水路に重複するように掘削されていることから、宮井用水路が整備された当時のものと考えられている。秋月遺跡では、瓦積みの井戸が検出されている。太田・黒田遺跡の南側には、太田城の推定地（356）があり、幅 10 m、深さ 3 m を測る 16 世紀の壕状の遺構が検出されて



写真 9 神前遺跡 2011-7・8 区（北東から）

いる。また、天正 13 年（1585 年）の羽柴秀吉による太田城の水攻め時の堤と考えられるものがわずかに残っている。

近世 近世には、和田周辺は和田村と呼ばれるようになり、宮組に所属する。

神前遺跡では、屋敷地跡と考えられる区画溝や土坑・暗渠排水溝が検出されている。太田・黒田遺跡では、太田城の名残とされる石垣や、耕作地として利用されていたと考えられる鋤溝群が見られる。和田遺跡の西側には静火神社跡があり、初見は『延喜式神名帳』に見える。その後、文献史料に永仁年間に廃絶したとされているが、長享元年（1487 年）に静火神社の名が見られる。また、『南紀徳川史』に静火社旧地とみえ、享保 8 年（1723 年）までに廃絶したと推測される。

第 3 節 既往の調査と文献史料

和田岩坪遺跡は、昭和 31 年の名草川改修に伴う発見に端を発し、さらに今回の調査対象地の北西側隣接地において、昭和 56 年（1981 年）に駐車場用地造成工事に伴い和歌山市教育委員会が小規模な調査を行い、土器溜り、土坑、礫敷き遺構などが検出されている。

その他、文献史料では、林家所蔵文書の大治 2 年（1127 年）「紀伊国在庁官人等解案」に日前宮領であった和田川の塩入常荒田を開発するため、40 町余の塩除堤を築造した記録が見られる。このように、和田川周辺域は、平安時代後期に大規模な整備が行われ、水田耕作地として利用されたと推測される。また、宮井用水路は長承元年（1132 年）の文書『古名草堰』で「綾井」・「国衙堰」といわれ、初見は、鎌倉期の元享元年（1311 年）の『歓喜寺文書』に見られる。

【図・写真出典】

- 1 2003 額田雅裕「和歌山平野における戦国時代ころの地形環境」『和歌山地方史研究』46 和歌山地方史研究会
- 2 2013「古墳時代の和歌山平野と大谷古墳の位置」『国指定史跡 大谷古墳』和歌山市の文化財 2 和歌山市教育委員会
- 3 2013 額田雅裕「和歌山平野南部の地形と土地開発」『和歌山市立博物館 研究紀要 28』和歌山市教育委員会

第3章 発掘調査の方法と資料整理

調査は、財団法人和歌山県文化財センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006年4月）に準拠して作業を進めた。発掘調査で使用した調査コードは、18-01・302（2018年度-和歌山市・和田岩坪遺跡）である。出土遺物・記録資料は、全てこの調査コードを用い整理・管理している。

第1節 調査現場の記録作業等

和田岩坪遺跡の調査に伴い、下記に示す記録作業等を行った。

1 遺構番号及び出土遺物登録番号

遺構番号は、遺構の種類にかかわらず西側地区の1-1区・1-2区で1番～4番までを、東側地区の2-1区・2-2区で11番～92番までを、2-3区で101番～148番までを使用した。遺構番号の後ろには必要に応じて遺構の性格を表す名称を付した。

出土遺物については、大区画-中区画-小区画を取り上げの基本区画とし、各遺構・各層位別に取り上げた。なお、1-1区・1-2区で出土遺物登録番号1～344番までを、東側地区の2-1区・2-2区で出土遺物登録番号401～493番までを、2-3区で出土遺物登録番号501～555番までを使用した。

2 写真撮影作業

記録は、写真撮影と実測図面作成を行った。写真撮影については、記録用のニコン35mmフルサイズデジタルカメラ及びペンタックス中判デジタルカメラ、メモ記録用のニコン35mmサイズデジタルカメラを使用し、デジタル写真画像（JPEGデータ及びRAWデータ）には全てファイル毎に内容を記載して保存している。

3 実測図作成作業（写真10）

記録図面は、縮尺=1:20もしくは1:10の遺構実測図（遺構平面図・遺物出土状況図・断面土層図・立面図）及び縮尺=1:100の遺構位置全体図を作成した。また、調査地区の遺存状態の良好な壁面に対して断面土層図（縮尺=1:20）などを調査記録として作成した。



写真10 1区 1自然流路遺物等出土状況図作成状況

4 航空写真撮影・基準点測量

調査地の遺構図面作成や遺物の取上げなどのため、国土座標平面直角座標系（世界測地系）第VI系により既設の公共基準点を利用して3級基準点・補助点を設置し、各地区内に4級基準点を設置した。併せて、3級基準点にも水準測量を行っている。

発掘調査により検出した遺構は、ラジコンヘリコプターを使用した調査地全体の航空写真撮影及び航空写真測量による図化（縮尺=1:50及び1:100編纂図）を行った。また、デジタル画像によるモザイク写真の作成を行った。基準点の設置と撮影及び図化作業を併せて、「和歌山平野農地防災事業 名草排水機場建設工事に伴う和田岩坪遺跡発掘調査業務に係る航空写真測量・基準点測量委託業務」として有限会社ヤマニシに再委託して実施した。

第2節 出土遺物等資料の整理

1 出土遺物応急整理

出土遺物については、当文化財センター事務局整理棟において出土遺物の一部について応急的な洗浄作業を実施した。これは、調査の進捗に伴い、現地調査方法の判断資料として時期決定を行い、調査を円滑に進めていく必要があるため、また、現地公開等において公開する目的をもって行った。

また、出土遺物の総体的な把握と調査報告書作成までのコンテナ収納・管理を目的とした出土遺物登録台帳の作成作業を行い、全てを完了した。しかし、この段階では、出土遺物の詳細な内容登録までは行っていない。

2 出土遺物等整理業務 (写真 11～13)

調査で出土した遺物は、応急的な整理作業のみであったため、調査報告書作成に伴い一連の整理作業を行うと共に、現地調査の遺構図面・遺構写真などの調査記録資料の整理を行い、資料登録台帳などを作成した。出土遺物等整理業務は、和歌山県教育委員会の指導のもと、当文化財センターが「平成31年度 和歌山平野農地防災事業 名草排水機場建設工事に伴う和田岩坪遺跡出土遺物等整理業務」としてこれを受託し、実施することとなった。

出土遺物の基礎的な整理作業

出土遺物の内、土器類、石器・石製品、種実等は、通常の遺物収納コンテナ（容量28ℓ）にして78箱である。その他、木器・木製品40点及び木質遺物である。出土遺物の整理は、調査同様に『財団法人和歌山県文化財センター 発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006年4月）に準拠して行った。

出土遺物は、応急整理済みの作業を省いて、遺物の洗浄作業（写真11）、遺物の種類毎の分別作業、遺物への調査コードと出土遺物登録番号の注記作業（写真12）、遺物の詳細な内容及び破片点数の台帳登録・集計（各層序別遺物数量）、遺物の接合作業を行った。



写真 11 遺物の洗浄作業



写真 12 遺物への注記作業

主要遺物を対象とした整理作業

基礎的な作業を経た主要遺物を対象に、遺物充填材による補強・復元作業、遺物実測図の作成・実測遺物の台帳登録（本書に掲載の「出土遺物一覧」として利用）・遺物実測図のトレース・トレース図のレイアウト・遺物実測図の整理、集計登録データ等各種データのPC入力作業を行った。

遺構図面の整理

現地調査の遺構図面の整理は、遺構位置全体図・地区・図面の種類毎にまとめて台帳登録を行った。

調査報告書に掲載する遺構図面については、作図・レイアウト・組版作業を行い、調査報告書に掲載する図面原稿のデジタルトレース作業を行った。

遺構写真の整理

調査現場の記録写真には、記録用の35mmフルサイズデジタルカメラ及び中判デジタルカメラ、メモ記録用の35mmサイズデジタルカメラを使用し、デジタル画像データには全てファイル毎に内容を記載して保存している。デジタル写真画像（JPEGデータ及びRAWデータ）は、調査時に日付毎、もしくは地区毎にフォルダに纏めている。

一部のデジタル写真画像については、調査報告書に使用する目的で、掲載用の写真画像を抽出し、検出遺構の写真図版のレイアウト・組版作成を行った。

出土遺物の内容登録に伴う各層序別遺物数量

今回の遺物整理の中で最も主体を占める遺物群は、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての土器である。ここでは、弥生時代後期に続く段階を弥生時代終末期と捉えた。弥生時代終末期は、凡そ庄内式土器に併行する段階と把握し、庄内式併行期と理解して作業を進めた。庄内式併行期は、大きく二分して庄内式併行期古段階・新段階とした。依って、弥生時代終末期の土器を弥生土器と理解した。

それに続く段階を布留式土器に代表される段階と把握し、布留式併行期とした。布留式併行期は、大きく三分して布留式併行期古段階・中段階・新段階とした。布留式併行期新段階は、初期須恵器の共伴する段階と考えた。依って、古墳時代の始まりの土器を布留式併行期の土器とし、土師器と理解した。

出土遺物の内容登録に伴う遺物破片点数の数量化は、大凡の時代と主要となる土器類・その他の遺物に分けて作業を進めた。時代・時期区分については、大きく弥生時代前期・中期、弥生時代後期・終末期、古墳時代、飛鳥・奈良・平安時代、平安時代末～室町時代、江戸時代に区分した。

出土遺物等整理業務に伴う保存処理業務委託

出土遺物等整理業務に伴い、木製品20点の保存処理を行った。保存処理は、「和歌山平野農地防災事業 名草排水機場建設工事に伴う和田岩坪遺跡出土遺物等整理業務に係る保存処理業務委託」として、株式会社イビソクに再委託して実施した。木製品の保存処理は、PEG含浸及び真空凍結乾燥処理法による。

出土遺物等整理業務に伴う木質遺物の樹種同定（写真13）

1区1自然流路から木器・木製品を始め、まとまった量の木質遺物が出土した。出土遺物等整理業務に伴い、能城修一・村上由美子・佐々木由香・前田仁暉氏らのグループに依頼して樹種同定のための切片採取・プレパラート作成作業244点を行い、樹種の同定を行った。同定結果は、付章第1節において報告する。

出土遺物等整理業務に伴う種実の同定

1区1自然流路からは、多量の土器類、木質遺物と共にまとまった量の種実が出土した。出土遺物等整理業務に伴い、一般社団法人文化財科学研究センターの金原美奈子氏に依頼して同定を行った。同定結果は、付章第2節において報告する。



写真13 樹種同定のための切片採取作業

第3節 調査区の設定

1 地区割 (図5～7)

遺構実測図作成や遺物取り上げの際に用いた地区割の基準線は、国土座標平面直角座標系（世界測地系）第VI系の座標軸を使用し、和田岩坪遺跡を網羅する区切りのいい北東隅の数値を地区割の基点（ $X = -197,000$ m、 $Y = -72,000$ m）とした。なお、この基点の座標は、同一地域での煩雑化を避けるため平成22～25年度に当文化財センターが発掘調査を実施した井辺遺跡、和田遺跡に準拠した。

この基点から、西方向および南方向に各々1km毎に区切った区画を1単位とした大区画（図5）を設定し、基点から西方向にローマ数字のI・IIで、

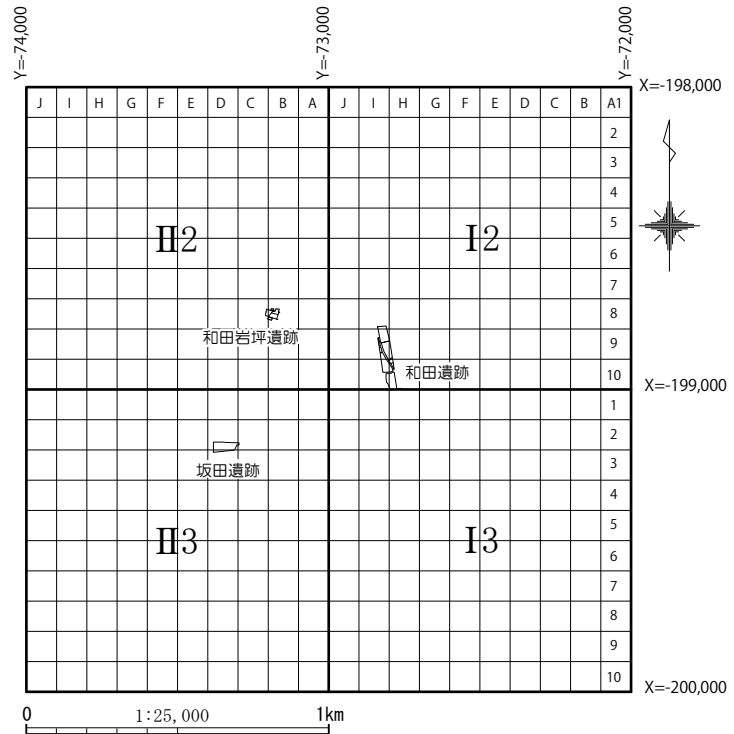


図5 区画割模式図(1km区画)

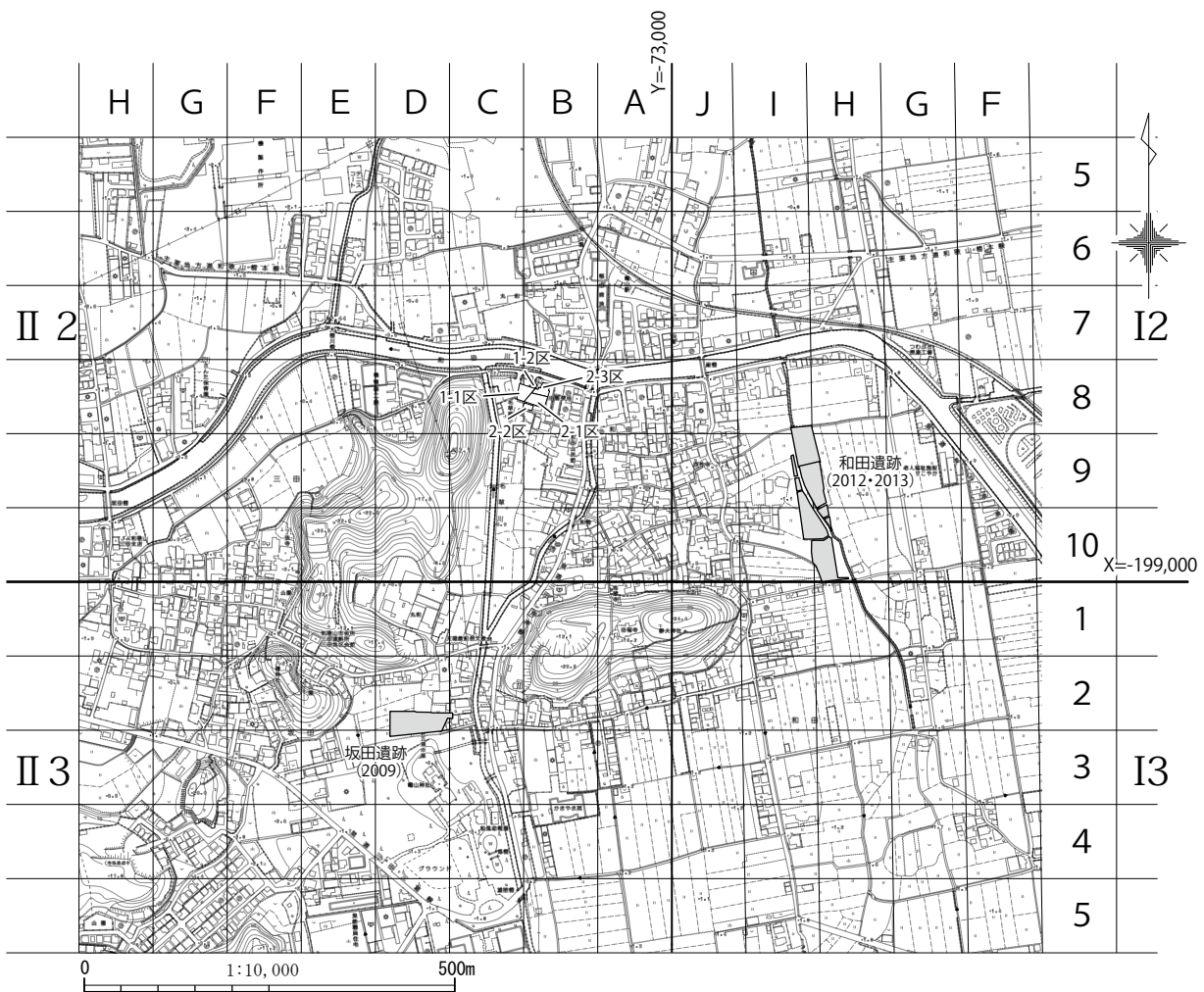


図6 調査位置と区画割(100m区画)

南方向にはアラビア数字の1・2で表記した。これにより、今回の和田岩坪遺跡は大区画Ⅱ2区に位置することとなる。

この基点から、それぞれ100 m四方の区画を1単位とした中区画を設定(図6)し、北東端を基点とし西方向へアルファベット大文字でA~Jと、南方向へアラビア数字で1~10と表記した。さらに4 m四方の区画を1単位とした小区画(図7)を設定し、北東端を基点とし西方向へアルファベット小文字でa~yと、南方向へアラビア数字で1~25と表記した。遺構図面作成や遺物取り上げの際には原則として、4 m四方の小区画で行い、大区画-中区画-小区画を組み合わせて表記し用いた(例: 2-1区の12土坑は、Ⅱ2B8s16に位置する)。但し、今回の調査範囲は、全て大区画Ⅱ2区に入るため、本文の記述における大区画の表記は省略した。

調査区は、西側地区を1-1区・1-2区、東側地区を2-1区・2-2区・2-3区に区分した。

方位は座標北を使用し、標高は東京湾平均海面(T. P. +)を基準とした値を使用した。

2 調査方法(図7)

調査地は、当初、西側地区(和田1154-1番地)を1-1区・1-2区、東側地区(和田1155-1・1156・1157-1番地)を2-1区・2-2区として進めたが、掘削排土の搬出量が多くなり過ぎることにより調査後に陥没状態が深くなり過ぎ、本工事着手までの安全面で多大な影響が懸念された。そのため、近畿農政局和歌山平野農地防災事業所と協議の上、残りの調査地と残地で掘削排土置き場を確保するため当初の2-1区を2-1区と2-3区に分割して調査を進めた。

調査は、西側地区の1-1区・1-2区から開始し、次いで2-2区、2-1区、2-3区の順で行った。

1-1区・1-2区では、結果的に調査範囲の大半が弥生時代終末期~古墳時代後期に埋積の進んだ自然流路に重複した状態であったが、遺物の殆ど認められない鎌倉時代もしくはこれに近似する時期と考えられる第3

層系堆積層までを機械掘削排土とし、以下を人力掘削として作業を進めた。

調査面積は、各々調査区の下端で、1-1区が294.1㎡、1-2区が22.6㎡、2-1区が339.4㎡、2-2区が54.5㎡、2-3区が210.4㎡、合計921.0㎡である。

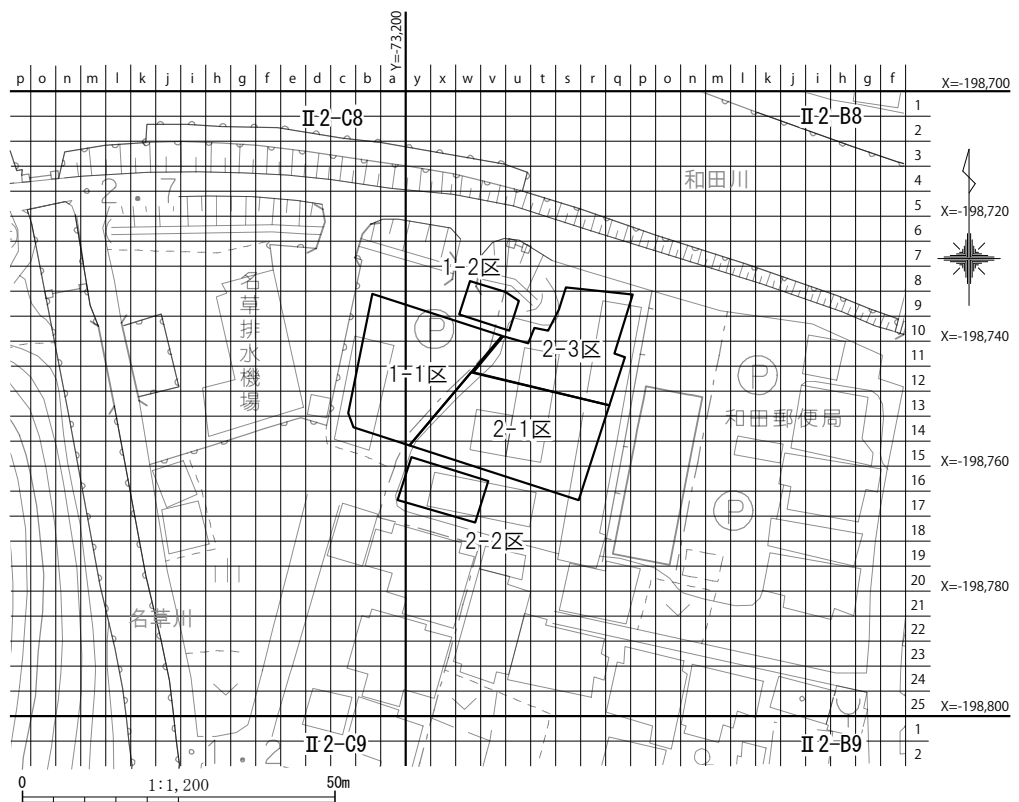


図7 調査範囲と地区割(4m区画)

第4章 調査成果

調査成果の各遺構の記述は、生活遺構を主体とする2区（2-1区・2-3区・2-2区）から進めることにする。

第1節 2区の調査成果

1 2区の調査概要（図10～29、写真図版2～7・21）

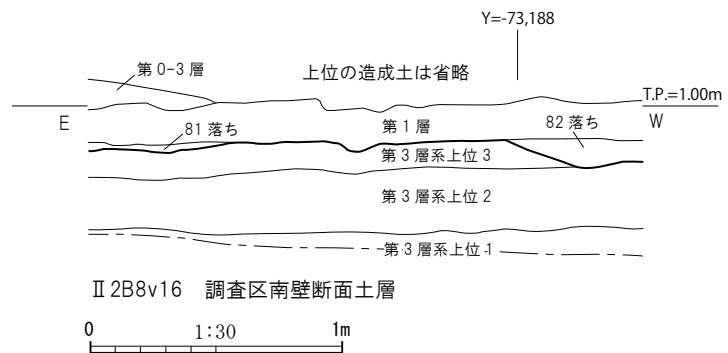
調査区東側の2-1区・2-2区では、当初、調査区西側の1-1区・1-2区の1自然流路の埋積遺物の主体となる同時期の弥生時代終末期・古墳時代前～後期の遺構・遺物の存在を予測していたが、調査の結果、予測に反して、該当する時期の明確な遺構・遺物は極めて少なく、弥生時代前期の土坑、鎌倉時代の土坑・水溜、最大幅6.10mの区画溝、柱穴・小穴等を検出した。

2-3区でも、2-1区と同様に弥生時代終末期・古墳時代前～後期の明確な遺構は極めて少なく、弥生時代前期の土坑・溝、鎌倉時代の土坑・2-1区の13区画溝の延長に当たる幅約2.20～5.40mの区画溝等を検出した。但し、区画溝は東側に折れ曲がるのではなく、西側に折れ曲がることが判明した。また、遺物量は少ないが、弥生時代の土坑の内、形状から土壇墓の可能性が考えられるものもある。

2 基本層序と遺構面（図8）

調査対象地は、調査前まで使用されていた駐車場用地として造成盛土されていた場所である。昭和50～56年に駐車場用地になるまでは、水田耕作地であった。調査に伴いコンクリート路盤・アスファルト舗装版撤去後の現状での地盤高は、西側地区の1-1区・1-2区でT.P.=2.50m前後、東側地区の2-1区・2-2区・2-3区でT.P.=3.20m前後を測る。

駐車場用地としての造成盛土を第0層とし、第1層は造成以前の昭和時代の水田耕作土、第2層は水田耕作土に伴う床土、第2層系堆積層は第2層に近似する時期の堆積層となる。但し、図8で示した断面土層図の地点のように、第2層の存在しない範囲が広がる。水田耕作土の天端高は、西側地区でT.P.=0.90～1.00m前後、東側地区でT.P.=1.00m前後となり、東側から西側に向かって僅かに低くなる傾向にある。以上が地区全体に共通して認められる層序である。



第0-3層	やや攪拌度の弱い水田耕作土
第1層	第1層 +10Y5/1 灰色シルトを主体とし、 5Y6/3 オリーブ黄色シルト 5 cm大のブロックを多量に含む 水田耕作土 N4/0 灰色～3/0 暗灰色シルト 0.5～1 cm大の細礫を微量含む
81 落ち	7.5Y5/1～4/1 灰色微細砂混シルト 0.3～0.5 cm大の細礫を少量含む
82 落ち	81 落ちと同じ
基盤層	
第3層系上位3	5GY6/1 オリーブ灰色～7.5GY6/1 緑灰色微砂混シルト 第1層の影響で変色化する 第3層系上位2よりやや暗色傾向にある やや締まり有り
第3層系上位2	7.5GY6/1 緑灰色～5GY6/1 オリーブ灰色微砂混シルト 第1層の影響で変色化する やや締まり無し
第3層系上位1	2.5GY6/1 オリーブ灰色～5GY6/1 オリーブ灰色微砂混シルト 第1層の影響で変色化する 第3層上位2よりシルト質が強い

図8 2-1区の基本層序（調査区南壁断面土層）

Y=73,180

X=198,740

X=198,760

Y=73,180

Y=73,200

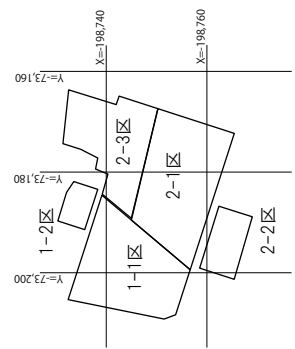
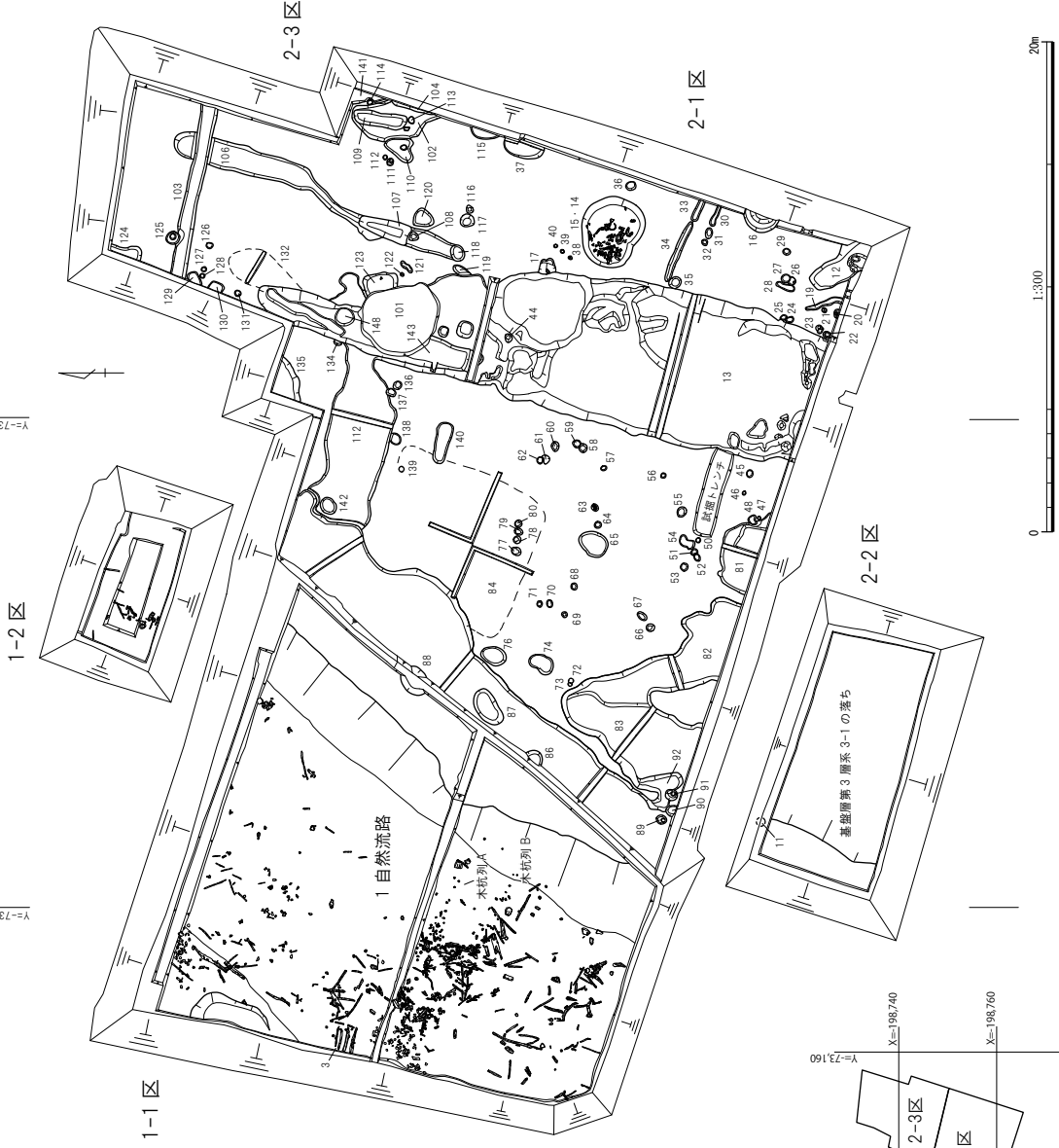


図9 調査遺構全体図

3 各遺構の調査成果

(1) 弥生時代前期の検出遺構

1 2土坑 (図10・27、写真図版4・21)

12土坑は、2-1区 B8s16の南東隅に位置し、南東側は調査区外に延びるため全容は不明である。平面形は、北西-南東に延びるやや歪な隅丸長形状を呈する。検出できた範囲での平面規模は、短軸(北東-南西)1.04m・調査区南壁では1.50m、長軸(北西-南東)3.0m以上、残存の深さは南東側の最深部で0.54mを測る。断面形は、北東-南西方向で整ったU字形を呈する。基底部分は、北西半側がほぼ平坦であるのに対し、南東半側は浅い凹凸が著しい。

堆積層は、最下層の6層を省いて人為的な埋積が認められる。大半が1層・4層に認められる基盤層の大ブロックを中量から多量に含む埋積となる。

遺物は、12土坑として取り上げたものと調査区壁面側溝で12土坑に該当する範囲を掘削したものを含んでいる。遺物は12土坑の中層から下層にかけてややまとまりのある弥生時代前期紀伊I-3様式の壺86点：広口壺口縁部(2・3)・壺頸部(4)・壺底部(9)、甕6点：紀伊形甕底部(11)・甕口縁部(30)等合計92点が出土した。その他、側溝掘削範囲から弥生時代前期の土器と共に鎌倉時代の土師器皿3点・瓦器椀1点、12土坑一括として掘削した中に瓦器椀1点・近代の白磁碗1点が出土した。鎌倉時代の遺物は、この範囲には第2層が存在しないことから重

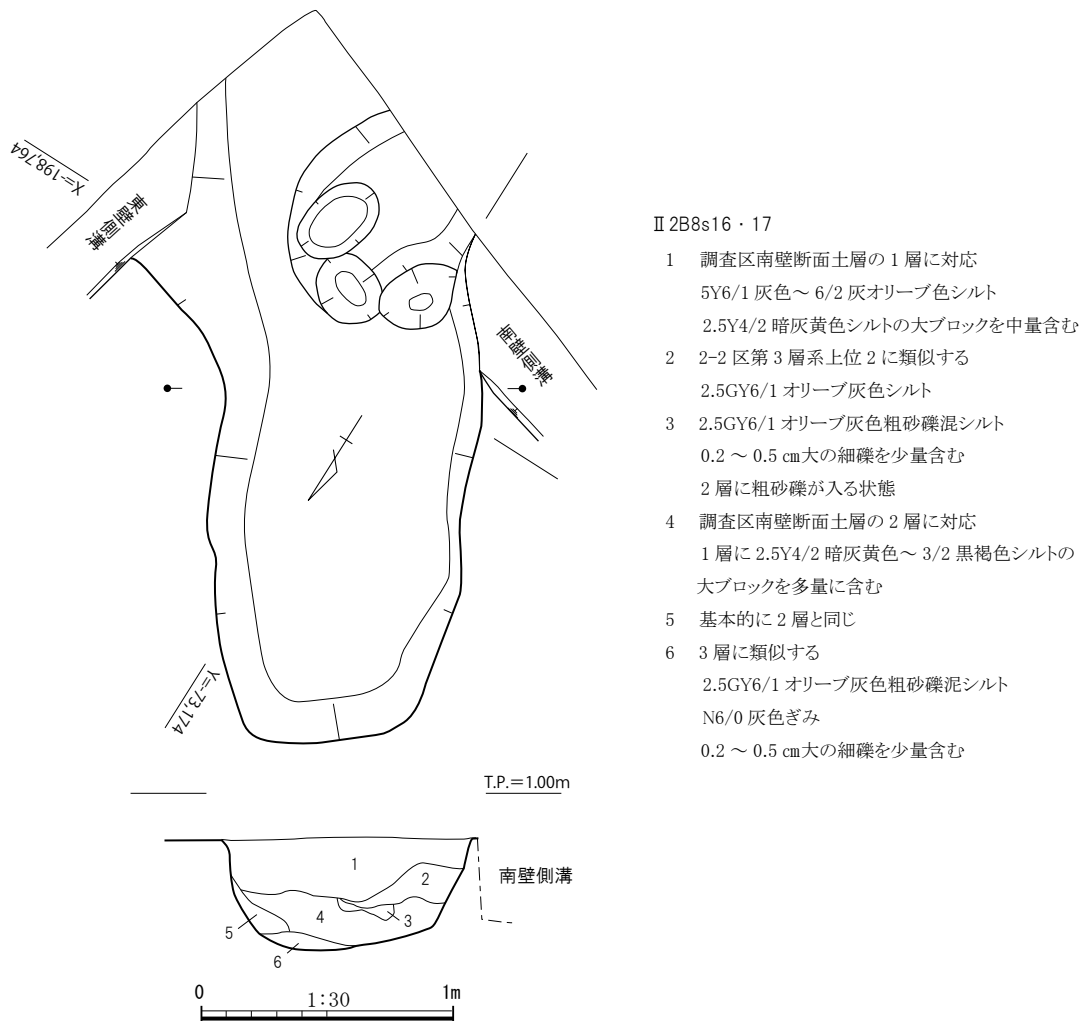


図10 2-1区 12土坑実測図

複遺構の見逃しに伴うもの、近代の白磁は調査区壁面からの崩落の可能性が高いものである。これらのことから、12 土坑は弥生時代前期に帰属するものと考えられる。

109 土坑 (図 11・27、写真図版 5・21)

109 土坑は、2-3 区 B8q・r12 の北半側に位置する。109 土坑は、102 土坑と重複関係にあり、102 土坑が後出する。平面形は、南北に主軸をもつやや歪な細長い隅丸長形状となる。平面規模は、短軸（東西）0.52～0.64 m、長軸（南北）2.20 m、残存の深さは 0.07 m を測る。断面形は、東西方向で浅い皿形を呈する。基底部は、緩やかな凹み状となる。

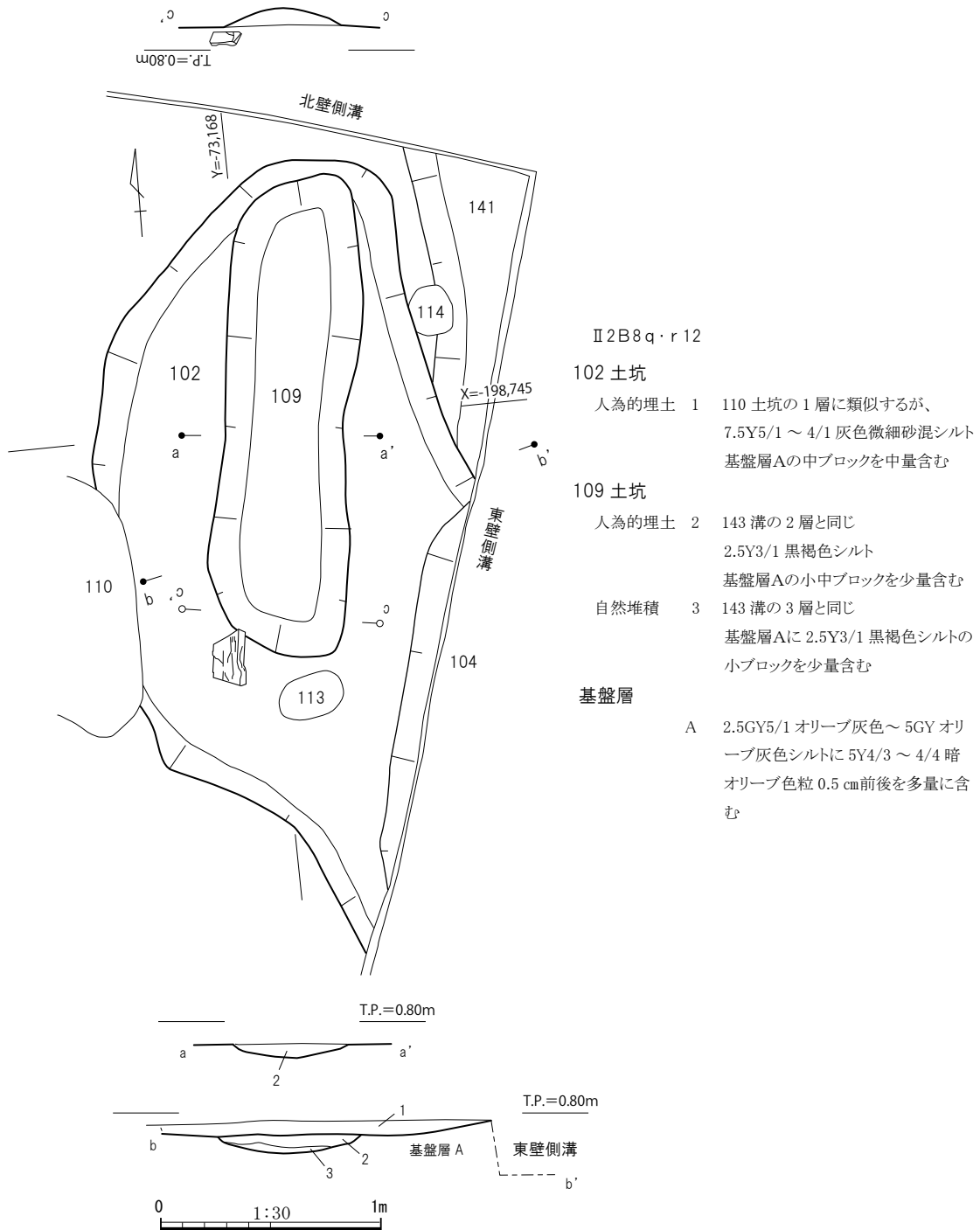


図 11 2-3 区 102・109 土坑実測図

堆積層は、2層に分けられるが、基盤層のブロック土を含む人為的な埋積が認められる。

109 土坑は、その隅丸長方形の形状から土壙墓の可能性が考えられる。

109 土坑の南端に接して、幅 15 cm・長さ 26 cm・厚さ 4 cmの結晶片岩の板石を検出した。102 土坑の基底部に接することから、後述する 102 土坑と関係するものか、109 土坑と関係するものか明確にできていない。109 土坑に関係したものであった場合、標石の可能性が考えられる。

遺物は、僅かであるが弥生時代前期紀伊 I-3 様式の壺 19 点：広口壺口縁部 (1)・壺肩部 (7)・壺底部 (10)、甕 1 点、器種不明 1 点等合計 21 点が出土した。これらのことから、109 土坑は弥生時代前期に帰属するものと考えられる。

102 土坑 (図 11、写真図版 5)

102 土坑は、2-3 区 B8q・r12 の北半側に位置し、南南東側は調査区外に延びるため全容は不明である。102 土坑は、104・109・110・141 土坑と重複関係にあり、110 土坑より古く、104・109・141 土坑より後出する。平面形は、北北西-南南東に延びる歪な形状である。平面規模は、短軸 (東西) 1.70 m、長軸 (南北) 3.60 m以上、残存の深さは 0.07 ~ 0.09 mを測る。断面形は、東西で浅い皿形を呈する。基底部は、ほぼ平坦である。

遺物は、僅かであるが弥生時代前期の壺・甕 11 点、古墳時代前期の布留式併行期と考えられる壺 2 点・器種不明 4 点、上層から鎌倉時代の土師器皿 1 点、瓦器椀 1 点、最上層から古墳時代中期の土師器甕 1 点等合計 20 点が出土した。

102 土坑は、時期の決定要素に乏しいが、重複関係にある 110 土坑からも古墳時代前期の布留式併行期と考えられる壺 2 点、紀伊形布留式甕 2 点等合計 4 点が出土した。

なお、102 土坑と重複関係にある 104 土坑からは弥生時代前期の壺 2 点、141 土坑からは弥生時代前期の壺 1 点が出土した。調査区東壁断面土層の堆積層の埋積の状況からも 12 土坑と同様に人為的な埋積と考えられる。

107 土坑 (図 12、写真図版 6)

107 土坑は、2-3 区 B8s12 の北東隅に位置し、南北に細長い。107 土坑は、106 溝と重複関係にあり、106 溝が後出する。平面形は、北北東-

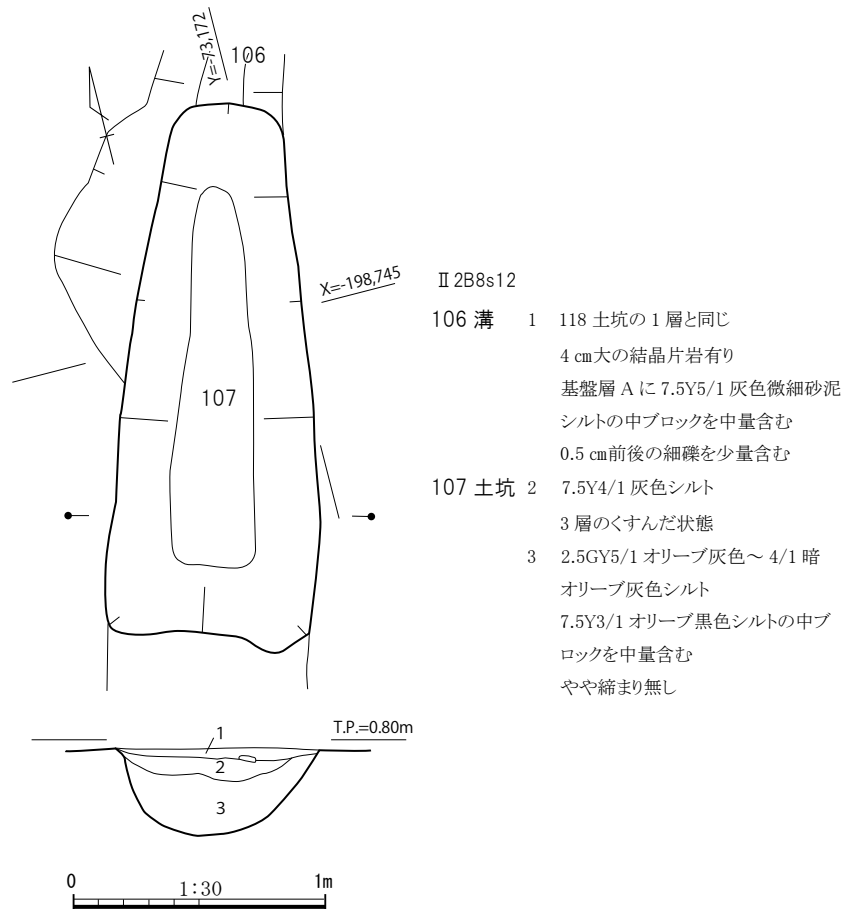


図 12 2-3 区 107 土坑実測図

南南西に主軸をもつ歪な長手の形状である。平面規模は、短軸（東西）0.48～0.82m、長軸（南北）2.15m、残存の深さは0.30mを測る。基底は、U字形を呈する。

堆積層は、2層に分けられるが、下層に基盤層のブロック土を含む人為的な埋積が認められる。遺物は、出土していない。

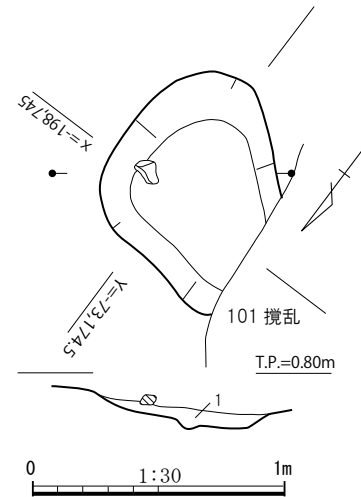
重複関係にある106溝からは、弥生時代前期の甕2点、古墳時代前期の布留式併行期と考えられる土師器4点、鎌倉時代の東播系須恵器（瓦質）甕（40）、室町時代の備前播鉢（41）等合計7点が出土した。これらのことから、107土坑から遺物は出土していないが、堆積土の埋積の特徴から弥生時代前期に帰属するものと考えられる。

147土坑（図13、写真図版7）

147土坑は、2-3区B8s12の北半側に位置し、西側は101攪乱により削平されるため全容は不明である。147土坑は、123土坑と重複関係にあり、123土坑が後出する。平面形は、東西に主軸をもつ不整形な形状となる。平面規模は、短軸（南北）0.62m、長軸（東西）0.80m以上、残存の深さは0.12mを測る。断面形は、北東-南西方向で浅い皿形を呈する。基底は、緩やかな凹み状である。

堆積層は、単層で基盤層のブロック土を含む人為的な埋積が認められる。基底に接して6×10cm大の結晶片岩が入り込んでいた。

遺物は、出土していないが、堆積土の埋積の特徴から弥生時代前期に帰属するものと考えられる。



II 2B8s12

- 1 5Y5/1 灰色～5/2 灰オリーブ色シルト
- 5Y3/1 オリーブ黒色シルトの大ブロックを多量に含む
- やや縮まり有り

図13 2-3区 147土坑実測図

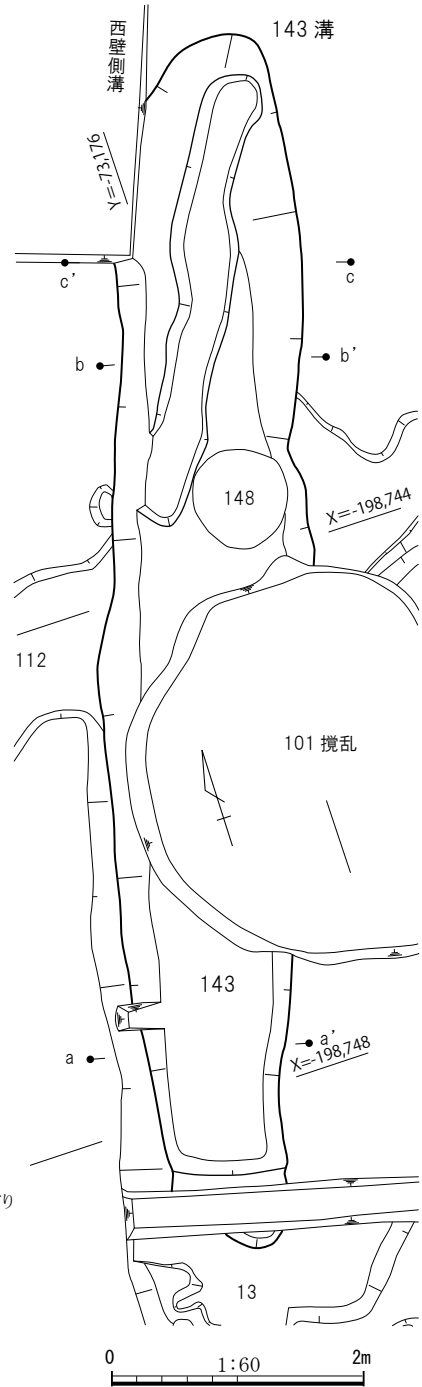
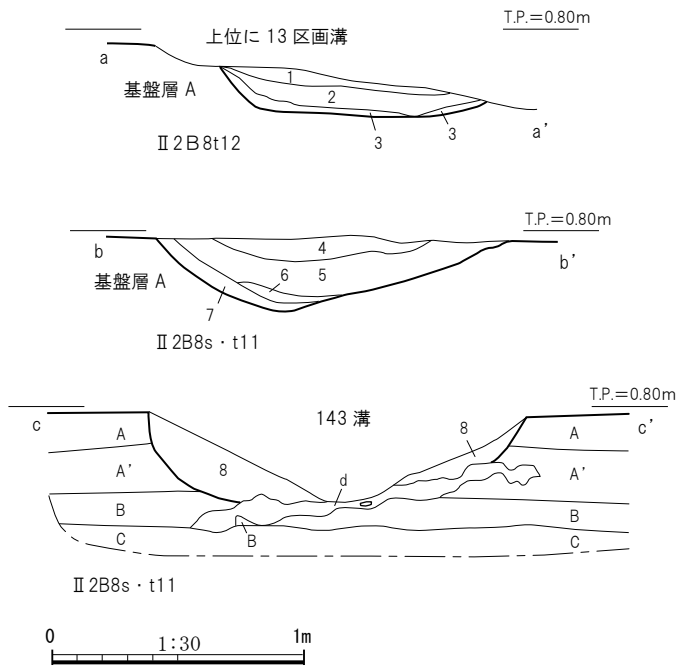
その他、類似する堆積層の埋積の認められる遺構には、2-1区・2-3区東端B8r13に位置する37土坑・115土坑がある。何れも遺物は出土していないが、埋積の特徴から弥生時代前期に帰属する遺構と考えられる。

143溝（図14・27、写真図版6・21）

143溝は、2-3区B8s11～t13に位置し、北北東-南南西方向に延びる。143溝は、105・144・148土坑、13・112区画溝と重複関係にあり、何れよりも先行する。143溝は、西北西-東南東幅1.06m～1.45m、残存の深さは他遺構との重複の無い北側範囲で0.36mを測り、延長9.6m分を検出した。法面の掘り込み（断面形）は、緩やかな形状を呈する。基底の南北での高低差は、特に認められない。

堆積層は、南端の断面土層a-a'の範囲の一部に人為的な埋積が認められるが、断面土層a-a'3層・断面土層b-b'7層の最下層は143溝の西側からの流入が、中層から上層は両側からの均一的な流入の認められる自然埋積と考えられる。

遺物は、143溝一括として掘削した中に弥生時代前期紀伊I-2・3様式の壺（5・6）19点、甕11点：紀伊形甕10点・甕（8）1点、壺もしくは甕の細片14点、古墳時代前期の布留式併行期と考えられる土師器3点（内、壺1点）、瓦器椀2点等合計49点が出土した。古墳時代及び鎌倉時代の遺物は、重複遺構の144・148土坑の掘り残しと考えられる。これらのことから、143溝は弥生時代前期に帰属するものと考えられる。



143 溝

- 人為的埋土 1 5GY5/1 緑灰色シルト+2.5Y4/1 黄灰色シルトまだら状態
 人為的埋土 2 2.5Y3/1 黒褐色シルト
 基盤層 A の小中ブロックを少量含む
 自然堆積 3 基盤層 A に 2.5Y3/1 黒褐色シルトの小ブロックを少量含む
 自然堆積 4 7.5Y6/1 ~ 5/1 灰色微細砂シルト
 基盤層 A に 10YR5/2 灰黄褐色シルトの小ブロックが少量入る
 締まりやや有り
 自然堆積 5 基盤層 A と 10YR4/2 灰黄褐色微細砂混シルトが 0.5 ~ 1 cm の
 層厚で互層になる
 東半側下半に 10YR4/2 灰黄褐色シルトの帯状ブロックが入る
 自然堆積 6 2.5Y5/1 黄灰色 ~ 10YR5/2 灰黄褐色シルト
 自然堆積 7 殆んど基盤層 A に類似するが、10YR5/2 灰黄褐色シルトの
 小ブロックが少量入る
 自然堆積 8 143 溝の掘り残しの可能性有り、トレンチ北側の平面で土器片有り
 s · t11 東西断面土層の 7 層に類似する
 小動物による擾乱か
 d 2.5Y4/1 黄灰色シルトの大ブロックを多量に含む
 基盤層 A' の中ブロックとまだら状態
 5GY6/1 オリーブ灰色ぎみ
 土器片有り

基盤層

- | | | | |
|-------|--|--------|--|
| 基盤層 A | 2-2 区第 3 層系上位 2 に対応
2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト
5G6/1 緑灰色シルト
上記の 2 層がまだら状態
やや締まり有り
第 1 層の影響で変色の可能性有り
2-1 区の西側に行くに連れ微細砂の率が高い | 基盤層 A' | 上位よりやや明色
10G6/1 緑灰色ぎみで明色に見える
やや締まり有り
B 7.5Y5/1 灰色微細砂混粘泥
10GY6/1 緑灰色ぎみ、サクサク状態
C 基盤層 B と 2.5Y5/2 暗灰黄色粘泥 (有機質含む) が
0.5 cm 前後の層厚で互層となる |
|-------|--|--------|--|

図 14 2-3 区 143 溝実測図

柱穴・小穴の円形配列（図9）

2-1区 B8u・v14 を中心として 50・62・66・67・69・71・77・80 柱穴・小穴が円形状に並ぶ傾向にある。柱穴・小穴の円形配列は、円形（竪穴）建物の柱並びを構成しているように見える。円形配列の平面規模は、直径（東西・南北）約 7.0 m を測る。柱穴・小穴の平面規模は、直径 0.15 m 前後のものと同直径 0.25～0.35 m 前後のものがある。残存の深さは、殆どが 0.05～0.10 m 前後と浅い。柱穴・小穴の円形配列の中央には、65 土坑が位置し、あたかも円形（竪穴）建物跡に伴う床面中央の炉穴のように見えるが、埋土は調査区壁面に認められる基本層序の第 2 層系の埋積である。

遺物は、何れの遺構からも出土していない。

柱穴・小穴の円形配列は、縄文時代晩期に位置付けられる和歌山市川辺遺跡の事例（IV区下面 SI02 『川辺遺跡発掘調査報告書』1995年（財）和歌山県文化財センター）にみるような建物跡になる可能性が考えられる。また、遺物が出土していないので明確な時期の判断ができない。

（2）古墳時代の検出遺構

84 隅丸方形状痕跡（写真図版 7）

84 隅丸方形状痕跡は、2-1区・2-3区にまたがって B8u・v12・13 に位置し、西北西側は 1 自然流路の肩口の堆積層のため全容は不明である。平面形は、隅丸方形状を呈する。平面規模は、短軸（西北西-東南東）6.0 m、長軸（北北東-南南西）6.5 m を測る。84 隅丸方形状痕跡は、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての竪穴建物跡あるいは掘立柱建物の床面痕跡と考えて調査を進めた。

84 隅丸方形状痕跡と認識した範囲では、周囲より基盤層が僅かに暗色を呈し、土質が毛羽立つ以外は変化に乏しい。84 隅丸方形状痕跡に対して再度の精査及び断ち割り調査を行ったが、明確な土質の変化・硬化及び柱穴・壁溝等の掘り込み痕跡を確認することができなかった。

（3）鎌倉時代の検出遺構

13 区画溝（図 15・27、写真図版 8・21）

13 区画溝は、2-1 区の東半側に位置し、南側は調査区外に延びるため全容は不明である。北側は 2-3 区に延びる。13 区画溝は、17・144・148 土坑、143 溝と重複関係にあり、13 区画溝が後出する。13 区画溝は、西北西-東南東最大幅 6.10 m、残存の深さは 0.34～0.40 m を測る。法面の掘り込みは、南側で一部緩やかな傾斜となるが、全体に約 30～40° の傾斜角法面となる。基底部の掘り込みは、凹凸が著しく、不揃いである。13 区画溝は、南北方向の座標軸軸線から N-13°-E に偏る。

堆積層は、大きく 3 層に分けることができ、何れの堆積層においても基盤層のブロック土を多量に含むこと、細礫をブロック状に含むことから全てに人為的な埋積が認められる。

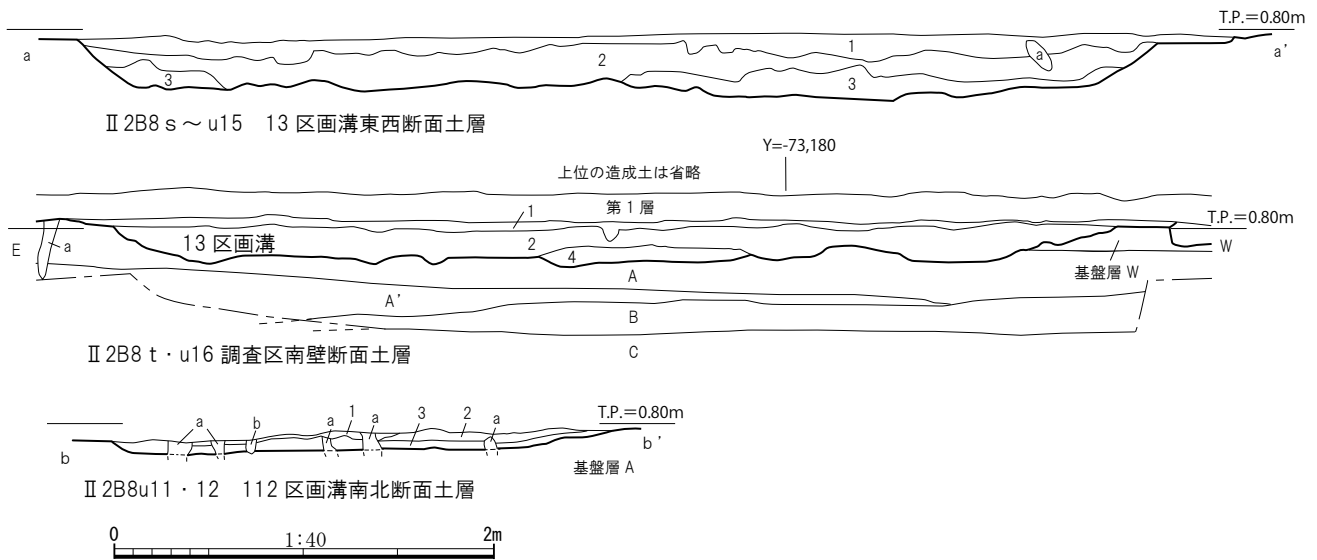
遺物は、弥生時代前期の土器（12・13・15）60 点、古墳時代の土師器 10 点・須恵器（16・17）10 点を含むが、主体は鎌倉時代の土師器皿・小皿 55 点、瓦器椀（18）20 点、土釜 24 点、東播系須恵器捏鉢（19）4 点、瓦器甕 2 点、無釉陶器備前播鉢・甕、常滑甕 5 点、中国製青磁皿・中国製白磁碗 3 点、瓦（24）・その他 7 点等合計 120 点が出土した。また、最上層の 1 層からは近世の肥前系陶器唐津碗（23）・瓦・その他（21・22）11 点が出土した。下層一括として掘削した一部からも近世の肥前系陶器唐津碗 3 点が出土したが、出土層位が不明瞭である。

112区画溝 (図15・27、写真図版9)

112区画溝は、2-3区の西半側に位置し、西側端は1自然流路の堆積層のため全容は不明である。112区画溝は、2-1区で検出した13区画溝の延長で、2-1区から2-3区にかけて南北に延び、2-3区の中央で西側に折れ曲がる。東西方向の112区画溝は、北北東-南南西幅2.25～2.60m、残存の深さは0.10m前後を測る。法面の掘り込みは、浅い皿形を呈する。基底層は、平坦である。

東西方向の112堀の堆積層は、大きく3層に分けることができ、南半側上層に焼土粒・炭化物を多量に含み、全て人為的な埋積が認められる。堆積層の随所に小動物による擾乱が認められる。

遺物は、弥生時代前期の土器(14)23点、古墳時代前期の布留式併行期の土師器1点、古墳時代中期と考えられる須恵器甕1点、平安時代の黒色土器A類椀1点、須恵器甕1点、鎌倉時代の土師器皿4点等合計31点が出土した。これらのことから、時期の決定要素に乏しいが、13・112区画溝は、鎌倉時代に帰属するものと考えられる。

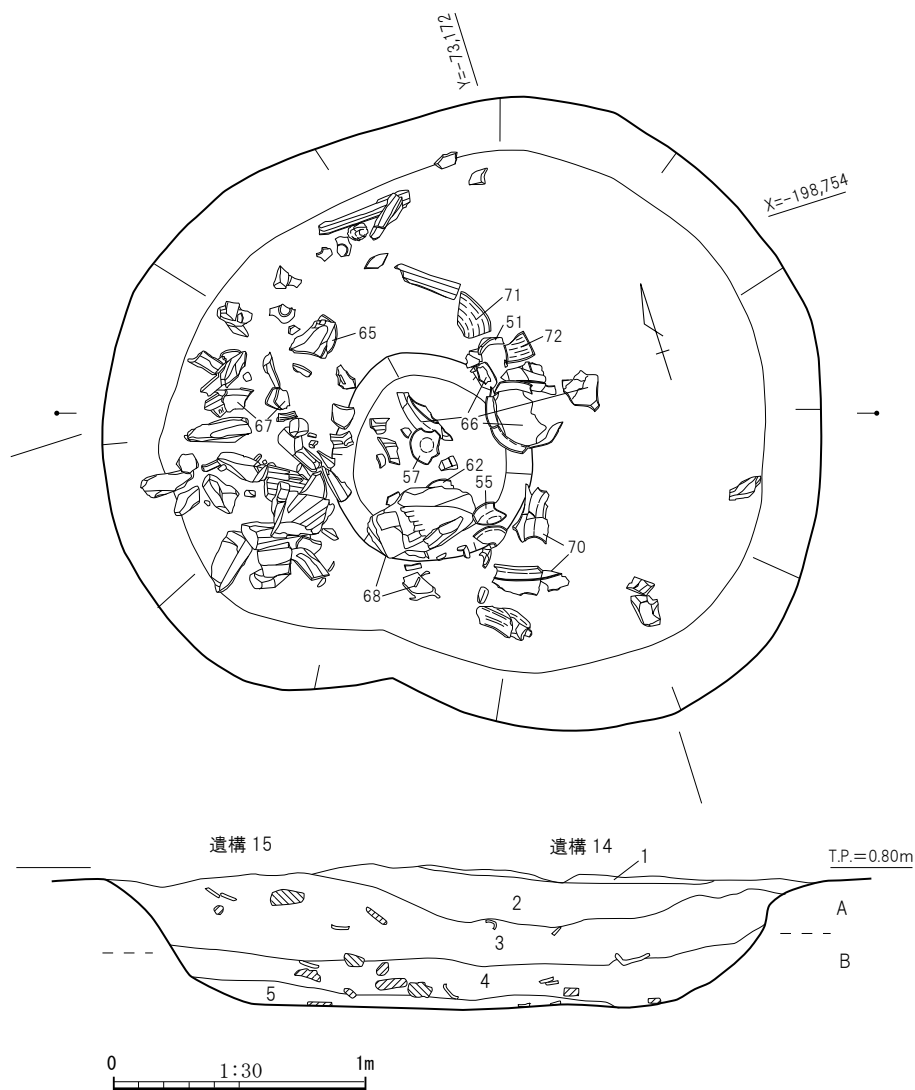


第1層	水田耕作土	112区画溝	3	基底層Aに2層の小ブロックを少量含む
13区画溝	1	人為的埋土	a	小動物による擾乱 5Y5/1 灰色粘泥
		7.5Y6/1 灰色～6/2 灰オリーブ色粗砂混シルト	b	小動物による擾乱 aに焼土粒を多量に含む
		軟質結晶片岩を少量含む 0.3～0.5cm大の細礫を中量含む		
		近世遺物有り	基底層	W
		2	人為的埋土	5Y6/3 オリーブ黄色～7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト
		5Y6/1 灰色～6/2 灰オリーブ色シルト		やや締まり有り
		2.5Y4/2 暗灰黄色シルトの大ブロックを中量含む	A	5GY6/1 オリーブ灰色シルト
		3層を大ブロック状に少量含む、特に西半1/3に多量に含む		7.5Y5/3 灰オリーブ色シルト粒1～3cm大を極めて多量に含む
		3	人為的埋土	A'
		5Y4/1 灰色粗砂混シルト		上位よりやや明色
		0.3～1cm大の細礫を中量含む		10G6/1 緑灰色ぎみで明色に見える
		4	2層に基底層Aの中ブロックが中量入る	やや締まり有り
		a	小動物による擾乱 2.5Y6/1 黄灰色微細砂混シルト	B
112区画溝	1	2.5Y5/1 黄灰色シルト		N5/0 灰色微細砂とシルトの互層
		5YR4/4 にぶい赤褐色・3/1 黒褐色焼土粒0.5～2cm大を多量に含む、やや締まり無し		2-2区基底層W下位3に類似する
		2	2.5Y5/1 黄灰色シルト	下端に10YR5/4 にぶい黄褐色シルトの硬化層約1cm厚有り
		0.5～1cm大の細礫を微量含む		C
		5cm大極めて微量含む		7.5Y6/1 灰色～6/2 灰オリーブ色微細砂
				2.5Y5/6 黄褐色粒及び縦筋状幅0.5～1cmを少量含む
				やや締まり弱い
				2-2区基底層W下位3に対応

図15 2-1区 13区画溝、2-3区 112区画溝断面土層実測図

14・15土坑 (図16・28・29、写真図版9・22・23)

14・15土坑は、2-1区B8r・s14の南半側に位置する。平面検出時には、東側に円形に広がる堆積層(1・2層)の遺構14と西側の堆積層(3層)の遺構15が重複関係にある井戸(掘形・井側)と判断して調査を進めたが、土器等廃棄土坑の堆積層の変化であることが判明した。平面形は、西北西-東南東に主軸をもつやや歪な楕円形状(達磨形)となる。平面規模は、短軸(北北東-南南西)2.10~2.46m、長軸(西北西-東南東)2.83m、残存の深さは0.58mを測る。法面の掘り込みは、全体に均一で42~48°の傾斜角となる。基底層は、中央西半側で浅い窪みが生じるが、それ以外はほぼ平坦である。



II 2B8r・s14

自然堆積	1	10Y6/1 ~ 5/1 灰色シルト 2層より明色 平面から当初遺構14 井戸の井側内	人為的埋土	4	5GY5/1 オリーブ灰色微細砂混シルト 5Y5/2 ~ 4/2 灰オリーブ色粒 0.5 cm前後を多量に含む
自然堆積か	2	7.5Y6/1 ~ 5/1 灰色シルト 1層より暗色 平面から当初遺構14 井戸の掘形			締めりやや有り 遺物等を少量含む
人為的埋土	3	7.5Y5/1 ~ 4/1 灰色シルト 10Y6/1 ~ 5/1 灰色シルトの中ブロックを少量含む 遺物・10-50 cm大の結晶片岩を多量に含む 10 cm大の円礫を微量含む 平面から当初遺構14 井戸より古い遺構15 井戸	自然堆積	5	5GY6/1 ~ 5/1 オリーブ灰色微細砂混シルト 遺物等を少量含む
			基盤層	A	5GY6/1 オリーブ灰色シルト 7.5Y5/3 灰オリーブ色シルト粒 1 ~ 3 cm大を極めて多量に含む
				B	5BG6/1 ~ 5/1 青灰色微細砂

図16 2-1区 14・15土坑実測図

堆積層は、最上層（1層）・上層（2層）を省いて、遺物と共に人為的な埋積が認められる。堆積層と遺物の出土状況から3・4層が一連の廃棄行為に伴う埋積となり、1・2層がその後の自然埋積となる。

遺物は、上層下位（3層）から下層（4層）にかけて多量の結晶片岩等と共にまとまりのある鎌倉時代の土師器 293 点：皿（49～51）75 点・小皿（43）3 点、土釜（66～70）215 点、瓦器 168 点：椀（55～65）161 点・小皿（44～48）7 点、東播系須恵器捏鉢（71・72）3 点、瓦器甕（73・74）7 点、無釉陶器備前播鉢 1 点・常滑甕 1 点、中国製白磁碗（52）1 点、弥生時代前期の土器（53）6 点、古墳時代の須恵器小型短頸壺（54）1 点等合計 491 点が出土した。また、図示していないが、鏝の長さ約 2 cm の初現期の土釜（所謂、「羽釜」）1 点が含まれている。これらのことから、14・15 土坑は、鎌倉時代に帰属する土器等廃棄土坑と考えられる。

123 土坑（図 17、写真図版 10・11）

123 土坑は、2-3 区 B8s12 の北半側に位置し、西側が 101 攪乱に削平を受けるため全容は不明である。123 土坑は、147 土坑と重複関係にあり、123 土坑が後出する。検出できた範囲での平面形は、南北に主軸をもつ歪な隅丸長形状となる。平面規模は、短軸（東西）0.70 m 以上、長軸（南北）1.40 m、残存の深さは 0.06 m を測る。断面形は、東西方向で浅い皿形を呈する。基底は、緩やかな凹み状である。

堆積層は、単層で焼土粒及び炭粒を極めて多量に含む埋積である。

遺物は、古墳時代の須恵器坏 1 点、鎌倉時代の皿と考えられる土師器 3 点、焼けた細かい粘土塊数点が出土した。これらのことから、123 土坑は、時期の決定要素に乏しいが、鎌倉時代の火を伴った行為による埋積遺構と考えられる。

17 土坑（図 18、写真図版 11）

17 土坑は、2-1 区 B8s13・14 にまたがって位置し、西側が 13 区画溝に削平を受けるため全容は不明である。検出できた範囲での平面形は、歪な形状である。平面規模は、短軸（南北）0.70 m、長軸（東西）0.64 m 以上、残存の深さは 0.15 m を測る。基底に接して、結晶片岩の板石を検出した。断面形は、東西方向で浅い窪み状を呈する。

堆積層は、上層の 1 層に炭粒を多量に含み、下層の 2 層は炭粒混じりの灰色シルトと基盤層が薄く互層に埋積する自然埋積とみられる。

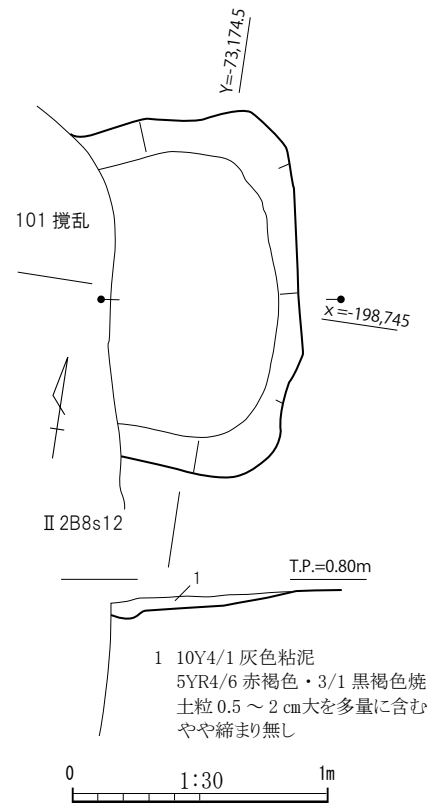


図 17 2-3 区 123 土坑実測図

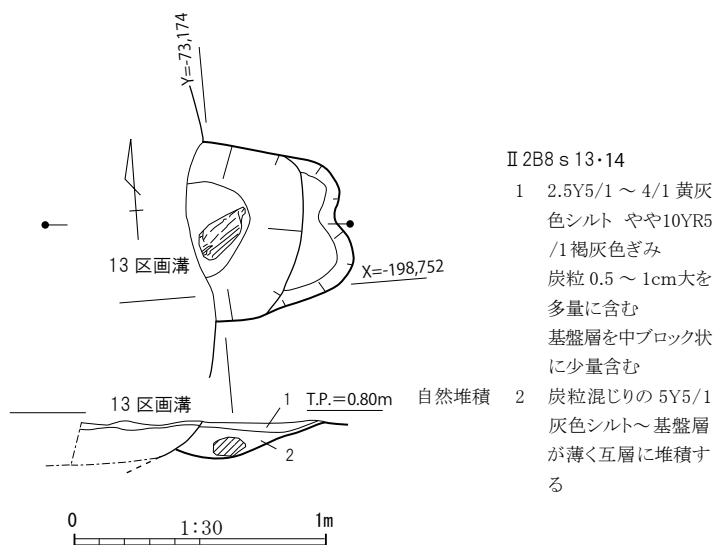
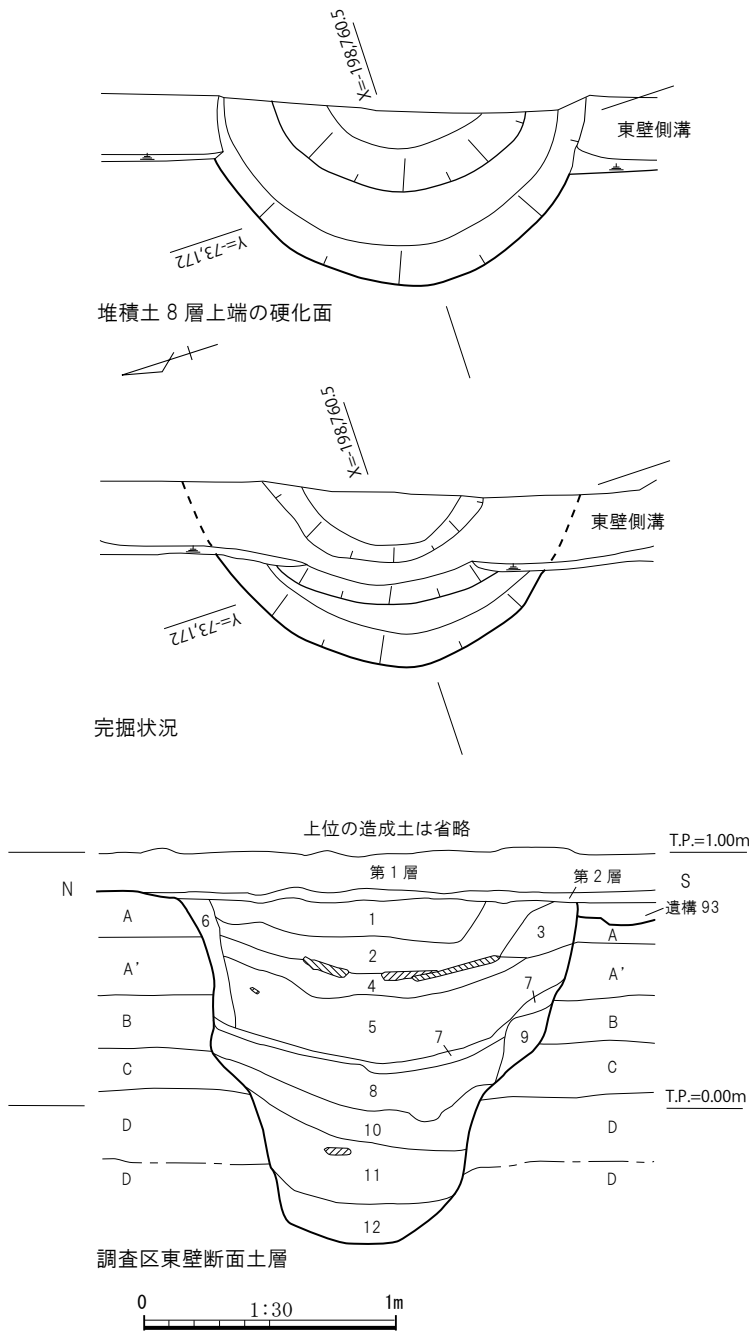


図 18 2-1 区 17 土坑実測図

遺物は、弥生時代前期の土器2点、古墳時代の須恵器坏身1点が出土したのみである。17土坑は、時期の決定要素に乏しいが、埋積層の状況から判断して鎌倉時代に帰属するものと考えられる。



II 2B8 r・s 16

- 第1層 水田耕作土 2.5Y5/1 ~ 4/1 黄灰色粗砂混シルト
- 第2層 水田床土 5Y6/1 灰色 ~ 6/2 灰オリーブ色粗砂礫混シルト、0.3 ~ 0.5 cm大の細礫を少量含む
- 遺構 93 第2層+基盤層 A

16 水溜

- 全体に締まりやや弱い
- 1 7.5Y5/1 灰色シルト
基盤層 A の小ブロックを中量含む
- 人為的埋土 2 5Y4/1 灰色 ~ 7.5Y4/1 灰色シルト
基盤層 A の小ブロックを中量含む
- 人為的埋土 3 7.5Y6/1 ~ 5/1 灰色シルト
- 4 7.5Y4/1 灰色シルト
5GY6/1 ~ 5/1 オリーブ灰色シルトの中ブロックを中量含む
やや締まり無し
- 人為的埋土 5 4層に N4/0 灰色シルトの中ブロックを多量に含む、やや締まり有り
- 6 3層に類似する
やや締まり有り
- 自然堆積 7 5Y6/2 灰オリーブ ~ 6/1 灰色シルト
締まり弱い
- 人為的埋土 8 10YR6/2 灰黄褐色細砂混シルト
7.5YR4/3 褐色斑状に極めて多量、鉄分の沈着か、締まり有り
上端に硬化面
- 人為的埋土 9 10YR6/2 灰黄褐色微細砂混シルト
やや締まり有り
- 自然堆積 10 10YR5/1 褐灰色粘泥
5G6/1 緑灰色粘泥の中ブロックを少量含む
締まり無し
- 自然堆積 11 N5/0 灰色 ~ 7.5Y5/1 灰色粘泥
5G6/1 緑灰色粘泥の大ブロックを中量含む
締まり無し
- 自然堆積 12 N4/0 灰色粘泥
5G6/1 緑灰色粘泥の中ブロックを少量含む
締まり無し

基盤層

- A 2-2 区第3層系上位 2 に対応
2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト
5G6/1 緑灰色シルト
上記の2層がまだら状態
やや締まり有り
第1層の影響で変色か
- A' 上位よりやや明色
10G6/1 緑灰色ざみで明色に見える
やや締まり有り
- B 10GY6/1 緑灰色微細砂混シルト
南側の一部、基盤層 A の大ブロックを少量含む
2-2 区基盤層 W 下位 3 に対応か
- C 7.5Y6/1 灰色 ~ 6/2 灰オリーブ色微細砂
2.5Y5/6 黄褐色粒及び縦筋状幅 0.5 ~ 1 cmを少量含む
やや締まり弱い
- D 2.5Y4/1 黄灰色 ~ 5Y4/1 灰色粘泥
基盤層 C 下端から 2.5Y7/2 ~ 6/2 灰黄色微細砂の縦筋状幅 0.5 ~ 1cmが少量入る
締まり無し、木質自然木有り

図 19 2-1 区 16 水溜実測図

16水溜 (図19・27・28、写真図版10・21)

16水溜は、2-1区B8r・s16の北端に位置し、東南東側は調査区外に延びるため全容は不明である。平面形は、ほぼ円形を呈するものと考えられる。検出できた範囲での平面規模は、短軸(北北東-南南西)1.57m、長軸(西北西-東南東)0.84m以上、残存の深さは8層上端の10YR6/2灰黄褐色細砂混シルトの酸化土壌化層硬化面までの中心部で0.69m(側で0.51m)を測る。堆積層の大半が人為的な埋積となり、2層下端(4層上端)に結晶片岩の板石3枚(長さ20~40cm、幅25cm前後、厚さ4cm前後)が廃棄されていた。堆積土層の観察から2層と3・4層の間に一時的な時間差を認めることができる。酸化土壌化層硬化面での基底部は、浅い皿形を呈する。16水溜は、平面検出当初、3・6層を掘形、1・2層を井側内とする円形掘形の井戸もしくは溜樹の可能性を考えた遺構である。

16水溜上半部の調査終了後に断ち割り調査を行い、酸化土壌化層硬化面の下位にも掘り込みが0.65m続くことが判明した(上部から合わせて残存の深さ1.34m)。下位での掘り込みの断面形は、U字形を呈する。下位・最下層の堆積層(10~12層)は、自然堆積と考えられる締まりの無い10YR5/1褐灰色~N5/0・N4/0灰色粘泥の埋積である。

遺物は、全体に僅かであるが、上層(1~6層)から弥生時代前期の土器3点、鎌倉時代の土師器碗1点・皿1点、瓦器碗(35)7点、土釜3点、近代の陶器碗1点の細片等合計16点が、下層(8・10・11層)から奈良時代の土師器甕(26)2点、鎌倉時代の土師器皿3点、瓦器碗(27)4点、土釜3点の細片等合計12点が、最下層(12層)から弥生時代前期の土器1点、古墳時代中期と考えられる土師器甕1点、奈良時代の土師器皿(25)1点・高坏1点、鎌倉時代の土師器皿3点、瓦器碗2点、土釜3点等合計12点が出土した。

16水溜は、基底部(T.P.=-0.54m)においても基盤層の湧水層には達していないこと、下層(10・11層)から最下層(12層)にかけての粘泥層に締まりの無いことなどから、遺構名に付記したとおり滞水を伴う水溜として機能し、鎌倉時代に帰属するものと考えられる。

105土坑 (図20)

105土坑は、2-3区B8s11の北西隅に位置する。105土坑は、143溝の北端で重複関係にあり、105土坑が後出する。平面形は、北東-南西に主軸をもつ楕円形状を呈する。平面規模は、短軸(北西-南東)0.82m、長軸(北東-南西)1.54m、残存の深さは0.09mを測る。断面形は、何れの方角でも浅い皿形を呈する。

堆積層は、2層に分けられ、上層は人為的な埋積、下層は自然堆積と考えられる。

遺物は、弥生時代前期の土器3点が出土したのみであるが、堆積層が107土坑の項で前述した106溝に類似することから室町時代もしくはそれ以後に帰属する可能性が考えられる。

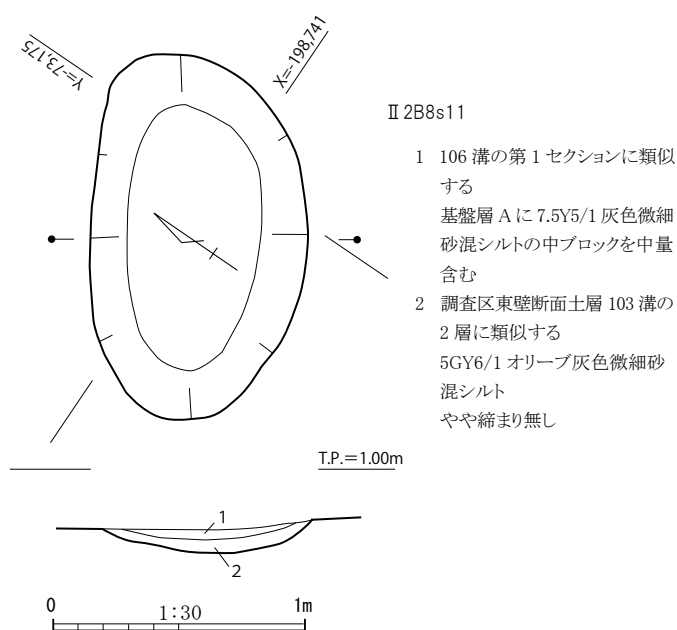


図20 2-3区 105土坑実測図

144・148土坑 (図21・28、写真図版11)

144・148土坑は、2-3区 B8s・t11の南端に位置する。144・148土坑は、143溝・13・112区画溝と重複関係にあり、13・112区画溝よりも古く、143溝より後出する。144土坑の平面形は、西-東に主軸をもつ楕円形状を呈する。平面規模は、短軸(南北)0.67m、長軸(東西)1.00

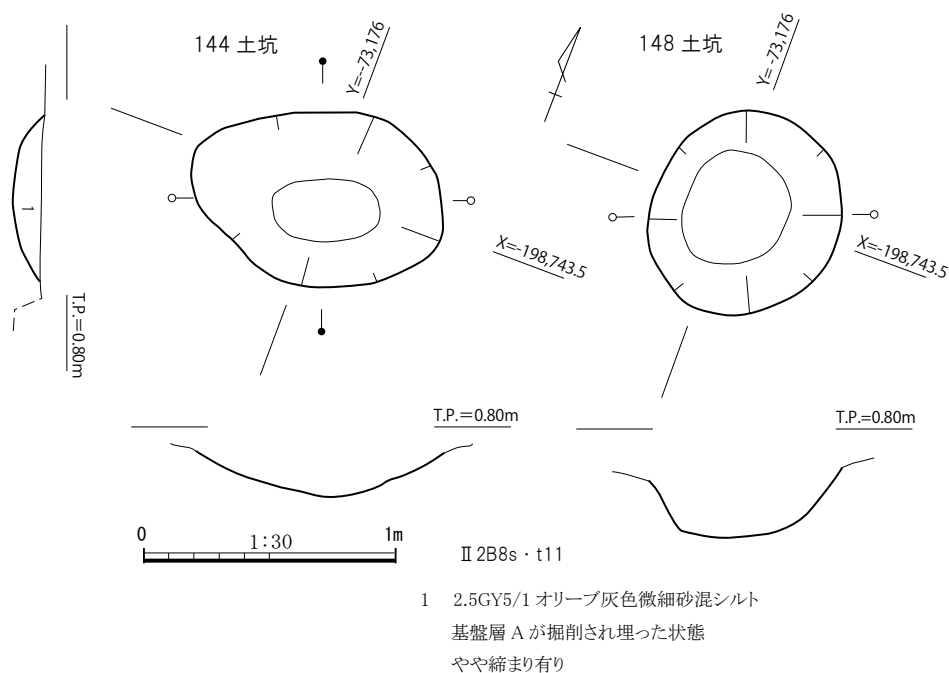


図21 2-3区 144・148土坑実測図

m、残存の深さは0.18mを測る。断面形は、浅い窪み状を呈する。148土坑の平面形は、やや南北に長い円形状を呈する。平面規模は、短軸(東西)0.74m、長軸(南北)0.82m、残存の深さは0.30mを測る。断面形は、浅いU字形を呈する。

144・148土坑は、144土坑が148土坑より上位に位置し、別個の土坑として検出したが、堆積層の状況が酷似することから一連の土坑であった可能性が高い。また、144・148土坑は、最上位の13・112区画溝の掘削後、143溝の掘削途中において検出したため、土坑の上端及び規模等不明瞭となる。さらに、出土遺物の一部に先述した143溝として取り上げたものを含んでいる。

遺物は、144土坑から古墳時代の土師器5点、鎌倉時代の土師器皿3点、瓦器椀(36)4点、土釜1点等合計13点が、148土坑から弥生時代前期の土器(28)4点、古墳時代中期の須恵器甕1点、鎌倉時代の土師器皿5点、瓦器椀1点、土釜1点等合計12点が出土した。これらのことから、144・148土坑は、時期の決定要素に乏しいが、鎌倉時代に帰属するものと考えられる。

柱穴・小穴 (図22・28、写真図版11)

柱穴・小穴は、(1) 弥生時代前期の検出遺構 柱穴・小穴の円形配列の項で前述した以外は、2-1区・2-3区の全域で極めてまばらな状態で検出できた程度である。平面形は、円形状もしくは歪な形状を呈する。平面規模は、直径0.10～0.15m前後のものや直径0.25～0.40m前後のものがある。残存の深さは、殆どが0.05～0.10m前後と浅く、0.20m前後の深さを測る柱穴は稀である。中には基底部に根石の遺存した63柱穴もある。

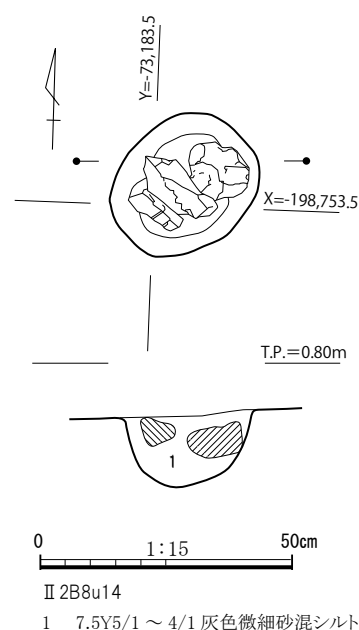


図22 2-1区 63柱穴実測図

これらの内、直径 0.10 m 前後の小穴は、小動物による擾乱の可能性の高いものもある。その他、2-1 区南東隅 B8s・t16 において若干のまとまりを見出すことができるが、いずれも建物跡としての柱並びを見出すことができなかった。

遺物は、極めて僅かであるが、古墳時代の土師器甕、鎌倉時代の瓦器椀、土釜、瓦質甕の細片が出土したのものもある。2-1 区 B8t16 に位置する 22 柱穴からは、瓦器椀 (37) 4 点、土釜 1 点、東播系須恵器 (瓦質) 甕 1 点が出土した。

103 溝 (図 23、写真図版 3・11)

103 溝は、2-3 区 B8q10 ~ s10 で東南東-西北西方向に延びて位置する。東西両側共に調査区外に延びるため全容は不明である。103 溝は、125 柱穴・106 溝と重複関係にあり、103 溝が 106 溝より後出し、125 柱穴が 103 溝より後出する。103 溝は、北北東-南南西幅 0.50 ~ 0.76 m、残存の深さは 0.16 ~ 0.20 m を測り、延長 7.5 m 分を検出した。103 溝は、調査区東・西壁の断面土層と平面観察から東南東側から西北西側に延びる。103 溝は、東西方向の座標軸軸線から E-11° - S に偏る。

堆積層は、大きく 2 層に分けることができ、上層 (1 層) が基盤層に下層のブロック土が入る人為的な埋積、下層 (2・3 層) が自然堆積による埋積と考えられる。

遺物は、極めて僅かで弥生時代前期の壺 2 点が出土したのみで、103 溝の機能時期を推し量ることが難しい。しかし、先行する 106 溝から鎌倉時代の瓦器甕 (40)、室町時代の備前播鉢 (41) 等が出土したことから、それ以後もしくはこれに近似する時期に帰属するものと考えられる。

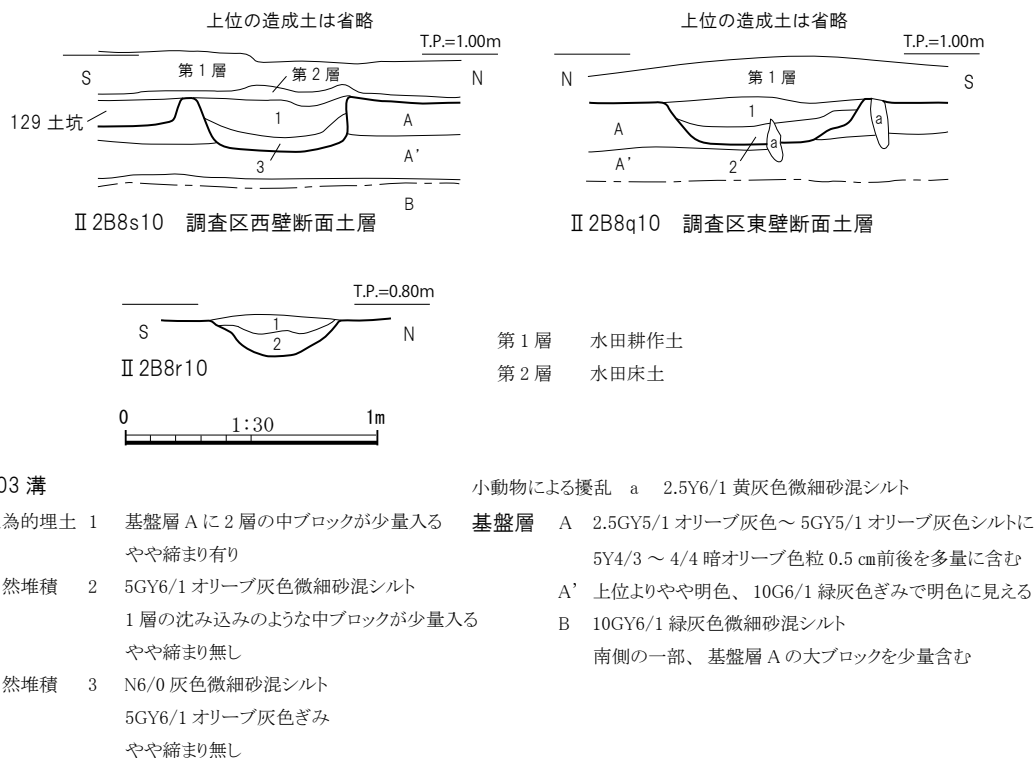


図 23 2-3 区 103 溝断面土層実測図

92 土坑 (図 24、写真図版 11)

92 土坑は、2-1 区 B8x15 の北西隅に位置する。92 土坑は、90・91 柱穴と重複関係にあり、90・91 柱穴が後出する。また、92 土坑は、2-1 区 1 自然流路東肩口の第 3 層系堆積層及び 83

落ち堆積層除去面において検出できた。平面形は、南北に延びる歪な隅丸三角形状である。平面規模は、短軸（北北東-南南西）1.64 m、長軸（東南東-西北西）1.76 m、残存の深さは0.31 mを測る。断面形は、南北で深い45°の傾斜角となる。基底部は、緩やかな凹凸が認められ、南側に向かって下降する。

遺物は、僅かであるが古墳時代の土師器と考えられる甕2点、鎌倉時代の土師器皿2点、土釜1点が出土した。これらのことから、時期の決定要素に乏しいが、92土坑は、鎌倉時代もしくはこれに近似する時期と考えられる。

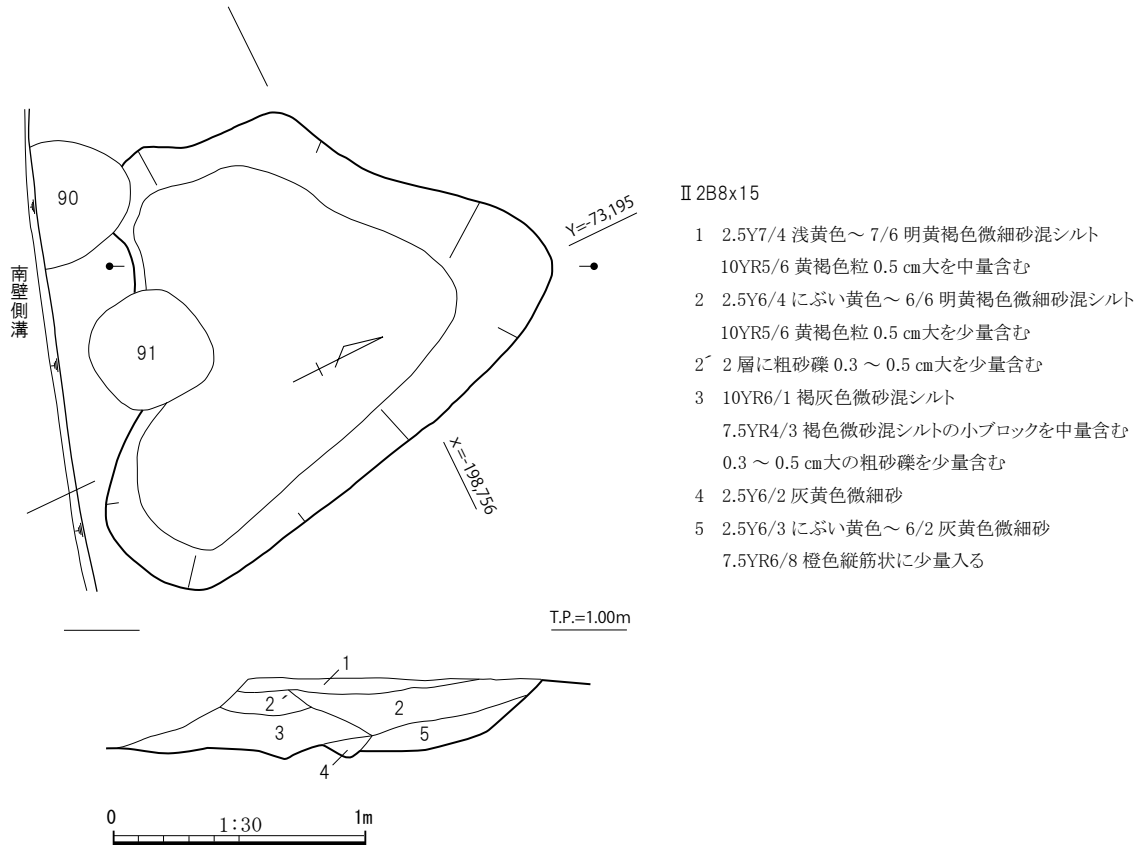


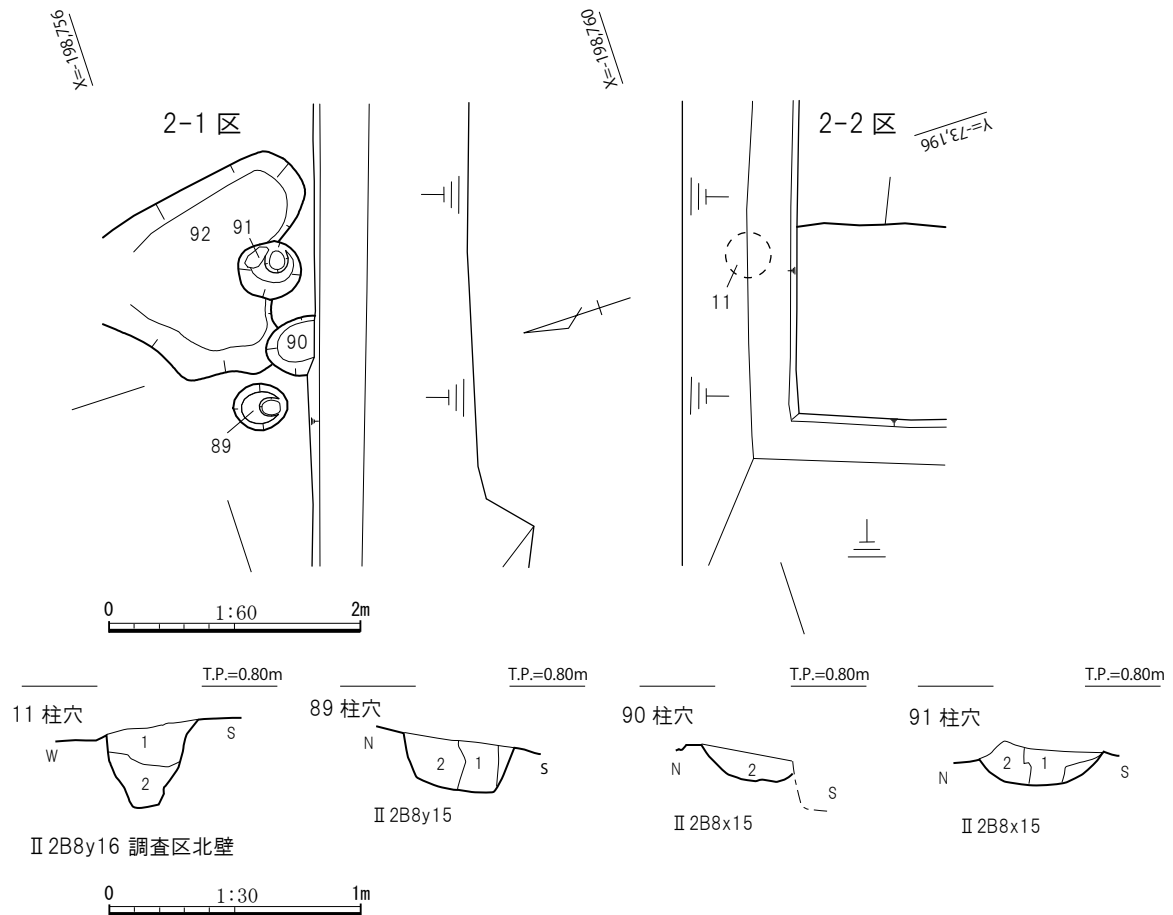
図 24 2-1 区 92 土坑実測図

11・89・91 掘立柱柱穴 (図 25、写真図版 11・12)

11 柱穴は、後述する 2-2 区 B8y16 の調査区北壁断面に位置する。89～91 柱穴は、2-1 区 B8x・y15 にまたがって位置する。90・91 柱穴は、92 土坑と重複関係にあり、90・91 柱穴が後出する。遺物は、何れの柱穴からも出土していない。

89・91 柱穴は、先述した 2-1 区・2-3 区の中央から東側にかけて検出した一連の柱穴よりも明確な掘形と柱当りが確認できる。そのため、2-2 区 11 柱穴を含めて考えることによって、建物跡としての柱並びを見出すことが可能となる。図面上での 91 柱穴と 11 柱穴との柱間は、3.75 m となり、概ね 2 間分に相当する。また、91 柱穴と 89 柱穴との柱間は、1.14 m となる。これらのことから、東西の規模は不明であるが、南北 2 間で側に庇もしくは縁の取りつく建物跡の可能性が考えられる。

時期の決定要素に乏しいが、90・91 柱穴が 92 土坑より後出することから、90・91 柱穴も時期的には鎌倉時代もしくはこれに近似する時期、及び 2-1 区 1 自然流路東肩口の第 3 層系堆積層に覆われるまでの段階と考えられる。



11 柱穴

- 1 2.5Y6/2 灰黄色～5/2 暗灰黄色粗砂混シルトに
2.5Y6/2 灰黄色～6/4 にぶい黄色細砂混シルトの
小ブロックを少量含む
やや締まり有り
- 2 2.5Y6/2 灰黄色～6/4 にぶい黄色細砂混シルトに
2.5Y6/2 灰黄色～5/2 暗灰黄色粗砂混シルトの中
ブロックを中量含む
やや締まり無し

89～91 柱穴

- 1 柱当り 10YR5/1 褐色シルト
7.5YR4/3 褐色シルトの小ブロックを中量含む
炭粒 0.5～1 cm大を微量含む
- 2 掘形 10YR6/1 褐色微細砂混シルト
7.5YR4/3 褐色微細砂混シルトの小ブロックを少量含む

図 25 2-1 区・2-2 区 掘立柱柱穴実測図

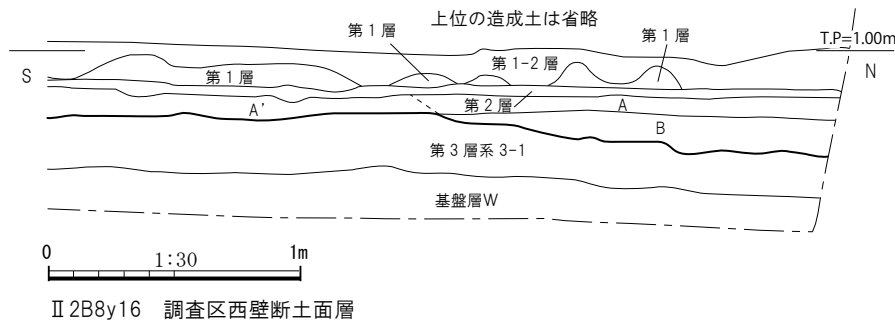
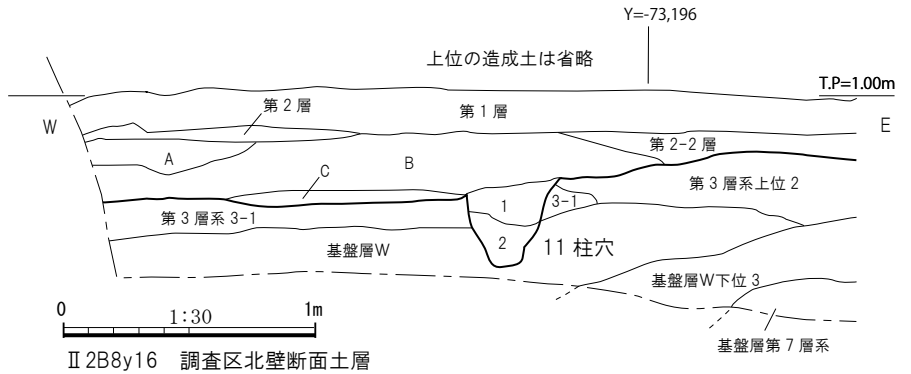
2-2 区 (図 25・26・28、写真図版 12・21)

2-2 区では、検出遺構は調査区北壁断面土層で確認できた柱穴 1 基 (11 柱穴) のみで、平面的に遺構が検出できなかった。そのため、下位層での遺構面及び遺物包含層の有無について確認するため掘り下げを行った。結果、2-2 区では下位層下位面に生活遺構及び遺物包含層が存在しないことが明らかとなった。

11 柱穴 (図 26・28、写真図版 12・21)

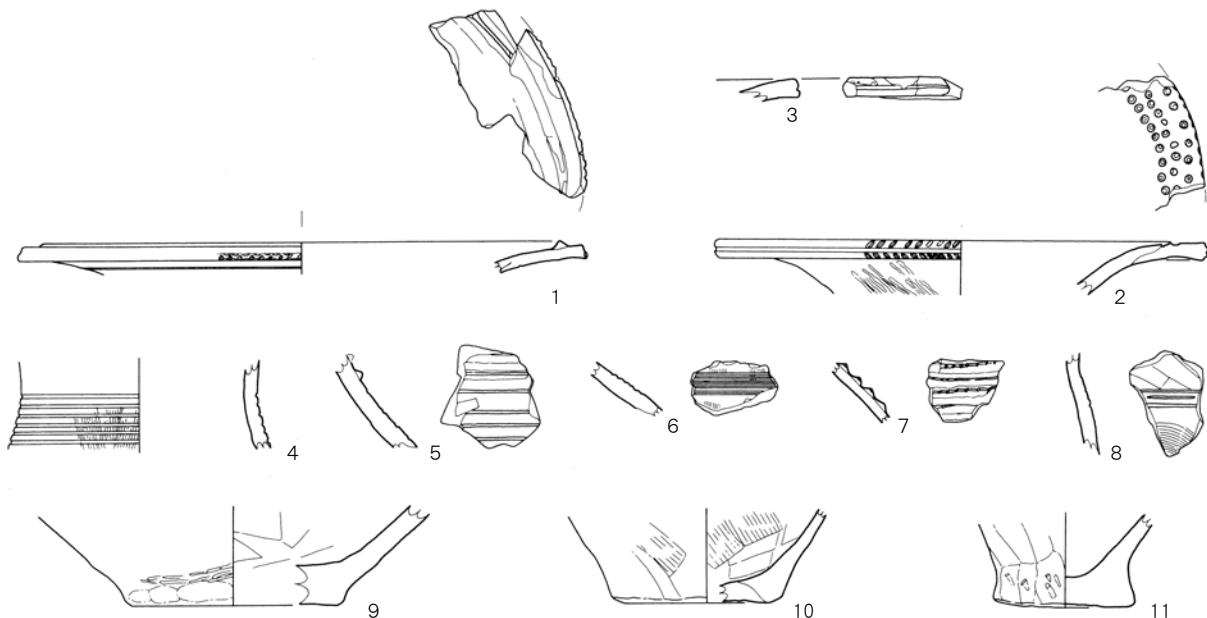
11 柱穴は、2-2 区 B8y16 の調査区北壁断面に位置する。北壁の断面土層観察では、東西 0.36 m・残存の深さは 0.32 m を測る。断面形は、歪な U 字形を呈する。堆積層は 2 層に分けられ、整地層と考えられる C 層と第 3 層系 3-1 層が混在する埋積となる。状況から判断して、柱材の抜き取り後に人為的に埋められたものと考えられる。

11 柱穴から遺物は出土していないが、上位の整地層第2-2層から古墳時代の土師器と考えられる甕2点、遺物包含層A'層から古墳時代の土師器壺2点、甕2点、高坏2点(32・33)が出土した。このことから、それ以後もしくは近似した時期に帰属するものと考えたいが、整地層第2-2層及び遺物包含層A'層が2-1区1自然流路東肩口の第3層系堆積層に該当すると考えられることから、当該遺構を鎌倉時代もしくはこれに近似する時期とするのが妥当と考えられる。

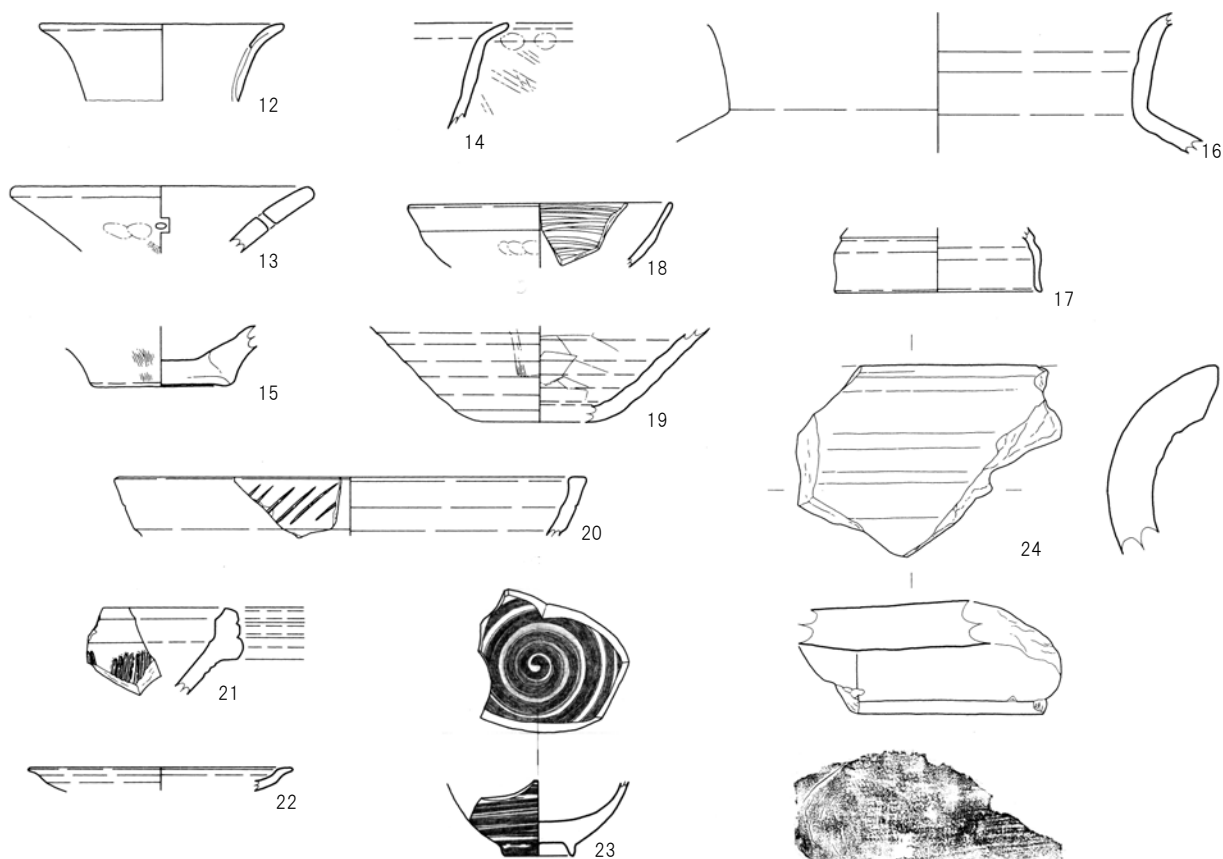


第1-2層	畑耕作土	2.5Y5/2 暗灰黄色～6/2 灰黄色粗砂礫混シルト	0.3～0.5 cm大の細礫を少量含む	11 柱穴	1	C層に第3層系3-1の小ブロックを少量含む やや縮まり有り
第1層	水田耕作土	N4/0 灰色～3/0 暗灰色シルト	0.5～1 cm大の細礫を微量含む	2	第3層系3-1にC層の中ブロックを中量含む やや縮まり無し	
第2層	水田床土	10YR5/6 黄褐色シルト	7.5YR6/8 橙色～5YR6/8 橙色の軟質結晶片岩を極めて多量に含む	基盤層	第3層系 上位2	7.5GY6/1 緑灰色～5GY6/1 オリーブ灰色微砂混シルト
第2-2層	整地層	7.5GY6/1～5/1 緑灰色細砂混シルト	部分的に第1層の影響で10Y5/1 灰色化を呈する	第3層系 3-1	2.5Y6/2 灰黄色～6/4 にぶい黄色細砂混シルト	砂質の度合いが高い やや縮まり無し
A	遺物包含層	10YR5/2 灰黄褐色～5/3 にぶい黄褐色粗砂礫混シルト	2.5Y5/2 暗灰黄色シルトの小ブロックを中量含む	基盤層W	2.5Y6/1 黄灰色～6/2 灰黄色微砂混シルト	砂質の度合いが高い 西側端で10YR4/4 褐色微細砂が下降する やや縮まり有り
A'	遺物包含層	10YR7/8 黄褐色～6/8 明黄褐色の軟質結晶片岩	1～2 cm大を少量含む	基盤層W下位3	2.5Y6/2 灰黄色～6/3 にぶい黄色シルト	2.5GY6/1 オリーブ灰色微細砂～細粗砂
B	整地層	2.5Y6/2 灰黄色～5/2 暗灰黄色粗砂混シルト	10YR7/8 黄褐色～6/4 にぶい黄褐色の軟質結晶片岩	基盤層第7層系	10YR3/1 黒褐色粘泥、N3/0 暗灰色ぎみ	2.5GY6/1 オリーブ灰色微細砂混粘泥
C	整地層	2.5Y6/2 灰黄色～5/2 暗灰黄色粗砂混シルト	1～3 cm大を極めて多量に含む、やや縮まり有り		10YR6/1 褐灰色ぎみ	上記の2層が0.5～1 cm厚の互層に堆積する
						上記の2層が0.5～1 cm厚の互層に堆積する

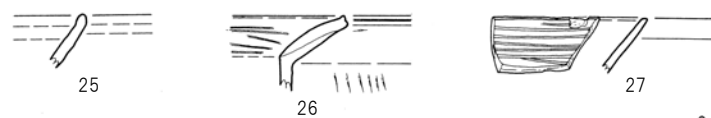
図 26 2-2 区の基本層序 (調査区北壁・西壁断面土層)



1·7·10:109 土坑、2~4·9·11:12 土坑、5·6·8:143 溝



12·13·15~24:13 区画溝、14:112 区画溝



25~27:16 水溜

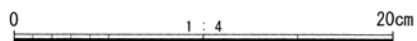
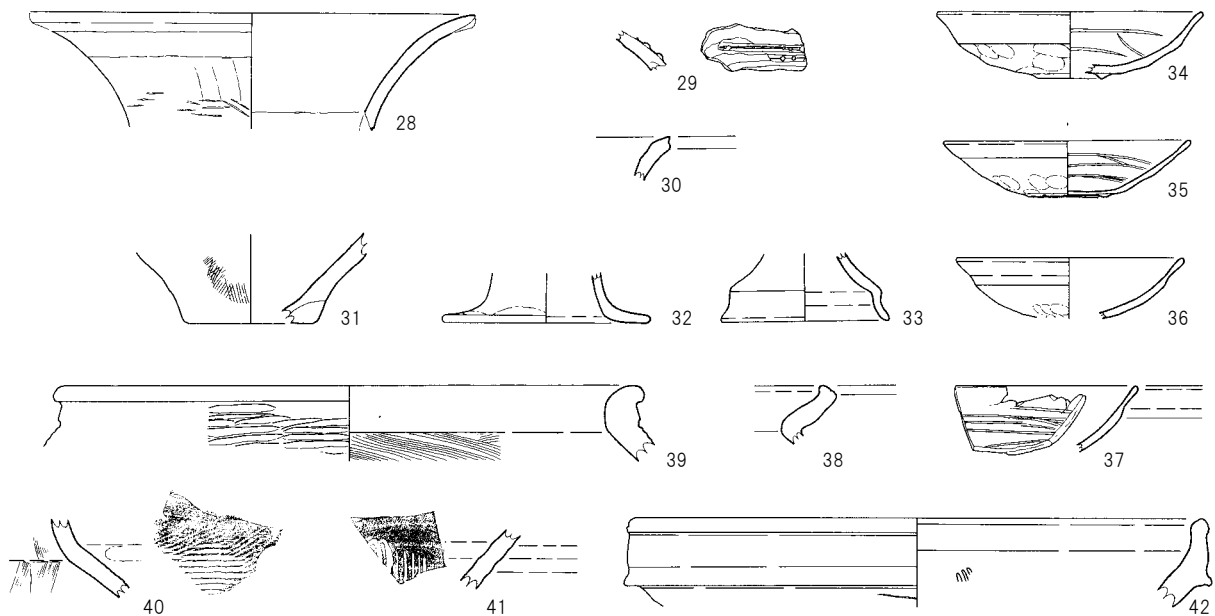
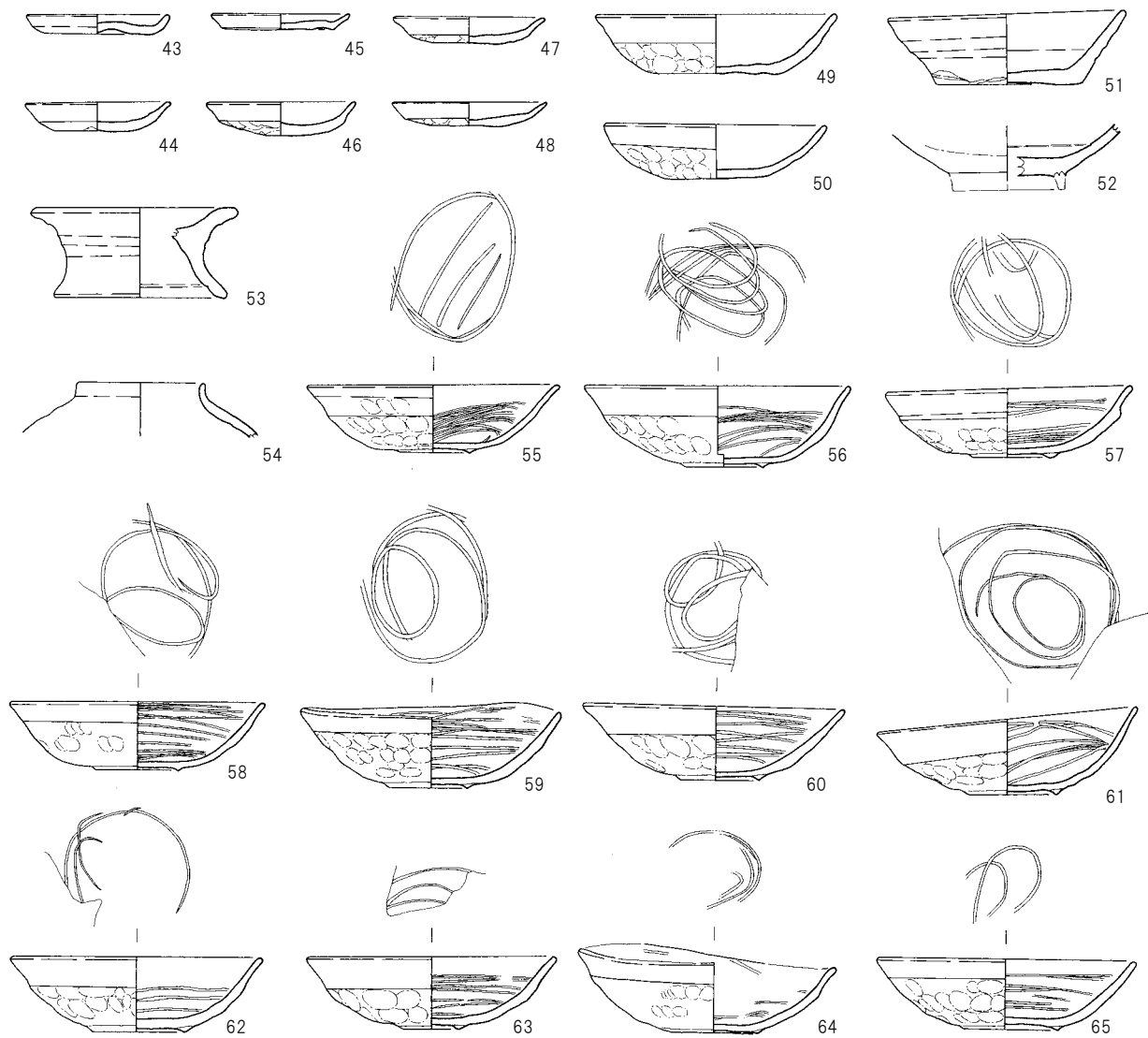


图 27 2 区 出土遺物実測图 1



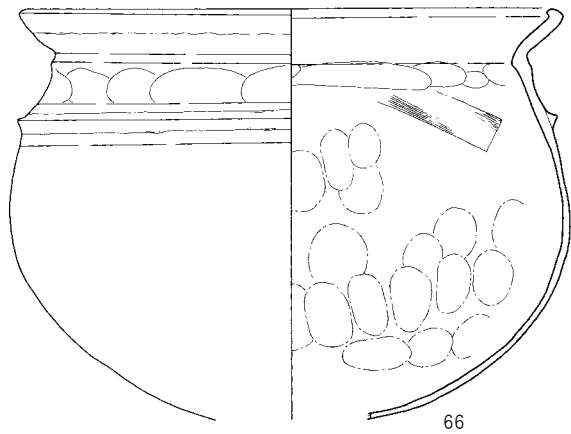
28: 148 土坑、29: 第1層・遺構埋土含む、30: 12 土坑、31・34・38・39・42: 第1層直下基盤層直上・遺構埋土含む、
32・33: 2-2区 調査区西壁断面土層 図A' 層、35: 16 水溜、36: 144 土坑、37: 22 桂穴、40・41: 106 溝



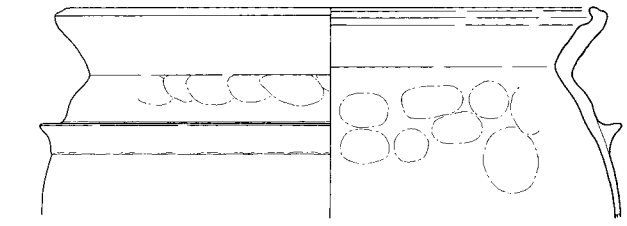
43~65: 14・15 土坑



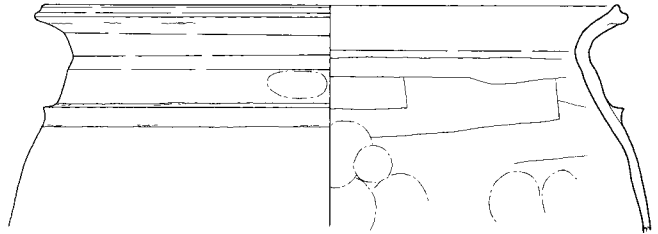
图 28 2 区 出土遺物実測图 2



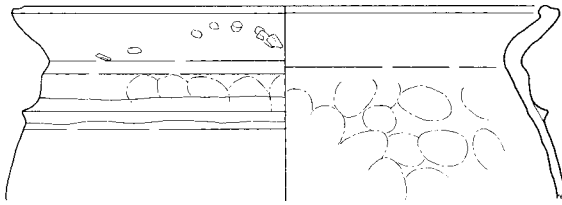
66



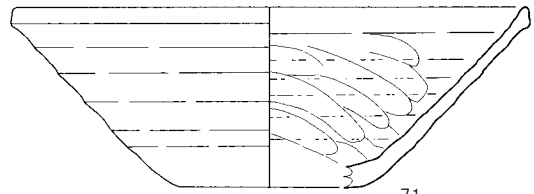
69



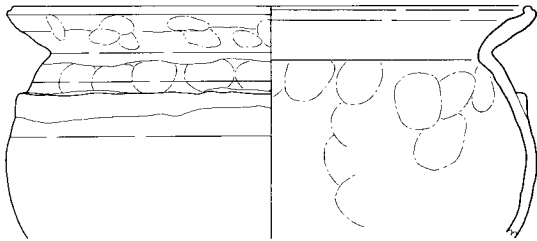
70



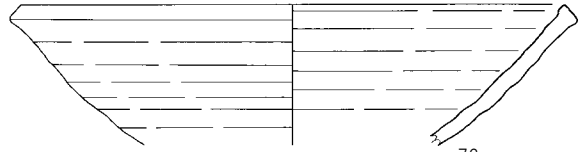
67



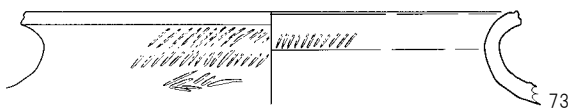
71



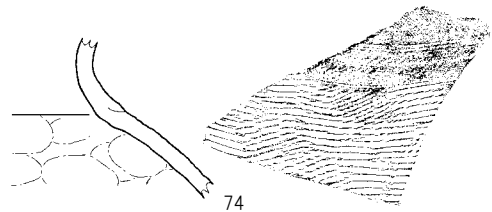
68



72



73



74

66~74 : 14 · 15 土坑

0 1 4 20cm

图 29 2 区 出土遺物実測图 3

第2節 1区の調査成果

1 1区の調査概要 (図30～48、写真図版13～20・24～32)

調査は、西側地区の1-1区・1-2区から開始し、上層で古墳時代中期後半から後期前半にかけて、下層で弥生時代終末期の庄内式併行期から古墳時代前期の布留式併行期にかけての多量の遺物を伴って埋積した1自然流路を検出した。最上層部の遺物の殆ど認められない鎌倉時代もしくはこれに近似する時期と考えられる第3層系堆積層までを機械掘削排土とし、以下を人力掘削として作業を進めた。

1-1区と1-2区の両地区は、調査区の下端で南北に約4m離れた位置関係にある。検出した自然流路は、堆積層の層序及び方向性からみて同一の流向の自然流路と判断できる。結果的に、1-1区は調査区の大半が、1-2区は調査区の全てが1自然流路の範囲に重複した状態であった。

2 各遺構の調査成果

1 自然流路 (図30～34・37～47、写真図版13～20・24～32)

1自然流路は、西側地区の1-1区・1-2区(和田1154-1番地)において南南西から北北東側方向に延びる。旧地形の自然流路の地形を踏襲して現在の水田耕作地の区画が形作られたようである。1-1区で検出した自然流路の肩口は、古墳時代前期までに埋積の進んだ状態で、南東側の肩口から北西側へは、1-1区北西隅で北西側への上りが認められること(写真図版19)から、幅約18m前後、肩口からの深さ約1.00m前後となる。

1自然流路は、鎌倉時代もしくはこれに近似する時期と考えられる第3層系堆積層までの南東側肩口の上りは、2-1区・2-3区(和田1155-1・1156・1157-1番地)の西端で検出できていること(図32・34、写真図版16)から、幅約24m前後以上、肩口からの深さ約0.3m前後の浅い凹み状を呈する。

1 自然流路の基本層序 (図30・32・33、写真図版15・16・20)

1自然流路の第3層系堆積層以下は、基本的に自然流水による澱み堆積と考えられ、1-1区・1-2区の1自然流路の堆積層となる。第3層系堆積層は僅かな出土遺物からの判断ではあるが、鎌倉時代もしくはこれに近似する時期の堆積層と考えられ、東側肩口では一部で人為的な埋積が認められる。

以下、1自然流路の埋積は、下層になるに連れ、第4層系堆積層、第5層系堆積層、第6層系堆積層、第6層系堆積層下端(第6-3層)、第7層系堆積層、基盤層となる。

第4層系堆積層からは、古墳時代中期後半から後期前半にかけての土師器・須恵器が比較的まとまった状態で出土した。一部には初期須恵器の段階に遡る可能性のものも認められる。須恵器は硬質なため比較的遺存していたが、土師器は極めて軟質化し、殆どが取り上げのできないほど脆弱な状態であった。そのため、実際は遺物の総点数として集計したものを上回る状況にある。その他、遺物としては、下位層の弥生時代後期末・終末期～古墳時代前期の布留式併行期の土器、石器を含んでいる。また、一部で木器・木製品、木質遺物を包含している。

第5層系堆積層は、植物質の根痕跡を極めて多量に含み、遺物の出土量は第4層系堆積層に比較して極めて少ない状況になる。遺物は、第4層系堆積層同様に古墳時代の土師器・須恵器が出土したが、厳密な形成時期を明確にできていない。

第6層系堆積層は、1自然流路の堆積層の中で最も多くの遺物を包含する状況にある。一部で第6層系堆積層上半、第6層系堆積層下半、第6層系堆積層下端として掘り分けた。出土遺物の内容把握としては、弥生時代後期及び終末期の庄内式併行期の遺物が第6層系堆積層全体4,666点の内の3,869点(82.9%)、古墳時代前期の布留式併行期～後期の遺物が745点(16.0%)、弥生時代前期・中期の遺物が52

点 (1.1%) となる。また、大半の石器・石製品、木器・木製品、木質遺物がこの層からの出土である。

第6層系堆積層下端 (第6-3層) は、第6層系堆積層と第7層系堆積層の間に埋積した堆積層である (図 32)。第6層系堆積層下端 (第6-3層) は、1自然流路の全域に広がるものではなく、1自然流路の西半側に沿って南北方向 (調査区の北西側 C8a9・10 から南西側 C8b12) に堆積する。調査区の南西隅 (調査区南壁断面土層) では、確認できていない。遺物内容は、第6層系堆積層に類似するが、古墳時代前期の布留式併行期の遺物の比率が逆に高くなる (第6層系堆積層下端 (第6-3層) 全体 3,051 点の内の 645 点 (21.1%))。また、一部で木器・木製品、木質遺物を包含している。

第7層系堆積層は、1自然流路の最下層と認識した堆積層である。第7層系堆積層は、1自然流路のほぼ全域に認められるが、調査区壁面沿いの側溝の一部及びトレンチ調査によるものである。そのため、

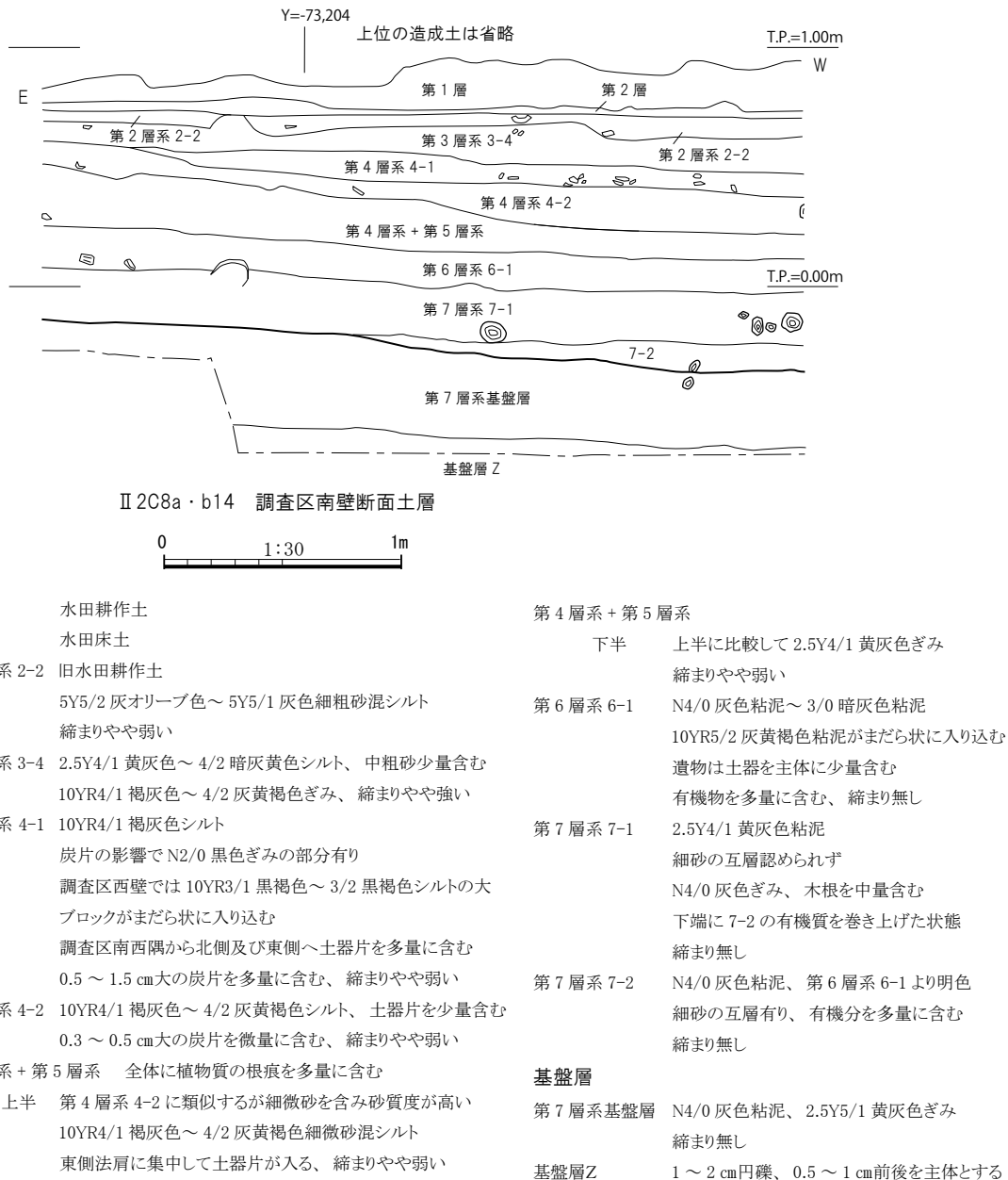


図 30 1-1 区の基本層序 (1 自然流路：調査区南壁断面土層)

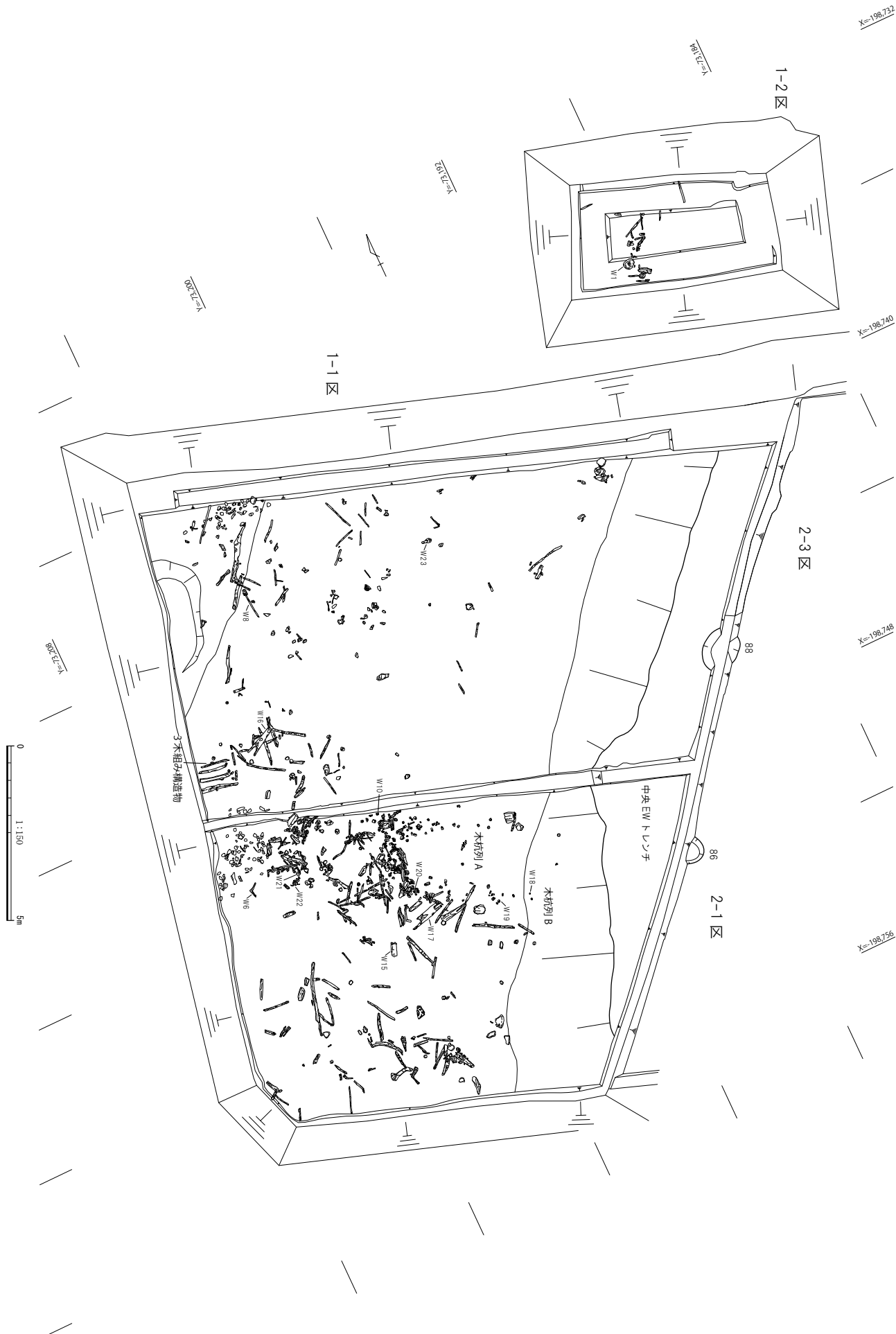
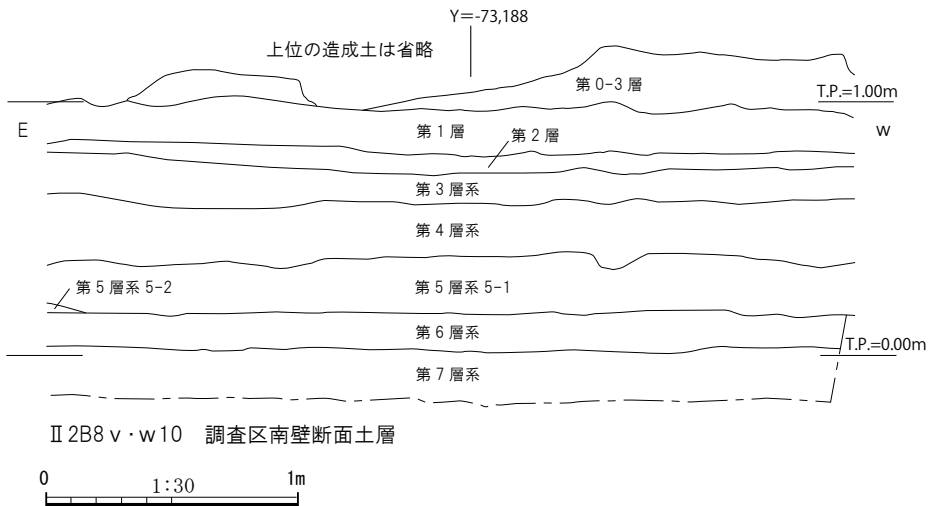


図 31 1-1 区・1-2 区 1 自然流路第 6 層系堆積層内 遺物等検出・出土状況図

取り上げられた遺物量は僅か46点である。遺物は、弥生時代前期の土器11点(23.9%)、弥生時代後期・終末期の土器34点(73.9%)、布留式併行期の紀伊形布留式甕1点(2.2%)が確認できている。

第7層系基盤層は、1自然流路の第7層系堆積層の下位に位置するが、第7層系堆積層と類似するため全容は明らかにできていない。その他、1自然流路の1-1区東側肩口及び下位層には、1自然流路の基盤層となる基盤層W・X・Y・Zが認められる。基盤層は、各々、基盤層W(浅黄色～灰黄色シルト)・基盤層X(青灰色粗砂礫)・基盤層Y(緑灰色～灰色粗砂)・基盤層Z(緑灰色粗砂礫層)及び基盤層Z-2(青灰色系粗砂礫層)となる。

1-1区・1-2区のほぼ全域に広がる1自然流路は、基本層序でも記述したように、上層の第4層系・第5層系堆積層が古墳時代中期後半から後期前半の遺物を伴って埋積したもの、下層の第6層系堆積層及び第7層系堆積層下端(第6-3層)が古墳時代前期の布留式併行期の遺物を伴って埋積したものと考えられる。また、最下層の第7層系堆積層からは弥生時代終末期の庄内式併行期の遺物が主体的に出土するが、遺物が少ないため形成時期を明確にできていない。下層からは遺存状態の比較的良好な遺物(土器、木器・木製品、木質遺物)が多量に出土した。なお、遺物の内、木器・木製品には帰属時期を明確にできないものもある。



- | | | |
|----------|------------------------|--|
| 第0-3層 | やや攪拌度の弱い水田耕作土 | |
| 第1層 | 水田耕作土 | 第1層 +10Y5/1 灰色シルトを主体とし、5Y6/3 オリーブ黄色シルト5cm大のブロックを多量に含む |
| 第2層 | 水田床土 | N4/0 灰色微砂混シルト(やや5Y4/1 灰色ぎみ)、サクサク状態 |
| 第3層系 | 中世堆積層 | 5Y5/3 灰オリーブ色シルト～10Y5/1 灰色シルト、一部に結晶片岩の碎石を多量に含む |
| 第4層系 | | 7.5Y6/1 灰色～7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト |
| 第5層系 5-2 | | 5Y5/4 オリーブ色の縦筋状酸化、遺物は第4層より少ないが少量認められる |
| 第5層系 5-1 | | やや締まり有り |
| 第6層系 | | 2.5Y4/1 黄灰色シルト、細砂・粗砂を微量含む |
| 第7層系 | 1-1区調査区南壁断面土層 第7層系 7-1 | 他層に比較して遺物が多く認められる、第3層に比較して締まりが弱い |
| | | 2.5Y4/1 黄灰色～4/2 暗灰黄色シルト、第4層に比較して締まりが弱い |
| | | 10YR4/4～4/6 褐色粗砂混シルトの径0.5～1cm・縦長さ2～5cmの植物質の根痕を極めて多量に含む |
| | | 第5層系 5-1に類似するが、植物質の根痕が微量になる |
| | | N3/0 暗灰色ぎみの5Y3/1 オリーブ黒色シルト、第5層系 5-1に類似する植物質の根痕を多量に含む |
| | | 締まり弱く柔らかい感じ |
| | | 2.5Y4/1 黄灰色粘泥、N4/0 灰色ぎみ、木根を中量含む、締まり無し |

図33 1-2区の基本層序(1自然流路:調査区南壁断面土層)

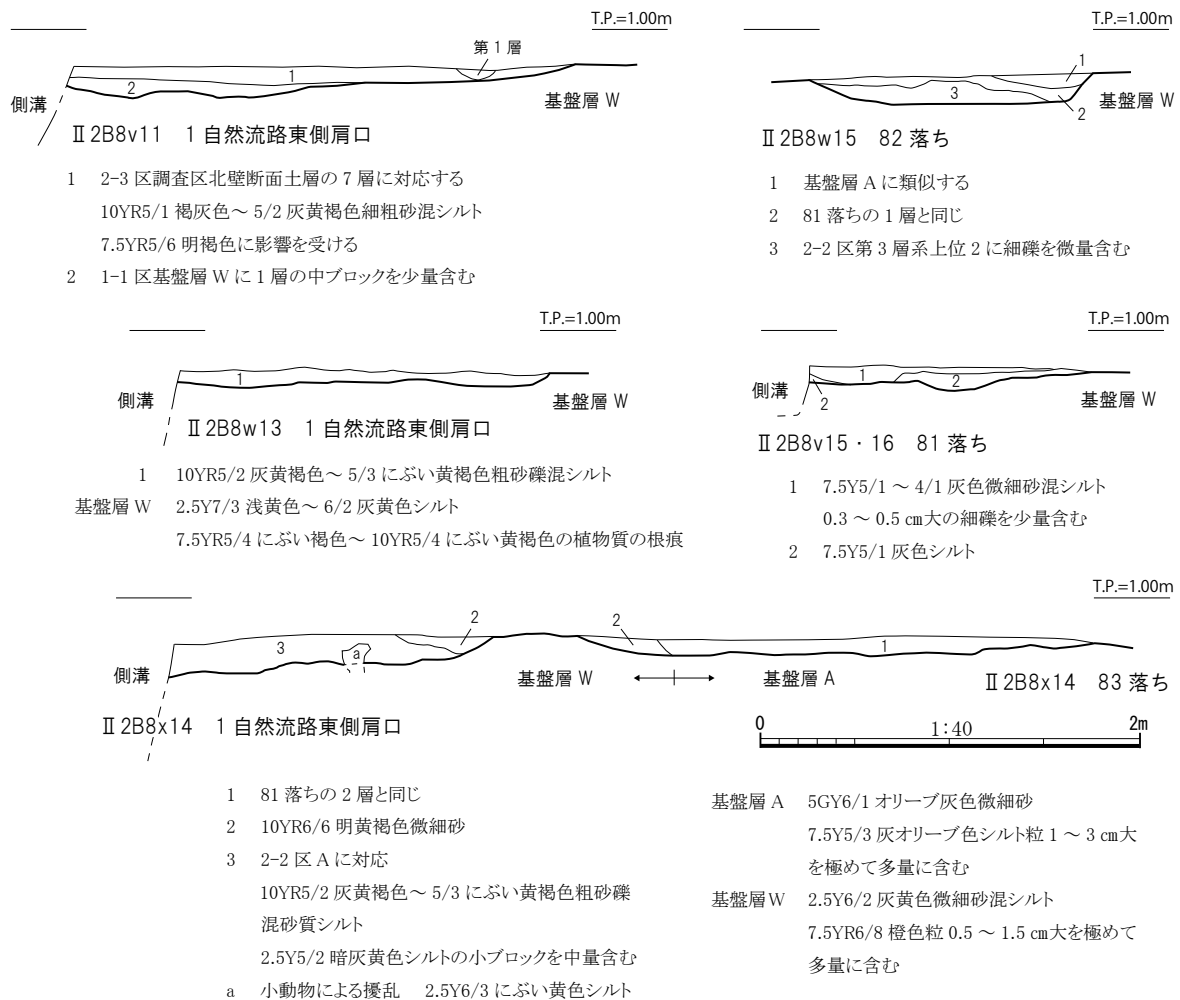


図 34 2-1区・2-3区 1 自然流路東側肩口等断面土層実測図

筈状遺構木杭列 A・B (図 35・47、写真図版 13・14・17・32)

1-1区1自然流路の南側範囲において、第6層系堆積層を掘削する過程で木杭列A・Bを検出した。木杭列A・Bは、1自然流路の流向に対してほぼ直交する位置(木杭列A)、あるいはやや斜行する位置(木杭列B)にあることから水の流れを制御する機能をもつ筈状遺構と考えられる。

筈状遺構木杭列A・Bの西端側C8b12では、木杭列の上に第6層系堆積層下端(第6-3層)が多量の遺物と共に覆い被さる状況が確認できた(写真図版17)。このことから、筈状遺構木杭列A・Bは、古墳時代前期の布留式併行期の遺物を伴う埋積以前の可能性が高いと考えられる。

筈状遺構木杭列 A

筈状遺構木杭列Aは、1自然流路の東側肩口に対しほぼ直交して東南東から西北西に、西端でやや変化し流向に対してやや斜行して延び、木杭列Bと並びを同じくして、延長約10m分を検出した。

筈状遺構木杭列 B

筈状遺構木杭列Bは、木杭列Aの南側に位置し、1自然流路の東側肩口に対しやや斜行して南東から北西に、西端で木杭列Aと並びを同じくして延び、延長約10m分を検出した。



図 35 1-1 区 1 自然流路第 6 層系堆積層内 箒状木杭列等実測図

何れの木杭列も、基本的に芯持ち材の先端部を加工し杭材として利用する。中には板材杭 (WKY753・754) や建築部材垂木の転用材 (W 20 (WKY791)) も認められるが極めて僅かである。芯持ち材は、直径 3～6 cm 前後 (W 18～20 (WKY786・762・791))、直径 7～10 cm 前後 (W 21 (WKY789))、直径 11～14 cm 前後 (W 22 (WKY796)) の太さの 3 グループに分けることができる。直径 3～6 cm 前後の木杭は、1 自然流路の中央から東半側かけて多用され、打ち込みの深さは約 0.2～0.4 m 前後と比較的浅い。直径 7～10 cm 前後の木杭は、直径 3～6 cm の木杭と共に 1 自然流路の中央に多用され、打ち込みの深さは約 0.4～0.6 m 前後となる。直径 11～14 cm 前後の木杭は、1 自然流路の西半側に多用され、打ち込みの深さは約 0.8～1.0 m 前後と深く堅固な状態である。

杭材に利用された樹種については、付章第 1 節の報告にあるように小径木はイヌマキ属・サカキ・グミ属・ツブラジイ・コナラ属アカガシ亜属等が、中径木はタイミンタチバナ・ツブラジイ・スギ・コナラ属アカガシ亜属・コナラ属コナラ節等が、大径木はコナラ属アカガシ亜属・シャシャンボ・ツバキ属等がある。

なお、篩状遺構木杭列 A・B に対する横木や支え木は、確認できていない。

1 自然流路出土の木器・木製品 (図 45～47、出土遺物一覧、写真図版 30～32)

1 自然流路からは、土器、石器・石製品と共に多量の木器・木製品、木質遺物が出土した。木器・木製品、木質遺物は、第 6 層系堆積層に弥生時代前期・中期の土器が僅かながら伴って出土する (第 6 層系堆積層全体 4,666 点の内の 52 点 (1.1%)) ことから帰属時期を明確にできないものを含んでいる。

木器・木製品には、農具、工具、建築部材、土木材等がある。

農具には、泥除・曲柄又鋏・一木鋤・膝柄・木錘がある。泥除 (W 1:WKY722) は、イチイガシの柁目材を利用する。1-2 区からの出土で、一部欠損しているが、上端に 2 箇所の新孔が穿たれ、内面に隆起帯が廻る。曲柄平鋏 (W 2:WKY894) は、コナラ属アカガシ亜属の柁目材を利用する。全体が腐食し脆弱な状態である。曲柄又鋏 (W 3:WKY714・916) は、第 6 層系堆積層 (第 6-3 層) からの出土で、コナラ属アカガシ亜属の柁目材を利用する。同一地点で 2 片に割れていたものが接合した。曲柄又鋏 (W 4:WKY719) は、第 4 層系堆積層からの出土で、コナラ属アカガシ亜属の柁目材を利用する。曲柄又鋏 (W 5:WKY927) は、イチイガシの柁目材を利用する。膝柄 (W 6:WKY721) は、イヌマキ属の又木材を利用する。鋤柄の握り部 (W 7:WKY716) は、第 4 層系堆積層からの出土で、イチイガシの追柁目材を利用する。一木鋤 (W 8:WKY860) は、コナラ属アカガシ亜属の柁目材を利用する。柄の先や鋤先の一部を欠損する。木錘 (W 9:WKY713) は、タイミンタチバナの芯持ち丸木材を利用する。

工具には、鉄斧柄・鉄製工具柄がある。膝柄・鉄斧柄 (W 10:WKY737) は、篩状遺構木杭列 A に転用杭として利用されていた。サカキの芯持ち丸木材を利用する。鉄製工具柄 (W 11:WKY915) は、第 6 層系堆積層 (第 6-3 層) からの出土で、コナラ属コナラ節の芯持ち丸木材を利用する。鉄製の刃先を装着させる部分は、段が下げられ表面が炭化する。

建築部材には、栓・壁板・柱材がある。栓 (W 12:WKY715) は、第 6 層系堆積層 (第 6-3 層) からの出土で、コナラ属コナラ節の割り材を利用する。壁板 (W 15:WKY720) は、第 6 層系堆積層 (第 6-3 層) からの出土で、ヒノキの板目材を利用する合せ板である。一部欠損するが、実測図の上端に円孔が認められる。柱材 (W 16:WKY799) は、カナメモチビワの又木を利用する。柄穴部分を削り抜いた加工痕が認められ、表面の一部が炭化する。柱材 (W 17:WKY797) は、ヒノキ科の大径木の割り材を利用する。上半部は、食痕と腐食が著しい。

その他、用途不明のとがり棒 (W 13:WKY718) はヒノキの割り材、樹皮素材 (W 14:WKY717) はサクラ属 (広

義?) である。

3 木組み構造物 (図 36、写真図版 17)

3 木組み構造物は、調査地の西端 C8b11 南端に位置する。第 6 層系堆積層を掘削する過程で検出し、当該層下端 (第 6 層系堆積層 (第 6-3 層)) に設置された構造物と考えられる。

3 木組み構造物は、やや不揃いの 4 本の芯持ち材を平行ぎみに南北に並べ、東側先端部の横に木杭を伴う。機能していた段階の構造は不明であるが、本来は、丸木の東側先端部と木杭の上部を蔓紐等で結束されていた可能性が考えられる。

周辺部の第 6 層系堆積層の出土遺物から、3 木組み構造物は古墳時代前期の布留式併行期に 1 自然流路が埋積する過程で構築されたと考えられる。

2 自然流路 (写真図版 19)

2 自然流路は、1 自然流路に重複して位置する。2 自然流路は、1 自然流路より深く、規模の大きな流れを形成していたものと考えられるが、調査範囲が限られたため規模等を明確に把握することができなかった。

1 自然流路の下位の基盤層 W (浅黄色～灰黄色シルト)・基盤層 X (青灰色粗砂礫)・基盤層 Y (緑灰色～灰色粗砂)・基盤層 Z (緑灰色粗砂礫層) 及び基盤層 Z-2 (青灰色系粗砂礫層) を含んで形成されたものである。

1-1 区中央部での断ち割り調査により、上位の粗砂礫層 I (= 基盤層 Z) から弥生時代前期の壺 (76・79)・紀伊形甕 (80・82・84)、中期中葉の壺 (94)、層厚 0.3 m の 2.5Y 系暗灰色粘泥を挟んで下位の粗砂礫層 II (= 基盤層 Z-2) から弥生時代前期の壺 (75)、中期後半の高杯 (93)、終末期の壺底部 (96) 等合計 55 点が出土した。

また、2-1 区において、1 自然流路及び弥生時代前期・鎌倉時代の遺構の基盤層 A の断ち割りトレンチ調査を行い、1-1 区の 1 自然流路の下位層で確認していた弥生時代前期・中期の遺物を包含する 2 自然流路の東側法肩と考えられる上りを 2-1 区の西端で確認した。

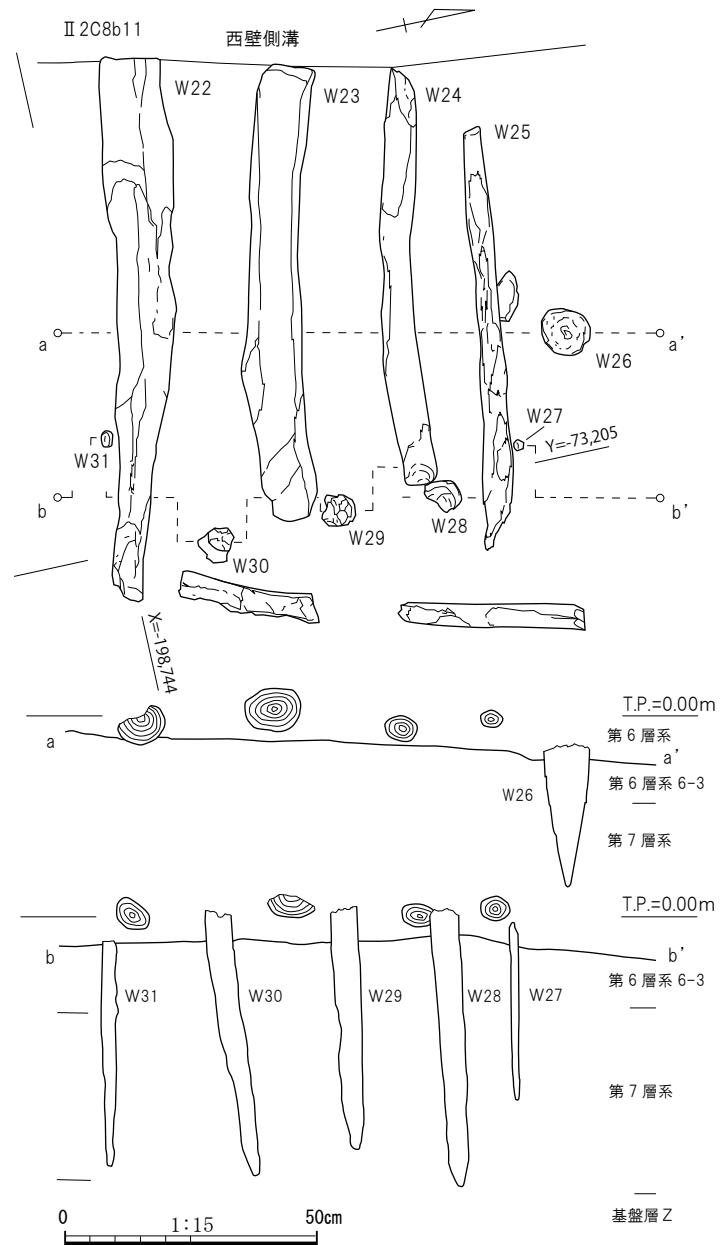
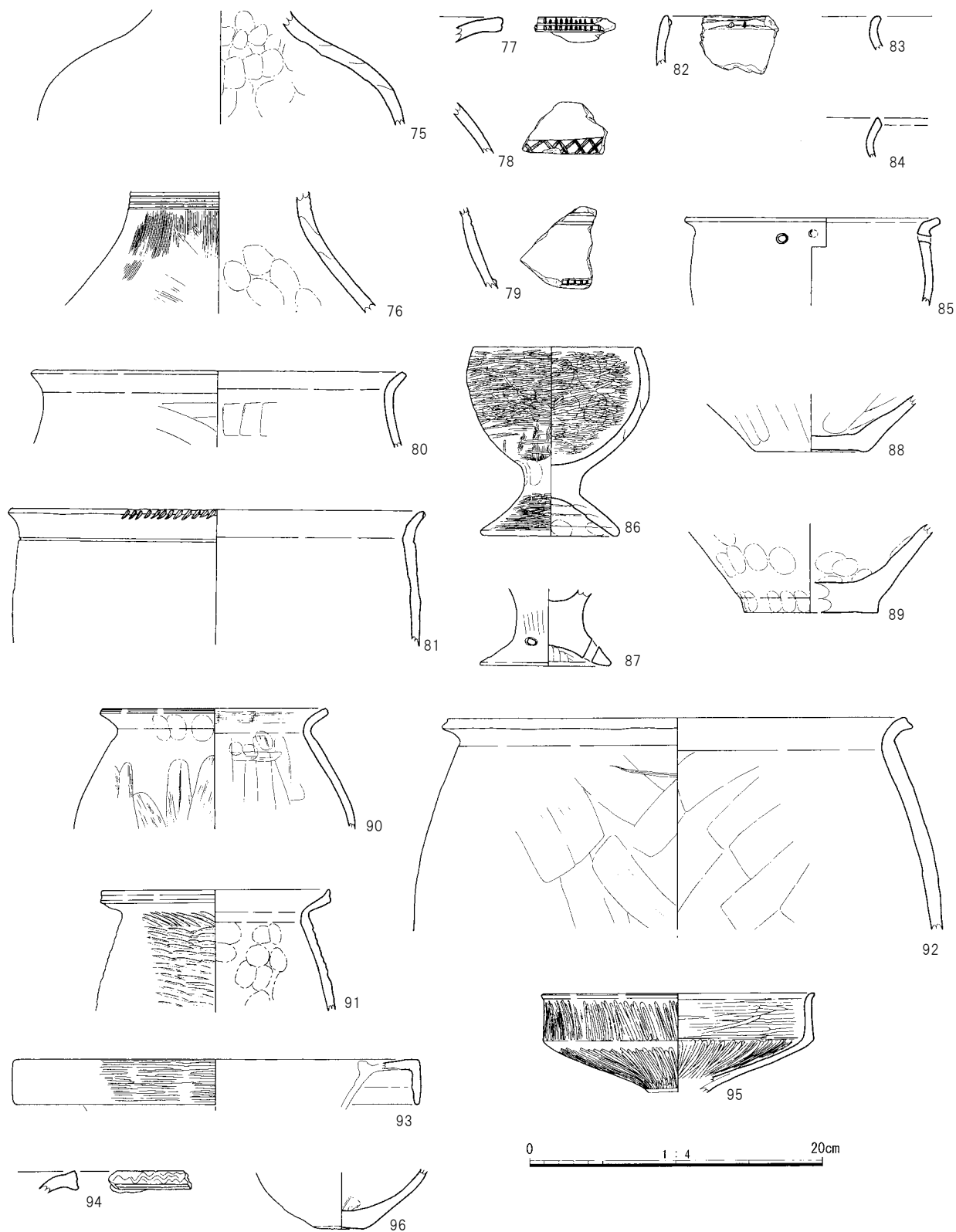
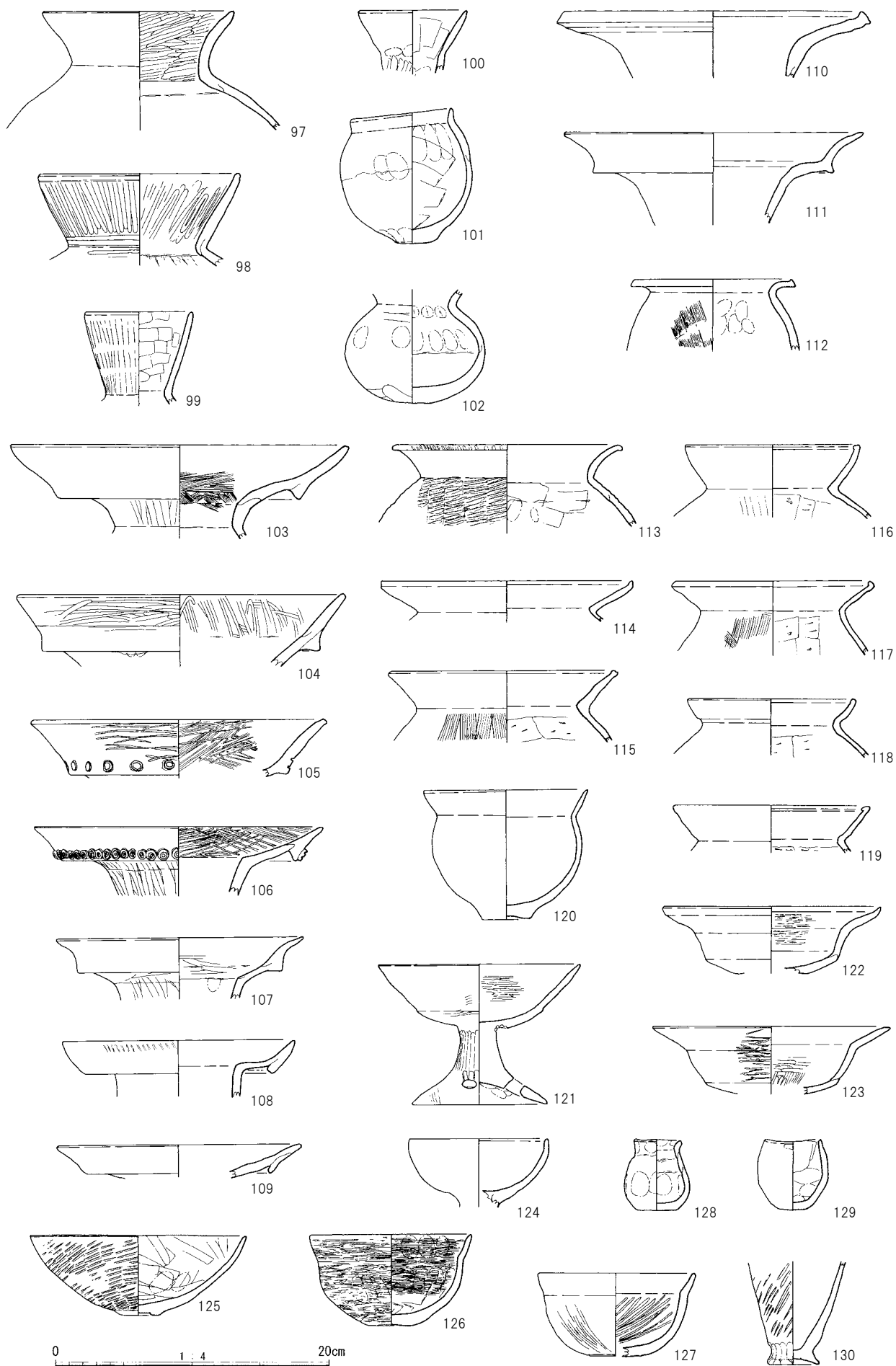


図 36 1-1 区 1 自然流路内 3 木組み構造物実測図



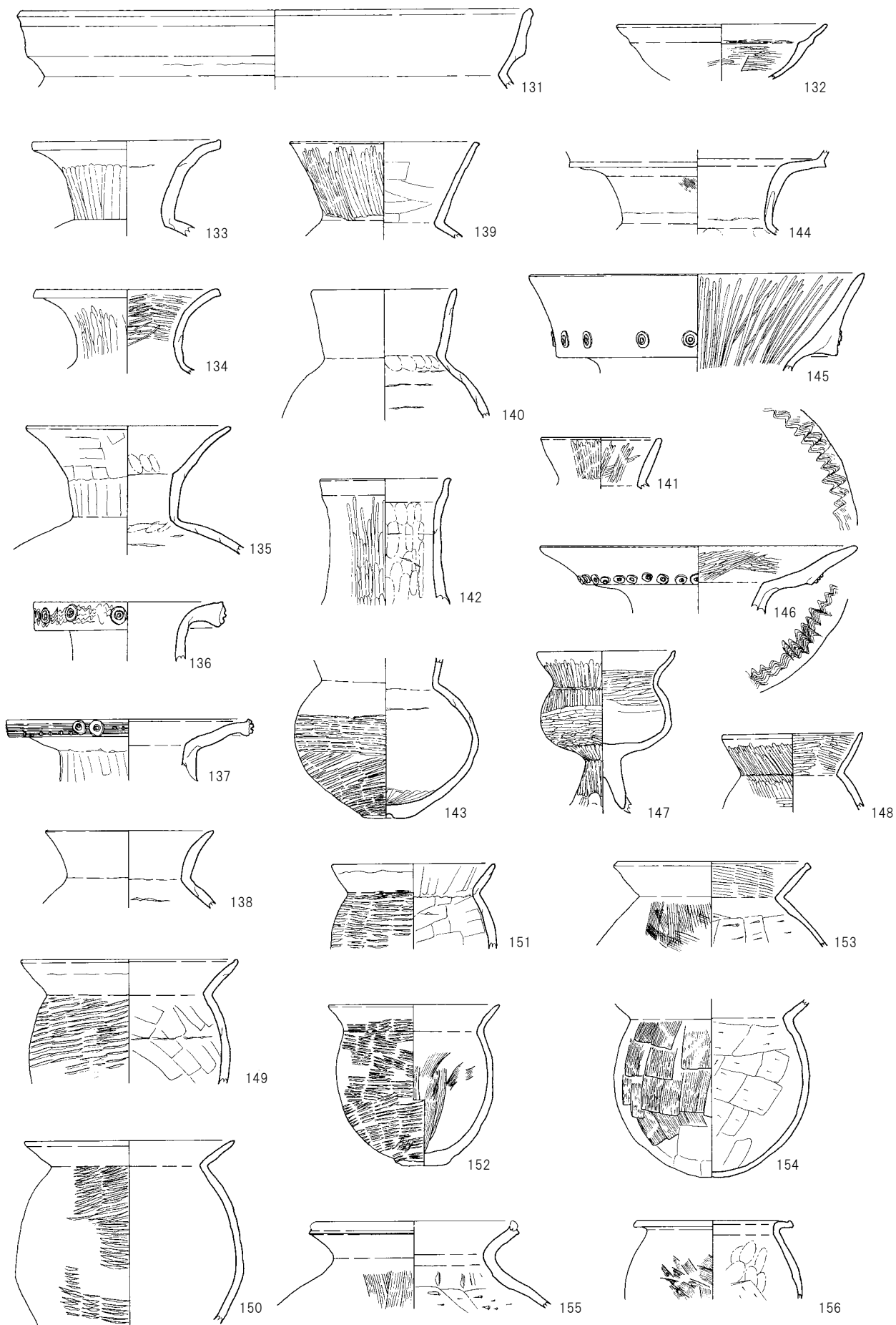
75・83・93・96：第7層系堆積層より下位の粗砂礫層Ⅱ、76・79・80・82・84・88～90・92・94・95：第7層系堆積層より下位の粗砂礫層Ⅰ、77・78：第7層系堆積層、81・85：第6層系堆積層（より下位含む）+第7層系堆積層、86・87：第6層系堆積層、91：第6層系堆積層下半・基盤層Zまで含む

図37 1区 1・2自然流路出土遺物実測図



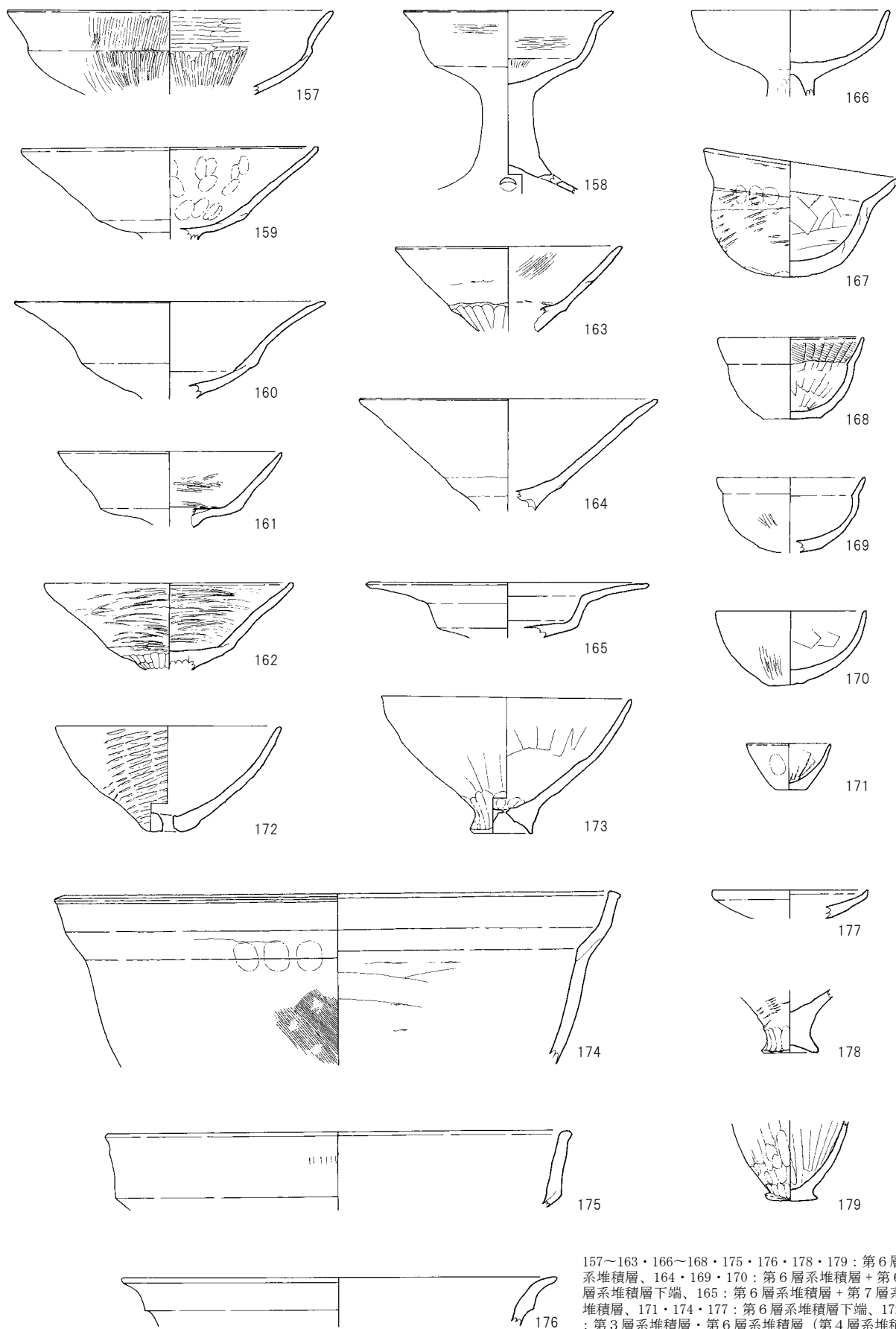
97・110・112・116・124・127・129・130：第6層系堆積層下端6-3、101・104・107・123：第6層系堆積層下半・下端+第6層系堆積層6-3、102：第6層系堆積層+第6層系堆積層6-3、103・106：第6層系堆積層下端・第7層系堆積層上端6-3、他は第6層系堆積層6-3

图 38 1 区 1 自然流路出土遺物実測图 1



131·132：第6層堆積層6-3、133·143·151：第6層系堆積層+第6層系堆積層下端、
 134·136：第5層系堆積層、135·139~141·145·149·150·152~154：第6層系堆積層、137·144·148·155·156：第6層系堆積層下端、
 138：第6層系堆積層下端·第7層系堆積層上端、142：第7層系堆積層、146：第4層系堆積層·第6層系堆積層、147：第6層系堆積層·
 第7層系堆積層

图39 1区 1自然流路出土遺物実測图2



157~163・166~168・175・176・178・179：第6層系堆積層、164・169・170：第6層系堆積層+第6層系堆積層下端、165：第6層系堆積層+第7層系堆積層、171・174・177：第6層系堆積層下端、172：第3層系堆積層・第6層系堆積層（第4層系堆積層含む）、173：第7層系堆積層

0 1 4 20cm

图 40 1区 1自然流路出土遺物実測図3

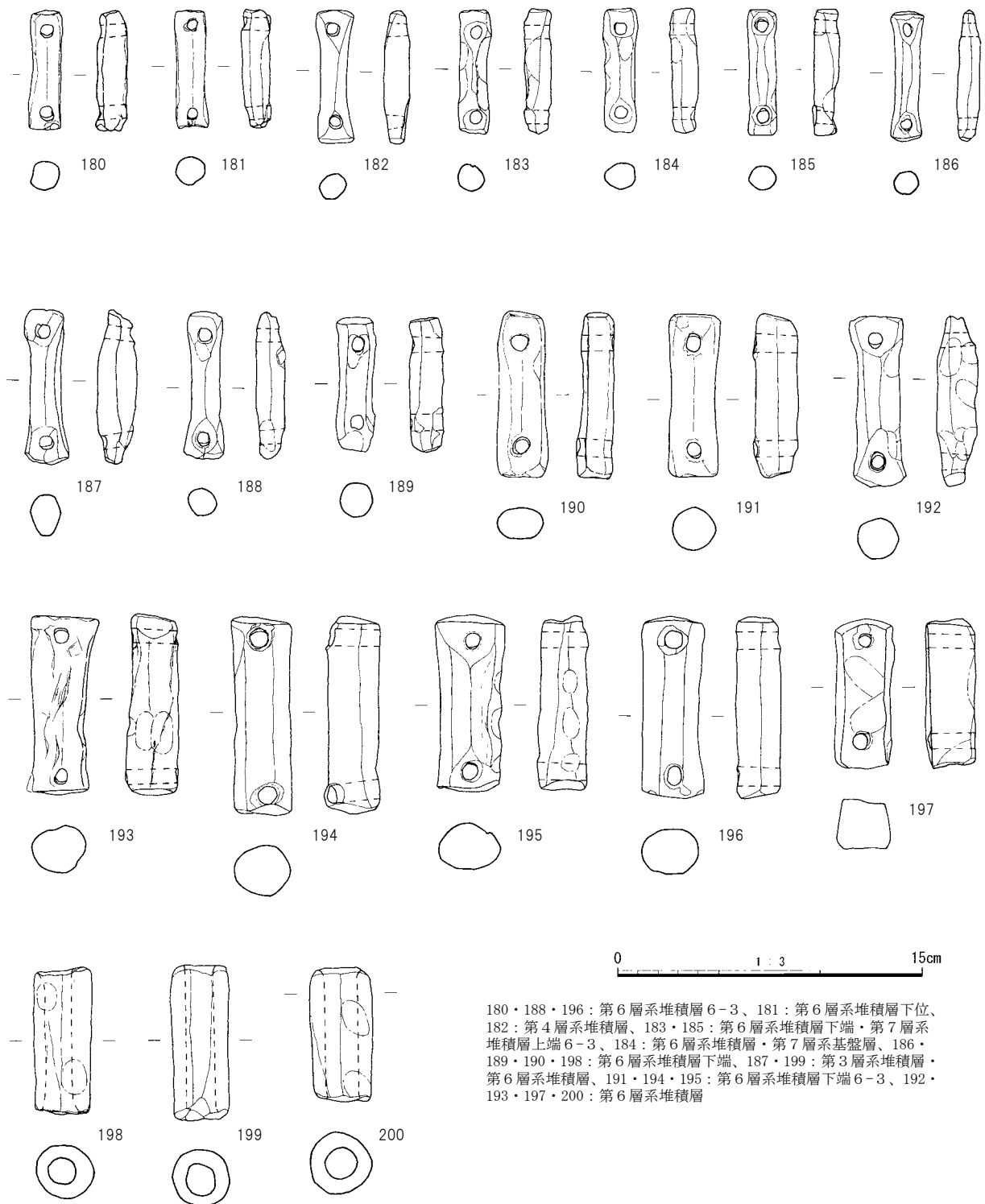
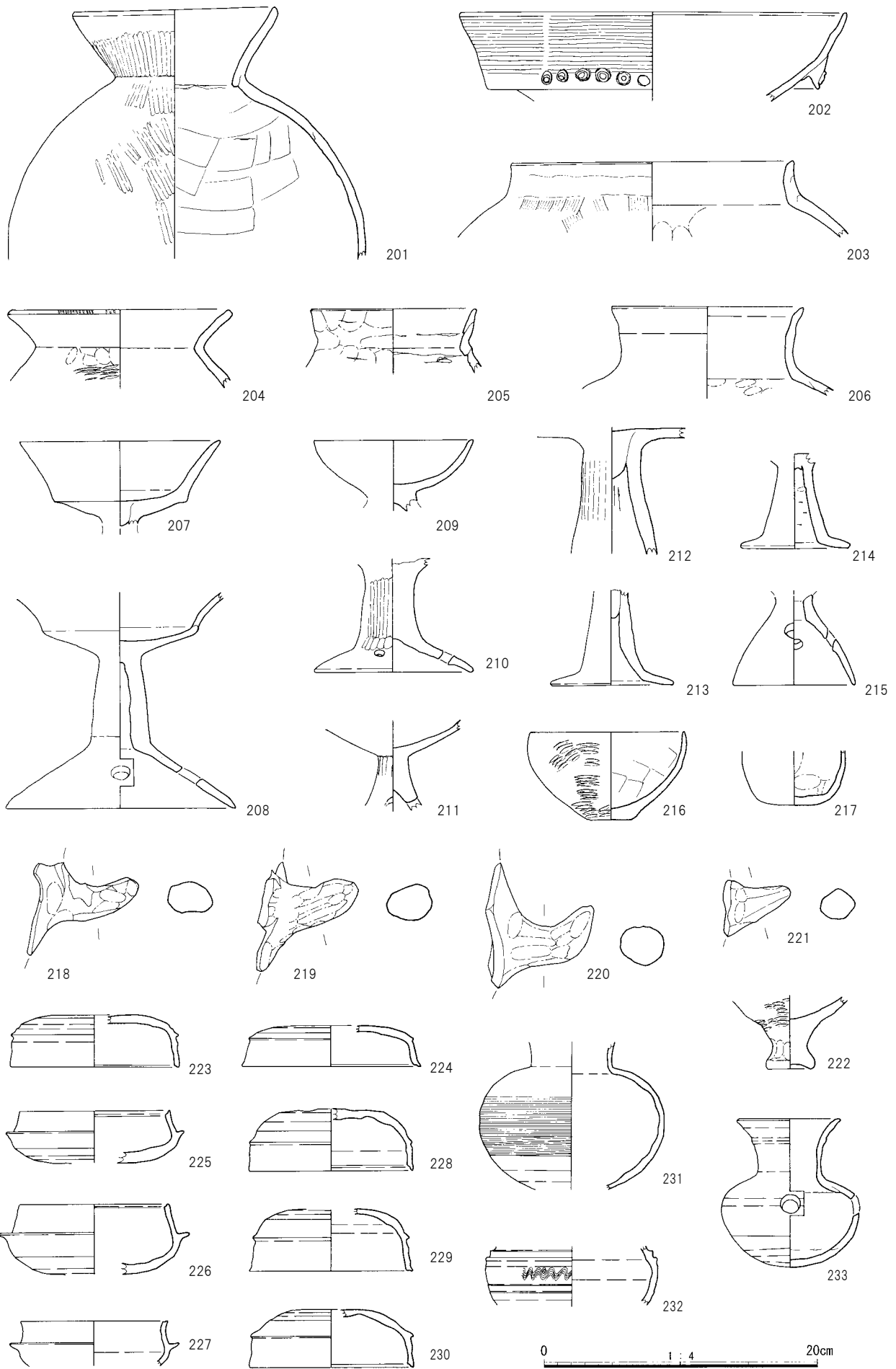
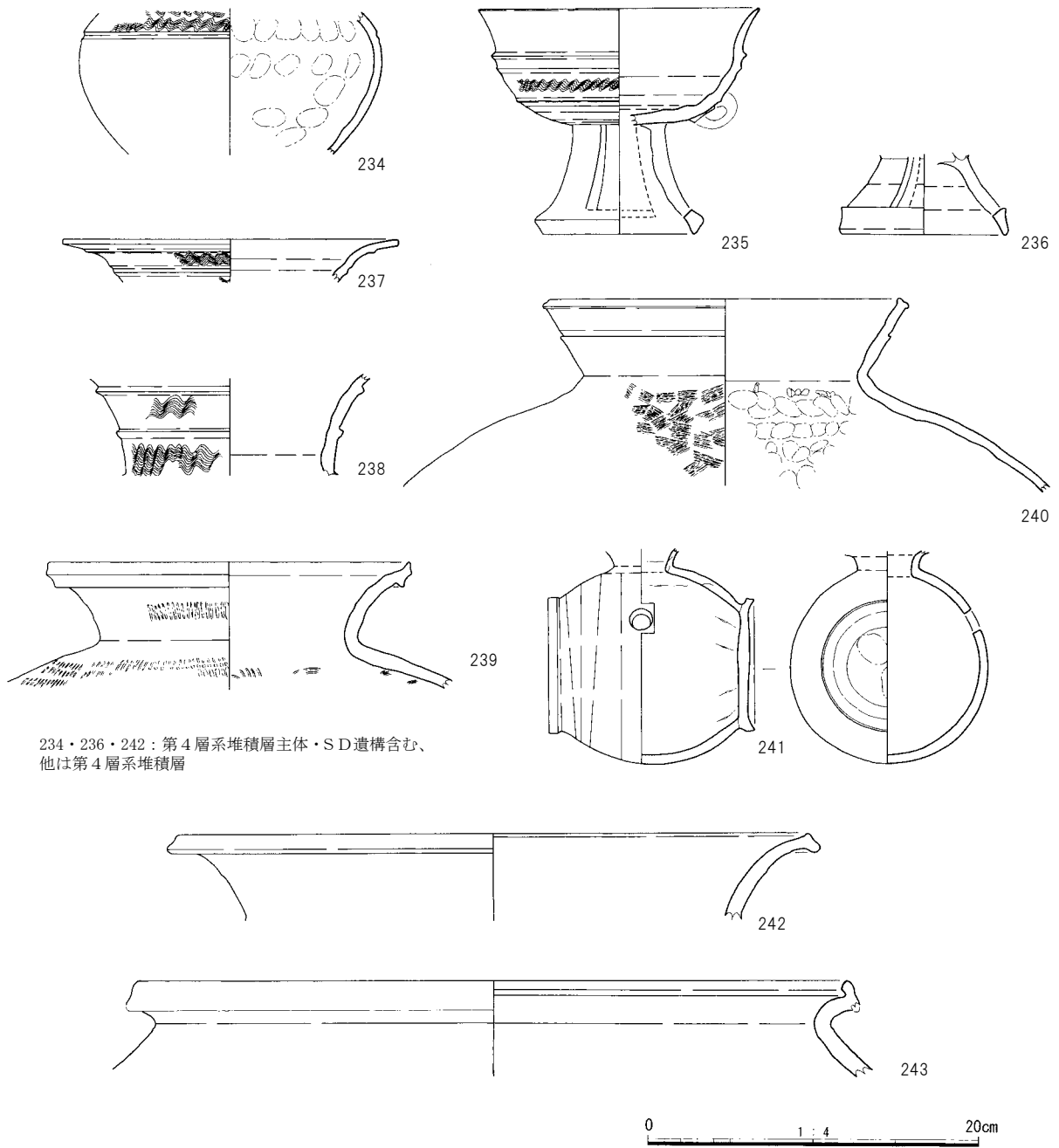


图41 1区 1自然流路出土遺物実測図4



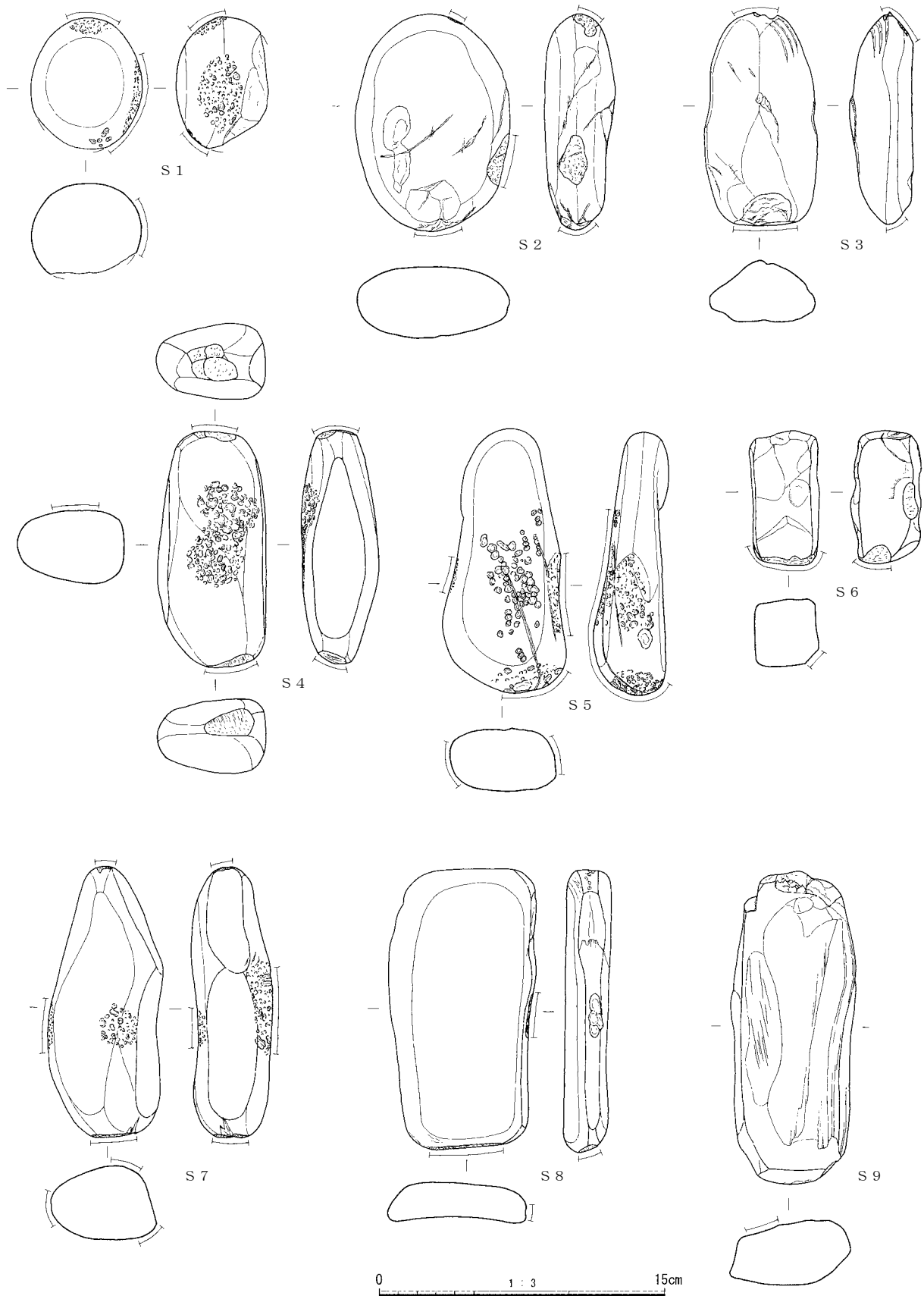
203・205～208・214・224・227：第4層系堆積層主体・S・D遺構含む、211：第4層系堆積層・第5層系堆積層、213：第3層系堆積層・第4層系堆積層、225：第2～4層系堆積層、他は第4層系堆積層

图 42 1区 1 自然流路出土遺物実測図 5



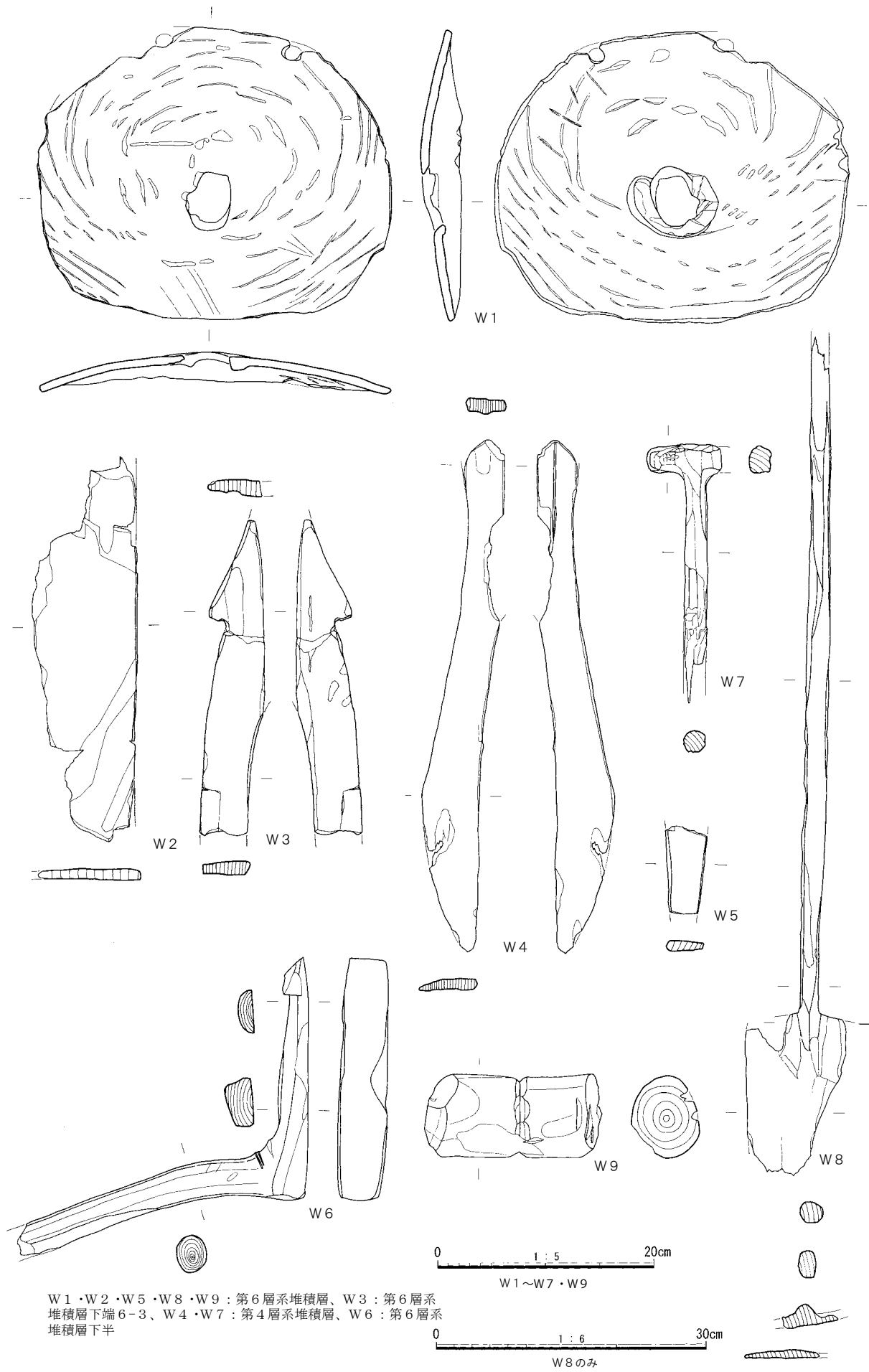
234・236・242：第4層系堆積層主体・SD遺構含む、
他は第4層系堆積層

図43 1区 1自然流路出土遺物実測図6



S 1 : 基盤層 Z に類似 (2 自然流路)、S 2・S 6 : 第 6 層系堆積層 6-3、S 3 : 第 4 層系堆積層、
 S 4 : 第 6 層系堆積層下位、S 5 : 第 6 層系堆積層下端、S 7 : 第 5 層系堆積層、S 8 : 3 SD 遺構か、
 S 9 : 第 6 層系堆積層

図 44 1 区 1 自然流路出土石器・石製品実測図



W1・W2・W5・W8・W9：第6層系堆積層、W3：第6層系堆積層下端6-3、W4・W7：第4層系堆積層、W6：第6層系堆積層下半

W1~W7・W9

W8のみ

図45 1区 1自然流路出土木器・木製品実測図1

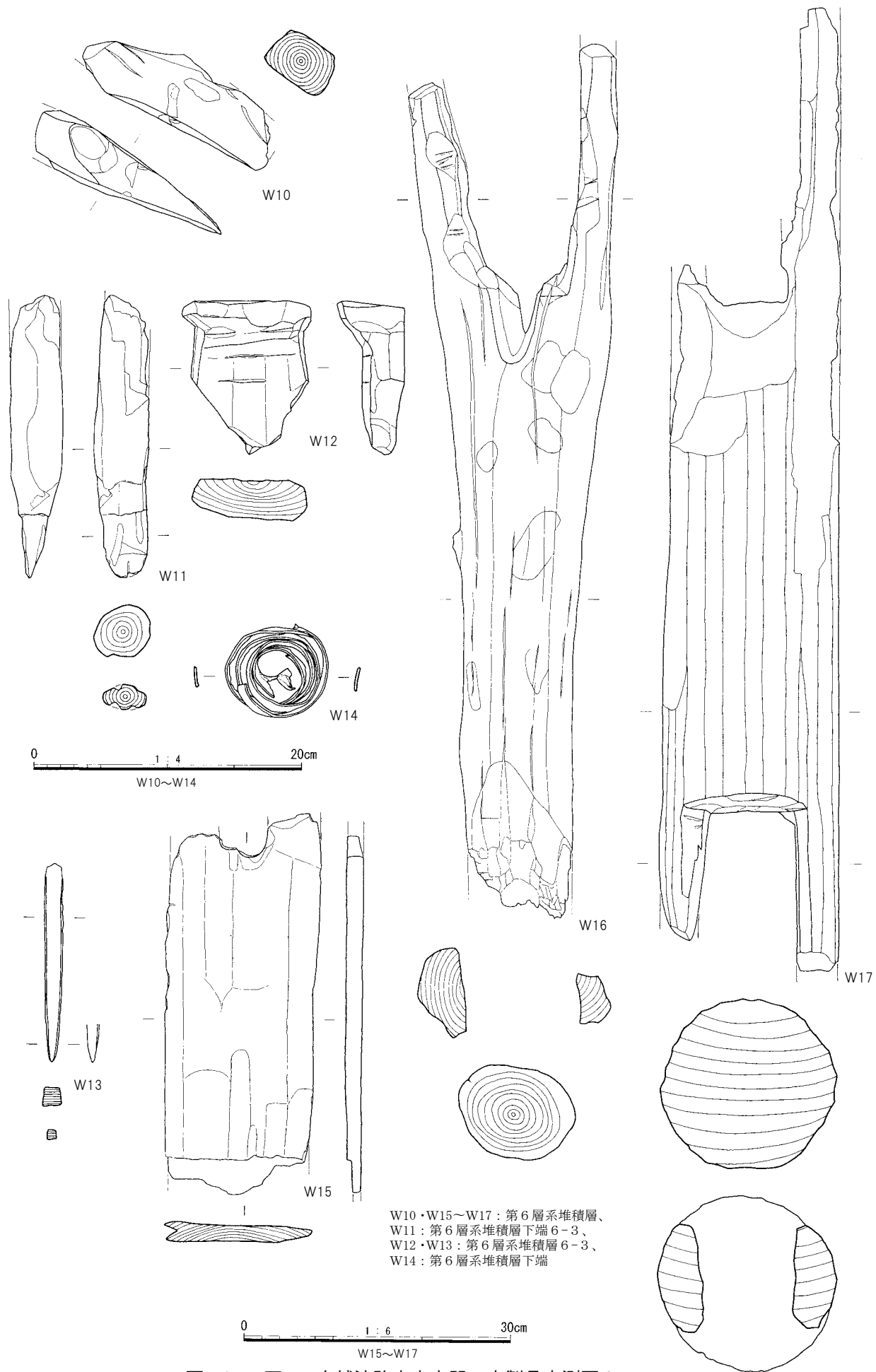
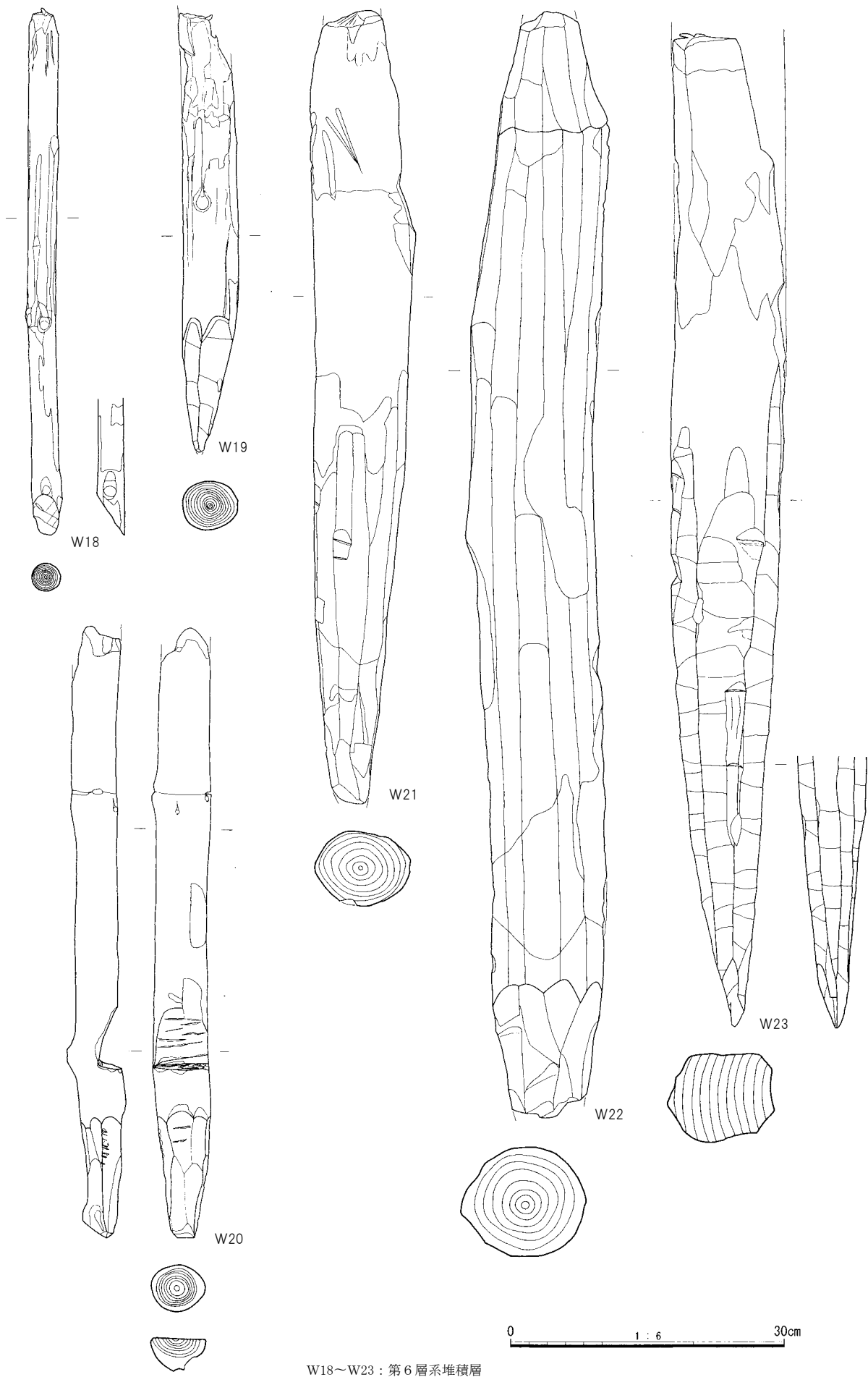


图 46 1区 1 自然流路出土木器・木製品実測図 2



W18~W23 : 第6層系堆積層

图 47 1区 1自然流路出土木製品実測図

第5章 まとめ

今回の和田岩坪遺跡の調査では、大きく東側地区の2区と西側地区の1区で様相を異にすることが明らかとなった。東側地区の2区が弥生時代前期の生活域を含みつつ、主体は鎌倉時代の生活域となり、西側地区の1-1区の大半が下位層の弥生時代前期～中期・後期の遺物を含む堆積層の埋積に始まり（2自然流路）、最終埋積が鎌倉時代もしくはこれに近似する時期（1自然流路の最上層）となる自然流路の範囲に当たる。

和田岩坪遺跡周辺は、従来の地理的な理解では低湿なラグーン性低地という生活域の存在の可能性が低いものであった。しかし、今回の和田岩坪遺跡の調査では、弥生時代前期ないしは鎌倉時代の生活痕跡が明らかとなった。また、地理的な理解の中で読み解かれていなかった南南西-北北東方向に流向する自然流路も検出された。さらに、東側地区の2区では、遺物の中に僅かながら古墳時代後期・奈良時代（図27-25・26）・平安時代中期の土器が見受けられることから、その時代・時期の生活痕跡の存在した証左となるところでもある。

現在においても和田川周辺は、たびたび湛水被害に見舞われる地域である。和田遺跡を含め、弥生時代や古墳時代・奈良時代・鎌倉時代等の多くの生活痕跡が存在することから考えれば、度重なる自然流水に悩まされながらも集落を営んでいたことは想像に難くない。

弥生時代前期の遺構・遺物の意義付け

調査で検出・出土したもので特に目を引くものの一つが、弥生時代前期に位置付けが可能な遺構・遺物である。これらは、2-1区・2-3区の東半側に集中することになり、1-1区の1自然流路の下位層の第6層系堆積層やその下位の2自然流路の埋積層からも少ないながらもまとまりのある遺物が出土している。遺物の中には、縄文時代晩期の突帯文系土器の系譜をひく古相の紀伊形甕（図37-82）や紀伊I-2様式新相とみられる壺（76・79）、甕（81）、高坏（86）等も見受けられる。

また、弥生時代前期と判断できた多くの土坑は、143溝の東側に集中することから143溝と一連の関係性があるものと考えられる。107・109土坑を土壇墓とみた場合、143溝が墓域を区切る区画溝の一部であった可能性の高いものである。

現在のところ、近隣の範囲で弥生時代前期の遺構・遺物が検出されているのは、和田岩坪遺跡の東側約500mに位置する和田遺跡、北東側約500mに位置する神前遺跡である。和田岩坪遺跡と類似する立地にある和田遺跡では、遺構の検出面がT.P. = 0.9～1.1mとなり、和田岩坪遺跡での遺構の検出面T.P. = 0.9m前後と大差ない状況にある。神前遺跡では、岩橋山塊の南西端に位置する半独立丘陵的な福飯ヶ峯（標高約102m）の南西側の丘陵裾部から沖積平野部に立地することから遺構の検出面はT.P. = 2.0m前後から和田川に向かって下降する南側ではT.P. = 1.30m前後となる。和田岩坪遺跡や和田遺跡より遺構の検出面が高くなり、より安定した立地に生活域を形成していたものと考えられる。

このように、従来の地理的な理解では低湿なラグーン性低地という生活域ではあるが、周辺に点在する僅かな高まりを生活域として弥生時代前期の段階ですでに人々の営みが開始されたことが明らかとなってきた意義は重要である。

なお、和田岩坪遺跡の南側に位置する坂田遺跡では、時代が下って、弥生時代終末期の庄内式併行期の土器群が初現となるが、遺構の検出面がT.P. = 1.2～1.7mとなり、和田岩坪遺跡より高くなる。

自然流路の埋積状況

下位の2自然流路の粗砂礫層及び粘泥層の埋積(写真図版19)の繰り返しから取り上げた遺物群は、弥生時代前期を主体とするものの、確実に弥生時代中期後半・後期の遺物(図37)を含む状況にある。遺物は、基本的に粗砂礫層Ⅰ・Ⅱから出土し、間の粘泥層からは出土していない。これは、弥生時代後期段階に前期・中期後半の遺物包含層(もしくは遺構)もろとも押し流す土砂流のような河川堆積が調査地南側の上流側から生じた結果であると考えられる。調査できた範囲では、T.P. = -1.30 m以下に粗砂礫層Ⅱが続く河川堆積が存在する。少なくとも、大きく2回の粗砂礫層(上位の粗砂礫層Ⅰ:層厚0.20 m、下位の粗砂礫層Ⅱ:層厚0.50 m以上)の埋積が認められる。

続いて、遺物の出土量が顕著になるのが、第6層系堆積層及び第6層系堆積層(第6-3層)にみられる弥生時代終末期の庄内式併行期から古墳時代前期の布留式併行期の遺物を埋積する様相である。1区全体の遺物の中での弥生時代終末期の遺物が占める割合は、各時代の中で最も高い比率を占める(1-1区・1-2区全体で9,580点の内、6,563点(68.5%)。続いて、古墳時代前期の遺物となる。特に遺物の集中する範囲として、1自然流路の西半側があり、1自然流路以外は、東側地区の2-1区・2-2区・2-3区にも明確な遺構がない状況である。これらのことから、上位の1自然流路の埋積の主体についても、土砂流のような河川堆積が調査地南側の上流側から生じた結果であると考えられる。

最終的に遺物の埋積の多い第4層系堆積層の段階では、第5層系堆積層に植物質の根痕跡を極めて多量に含むことから、湿地状の澱みに植物群の繁殖した様相が窺い知ることができる。その上位の第4層系堆積層にみられる須恵器などの遺物と共に多量の埋積物が生じたものと考えられる。

なお、現在の和田川の水位面は、調査地北側でT.P. = -0.20 m前後となる(平成30年12月5日午前11時計測値:計測時点の潮位は考慮していない)。1-1区調査区南壁断面土層での1自然流路第7層系堆積層下端でT.P. = -0.40 m前後、1-1区調査区北壁断面土層での第7層系堆積層掘削途中でT.P. = -0.50 m前後となる。

弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての土器群(図38～41、写真図版25～27)

出土遺物の内、1-1区・1-2区の1自然流路に埋積する第6層系堆積層及び第6層系堆積層(第6-3層)の同一層位で最も新しい一群を古墳時代前期の布留式併行期と認識している。但し、1自然流路の下層では、一時期古い弥生時代終末期の庄内式併行期に属すると判断できるものが主体を占める。これらは、布留式併行期の土器様相に庄内式併行期の土器様相が共伴するような状況にあるが、和歌山平野の南東部の土器様式が共伴するという、極端に偏在化する様相とは考え難いため従来の視点で土器を観察して大過ないものと考えた。

庄内式併行期から布留式併行期にかけての一群の土器には、搬入品として、図38-110～112・図39-155等の東阿波型土器の一群が認められる。その他、山陽・山陰の可能性が考えられる鉢(図40-176)、大和南西部と考えられる細片1点がある。なお、生駒山西麓産(河内)の土器は認められなかった。

和田岩坪遺跡発見の契機と今回の調査地との関係

ここで、今回の調査地の西側を南北方向に延びる名草川について、往時の遺跡発見の契機となった状況と今回の層序の対比を試みておきたい。昭和31年の県営和田川沿岸地盤沈下対策工事の基幹事業としての名草川改修工事(竈山陵前から和田川本流までの延長400 mの新流水路の開鑿)に伴い、郷土史家

の田中敬忠（たなか よしただ）氏によって多量の遺物の出土と近接地点から割り抜き式井戸枠1基、合せ板の組み合わせ式井戸枠1基と思われるものの発見が記録されている。

田中敬忠「和田川流域の弥生式遺跡」『紀州今昔—和歌山県の歴史と民俗—』昭和54年（1979）（原文は、「和田川流域の弥生式文化遺跡について」『和歌山春秋』昭和31年（1956））によると、「べつち山麓に近く、（中略）地表下15～60cmの地層からおびただしい土器片が出土し、さらに地表下1.5～1.8mの部分からは弥生式の壺・甕・高坏などの土器片が続々と発掘された」とある。田中氏が立ち会った地点位置は不明であるが、今回の調査地の1自然流路からさほど遠くない名草川の上流地点であると考えれば、上層が1自然流路の第4・5層系堆積層、下層が「弥生式土器」と限定していることから、弥生時代終末期から古墳時代前期の遺物を主体的に埋積する第6層系堆積層及び第6層系堆積層（第6-3層）に該当する蓋然性は高いと考えられる。この対応が妥当であるとすれば、1自然流路から南南西側約50mの名草川がやや西に屈折する地点付近（図6の「2-2区」の文字付近）と推定することができ、かなりの広範囲にわたり土砂流の埋積が生じたものと思われる。

また、和田岩坪遺跡の南東側に位置する和田Ⅱ遺跡周辺においても弥生時代中期の資料が表面採取されているとの報告があり、当該期の生活痕跡の存在が濃厚と考えられることから、弥生時代集落の展開は広範囲に広がるものと考えられる。

1 自然流路出土の土錘について（図41・48、表3、写真図版27）

1自然流路からは、土器、石器・石製品、木器・木製品などと共に土錘（180～200）30点が出土した。第6層系堆積層、第6層系堆積層（第6-3層）等、共伴遺物との関係で帰属時期を明確にできないものもあるが、今回出土した土錘は形態的に共通する要素をもつため一括して取り扱うことにする。

土錘には、形態の違いから有孔土錘と管状土錘の2種類がある。各々、有孔土錘をA類、管状土錘をB類とする。有孔土錘は、扁平な隅丸長方形の延板状の両端に近い部分に紐孔を穿った形態となる。表3及び図48に示す法量と重量の分布から有孔土錘をA1類～A5類に分類することができる。各々の長さ重量は、A1類（小型）9点の長さ平均値6.2cm、重量平均値15.1g、A2類（中型）3点の長さ平均値7.1cm、重量平均値（参考値）22.6g、A3類（大型）7点の長さ平均値7.9cm、6点の重量平均値46.0g、A4類（特大型）6点の長さ平均値8.8cm、5点の重量平均値81.8g、A5類（特大型）の長さ7.35cm、重量平均値（参考値）75.0gとなる。また、B類（大型）3点の長さ平均値7.2cm、重量平均値（参考値）55.3gとなる。

これらの表と図から、長さ重量の関係において、A3類の有孔土錘とB類の管状土錘の分布領域が近接あるいは重複することになる。これらの土錘の長さ重量の差の意味するところは、取りも直さず、先行研究の成果により刺し網漁に使用される漁網の種別、もしくは漁網に装着する位置によって異なるものと考えられる。

鎌倉時代の遺構・遺物の様相

最後に、鎌倉時代の遺構・遺物について触れておくことにする。東側地区の2-1区・2-2区・2-3区で検出・出土した鎌倉時代の遺構・遺物は、少ないながらもまとまりが認められる。

2-1区で検出した鎌倉時代の13区画溝は、2-1区の調査時点では14・15土器等廃棄土坑等の配置から2-3区で東側に折れ曲がるものと推定していた。しかし、2-3区の調査によって、13区画溝は2

表3 土錘法量計測値一覧

() 付数値は、残存値を表す。

A 類：有孔土錘															
A1 類：小型							A2 類：中型								
報告書 番号	実測遺物 登録番号	出土遺物 登録番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	報告書 番号	実測遺物 登録番号	出土遺物 登録番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
180	実 9	281	5.9	1.4 ~ 1.6	1.3 ~ 1.5	18		187	実 144	140	7.6	1.5 ~ 2.2	0.9 ~ 2.0	(23)	僅かに欠損
181	実 12	196	5.9	1.4 ~ 1.6	1.1 ~ 1.4	16		188	実 159	236	7.2	1.4 ~ 2.0	1.1 ~ 1.4	20	
182	実 138	70	6.5	1.3 ~ 1.8	0.9 ~ 1.3	13		189	実 172	202	6.55	1.6 ~ 1.8	1.5 ~ 1.65	(25)	僅かに欠損
183	実 160	173	6.2	1.3 ~ 1.5	1.2 ~ 1.3	16									
184	実 161	290	6.2	1.4 ~ 1.7	1.1 ~ 1.3	16									
185	実 162	173	6.2	1.3 ~ 1.4	1.0 ~ 1.2	14									
186	実 169	191	6.4	1.2 ~ 1.6	0.7 ~ 1.1	12									
—	—	157	(4.3)	1.3 ~ 1.5	1.0 ~ 1.2	(11)	約 1/3 欠損								
—	—	171	6.5	1.4 ~ 1.5	1.0 ~ 1.2	17									
—	—	206	5.8	1.3 ~ 1.5	0.9 ~ 1.0	14									
平均値	—	—	6.2	1.3 ~ 1.6	1.0 ~ 1.3	15.1	9 点	平均値	—	—	7.1	1.5 ~ 2.0	1.2 ~ 1.7	22.6	3 点
A 類：有孔土錘															
A3 類：大型							A4 類：特大型								
報告書 番号	実測遺物 登録番号	出土遺物 登録番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	報告書 番号	実測遺物 登録番号	出土遺物 登録番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
190	実 7	194	8.2	2.2 ~ 2.5	1.5 ~ 1.7	(41)	僅かに欠損	193	実 10	242	8.8	2.7 ~ 3.2	2.3 ~ 2.6	(73)	僅かに欠損
191	実 8	195	8.0	2.1 ~ 2.5	2.1 ~ 2.2	52		194	実 158	193	9.7	2.7 ~ 3.0	2.5 ~ 2.7	88	
192	実 157	162	8.3	1.95 ~ 2.7	0.9 ~ 2.0	40		195	実 170	193	8.65	3.0 ~ 3.4	2.2 ~ 2.4	86	
—	—	151	8.5	2.0 ~ 2.3	1.8 ~ 2.0	52		196	実 171	240	8.9	2.8 ~ 3.1	2.0 ~ 2.2	80	
—	—	160	7.4	1.9 ~ 2.2	1.8 ~ 2.0	43		—	—	192	9.2	2.4 ~ 2.8	1.7 ~ 2.0	72	
—	—	163	8.5	2.2 ~ 2.5	1.6 ~ 1.8	42		—	—	262	7.5	2.7 ~ 3.0	2.3 ~ 2.4	83	
—	—	200	6.7	2.2 ~ 2.5	1.8 ~ 2.0	47									
平均値	—	—	7.9	2.1 ~ 2.5	1.6 ~ 2.0	46.0	6 点	平均値	—	—	8.8	2.7 ~ 3.1	2.2 ~ 2.4	81.8	5 点
A 類：有孔土錘							B 類：管状土錘								
A5 類：特大型							大型								
報告書 番号	実測遺物 登録番号	出土遺物 登録番号	長さ (cm)	短径 (cm)	長径 (cm)	重量 (g)	備考	報告書 番号	実測遺物 登録番号	出土遺物 登録番号	長さ (cm)	短径 (cm)	長径 (cm)	重量 (g)	備考
197	実 156	157	7.35	2.6 ~ 2.8	2.4	(75)	僅かに欠損	198	実 11	287	7.2	2.4 ~ 2.6	2.7 ~ 2.9	64	
								199	実 143	140	7.7	2.7	2.7 ~ 2.8	(52)	僅かに欠損
								200	実 155	162	6.7	2.85 ~ 3.05	3.0	(50)	僅かに欠損
平均値	—	—	7.35	2.6 ~ 2.8	2.4	75.0	1 点	平均値	—	—	7.2	2.6 ~ 2.8	2.8 ~ 2.9	55.3	3 点

※平均値は、小数点第2位を四捨五入
一部欠損のため参考値

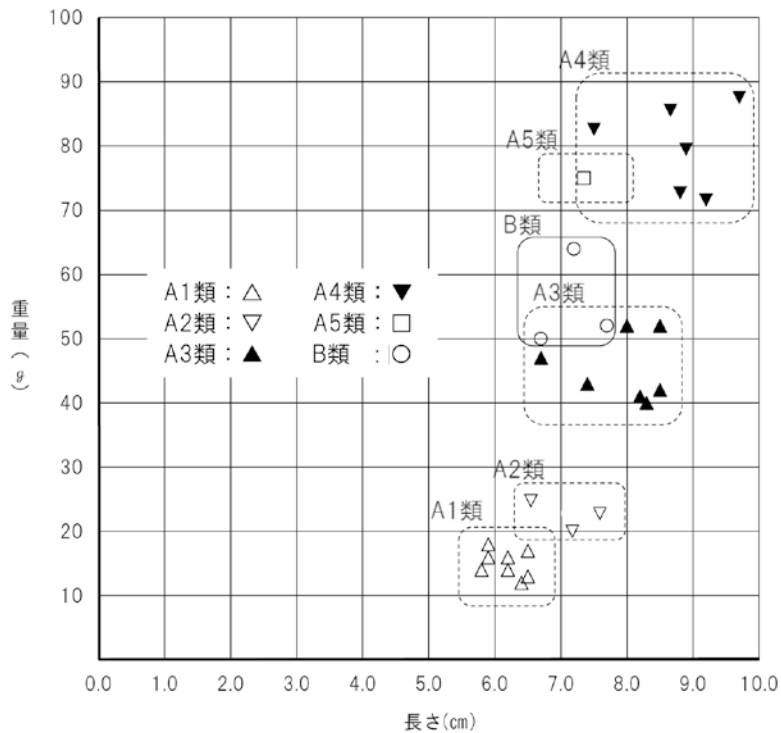


図48 土錘の法量分布

-3区の中央で西側に折れ曲がり、112区画溝へと続き、2-3区の西端で1自然流路に最終埋積した第3層系堆積層によって削平を受けることが判明した。2-1区・2-3区内で13区画溝及び112区画溝に囲まれた範囲は、北北東-南南西方向に15.5m以上、東南東-西北西方向に14.5m以上となる。13区画溝及び112区画溝に囲まれた内側には、鎌倉時代の建物跡等、明確な遺構が検出できなかった。むしろ、2-1区の13区画溝の東側で鎌倉時代の14・15土器等廃棄土坑や16水溜・17土坑・123土坑等を検出したことから、当該期の生活域は調査地の東側に展開するものと考えられる。

では、2-1区・2-3区内で13区画溝及び112区画溝に囲まれた範囲は、何を区画していたのか。現状では、区画溝の内側に鎌倉時代の明確な遺構が検出されていないため、不明と言わざるを得ない。

また、西側の自然流路（河川）が東側と同じような平坦地になるのが鎌倉時代もしくはこれに近似する時期に入ってからであることも判明してきた。このことは、文献史料等から指摘されている和田川の築堤による当地域一帯の土地開発の安定化の時期と関係してくるものと思われる。

繰り返しになるが、文献史料では、林家所蔵文書の大治2年（1127年）「紀伊国在庁官人等解案」に日前宮領であった和田川の塩入常荒田を開発するため、40町余の塩除堤を築造した記録が見られる。このように、和田川周辺域は、平安時代後期に大規模な整備が行われ、それ以後、水田耕作地及び安定した居住域として利用されたと推測される。

なお、額田氏による和田条里区とされる現行の条里型地割は、南北方向の軸線からN-11°前後-W（座標軸では、N-18°前後-W）に偏る。2-1区検出の13区画溝は、南北方向の軸線から座標軸N-13°-Eに偏る。また、2-3区検出の103溝は、東西方向の軸線から座標軸E-11°-Sに偏る。これらのことから、今回の調査で検出した遺構は、何れも現行の条里型地割の軸線とずれることになる。

【参考文献】

- 1979 田中敬忠「和田川流域の弥生式遺跡」『紀州今昔—和歌山県の歴史と民俗—』田中敬忠先生頌寿記念会（原文は、「和田川流域の弥生式文化遺跡について」『和歌山春秋』1号 昭和31年（1956））
- 1981 『和田岩坪遺跡緊急発掘概要』和歌山市教育委員会
- 1989 中野榮治「第四章 名草郡の条理」『紀伊国の条里制』古今書院
- 1993 『木器集成図録 近畿原始編（解説）』奈良国立文化財研究所 史料第36冊 奈良国立文化財研究所
- 2002 三田郷土誌編集委員会『和歌山市 三田郷土誌』和歌山市三田地区連合自治会
- 2006 野田阿紀子「第1章 中世日前宮領の研究—百姓と職能民の世界—」『和歌山平野における荘園遺跡の復元研究—中世日前宮領の研究—』海津一朗編 課題番号15520403 平成15～17年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 2016 樋上 昇『樹木と暮らす古代人 木製品が語る弥生・古墳時代』吉川弘文館
- 2017 田中元浩「和田盆地の開発と中世宮井水路—中世日前宮領の考古学的検討—」『紀伊考古学研究』第20号 紀伊考古学研究会
- 2017 額田雅裕「第3章 和歌山平野南部の地形と土地開発」『絵図でよむ荘園の立地と環境』古今書院（初出は、2013 額田雅裕「和歌山平野南部の地形と土地開発」『和歌山市立博物館 研究紀要28』和歌山市教育委員会）
- 2018 樋上 昇「二 木製品の組成と社会変容」『モノと技術の古代史 木器編』宇野隆夫編 吉川弘文館

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
1	図27	図版21	40	523	2-3区 II 2B8q.r12	—	109 土杭北半側層位一括	弥生土器	広口壺	口縁部	9%	全体に磨滅極めて著しいため調整不明、口縁部内面端部に貼付突帯、端面下端に浅いV字刻み、紀伊I-3様式、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
2	図27	図版21	45	432	2-1区 II 2B8s16	—	12 土杭北西半側層位一括	弥生土器	広口壺	口縁部	10%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、内面は分割ヘラミガキ調整、外面は縦位のハケメ調整、後に斜位のヘラミガキ調整の痕跡、口縁部端部に1条の篋描沈線文、後に矢羽根状のV字刻み、紀伊I-3様式、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
3	図27	—	42	432	2-1区 II 2B8s16	—	12 土杭北西半側層位一括	弥生土器	広口壺	口縁部	—	全体に磨滅極めて著しいため調整不明瞭、内面は横位のハケメ調整の後に縦位のヘラミガキ調整の痕跡、紀伊I-3様式、細片のため傾き不明瞭、断面・端面のみ
4	図27	図版21	43	432	2-1区 II 2B8s16	—	12 土杭北西半側層位一括	弥生土器	壺	頸部	10%	内面は剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、外面は縦位のハケメ調整の後に篋描沈線文、紀伊I-3様式、細片のため径・傾き不明瞭、反転復元
5	図27	図版21	49	533	2-3区 II 2B8t12.13	—	143 溝層位一括	弥生土器	壺	頸部～肩部	—	肩部外面に黒斑有り、全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、紀伊I-3様式、細片のため傾き不明瞭、断面・外面のみ
6	図27	図版21	50	554	2-3区 II 2B8s11	—	143 溝掘り残り分	弥生土器	壺	体部	—	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、外面は縦位のハケメ調整→篋描沈線文→ヘラミガキ調整、紀伊I-3様式、細片のため傾き不明瞭、断面・外面のみ
7	図27	図版21	39	523	2-3区 II 2B8q.r12	—	109 土杭北半側層位一括	弥生土器	壺	体部	—	全体に磨滅極めて著しいため調整不明、貼付突帯の接合面に界線(篋描沈線)有り、突帯頂部に小さいV字刻み、紀伊I-3様式、細片のため傾き不明瞭、断面・外面のみ
8	図27	図版21	51	548	2-3区 II 2B8t12	—	143 溝層位一括	弥生土器	甕	頸部～体部	—	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、外面は斜位のハケメ調整→篋描沈線文、胎土に1mm以下の長石・石英・チャートを多量に含む、紀伊I-2・3様式、細片のため断面・外面のみ
9	図27	—	44	408	2-1区 II 2B8s16 東壁側溝	—	遺構12 含む層位一括	弥生土器	壺	底部	40%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、内面は板状工具によるナデ調整、外面は横位の細かいヘラミガキ調整、紀伊I-2・3様式、反転復元
10	図27	—	41	522	2-3区 II 2B8q.r12	—	109 土杭南半側層位一括	弥生土器	壺	底部	25%	外面全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、内面は斜位のハケメ調整、外面は斜位のハケメ調整の痕跡、紀伊I-2・3様式、反転復元
11	図27	図版21	46	432	2-1区 II 2B8s16	—	12 土杭北西半側層位一括	弥生土器	紀伊形甕	底部	75%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、内面の調整は不明、外面は底部側から体部側に向けての粗いヘラケズリ整形、紀伊I-2・3様式、一部反転復元
12	図27	—	62	443	2-1区 II 2B8t15	—	13 区画溝層位一括	弥生土器	広口壺	口縁部	20%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、紀伊I-3様式か、反転復元
13	図27	—	65	530	2-3区 II 2B8t12.13	—	13 区画溝層位一括	弥生土器	広口壺	口縁部	20%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、紀伊I-3様式か、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
14	図27	—	63	528	2-3区 II 2B8t11.12	—	112 区画溝層位一括	弥生土器	甕	口縁部	—	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、内面の調整は不明、体部外面は斜位の粗いハケメ調整、紀伊I-3様式、細片のため傾き不明瞭、断面・外面のみ
15	図27	—	61	442	2-1区 II 2B8t14	—	13 区画溝層位一括	弥生土器	壺	底部	50%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、底部外面は縦位のハケメ調整の痕跡、紀伊I-2・3様式、反転復元
16	図27	—	67	434	2-1区 II 2B8t15	—	13 区画溝層位一括	須恵器	甕	頸部	15%	焼成遺存は良好、ロクロ回転方向：右回り、頸部以下内面に当て具の痕跡僅かに有り、陶器II型式第2段階(田辺MT14型式)か、反転復元
17	図27	—	64	466	2-1区 II 2B8s13	—	13 区画溝層位一括	須恵器	坏蓋	口縁部	5%	焼成遺存はやや軟質化、ロクロ回転方向：左回り、陶器II型式第2段階(田辺MT14型式 or TK10型式)、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
18	図27	—	80	452	2-1区 II 2B8t16	—	13 区画溝下層一括	瓦器	椀	口縁部	10%	焼成遺存はまま良好、体部内面に密なミガキ、北野編年Ⅲ-1期、反転復元
19	図27	—	69	435	2-1区 II 2B8t14	—	13 区画溝層位一括	東播系須恵器	捏鉢	体部～底部	5%	ロクロ回転方向：右回り、時期比定不明、細片のため径・傾き不明瞭、反転復元
20	図27	—	68	452	2-1区 II 2B8t16	—	13 区画溝下層一括	無釉陶器備前	鉢?	口縁部	10%	内外面共に僅かに自然釉付着、口縁部外面に2条1対になる斜位の篋描沈線文、ロクロ回転方向：左回り、江戸時代、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
21	図27	図版21	71	444	2-1区 II 2B8t16	—	13 区画溝層位一括	無釉陶器備前	搦鉢	口縁部	—	口縁部端面やや歪み有り、片口に近い部分の破片、ロクロ回転方向：左回りか、乗岡編年近世2a期か、細片のため断面・内面のみ
22	図27	図版21	66	454	2-1区 II 2B8u15	—	13 区画溝下層一括	肥前系磁器青磁染付	縁折れ皿?	口縁部	5%	釉調は10GY7/1明緑灰色、断面N8/O灰白色、江戸時代、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
23	図27	図版21	79	444	2-1区 II 2B8t16	—	13 区画溝層位一括	施釉陶器肥前系唐津	碗	体部～底部(高台部)	40%	内外面共に刷毛目文様、畳付は露胎、江戸時代中期、一部反転復元
24	図27	図版21	70	442	2-1区 II 2B8s14	—	13 区画溝層位一括	瓦	丸瓦	丸瓦部	20%?	全体に焼し不十分、凹み面は布目痕に重複して摺骨痕、凸面は篋状工具によるナデ調整、室町時代か

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
25	図 27	—	58	490	2-1区 II 2B8r・s16	—	16 水溜か最下層	土師器	皿	口縁部	—	全体にやや歪つ、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、奈良時代、細片のため傾き不明瞭、断面のみ
26	図 27	—	57	489	2-1区 II 2B8r・s16	—	16 水溜下層 8層	土師器	甕	口縁部	—	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面は横位の極めて粗いハケメ調整、頸部以下外面は縦位の極めて粗いハケメ調整、奈良時代、細片のため傾き不明瞭、断面のみ
27	図 27	図版 21	56	448	2-1区 II 2B8r・s16	—	16 井戸井側内下層	瓦器	椀	口縁部～体部	—	全体にかなり歪つ、焼成遺存はやや良好、体部内面にやや粗いミガキ、北野編年Ⅲ-2期、細片のため傾き不明瞭、断面・内面のみ
28	図 28	—	53	545	2-3区 II 2B8s・t11	—	148 土抗層位一括	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	15%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、内面の調整は不明、外面は板状工具によるナデ調整の痕跡、紀伊 I-3 様式か、反転復元
29	図 28	—	74	402	2-1区 II 2B8s16	第1層	遺構埋土含む	弥生土器	壺	体部	—	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、突帯頂部に小さいV字刻み、紀伊 I-2・3 様式、細片のため傾き不明瞭、断面・外面のみ
30	図 28	—	48	408	2-1区 II 2B8s16 東壁側溝	層位一括	遺構含む	弥生土器	甕	口縁部	—	全体に磨滅極めて著しいため調整不明、胎土に 0.5 mm 以下の長石・石英・チャートを多量に含む、紀伊 I-3 様式、細片のため傾き不明瞭、断面のみ
31	図 28	—	73	413	2-1区 II 2B8t14・15	第1層直下基盤層直上	遺構埋土含む	弥生土器	壺	底部	20%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、内面の調整は不明、外面は不定方向の細かいハケメ調整か、紀伊 I-2・3 様式、反転復元
32	図 28	図版 21	78	411	2-2区 II 2B8y16	—	図 A' 層	土師器	高坏	脚台部	20%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明、布留式併行期古段階、欠損が著しいため裾径・傾き不明瞭、反転復元
33	図 28	図版 21	77	411	2-2区 II 2B8y16	—	図 A' 層	土師器	高坏	脚台部	12%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、布留式併行期、細片のため裾径・傾き不明瞭、反転復元、庄内式併行期の二重口縁壺の可能性も有り
34	図 28	—	72	414	2-1区 II 2B8r・s14	第1層直下基盤層直上	遺構埋土含む	瓦器	椀	口縁部～底部(高台部)	30%	全体にやや歪つ、焼成遺存はやや軟質化、磨滅著しいため調整・ミガキは不明瞭、体部内面に粗いミガキ、北野編年Ⅲ-1期、反転復元
35	図 28	図版 21	55	446	2-1区 II 2B8r・s16	—	16 井戸井側内上層	瓦器	椀	口縁部～底部(高台部)	40%	全体にかなり歪つ、焼成遺存はやや軟質化、体部内面に粗いミガキ、見込に連結輪状の暗文痕跡か、高台の貼り付けは非常に雑、北野編年Ⅲ-2期、反転復元
36	図 28	—	52	542	2-3区 II 2B8s・t11	—	144 土抗東半側層位一括	瓦器	椀	口縁部～体部	10%	焼成遺存は極めて軟質化、磨滅極めて著しいため調整・暗文・ミガキは不明瞭、北野編年Ⅲ-2期、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
37	図 28	—	54	431	2-1区 II 2B8t16	—	22 柱穴南半側一括	瓦器	椀	口縁部～体部	—	焼成遺存は極めて軟質化、磨滅著しいため調整・暗文・ミガキは不明瞭、体部内面に粗いミガキの痕跡、北野編年Ⅲ-2期、細片のため傾き不明瞭、断面・内面のみ
38	図 28	—	75	422	2-1区 II 2B8s13	第1層直下基盤層直上	遺構埋土含む	土師器	土釜	口縁部～頸部	—	全体にやや歪つ、頸部外面に煤薄く付着する、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、鎌倉時代、細片のため傾き不明瞭、断面のみ
39	図 28	図版 21	47	412	2-1区 II 2B8r・s15	第1層直下基盤層直上	遺構埋土含む	瓦器	甕	口縁部～肩部	8%	焼成遺存はやや軟質化、肩部内面は斜位の細かいハケメ調整、後に口縁部をヨコナデ調整、外面はやや右上がり斜位の平行タタキ整形、室町時代、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
40	図 28	—	60	513	2-3区 II 2B8r11・s12	—	106 溝上層一括	瓦器	甕	頸部～体部	—	頸部以下内面は当て具痕、後にユビナデ調整、外面は平行タタキ整形、後に頸部はヨコナデ調整、鎌倉時代、細片のため傾き不明瞭、断面・外面拓本のみ
41	図 28	図版 21	59	513	2-3区 II 2B8r11・s12	—	106 溝上層一括	無釉陶器備前	擂鉢	体部	—	乗岡編年型式不明、室町時代か、細片のため傾き不明瞭、断面・内面拓本のみ
42	図 28	図版 21	76	417	2-1区 II 2B8y15	第1層直下基盤層直上	遺構埋土含む	無釉陶器備前	擂鉢	口縁部	8%	ロクロ回転方向：右回り、乗岡編年中世 5b 期、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
43	図 28	図版 22	89	486	2-1区 II 2B8r・s14	—	14・15 土抗北半側 4層下半	土師器	小皿	口縁部～底部	63%	全体にやや歪つ、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、鎌倉時代
44	図 28	図版 22	82	480	2-1区 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸南半側 4層	瓦器	小皿	口縁部～底部	85%	全体にやや歪つ、焼成遺存はやや軟質化、全体にやや磨滅ぎみのため調整不明瞭、底部底面に粘土の接合痕有り、鎌倉時代
45	図 28	図版 22	81	479	2-1区 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸南半側 4層	瓦器	小皿	口縁部～底部	65%	焼成遺存はまま良好、全体にやや磨滅ぎみのため調整不明瞭、底部底面に簧状の板状庄痕、鎌倉時代、一部反転復元
46	図 28	図版 22	85	486	2-1区 II 2B8r・s14	—	14・15 土抗北半側 4層下半	瓦器	小皿	口縁部～底部	65%	全体にやや歪つ、焼成遺存はやや軟質化、全体にやや磨滅ぎみのため調整不明瞭、底部底面に粘土の雑な接合痕有り、鎌倉時代
47	図 28	図版 22	84	483	2-1区 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸北半側上層下位 3層下位	瓦器	小皿	口縁部～底部	60%	全体にやや歪つ、焼成遺存はまま良好堅緻、外面全体にタール状の付着物有り、底部底面に粘土の接合痕有り、鎌倉時代
48	図 28	図版 22	83	487	2-1区 II 2B8r・s14	—	14・15 土抗北半側 5層	瓦器	小皿	口縁部～底部	100%	焼成遺存はまま良好堅緻、底部底面外縁は連続する小ピッチのユビオサエ、鎌倉時代

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
49	図 28	図版 22	86	479	2-1 区 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸 南半側 4 層	土師器	皿	口縁部 ～底部	58%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部外面は連続する小ピッチの 2 段のユビオサエ、鎌倉時代、一部反転復元
50	図 28	図版 22	87	483	2-1 区 II 2B8r・s14	—	14・15 土抗 北半側 上層下位 3 層下位	土師器	皿	口縁部 ～底部	90%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部外面は連続する小ピッチの 2 段のユビオサエ、鎌倉時代
51	図 28	図版 22	88	477-8	2-1 区 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸 上層下位 3 層	土師器	皿	口縁部 ～底部	70%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、底部底面は回転糸切り痕、雑な底部整形のため粘土のみみ出し有り、鎌倉時代
52	図 28	図版 22	107	486	2-1 区 II 2B8r・s14	—	14・15 土抗 北半側 4 層下半	白磁	碗	体部 ～底部	40%	全体に細かい貫入多数有り、腰部外面から底部底面にかけて露胎、露胎部はカンナによるケズリ痕、高台はカンナによるケズリ出し、鎌倉時代、V 1a 類か、反転復元
53	図 28	図版 22	90	486	2-1 区 II 2B8r・s14	—	14・15 土抗 北半側 4 層下半	弥生土器	器台形土器	口縁部 ～裾部	60%	全体にやや歪つ、全体にやや磨滅がみのため調整不明瞭、弥生時代前期の広口壺口縁部の作りに類似し胎土の特徴から一連の土器に伴う物と判断
54	図 28	—	106	427	2-1 区 II 2B8r・s14	—	14 井戸 井側内南半側 最上層	須恵器	短頸壺	口縁部 ～体部	5%	肩部以下体部外面に自然釉まだらに付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶色編年Ⅱ型式第 2 段階(田辺 TK 型式)か、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
55	図 28	図版 22	96	477-9 428	2-1 区 II 2B8r・s14 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸 上層下位 3 層 14 井戸掘形 南半側 最上層	瓦器	椀	口縁部 ～底部 (高台部)	90%	焼成遺存はやや軟質化、全体に磨滅著しいため調整・暗文・ミガキは不明瞭、体部内面のミガキは下半にやや密に、見込は粗い平行線状の暗文、体部外面は連続する小ピッチの 3 段のユビオサエ、北野編年Ⅱ-2 期
56	図 28	図版 22	98	486 484 485	2-1 区 II 2B8r・s14 II 2B8r・s14 II 2B8r・s14	—	14・15 土抗 北半側 4 層下半 14・15 土抗 北半側 3 層 4 層上半	瓦器	椀	口縁部 ～底部 (高台部)	70%	全体に歪みや著しい、焼成遺存はまま良好、体部内面のミガキは粗く、見込は崩れた連結輪状の暗文、体部外面は連続する小ピッチの 2 段の浅いユビオサエ、北野編年Ⅱ-2 期
57	図 28	図版 22	94	477-11	2-1 区 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸 上層下位 3 層	瓦器	椀	口縁部 ～底部 (高台部)	70%	焼成遺存はやや軟質化、全体に磨滅がみのため調整・暗文・ミガキは不明瞭、体部内面のミガキは粗く、見込は崩れた連結輪状の暗文、体部外面は連続する小ピッチの 2 段のユビオサエ、北野編年Ⅱ-2 期
58	図 28	図版 22	92	480 481	2-1 区 II 2B8r・s14 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸 南半側 4 層 5 層基底部	瓦器	椀	口縁部 ～底部 (高台部)	50%	焼成遺存はまま良好堅緻、体部内面のミガキはやや粗く、見込は崩れた連結輪状の暗文、体部外面は連続する小ピッチの 2 段のユビオサエ、北野編年Ⅱ-2 期、一部反転復元
59	図 28	図版 22	97	484	2-1 区 II 2B8r・s14	—	14・15 土抗 北半側 3 層	瓦器	椀	口縁部 ～底部 (高台部)	90%	全体に歪みや著しい、焼成遺存はまま良好、体部内面のミガキは粗く、見込は崩れた連結輪状の暗文、体部外面は連続する小ピッチの 3 段のユビオサエ、北野編年Ⅱ-2 期
60	図 28	—	93	485	2-1 区 II 2B8r・s14	—	14・15 土抗 北半側 4 層上半	瓦器	椀	口縁部 ～底部 (高台部)	60%	全体に歪みや著しい、焼成遺存はまま良好、体部内面のミガキはやや粗く、見込は崩れた連結輪状の暗文、体部外面は連続する小ピッチの 2 段のユビオサエ、北野編年Ⅱ-2 期
61	図 28	図版 23	101	480 481	2-1 区 II 2B8r・s14 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸 南半側 4 層 南半側 5 層 基底部	瓦器	椀	口縁部 ～底部 (高台部)	55%	全体に歪み著しい、焼成遺存はまま良好、体部内面のミガキは粗く、見込の崩れた連結輪状の暗文から連続する、体部外面は連続する小ピッチの 2 段の浅いユビオサエ、北野編年Ⅱ-2 期～Ⅲ-1 期
62	図 28	図版 23	100	477-29 483	2-1 区 II 2B8r・s14 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸 上層下位 3 層 14・15 土抗 北半側上層下位 3 層下位	瓦器	椀	口縁部 ～底部 (高台部)	70%	焼成遺存はまま良好、全体にやや磨滅がみのため調整・暗文・ミガキは不明瞭、体部内面のミガキは粗く、見込は崩れた連結輪状の暗文か、体部外面は連続する小ピッチの 2 段のユビオサエ、北野編年Ⅱ-2 期～Ⅲ-1 期
63	図 28	—	99	487	2-1 区 II 2B8r・s14	—	14・15 土抗 北半側 5 層	瓦器	椀	口縁部 ～底部 (高台部)	30%	焼成遺存はまま良好堅緻、体部内面のミガキは細く粗い、見込は細い渦巻状の暗文か、体部外面は連続する粗いピッチの 2 段のユビオサエ、北野編年Ⅲ-1 期
64	図 28	図版 23	91	480 479	2-1 区 II 2B8r・s14 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸 南半側 4 層	瓦器	椀	口縁部 ～底部 (高台部)	70%	全体に歪み著しい、焼成遺存はやや軟質化、全体に磨滅著しいため調整・暗文・ミガキは不明瞭、体部内面のミガキはやや粗く、見込は崩れた連結輪状の暗文か、北野編年Ⅱ-2 期
65	図 28	図版 23	95	477-20	2-1 区 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸 上層下位 3 層	瓦器	椀	口縁部 ～底部 (高台部)	60%	焼成遺存は軟質化、全体に磨滅著しいため調整・暗文・ミガキは不明瞭、体部内面のミガキは粗く、見込は崩れた連結輪状の暗文、体部外面は連続する小ピッチの 3 段のユビオサエ、北野編年Ⅱ-2 期
66	図 29	図版 23	108	477-3 477-4 477-5 477-12 427	2-1 区 II 2B8r・s14 II 2B8r・s14 II 2B8r・s14 II 2B8r・s14 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸 上層下位 3 層 14・15 井戸 上層下位 3 層 14・15 井戸 上層下位 3 層 井側内南半側 最上層	土師器	土釜	口縁部 ～底部	60%	外面全体に煤厚く付着する、体部内面下半は焦げ付きのためか暗色化する、体部内面は当て具による凹凸痕、外面は篋状工具でナデ整形、後にユビナデ調整、鏝は高さ 0.5 cm 前後の断面三角形、鎌倉時代、北野編年Ⅲ-1 期に対応、一部反転復元

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
67	図 29	—	109	477-22 477-24 477-23 468	2-1区 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸上層下位3層 14・15 井戸?北半側上層下位一括	土師器	土釜	口縁部~体部	20%	外面全体に煤薄く付着する、体部内面は当て具及びユビオサエによる凹凸痕、外面はユビナデ調整、鐙は高さ0.5cm前後の断面三角形、鎌倉時代、北野編年Ⅲ-1期に対応、反転復元
68	図 29	図版 23	110	477-28 477-14 483	2-1区 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸上層下位3層 北半側上層下位、3層下位	土師器	土釜	口縁部~体部	40%	全体にやや歪み有り、外面全体に煤薄く付着する、体部内面は当て具及びユビオサエによる凹凸痕、外面はユビナデ調整、鐙は高さ0.3~0.5cmの扁平な断面三角形、鎌倉時代、北野編年Ⅲ-1期に対応、反転復元
69	図 29	—	111	486	2-1区 II 2B8r・s14	—	14・15 土坑北半側4層下半	土師器	土釜	口縁部~体部	20%	全体に強く二次焼成を受ける、全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、体部内面は当て具による凹凸痕、外面は調整不明、鐙は高さ1.1cm前後の断面二等辺三角形、鎌倉時代、北野編年Ⅱ-2期に対応、反転復元
70	図 29	図版 23	112	477-1 477-2 479 483	2-1区 II 2B8r・s14	—	14-15 井戸上層下位3層 南半側4層 北半側上層下位3層下位	土師器	土釜	口縁部~体部	80%	外面全体に煤薄く付着する、体部内面は当て具及びユビオサエによる凹凸痕、頸部に近い体部内面は板状工具によるナデ調整、外面はユビナデ調整、鐙は高さ0.5cm前後の断面三角形、鎌倉時代、北野編年Ⅲ-1期に対応、一部反転復元
71	図 29	図版 23	104	477-7	2-1区 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸上層下位3層	東播系須恵器	捏鉢	口縁部~底部	25%	焼成遺存はまま良好、ロクロ回転方向：右回り、口縁部端面に重ね焼き痕跡、第二期第2段階、反転復元
72	図 29	図版 23	105	477-6	2-1区 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸上層下位3層	東播系須恵器	捏鉢	口縁部~体部	12%	焼成遺存はまま良好、ロクロ回転方向：右回り、口縁部端面に重ね焼き痕跡、第二期第2段階、細片のため傾き不明瞭、反転復元
73	図 29	図版 23	103	485	2-1区 II 2B8r・s14	—	14・15 土坑北半側4層上半	瓦器	甕	口縁部~頸部	5%	ロクロ回転方向：左回り、頸部から口縁部外面は肩部の平行タタキ整形と異なる方向でタタキ整形、口縁部内面にも同様のタタキ整形、後に回転ヨコナデ調整、鎌倉時代、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
74	図 29	—	102	481	2-1区 II 2B8r・s14	—	14・15 井戸南半側5層 基底部	瓦器	甕	頸部~肩部	—	焼成遺存はやや軟質化、肩部内面は当て具痕、後に不定方向のユビナデ調整、外面は右上がり斜位の平行タタキ整形、後に頸部はヨコナデ調整、鎌倉時代、細片のため傾き不明瞭、断面のみ
75	図 37	図版 24	36	343	1-1区 II 2C8a12	—	1自然流路の下位第7層系より下の粗砂礫層Ⅱ	弥生土器	壺	頸部~体部	8%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部内面はユビオサエ+ユビナデ調整、体部外面はヘラミガキ調整の痕跡、紀伊Ⅰ-3様式か、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
76	図 37	図版 24	24	342	1-1区 II 2C8a12	—	1自然流路の下位第7層系より下の粗砂礫層Ⅰ	弥生土器	壺	頸部~体部	8%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、頸部内面はユビオサエ調整、肩部以下外面は不定方向のハケメ調整、頸部は縦位の細かいハケメ調整、後に篋描き沈線文、紀伊Ⅰ-2様式か、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
77	図 37	図版 24	20	340	1-1区 II 2C8a12	—	1自然流路第7層系断割り	弥生土器	広口壺	口縁部	—	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明瞭、口縁部端面に縦位の刻目目文、後に横位の1条の沈線文、紀伊Ⅰ-3様式か、細片のため断面・端面のみ
78	図 37	図版 24	21	340	1-1区 II 2C8a12	—	1自然流路第7層系断割り	弥生土器	壺	体部	—	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部外面は横位のヘラミガキ調整の痕跡、体部外面に幅広の削り出し突帯に斜格子の沈線文、紀伊Ⅰ-3様式か、細片のため断面・外面のみ
79	図 37	—	25	342	1-1区 II 2C8a12	—	1自然流路の下位第7層系より下の粗砂礫層Ⅰ	弥生土器	壺	体部	—	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、紀伊Ⅰ-2様式か、細片のため傾き不明瞭、断面・外面のみ
80	図 37	—	29	342	1-1区 II 2C8a12	—	1自然流路の下位第7層系より下の粗砂礫層Ⅰ	弥生土器	紀伊形甕	口縁部~頸部	5%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内外共に丁寧なヨコナデ調整、紀伊Ⅰ-3様式か、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
81	図 37	図版 24	174	262	1-1区 II 2C8a12	—	1自然流路第6層系(より下位含む)+第7層系	弥生土器	甕	口縁部~体部	9%	口縁部以下外面に煤薄く付着する、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部内外面共に左上がり斜位のハケメ調整の僅かな痕跡、紀伊Ⅰ-2様式新相、反転復元
82	図 37	図版 24	23	342	1-1区 II 2C8a12	—	1自然流路の下位第7層系より下の粗砂礫層Ⅰ	弥生土器	紀伊形甕	口縁部	—	全体に遺存は良好、内外面共に丁寧なヨコナデ調整、摘み出し状の低い突帯上に小さいV字刻み、胎土に2~3mm大の石英・結晶片岩の垂円礫を多量に含む、紀伊Ⅰ-2様式、細片のため断面・外面のみ
83	図 37	—	33	343	1-1区 II 2C8a12	—	1自然流路の下位第7層系より下の粗砂礫層Ⅱ	弥生土器	紀伊形甕	口縁部	—	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内外面共に丁寧なヨコナデ調整、紀伊Ⅰ-3様式か、細片のため断面のみ
84	図 37	—	30	342	1-1区 II 2C8a12	—	1自然流路の下位第7層系より下の粗砂礫層Ⅰ	弥生土器	紀伊形甕	口縁部	—	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、内外面共に丁寧なヨコナデ調整、紀伊Ⅰ-3様式か、細片のため断面のみ
85	図 37	図版 24	175	262	1-1区 II 2C8a12	—	1自然流路第6層系(より下位含む)+第7層系	弥生土器	鉢	口縁部~体部	9%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部外面は左上がり斜位のハケメ調整の僅かな痕跡、内面は調整不明、紀伊Ⅰ-2様式新相か、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
86	図 37	図版 24	17	242	1-1 区 II 2C8a13	—	1 自然流路第 6 層系	弥生土器	高坏	口縁部～脚台部	80%	坏部内面の約 1/4 及びそれに対応する外面の約 1/4 に黒斑有り、全体に雑な成形、坏部外面下半に縦位のハケメ調整、後に坏部内外面・脚台部外面共に横位の丁寧な細かいヘラミガキ調整、紀伊 I-2 様式
87	図 37	図版 24	176	242	1-1 区 II 2C8a13	—	1 自然流路第 6 層系	弥生土器	脚台付鉢	脚台部	100%	外面の約 4/5 に黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、外面は縦位のヘラミガキ調整の僅かな痕跡、脚台部内面は強いナデ調整、紀伊 I-2・3 様式、一部反転復元
88	図 37	図版 24	27	342	1-1 区 II 2C8a12	—	1 自然流路の下位第 7 層系より下の粗砂礫層 I	弥生土器	壺	底部	50%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、内面はユビオサエ+ユビナデ調整、外面は板状工具による縦位のナデ調整、紀伊 I-2・3 様式、反転復元
89	図 37	図版 24	26	342	1-1 区 II 2C8a12	—	1 自然流路の下位第 7 層系より下の粗砂礫層 I	弥生土器	壺	底部	40%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、底部外面は縦位の細かいハケメ調整の痕跡、紀伊 I-2・3 様式、反転復元
90	図 37	図版 24	28	342	1-1 区 II 2C8a12	—	1 自然流路の下位第 7 層系より下の粗砂礫層 I	弥生土器	(紀伊形) 甕	口縁部～体部	9%	体部外面下半に煤厚く付着する、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部内面はユビオサエ+ユビナデ調整、外面は板状工具による縦位の粗い掻き上げ整形、紀伊 III-1 様式か、反転復元
91	図 37	図版 24	173	318	1-1 区 II 2C8a13	—	1 自然流路第 6 層系下半基盤層 Z まで含む	弥生土器	甕	口縁部～体部	10%	口縁部以下外面に煤厚く付着する、内面は鉄分質の固着が極めて著しいため調整不明瞭、頸部外面は左上がり斜位の平行タタキ整形、以下はやや左上がりぎみの横位の平行タタキ整形、紀伊 IV-2 様式、反転復元
92	図 37	図版 24	32	342	1-1 区 II 2C8a12	—	1 自然流路の下位第 7 層系より下の粗砂礫層 I	弥生土器	甕	口縁部～体部	10%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部内面はユビオサエ+ユビナデ調整、後に板状工具による斜位のナデ調整、体部外面は板状工具による斜位のナデ調整、紀伊 III-1 様式、反転復元
93	図 37	—	38	343	1-1 区 II 2C8a12	—	1 自然流路の下位第 7 層系より下の粗砂礫層 II	弥生土器	高坏	坏部口縁部	8%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、外面は横位の丁寧なヘラミガキ調整、紀伊 IV-1 様式、細片のため口径不明瞭、反転復元
94	図 37	—	31	342	1-1 区 II 2C8a12	—	1 自然流路の下位第 7 層系より下の粗砂礫層 I	弥生土器	広口壺	口縁部	—	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部端面に櫛描波状文、紀伊 III-1 様式か、細片のため断面・端面のみ
95	図 37	図版 24	22	341	1-1 区 II 2C8a12	—	1 自然流路の下位第 7 層系より下の粗砂礫層直上基盤層 Z か?	弥生土器	高坏	坏部	25%	全体に遺存は極めて良好堅緻、内外面共に極めて丁寧なヘラミガキ調整、紀伊 V-2 様式
96	図 37	図版 24	37	343	1-1 区 II 2C8a12	—	1 自然流路の下位第 7 層系より下の粗砂礫層 II	弥生土器	壺	底部	70%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、内面は不定方向のハケメ調整の痕跡、外面は板状工具によるナデ調整の痕跡、庄内式併行期、一部反転復元
97	図 38	図版 25	198	193 171 173 138	1-1 区 II 2C8b12 北東端 II 2C8a11 北端 II 2C8a11 北端 II 2C8a11 北端	—	1 自然流路第 6 層系下端 6-3 第 6 層系下端 第 7 層系上端 6-3? 第 6 層系	弥生土器	(直口壺)	口縁部～体部	67%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面は右上がり斜位のヘラミガキ調整、口縁部外面は縦位のヘラミガキ調整の痕跡、肩部から体部外面は右上がり斜位のヘラミガキ調整の痕跡、内面は不明、庄内式併行期、一部反転復元
98	図 38	図版 25	15	321	1-1 区 II 2C8b13 北端	—	1 自然流路第 6 層系 6-3	土師器	太頸壺	口縁部～頸部	95%	口縁部内外面共に縦位の丁寧な太いヘラミガキ調整、肩部外面は横位の丁寧なヘラミガキ調整、布留式併行期古段階
99	図 38	図版 25	203	321	1-1 区 II 2C8b13 北端	—	1 自然流路第 6 層系 6-3	弥生土器	小型長頸壺	口縁部～頸部	40%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面は板状工具によるナデ調整、外面はヨコナデ調整、後に縦位の丁寧なヘラミガキ調整、庄内式併行期、反転復元
100	図 38	図版 25	204	198	1-1 区 II 2C8a11 北西半	—	1 自然流路第 6 層系 6-3	弥生土器	小型直口壺	口縁部～頸部	20%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面は板状工具によるナデ調整、外面はヨコナデ調整、後に下半部を縦位のヘラミガキ調整、庄内式併行期、反転復元
101	図 38	図版 25	4	251	1-1 区 II 2C8b11 南端	—	1 自然流路第 6 層系下半・下端+第 6 層系 6-3	弥生土器	小型甕	口縁部～底部	90%	体部外面に黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部内外面共に柔らかな板状工具によるナデ調整、庄内式併行期
102	図 38	図版 25	2	261	1-1 区 II 2C8a11 南西隅	—	1 自然流路第 6 層系+6 層系 6-3	土師器	小型壺	頸部～底部	60%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部外面から底部底面にかけて軽いヘラケズリ整形、体部中位から底部底面にかけて約 1/4 が赤色化する、布留式併行期古段階
103	図 38	図版 25	191	171 138	1-1 区 II 2C8a11 II 2C8a11	—	1 自然流路第 6 層系下端 第 7 層系上端 6-3? 第 6 層系	弥生土器	二重口縁壺	口縁部～頸部	45%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面下半から頸部内面は乱雑なハケメ調整、後にやや右上がり斜位のハケメ調整、頸部外面は縦位の粗い板状工具によるナデ調整、庄内式併行期、反転復元
104	図 38	—	14	251	1-1 区 II 2C8b11 南端	—	1 自然流路第 6 層系下半・下端+第 6 層系 6-3	土師器	二重口縁壺	口縁部	20%	口縁部内外面共に筋目の付く強いヨコナデ調整の後に丁寧なヘラミガキ調整、布留式併行期古段階、反転復元
105	図 38	—	189	240	1-1 区 II 2C8b12	—	1 自然流路第 6 層系 6-3	弥生土器	二重口縁壺	口縁部	12%	遺存状態は良好堅緻、内外面共に横方向のナデ調整の後に極めて細かいヘラミガキ調整、庄内式併行期、反転復元
106	図 38	図版 25	192	173	1-1 区 II 2C8a11 北端	—	1 自然流路第 6 層系下端 第 7 層系上端 6-3?	弥生土器	二重口縁壺	口縁部～頸部	25%	内面の約 2/3 に黒斑有り、全体に遺存状態はまま良好、口縁部内面は横位の丁寧な分割ヘラミガキ調整、外面二段目口縁以下は左上がり斜位の粗いヘラミガキ調整、庄内式併行期、反転復元

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
107	図 38	図版 25	13	251	1-1 区 II 2C8b11 南端	—	1 自然流路第 6 層系下半・下端 十第 6 層系 6-3	土師器	二重口縁壺	口縁部～頸部	60%	頸部内外面共に柔らかな板状工具によるナデ調整、布留式併行期古段階、反転復元
108	図 38	図版 25	184	252	1-1 区 II 2C8a・b14 南壁側溝	—	1 自然流路第 6 層系 6-3	弥生土器	二重口縁壺	口縁部～頸部	40%	内面全体に黒斑有り、全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内外面共に丁寧なヨコナデ調整、頸部外面は縦位の板状工具によるナデ調整、庄内式併行期新段階、反転復元
109	図 38	—	190	320	1-1 区 II 2C8b12	—	1 自然流路第 6 層系 6-3	弥生土器	二重口縁壺	口縁部	15%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、内面と外面二段目口縁以下は僅かにヘラミガキ調整の痕跡、庄内式併行期、反転復元
110	図 38	—	180	195 218	1-1 区 II 2C8a12 北西隅 II 2C8a12	—	1 自然流路第 6 層系下端 6-3 第 6 層系	弥生土器	広口壺	口縁部	40%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、胎土に 3～5mm 大の石英質片岩を微量含む、形態の特徴から阿波式土器、庄内式併行期古段階、反転復元
111	図 38	図版 25	186	288 138	1-1 区 II 2C8a11 南西半 II 2C8a11	—	1 自然流路第 6 層系 6-3 第 6 層系	弥生土器	二重口縁壺	口縁部～頸部	15%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内外面共に丁寧なヨコナデ調整、胎土に 1mm 前後の石英・石英片岩を極めて微量に含む、形態の特徴から阿波式土器、庄内式併行期、反転復元
112	図 38	図版 25	212	195	1-1 区 II 2C8a12 北西隅	—	1 自然流路第 6 層系下端 6-3	土師器	小型甕	口縁部～体部	10%	肩部以下外面に黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内外面は丁寧なヨコナデ調整、頸部以下内面はユビオサエ調整、頸部以下外面は左上がり斜位の丁寧な細かいハケメ調整、形態と調整技法の特徴から東阿波型土器、布留式併行期古段階、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
113	図 38	—	217	279	1-1 区 II 2C8a10 北東半	—	1 自然流路第 6 層系 6-3	弥生土器	甕	口縁部～体部	17%	外面全体に煤まだらに付着する、全体に遺存はまま良好、口縁部内外面共に丁寧なヨコナデ調整、体部内面はユビオサエ調整、後に板状工具によるナデ調整、頸部以下外面は左上がり斜位の平行タタキ整形、庄内式併行期、反転復元
114	図 38	—	219	279	1-1 区 II 2C8a10 北東半	—	1 自然流路第 6 層系 6-3	弥生土器	紀伊形庄内式甕	口縁部～頸部	25%	全体にやや磨滅ぎみのため調整不明瞭、口縁部内外面共に丁寧なヨコナデ調整、端部は内側上方に大きく揃い上げる。庄内式併行期最新段階（布留式併行期最古段階）、反転復元
115	図 38	—	224	321	1-1 区 II 2C8b13 北端	—	1 自然流路第 6 層系 6-3	土師器	紀伊形布留式甕	口縁部～体部	18%	口縁部外面に煤厚く付着する、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内外面共に丁寧なヨコナデ調整、端部は内側上方に鈍角に肥厚する、体部内面は横位の粗いヘラケズリ整形、体部外面は縦位の粗いハケメ調整、後に下半は左上がり斜位のハケメ調整、布留式併行期古段階、反転復元
116	図 38	—	220	186	1-1 区 II 2C8b12	—	1 自然流路第 6 層系下端 6-3	土師器	紀伊形布留式甕	口縁部～体部	12%	頸部外面に黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内外面共に丁寧なヨコナデ調整、端部に小さく肥厚する、体部内面は横位の粗いヘラケズリ整形、体部外面は縦位の粗いハケメ調整の痕跡、布留式併行期中段階、反転復元
117	図 38	—	222	321	1-1 区 II 2C8b13 北端	—	1 自然流路第 6 層系 6-3	土師器	紀伊形布留式甕	口縁部～体部	8%	口縁部内外面共に煤薄く付着する、全体に剥離・磨滅著しく調整不明瞭、口縁部内外面共に丁寧なヨコナデ調整の痕跡、端部は内側上方に丸く肥厚する、体部内面は横位の粗いヘラケズリ整形、体部外面は縦位の粗いハケメ調整、後に下半は左上がり斜位のハケメ調整、布留式併行期中段階、反転復元
118	図 38	図版 25	223	281	1-1 区 II 2C8a10 南半中央	—	1 自然流路第 6 層系 6-3	土師器	紀伊形布留式甕	口縁部～体部	8%	口縁部外面に煤薄く付着する、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内外面共に丁寧なヨコナデ調整、端部は内側上方に丸く肥厚する、体部内面は横位の丁寧なヘラケズリ整形、体部外面は不明、布留式併行期中段階、反転復元
119	図 38	—	216	277	1-1 区 II 2C8b12	—	1 自然流路第 6 層系 6-3	土師器	紀伊形布留式甕	口縁部～頸部	15%	口縁部外面に煤薄く付着する、全体に磨滅ぎみのため調整不明瞭、口縁部内外面共に丁寧なヨコナデ調整、端部は内側に大きく肥厚する、頸部内面下半は横位の粗いヘラケズリ整形、布留式併行期最新段階、反転復元
120	図 38	図版 25	206	284 283	1-1 区 II 2C8a10 中央 II 2C8a10 中央	—	1 自然流路第 6 層系 6-3 第 6 層系下端	弥生土器	小型甕	口縁部～底部	90%	外面全体に煤厚く付着する、底部底面から体部外面下半にかけて二次焼成、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、内面は不明、外面は左上がり斜位のハケメ整形の痕跡、後にナデ調整、庄内式併行期
121	図 38	図版 25	240	249	1-1 区 II 2C8b12 中央	—	1 自然流路第 6 層系 6-3	弥生土器	高坏	坏部～脚台部	60%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、坏部内面口縁部は横位のヘラミガキ調整、皿部内面は一定方向のヘラミガキ調整、口縁部外面は左上がり斜位のヘラミガキ調整の痕跡、皿部外面は左上がり斜位のヘラミガキ調整の痕跡、脚台部外面は縦位のヘラミガキ調整、後に裾部は斜位の分割ヘラミガキ調整か、庄内式併行期新段階、一部反転復元

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
122	図 38	—	244	321	1-1 区 II 2C8b13 北端	—	1 自然流路 第 6 層系 6-3	弥生土器	高坏	坏部 口縁部 ~ 腕部	25%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部・腕部内面上半は横位のヘラミガキ調整、それ以外は調整不明、庄内式併行期新段階、反転復元
123	図 38	図版 25	242	251	1-1 区 II 2C8b11 南端	—	1 自然流路 第 6 層系 下半・下端 + 第 6 層系 6-3	弥生土器	高坏	坏部 口縁部 ~ 腕部	40%	腕部内面の一部に黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面は横位のヘラミガキ調整の痕跡、腕部内面は縦位・後に横位のヘラミガキ調整、口縁部と腕部外面上半は横位の細かいヘラミガキ調整、庄内式併行期新段階、反転復元
124	図 38	—	245	192 193	1-1 区 II 2C8b12 北東端 II 2C8b12 北東端	—	1 自然流路 第 6 層系 下端 6-3 第 6 層系 下端 6-3	弥生土器	高坏	坏部	70%	内外面共に部分的に剥離・磨滅及び鉄分質の固着著しいため調整不明瞭、内外面共に横位の浅く丁寧なハケメ調整、庄内式併行期新段階、一部反転復元
125	図 38	図版 25	1	249	1-1 区 II 2C8b12 中央	—	1 自然流路 第 6 層系 6-3	弥生土器	鉢	口縁部 ~ 底部	60%	底部底面から体部にかけて黒斑有り、内面は柔らかな板状工具による不定方向のナデ調整、庄内式併行期、一部反転復元
126	図 38	図版 25	19	249	1-1 区 II 2C8b12 中央	—	1 自然流路 第 6 層系 6-3	弥生土器	鉢	口縁部 ~ 底部	60%	底部底面から体部外面にかけて黒斑有り、口縁部から体部にかけて内外面共に横位の板状工具によるナデ調整、後に内外面共に横位の丁寧なハケメ調整、細かいヘラミガキ調整、庄内式併行期、一部反転復元
127	図 38	—	230	193	1-1 区 II 2C8b12 北東端	—	1 自然流路 第 6 層系 下端 6-3	弥生土器	小型鉢	口縁部 ~ 底部	30%	体部外面下半に黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面は右上がり斜位の丁寧なヘラミガキ調整、体部外面は左上がり斜位のヘラミガキ調整、庄内式併行期新段階、反転復元
128	図 38	図版 25	6	284	1-1 区 II 2C8a10 中央	—	1 自然流路 第 6 層系 6-3	弥生土器	手捏ね壺	口縁部 ~ 底部	95%	口縁部外面から底部底面にかけて約 1/2 に黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部内面はナデ調整、体部外面は板状工具による押し当て、庄内式併行期
129	図 38	図版 25	252	206	1-1 区 II 2C8a11	—	1 自然流路 第 6 層系 下端 6-3	弥生土器	手捏ね鉢	口縁部 ~ 底部	60%	体部外面から底部底面の一部にかけて黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、内外面共にユビオサエ+ユビナデ調整、庄内式併行期か、反転復元
130	図 38	図版 25	251	206	1-1 区 II 2C8a11	—	1 自然流路 第 6 層系 下端 6-3	弥生土器	製塩土器 脚台 2 式	体部 ~ 底部	65%	全体に二次焼成を被ける、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、内面は見込から体部に向けてユビナデ調整、体部外面は右上がり斜位の平行タタキ整形、庄内式併行期、一部反転復元
131	図 39	—	226	320	1-1 区 II 2C8b12	—	1 自然流路 第 6 層系 6-3	土師器	大型鉢	口縁部 ~ 頸部	8%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、口縁部外面端部に幅広の凹線文状の凹み一条、形態の特徴から外来系土器、布留式併行期古段階、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
132	図 39	—	247	249	1-1 区 II 2C8b12 中央	—	1 自然流路 第 6 層系 6-3	土師器	鉢	口縁部 ~ 腰部	10%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面下半から体部にかけて横位の丁寧な細かいヘラミガキ調整、体部外面は横位の丁寧なヘラミガキ調整の痕跡、布留式併行期古段階、反転復元
133	図 39	図版 26	178	214	1-1 区 II 2C8a10	—	1 自然流路 第 6 層系 + 第 6 層系 下端	弥生土器	広口壺	口縁部 ~ 頸部	図 40%	口縁部内面約 1/4 に黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、頸部外面は縦位の幅広のヘラミガキ調整、庄内式併行期古段階、一部反転復元
134	図 39	図版 26	183	179	1-2 区 II 2B8v9	—	1 自然流路 第 5 層系 下半	弥生土器	広口壺	口縁部 ~ 頸部	85%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明瞭、口縁部内面は横位の丁寧な分割ヘラミガキ調整、頸部外面は縦位の粗い幅広のヘラミガキ調整、紀伊 V-5 様式か、一部反転復元
135	図 39	図版 26	202	212	1-1 区 II 2B8y10	—	1 自然流路 第 6 層系	弥生土器	広口壺 (長頸壺)	口縁部 ~ 肩部	40%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内外面は丁寧なヨコナデ調整、肩部外面は縦位の細かいハケメ調整の痕跡、内面はユビオサエ及びナデ調整、庄内式併行期、一部反転復元
136	図 39	図版 26	182	177	1-2 区 II 2B8v9	—	1 自然流路 第 5 層系 上半	弥生土器	広口壺	口縁部 ~ 頸部	70%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明瞭、口縁部内面の一部にヘラミガキ調整の僅かな痕跡有り、紀伊 V-5 様式か、一部反転復元
137	図 39	図版 26	181	292	1-1 区 II 2C8a12	—	1 自然流路 第 6 層系 下端	弥生土器	広口壺	口縁部 ~ 頸部	20%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面は左上がり斜位の丁寧な細かいヘラミガキ調整、頸部外面は粗い幅広のヘラミガキ調整、庄内式併行期古段階、反転復元
138	図 39	図版 26	200	173	1-1 区 II 2C8a11 北端	—	1 自然流路 第 6 層系 下端 第 7 層系 上端 6-3?	弥生土器	広口壺 (直口壺)	口縁部 ~ 肩部	30%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内外面は丁寧なヨコナデ調整、肩部外面は丁寧なユビナデ調整か、庄内式併行期、反転復元
139	図 39	図版 26	210	163	1-1 区 II 2C8a13	—	1 自然流路 第 6 層系	弥生土器	直口壺	口縁部 ~ 肩部	60%	全体に磨滅及び鉄分質の固着著しいため調整不明瞭、口縁部内面は横位の板状工具によるナデ調整、口縁部外面は縦位の粗いヘラミガキ調整、庄内式併行期、一部反転復元
140	図 39	図版 26	197	165	1-1 区 II 2C8b14	—	1 自然流路 第 6 層系 下端	弥生土器	直口壺	口縁部 ~ 肩部	50%	全体に剥離・磨滅及び鉄分質の固着が極めて著しいため調整不明、庄内式併行期、一部反転復元
141	図 39	—	205	148	1-1 区 II 2C8a14	—	1 自然流路 第 6 層系	弥生土器	小型直口壺	口縁部 ~ 頸部	55%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内外面共に縦位のヘラミガキ調整、庄内式併行期、一部反転復元

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
142	図 39	—	201	235	1-1区 II 2B8y11 北東端	—	1 自然流路 第7層系	弥生土器	長頸壺	口縁部 ~頸部	20%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内外面は丁寧なヨコナデ調整、後に外面は縦位のヘラミガキ調整、紀伊V-4様式、反転復元
143	図 39	図版 26	199	219	1-1区 II 2C8b11	—	1 自然流路 第6層系 + 第6層系下端	弥生土器	直口壺	頸部 ~底部	70%	肩部から底部外面にかけて対になる位置に黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、底部内面は板状工具による放射状のナデ整形、体部内面は不明、体部から底部外面は分割成形による平行タタキ整形、庄内式併行期、一部反転復元
144	図 39	—	18	197	1-1区 II 2C8a11 西側中央	—	1 自然流路 第6層系下端	弥生土器	二重口縁壺	頸部	40%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明瞭、庄内式併行期、反転復元
145	図 39	図版 26	193	151	1-1区 II 2C8b12	—	1 自然流路 第6層系	弥生土器	二重口縁壺	口縁部	18%	内面は鉄分質の固着が著しく調整不明瞭、外面は剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、内面は縦位の丁寧なヘラミガキ調整の痕跡、庄内式併行期、反転復元
146	図 39	図版 26	187	57	1-1区 II 2C8a12	—	1 自然流路 第6層系	弥生土器	二重口縁壺	口縁部 ~頸部	20%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面は横位の丁寧な分割ヘラミガキ調整、外面の調整は不明、庄内式併行期、反転復元
147	図 39	図版 26	177	182 183 223	1-2区 II 2B8y9 西半 II 2B8w9 II 2B8w9	—	1 自然流路 第6層系 第7層系 第6層系	弥生土器	脚台付壺	口縁部 ~脚柱部	70%	体部内面中位以下を省いて丁寧な細かいヘラミガキ調整、体部外面下半は分割によるヘラミガキ調整、庄内式併行期古段階、一部反転復元
148	図 39	—	179	280	1-1区 II 2C8a10 南半中央	—	1 自然流路 第6層系下端	土師器	小型壺	口縁部 ~肩部	20%	頸部内面以下を省いて丁寧な細かいヘラミガキ調整、口縁部内面は横位の分割ヘラミガキ調整、布留式併行期古段階、反転復元
149	図 39	図版 26	218	153	1-1区 II 2B8y13	—	1 自然流路 第6層系	弥生土器	甕	口縁部 ~体部	30%	外面全体に煤だらけに付着する、全体に遺存はまま良好、口縁部内外面共に丁寧なヨコナデ調整、端部は内側上方に小さく摘み上げる、体部内面は左上がり斜位の弱い掻き上げ、体部外面はやや右上がり斜位の平行タタキ整形、庄内式併行期新段階、反転復元
150	図 39	図版 26	213	48	1-1区 II 2B8y10	—	1 自然流路 第6層系 黒灰色シルト	弥生土器	甕	口縁部 ~体部	25%	外面全体に煤厚く付着する、内面は剥離・磨滅著しいため調整不明、頸部以下外面は分割成形による平行タタキ整形、庄内式併行期、反転復元
151	図 39	図版 26	214	214	1-1区 II 2C8a10	—	1 自然流路 第6層系 + 第6層系下端	弥生土器	小型甕	口縁部 ~体部	30%	外面全体に二次焼成、内面は磨滅著しいため調整不明瞭、頸部以下内面はやや右上がり斜位の弱いヘラケズリ整形、頸部以下外面はやや右上がり斜位の平行タタキ整形、庄内式併行期、反転復元
152	図 39	図版 26	208	213 112	1-1区 II 2B8y11 II 2B8y11	—	1 自然流路 第6層系 第6層系	弥生土器	小型甕	口縁部 ~底部	70%	全体にやや歪み著しい、全体に磨滅及び鉄分質の固着著しいため整形・調整の単位不明瞭、頸部以下内面は縦位から右上がり斜位のハケメ整形、頸部以下外面は分割成形による平行タタキ整形、庄内式併行期
153	図 39	図版 26	215	162	1-1区 II 2C8a12 南半	—	1 自然流路 第6層系	土師器	紀伊形 布留式甕	口縁部 ~体部	15%	口縁部外面に煤厚く付着する、全体に磨滅ぎみのため調整不明瞭、口縁部内面は横位の粗い分割ハケメ調整、端部は内側上方に小さく摘み上げる、体部内面はやや右上がり斜位の粗いヘラケズリ整形、体部外面は縦位のハケメ調整、後に左上がり斜位の粗いハケメ調整、布留式併行期古段階、反転復元
154	図 39	図版 26	207	289	1-1区 II 2C8a14 調査区南壁	—	1 自然流路 第6層系6-1	土師器	紀伊形 布留式甕	頸部 ~底部	図 40% 40%	体部中位外面に横帯状に煤厚く付着する、全体に磨滅著しく整形・調整の単位不明瞭、頸部以下内面は不定方向のヘラケズリ整形、体部外面は縦位から左上がり斜位のハケメ調整、布留式併行期、一部反転復元
155	図 39	図版 26	211	280	1-1区 II 2C8a10 南半中央	—	1 自然流路 第6層系下端	弥生土器	甕	口縁部 ~肩部	20%	口縁部内面から頸部にかけて煤?厚く付着する、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部内面は横位の粗いヘラケズリ整形、肩部以下外面は縦位の丁寧なハケメ調整、形態と調整技法の特徴から東阿波型土器、紀伊V-4・5様式併行期、庄内式併行期新段階、反転復元
156	図 39	図版 26	209	197	1-1区 II 2C8a11 西側中央	—	1 自然流路 第6層系下端	土師器	小型甕	口縁部 ~体部	14%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内外面は丁寧なヨコナデ調整、頸部以下内面は縦位の丁寧な調整、下半は左上がり斜位のヘラケズリ整形、頸部以下外面は左上がり斜位の丁寧な細かいハケメ調整、形態と調整技法の特徴から東阿波型土器、布留式併行期古段階、反転復元
157	図 40	図版 26	234	211	1-1区 II 2B8w11	—	1 自然流路 第6層系	弥生土器	高坏	坏部 口縁部 ~血部	20%	全体に磨滅及び鉄分質の固着著しいため調整不明瞭、口縁部内面は横位の丁寧なヘラミガキ調整、血部は縦位のヘラミガキ調整、外面は口縁部・血部共に縦位の丁寧なヘラミガキ調整、紀伊V-4様式か、反転復元
158	図 40	図版 26	233	212	1-1区 II 2B8y10	—	1 自然流路 第6層系	弥生土器	高坏	坏部 口縁部 ~脚柱部	40%	全体に剥離・磨滅及び鉄分質の固着著しいため調整不明瞭、坏部内面口縁部は横位のヘラミガキ調整、血部は縦位のヘラミガキ調整、坏部外面口縁部は横位のヘラミガキ調整、脚柱部外面は縦位のヘラミガキ調整の痕跡、紀伊V-5様式か、一部反転復元

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
159	図40	図版27	235	242	1-1区 II 2C8a13	—	1 自然流路 第6層系	弥生土器	高坏	坏部 口縁部 ~血部	25%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面はユビオサエ調整、後にヨコナデ調整、それ以外は調整不明、庄内式併行期新段階、反転復元
160	図40	図版27	238	263	1-1区 II 2C8a12	—	1 自然流路 第6層系	弥生土器	高坏	坏部 口縁部 ~血部	25%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明瞭、口縁部内外面共に横位の細かいヘラミガキ調整の痕跡、血部は内外面共に調整不明、庄内式併行期古段階、反転復元
161	図40	図版27	241	47 138 171	1-1区 II 2C8a9・ 10 II 2C8a11 II 2C8a11 北端	—	1 自然流路 第6層系 黒灰色シルト 第6層系 第6層系下端 第7層系上端 6-3?	弥生土器	高坏	坏部 口縁部 ~血部	70%	口縁部外面上半の一部に黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面は横位の細かいヘラミガキ調整、口縁部外面はヨコナデ調整、血部内面は一定方向のヘラミガキ調整、外面の調整は不明、庄内式併行期新段階
162	図40	図版27	237	135 134 144	1-1区 II 2C8b12 II 2C8a12 中央EWト レンチ II 2C8b12	—	1 自然流路 第6層系 第6層系 第6層系	弥生土器	高坏	坏部 口縁部 ~血部	75%	口縁部外面に黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面は横位の細かい雑な分割ヘラミガキ調整、血部内面は放射状の粗いハケメ調整、口縁部外面は横位の細かい雑なヘラミガキ調整、血部外面は縦位の幅広のヘラミガキ調整、庄内式併行期中段階
163	図40	図版27	236	138	1-1区 II 2C8a11	—	1 自然流路 第6層系	弥生土器	高坏	坏部 口縁部 ~血部	25%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面は右上がり斜位のヘラミガキ調整、外面は縦位のヘラミガキ調整の痕跡、血部外面は縦位のユビナデ調整、庄内式併行期新段階、反転復元
164	図40	図版27	239	275	1-1区 II 2C8b12	—	1 自然流路 第6層系 下半・下端 +第6層系6-3	弥生土器	高坏	坏部 口縁部 ~血部	30%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面はやや斜位の分割ヘラミガキ調整、血部の調整は不明、口縁部外面は斜位ぎみの縦位のヘラミガキ調整、庄内式併行期新段階、反転復元
165	図40	—	243	290	1-1区 II 2C8b12 南東隅	—	1 自然流路 第6層系+第7 層系 基盤層Z	土師器	高坏	坏部 口縁部 ~腕部	15%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部・腕部内面は横位のヘラミガキ調整の痕跡、口縁部・腕部外面は横位のヘラミガキ調整の痕跡か、布留式併行期古段階か、反転復元
166	図40	—	246	168	1-1区 II 2C8b12 中央	—	1 自然流路 第6層系	弥生土器	高坏	坏部 ~基部	40%	全体に剥離・磨滅及び鉄分質の固着極めて著しいため調整不明瞭、口縁部内面は横位のヘラミガキ調整の痕跡、基部外面は縦位のヘラミガキ調整の痕跡か、庄内式併行期古段階、一部反転復元
167	図40	図版27	16	243	1-1区 II 2C8a14	—	1 自然流路 第6層系	土師器	鉢	口縁部 ~底部	60%	全体に歪み著しい、特に口縁部の歪み著しく楕円形状を呈する、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部内面は板状工具による粗いナデ調整、体部外面は粗いタタキ整形、後にユビナデ調整、布留式併行期古段階、一部反転復元
168	図40	—	229	110	1-1区 II 2B8y10	—	1 自然流路 第6層系	弥生土器	小型鉢	口縁部 ~底部	30%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明瞭、体部内面の調整は不明、体部外面は左上がり斜位のヘラミガキ調整の痕跡、庄内式併行期新段階、反転復元
169	図40	—	231	214	1-1区 II 2C8a10	—	1 自然流路 第6層系 +第6層系下端	弥生土器	小型鉢	口縁部 ~底部	45%	腰部外面に黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、口縁部内面は左上がり斜位の細かいピッチのハケメ調整、体部内面も細かいピッチのハケメ調整か、体部外面の調整は不明、庄内式併行期、一部反転復元
170	図40	—	232	214 197	1-1区 II 2C8a10 II 2C8a11 西側中央	—	1 自然流路 第6層系 +第6層系下端 第6層系下端	弥生土器	小型鉢	口縁部 ~底部	95%	底部はやや歪つ、体部外面下半から底部底面にかけて黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部内面は板状工具によるナデ調整か、体部外面は縦位のヘラミガキ調整、庄内式併行期新段階
171	図40	—	5	278	1-1区 II 2C8a10 北東半	—	1 自然流路 第6層系下端	弥生土器	手捏ね鉢	口縁部 ~底部	60%	口縁部外面から底部にかけて対になる2方向に黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部内外面共にユビナデ調整、庄内式併行期
172	図40	図版27	227	140	1-1区 II 2C8b11	—	1 自然流路 第3層系凹み 第4層系含む 第6層系	弥生土器	底部有孔鉢	口縁部 ~底部	45%	全体に剥離・磨滅及び鉄分質の固着著しいため調整不明、外面は左上がり斜位の平行タタキ整形、底部の穿孔は焼成後に内面側から、庄内式併行期、一部反転復元
173	図40	図版27	228	231	1-1区 II 2B8x10 北側溝 内壁断面	—	1 自然流路 第7層系	弥生土器	底部有孔鉢	口縁部 ~底部	70%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、内面全体に板状工具（浅くて粗いハケメ）によるナデ調整、体部外面はタタキ整形、後に縦位のヘラミガキ調整か、底部外面は縦位のユビナデ調整、底部の穿孔は焼成後に底部底面側から、庄内式併行期古段階
174	図40	図版27	3	278	1-1区 II 2C8a10 北東半	—	1 自然流路 第6層系下端	土師器	大型鉢	口縁部	10%	口縁部外面の一部に黒斑有り、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、体部内面は左上がり斜位の粗いハケメ調整、体部外面は左上がり斜位の細かいハケメ調整、布留式併行期古段階、反転復元
175	図40	—	225	141	1-1区 II 2B8y11・ 12 中央EWト レンチ	—	1 自然流路 第6層系	弥生土器	大型鉢	口縁部	7%	全体に磨滅及び鉄分質の固着著しいため調整不明瞭、内面は横位のヘラミガキ調整の痕跡か、口縁部外面は縦位の丁寧なヘラミガキ調整の痕跡、屈曲部以下は横位のヘラミガキ調整の痕跡、庄内式併行期、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元

和田岩坪遺跡 出土遺物一覧 土器・土製品

*残存率は、図示できた遺存部位の割合

No.10

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
176	図40	—	185	134	1-1区 II 2C8a12	—	1 自然流路 第6層系	弥生土器	鉢	口縁部	10%	全体に磨滅がみのため調整不明瞭、内外面共に丁寧なヨコナデ調整、形態から他地域(山陽・山陰)からの搬入土器、紀伊V様式併行期、反転復元
177	図40	—	248	197	1-1区 II 2C8a11 西側中央	—	1 自然流路 第6層系下端	弥生土器	小型器台	口縁部	25%	全体に磨滅極めて著しいため調整不明瞭、口縁部内面は横位の丁寧なヘラミガキの痕跡、庄内式併行期新段階、反転復元
178	図40	図版27	250	47	1-1区 II 2C8a9・10 北壁側溝	—	1 自然流路 第6層系 黒灰シルト -50~70cm	弥生土器	製塩土器 脚台2式	体部 ~底部	70%	全体に二次焼成を被ける、全体に磨滅著しいため調整不明瞭、内面はコピナデ調整か、体部外面は右上がり斜位の平行タキ整形、庄内式併行期、一部反転復元
179	図40	図版27	249	213	1-1区 II 2B8y11	—	1 自然流路 第6層系	弥生土器	製塩土器 脚台2式	体部 ~底部	55%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、内面は見込から体部に向けて板状工具によるナデ上げ、外面はコピオサエ+コピナデ調整、庄内式併行期、一部反転復元、調整技法と形態の特徴から搬入品の可能性有り
180	図41	図版27	9	281	1-1区 II 2C8a10 南半中央	—	1 自然流路 第6層系6-3	土製品	有孔土錘	—	100%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、長さ5.9cm・幅1.4~1.6cm・厚さ1.3~1.5cm、穿孔径0.6cm、重量18g
181	図41	図版27	12	196	1-1区 II 2C8a11 北西隅	—	1 自然流路 第6層系下位	土製品	有孔土錘	—	100%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、長さ5.9cm・幅1.4~1.6cm・厚さ1.1~1.4cm、穿孔径0.5~0.6cm、重量16g
182	図41	図版27	138	70	1-1区 II 2C8b13 北半	—	1 自然流路 第4層系	土製品	有孔土錘	—	100%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、長さ6.5cm・幅1.3~1.8cm・厚さ0.9~1.3cm、穿孔径0.7cm、重量13g
183	図41	図版27	160	173	1-1区 II 2C8a11 北端	—	1 自然流路 第6層系下端 第7層系上端 6-3?	土製品	有孔土錘	—	100%	全体に磨滅極めて著しいため調整不明、長さ6.2cm・幅1.3~1.5cm・厚さ1.2~1.3cm、穿孔径0.6~0.7cm、重量16g
184	図41	図版27	161	290	1-1区 II 2C8b12 南東隅	—	1 自然流路 第6層系+第7層系 基盤層Z	土製品	有孔土錘	—	100%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、長さ6.2cm・幅1.4~1.7cm・厚さ1.1~1.3cm、穿孔径0.6cm、重量16g
185	図41	図版27	162	173	1-1区 II 2C8a11 北端	—	1 自然流路 第6層系下端 第7層系上端 6-3?	土製品	有孔土錘	—	100%	全体に磨滅極めて著しいため調整不明、長さ6.2cm・幅1.3~1.4cm・厚さ1.0~1.2cm、穿孔径0.6~0.7cm、重量14g
186	図41	図版27	169	191	1-1区 II 2C8b12 北東端	—	1 自然流路 第6層系下端	土製品	有孔土錘	—	100%	全体に磨滅極めて著しいため調整不明、長さ6.4cm・幅1.2~1.6cm・厚さ0.7~1.1cm、穿孔径0.4~0.6cm、重量12g
187	図41	図版27	144	140	1-1区 II 2C8b11	—	1 自然流路 第3層系凹み 第4層系凸心 第6層系	土製品	有孔土錘	—	95%	全体に磨滅極めて著しいため調整不明、長さ7.6cm・幅1.5~2.2cm・厚さ0.9~2.0cm、穿孔径0.6~0.7cm、重量(23)g
188	図41	図版27	159	236	1-1区 II 2C8b11 南端	—	1 自然流路 第6層系6-3	土製品	有孔土錘	—	100%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、長さ7.2cm・幅1.4~2.0cm・厚さ1.1~1.4cm、穿孔径0.7cm、重量20g
189	図41	図版27	172	202	1-1区 II 2C8a11	—	1 自然流路 第6層系下端	土製品	有孔土錘	—	98%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、長さ6.55cm・幅1.6~1.8cm・厚さ1.5~1.65cm、穿孔径0.6~0.8cm、重量(25)g
190	図41	図版27	7	194	1-1区 II 2C8a12 北西隅	—	1 自然流路 第6層系 下端	土製品	有孔土錘	—	98%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、長さ8.2cm・幅2.2~2.5cm・厚さ1.5~1.7cm、穿孔径0.7~0.8cm、重量(41)g
191	図41	図版27	8	195	1-1区 II 2C8a12 北西端	—	1 自然流路 第6層系下端6-3	土製品	有孔土錘	—	100%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、長さ8.0cm・幅2.1~2.5cm・厚さ2.1~2.2cm、穿孔径0.8cm、重量52g
192	図41	図版27	157	162	1-1区 II 2C8a12 南半 中央EWト レンチより南	—	1 自然流路 第6層系	土製品	有孔土錘	—	100%	全体に剥離・磨滅及び鉄分質の固着が著しいため調整不明瞭、長さ8.3cm・幅1.95~2.7cm・厚さ0.9~2.0cm、穿孔径0.7~0.9cm、重量40g
193	図41	図版27	10	242	1-1区 II 2C8a13	—	1 自然流路 第6層系	土製品	有孔土錘	—	95%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、2本の粘土紐を捻った状態の作り、長さ8.8cm・幅2.7~3.2cm・厚さ2.3~2.6cm、穿孔径0.6cm、重量(73)g
194	図41	図版27	158	193	1-1区 II 2C8b12 北東端 中央EWト レンチより 北側	—	1 自然流路 第6層系下端6-3	土製品	有孔土錘	—	100%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、長さ9.7cm・幅2.7~3.0cm・厚さ2.5~2.7cm、穿孔径0.9cm、重量88g
195	図41	図版27	170	193	1-1区 II 2C8b12 北東端	—	1 自然流路 第6層系下端6-3	土製品	有孔土錘	—	100%	全体に磨滅極めて著しいため調整不明、長さ8.65cm・幅3.0~3.4cm・厚さ2.2~2.4cm、穿孔径0.8cm、重量86g
196	図41	図版27	171	240	1-1区 II 2C8b12	—	1 自然流路 第6層系6-3	土製品	有孔土錘	—	100%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明、長さ8.9cm・幅2.8~3.1cm・厚さ2.0~2.2cm、穿孔径0.8~0.9cm、重量80g
197	図41	図版27	156	157	1-1区 II 2C8a12 中央EWト レンチより南	—	1 自然流路 第6層系	土製品	有孔土錘	—	98%	全体に剥離・磨滅及び鉄分質の固着が著しいため調整不明瞭、長さ7.35cm・幅2.6~2.8cm・厚さ2.4cm、穿孔径0.6~0.8cm・重量(76)g
198	図41	図版27	11	287	1-1区 II 2C8a11 南西半	—	1 自然流路 第6層系下端	土製品	管状土錘	—	100%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、長さ7.2cm・長径(幅)2.7~2.9cm・短径(厚さ)2.4~2.6cm・内径1.3~1.5cm、重量64g

和田岩坪遺跡 出土遺物一覧 土器・土製品

*残存率は、図示できた遺存部位の割合

No.11

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
199	図 41	図版 27	143	140	1-1 区 II 2C8b11	—	1 自然流路第 3 層系凹み第 4 層系含む第 6 層系	土製品	管状土鍾	—	95%	全体に磨滅極めて著しいため調整不明、長さ 7.7 cm・長径(幅) 2.7~2.8 cm・短径(厚さ) 2.7 cm・内径 1.4~1.5 cm、重量(52) g
200	図 41	図版 27	155	162	1-1 区 II 2C8a12 南半中央 EW トレンチより南	—	1 自然流路第 6 層系	土製品	管状土鍾	—	90%	全体に剥離・磨滅及び鉄分質の固着が著しいため調整不明瞭、長さ 6.7 cm・幅 2.85~3.05 cm・厚さ 3.0 cm・内径 1.5~1.6 cm、重量(50) g
201	図 42	図版 28	163	71 67 156	1-1 区 II 2C8a13 II 2C8a13 南半	—	1 自然流路第 4 層系第 6 層系	弥生土器	直口壺	口縁部~体部	70%	体部内面は左上がり斜位の板状工具による粗いナデ調整、体部外面は磨滅のため不明瞭だが分割ヘラミガキ調整、口縁部外面は縦位の丁寧なヘラミガキ調整、庄内式併行期、一部反転復元
202	図 42	—	166	64	1-1 区 II 2B8y14	—	1 自然流路東側肩口	土師器	二重口縁壺	口縁部	10%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、内面は縦位のヘラミガキ調整の痕跡、口縁部外面の突帯より上位は強いヨコナデ調整による筋目、突帯より下位は縦位のヘラミガキ調整の痕跡、布留式併行期、反転復元
203	図 42	図版 28	146	34	1-1 区 II 2C8b14 南壁側溝	—	1 自然流路 SD 遺構含む第 4 層系主体褐灰色シルト	土師器	甕	口縁部~肩部	20%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、内面の調整は不明、頸部外面以下は縦位の粗いハケメ調整、古墳時代中期か、反転復元
204	図 42	—	167	64	1-1 区 II 2B8y14	—	1 自然流路東側肩口	弥生土器	甕	口縁部~肩部	20%	口縁部外面以下に煤厚く付着する、全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、肩部外面はやや右上がり斜位の平行タタキ整形、庄内式併行期、反転復元
205	図 42	図版 28	150	9	1-1 区南側 II 2C8a・b14	—	1 自然流路 SD 遺構第 4 層系暗褐灰色シルト	土師器	甕	口縁部~肩部	13%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、頸部以下内面はヘラケズリ整形、外面は斜位のハケメ調整、古墳時代中期、反転復元
206	図 42	図版 28	151	34	1-1 区 II 2C8b14 南壁側溝	—	1 自然流路 SD 遺構含む第 4 層系主体褐灰色シルト	土師器	甕	口縁部~肩部	13%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、古墳時代中期、反転復元
207	図 42	図版 28	148	34	1-1 区 II 2C8b14 南壁側溝	—	1 自然流路 SD 遺構含む第 4 層系主体褐灰色シルト	土師器	高坏	坏部	40%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、布留式併行期、反転復元
208	図 42	—	142	32	1-1 区 II 2B8y15	—	1 自然流路 SD 遺構含む第 4 層系主体茶褐灰色シルト	土師器	高坏	坏血部~脚裾部	30%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、布留式併行期、反転復元
209	図 42	図版 28	149	図 43	1-1 区 II 2B8y10	—	1 自然流路第 4 層系褐灰色シルト	土師器	高坏	坏部~基部	90%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、坏部内面は縦位の太いヘラミガキ調整の痕跡、外面は不明、古墳時代中期
210	図 42	図版 28	164	62	1-1 区 II 2C8a14	—	1 自然流路第 4 層系	弥生土器	高坏	脚台部	70%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、柱状部外面は縦位の丁寧なヘラミガキ調整、基部上面は接合痕に筧先による切り込み有り、庄内式併行期、一部反転復元
211	図 42	図版 28	141	101	1-1 区 II 2C8a11	—	1 自然流路第 4 層系第 5 層系	土師器	高坏	基部	65%	全体に剥離・磨滅及び鉄分質の固着が著しいため調整不明瞭、古墳時代中期、反転復元
212	図 42	—	168	42	1-1 区 II 2C8a9・10	—	1 自然流路 SD 遺構含む第 4 層系暗褐灰色シルト東半褐灰色シルト	弥生土器	高坏	基部~脚柱部	60%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、脚柱部外面は縦位のヘラミガキ調整の痕跡、庄内式併行期、一部反転復元
213	図 42	—	152	143	1-1 区 II 2C8b10	—	1 自然流路第 3 層系凹み第 4 層系	土師器	高坏	脚台部	30%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、布留式併行期、一部反転復元
214	図 42	—	147	9	1-1 区南側 II 2C8a・b14	—	1 自然流路 SD 遺構第 4 層系暗褐灰色シルト	土師器	高坏	脚台部	45%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、柱状部内面は回転を伴う軽いヘラケズリ整形、外面は縦位のヘラミガキ調整の痕跡、布留式併行期、一部反転復元
215	図 42	—	145	67	1-1 区 II 2C8a13	—	1 自然流路第 4 層系	土師器	小型器台	脚台部	60%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、庄内式併行期新段階、反転復元
216	図 42	—	165	62	1-1 区 II 2C8a14	—	1 自然流路第 4 層系	弥生土器	鉢	口縁部~底部	65%	全体に剥離・磨滅著しいため調整不明瞭、体部内面は板状工具による軽いナデ調整、外面は水平から右上がり斜位の平行タタキ整形、後にユビナデ調整、庄内式併行期、一部反転復元
217	図 42	図版 28	136	69	1-1 区 II 2C8b13 南半	—	1 自然流路第 4 層系	土師器	小型鉢	体部~底部	55%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、内面ユビオサエ調整の痕跡のみ、古墳時代中期か、一部反転復元
218	図 42	図版 28	135	65	1-1 区 II 2C8b14 西半	—	1 自然流路第 4 層系	土師器	甕(埴)	把手	95%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、ユビオサエ調整の痕跡のみ、古墳時代中期
219	図 42	—	137	72	1-1 区 II 2C8b12	—	1 自然流路第 4 層系	土師器	甕(埴)	把手	95%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、ユビナデ調整の痕跡のみ、古墳時代中期
220	図 42	図版 28	139	69	1-1 区 II 2C8b13 南半	—	1 自然流路第 4 層系	土師器	甕(埴)	把手	95%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、ユビナデ調整の痕跡のみ、古墳時代中期
221	図 42	—	140	78	1-1 区 II 2C8b12	—	1 自然流路第 4 層系	土師器	埴	把手	100%	全体に剥離・磨滅極めて著しいため調整不明、ユビナデ調整の痕跡のみ、古墳時代中期か
222	図 42	—	153	73	1-1 区 II 2C8a12	—	1 自然流路第 4 層系	弥生土器	製塩土器脚台 2 式	腰部~底部	80%	全体に磨滅著しいため調整不明瞭、腰部内面は調整不明、外面は横位の平行タタキ整形、庄内併行期、一部反転復元

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
223	図 42	図版 28	119	69	1-1 区 II 2C8b13	—	1 自然流路第 4 層系	須恵器	坏蓋	天井部～口縁部	30%	天井部外面に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑編年 I 型式第 3 段階(田辺 TK208 型式)、反転復元
224	図 42	—	116	34	1-1 区 II 2C8b14 南壁側溝	—	1 自然流路 SD 遺構含む？ 第 4 層系主体 褐灰色シルト	須恵器	坏蓋	天井部～口縁部	20%	天井部外面に自然釉極めて厚く・口縁部外面に薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、自然釉付着のため回転ヘラケズリの単位は不明瞭、陶邑編年 I 型式第 3 段階(田辺 TK208 型式)、反転復元
225	図 42	図版 28	115	3	1-1 区 II 2C8b12 ~ 14	—	1 自然流路第 2・3 層 第 4 層含む 機械掘削	須恵器	坏身	口縁部～底部	40%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑編年 I 型式第 3 段階(田辺 TK208 型式)、反転復元
226	図 42	—	113	42	1-1 区 II 2C8a9・10	—	1 自然流路第 4 層系 暗褐灰色シルト 褐配色シルト	須恵器	坏身	口縁部～底部	15%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑編年 I 型式第 4 段階(田辺 TK23 型式)、反転復元
227	図 42	—	114	9	1-1 区 II 2C8a・b14	—	1 自然流路第 4 層系 暗褐灰色シルト	須恵器	坏身	口縁部～底部	10%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑編年 I 型式第 4 ~ 5 段階(田辺 TK23 ~ 47 型式)か、反転復元
228	図 42	図版 28	120	70	1-1 区 II 2C8b13	—	1 自然流路第 4 層系	須恵器	坏蓋	天井部～口縁部	50%	天井部外面から口縁部外面にかけて自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑編年 I 型式第 4 段階(田辺 TK23 型式)、反転復元
229	図 42	—	118	37	1-1 区 II 2C8b12	—	1 自然流路第 4 層系主体 褐灰色シルト	須恵器	坏蓋	天井部～口縁部	25%	天井部から口縁部外面にかけて鉄分質の固着薄く有り、ロクロ回転方向：右回り、陶邑編年 I 型式第 4 段階(田辺 TK23 型式)、反転復元
230	図 42	図版 28	117	67	1-1 区 II 2C8a13	—	1 自然流路第 4 層系	須恵器	坏蓋	天井部～口縁部	50%	天井部外面に自然釉薄く・口縁部外面にやや厚く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑編年 I 型式第 4 段階(田辺 TK23 型式)、反転復元
231	図 42	—	122	36	1-1 区 II 2C8c14 西壁側溝	—	1 自然流路第 4 層系主体 褐灰色シルト	須恵器	壺 (短頸壺)	頸部～底部	20%	頸部から底部外面にかけて偏って自然釉厚く付着する、ロクロ回転方向：左回り、陶邑編年 I 型式第 4 段階(田辺 TK23 型式) 前後か、反転復元
232	図 42	図版 28	121	72	1-1 区 II 2C8b12	—	1 自然流路第 4 層系	須恵器	脚台付壺 (把手付椀)	体部	5%	体部外面上半に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑編年 I 型式第 4 段階(田辺 TK23 型式) 前後か、細片のため径・傾き不明瞭、反転復元
233	図 42	図版 28	125	69 65	1-1 区 II 2C8b13 II 2C8b14	—	1 自然流路第 4 層系 第 4 層系	須恵器	甕	口縁部～底部	70%	口縁部内面から体部外面にかけて自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、底部底面は軽い回転ヘラケズリ整形、陶邑編年 I 型式第 2 段階(田辺 TK216 型式)か、一部反転復元
234	図 43	—	128	34	II 2C8b14 南壁側溝	—	1 自然流路第 4 層系主体 褐灰色シルト	須恵器	壺 (甕)	体部～腰部	35%	体部外面上半に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑編年 I 型式第 4 段階(田辺 TK23 型式)か、反転復元
235	図 43	図版 28	126	43 42 36 40	1-1 区 II 2B8y10 II 2C8a9・10 II 2C8c14 II 2C8b9	— 西壁側溝 西壁側溝	1 自然流路第 4 層系 褐灰色シルト 暗褐灰色シルト	須恵器	無蓋高坏	口縁部～脚台部	40%	口縁部内面から見込にかけて自然釉厚く付着する、脚台部外面に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑編年 I 型式第 3 段階(田辺 TK208 型式)、反転復元
236	図 43	—	127	34	II 2C8b14 南壁側溝	—	1 自然流路第 4 層系主体 褐灰色シルト	須恵器	有蓋高坏	脚台部	20%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑編年 I 型式第 4 段階(田辺 TK23 型式)、反転復元
237	図 43	図版 28	124	43	1-1 区 II 2B8y10 北側側溝	—	1 自然流路第 4 層系	須恵器	甕	口縁部	5%	口縁部内面及び端部外面に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、陶邑編年 I 型式第 3 段階(田辺 TK208 型式)、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
238	図 43	—	131	65	1-1 区 II 2C8b14	—	1 自然流路第 4 層系	須恵器	甕	口縁部～頸部	10%	口縁部内面に自然釉極めて薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑編年 I 型式第 3 段階(田辺 TK208 型式)、細片のため径・傾き不明瞭、反転復元
239	図 43	—	129	27 1	1-2 区 II 2B8w9 II 2B8v10	—	1 自然流路 上位層 包第 4 層系 包第 4 層	須恵器	甕	口縁部～肩部	30%	ロクロ回転方向：左回り、頸部外面から肩部にかけて縦位のタタキ整形、後に回転ヨコナデ、肩部内面は同心円文当て具痕、後に不定方向のユビナデ調整、陶邑編年 I 型式第 4 段階(田辺 TK23 型式)、反転復元
240	図 43	—	130	69 70 11	1-1 区 II 2C8b13 II 2C8b13 II 2C8b13	—	1 自然流路第 4 層系 包第 4 層系 暗褐灰色シルト	須恵器	直口壺	口縁部～体部	40%	頸部以下内面はユビオサエ、後に一部を回転ヨコナデ、頸部以下外面は左上がり斜位の平行タタキ、後に不定方向のユビナデ調整、陶邑編年 I 型式第 3 段階(田辺 TK208 型式)か、反転復元
241	図 43	図版 28	123	61 34	1-1 区 II 2C8b14 II 2C8b14 西壁側溝	—	1 自然流路第 4 層系 第 4 層系主体 褐灰色シルト	須恵器	樽形甕	頸部～底部	90%	頸部から底部外面にかけて左側半分偏って自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑編年 I 型式第 4 段階(田辺 TK23 型式)か、一部反転復元

和田岩坪遺跡 出土遺物一覧 土器・土製品

*残存率は、図示できた遺存部位の割合

No.13

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
242	図 43	—	133	10	1-1 区 II 2C8a13	—	1 自然流路 SD 遺構 包第 4 層系 暗褐色灰色シルト	須恵器	甕	口縁部	6%	内外面全体に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、平安時代中期か、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元
243	図 43	—	132	45	1-1 区 II 2B8w10	—	1 自然流路 第 4 層系 褐色灰色シルト	須恵器	甕	口縁部 ～頸部	5%	口縁部内面及び外面全体に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、陶色編年 V 型式第 1 段階（田辺 TK112 型式）、細片のため口径・傾き不明瞭、反転復元

和田岩坪遺跡 出土遺物一覧 石器（S）

*残存率は、図示できた遺存部位の割合

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構番号 層位	遺構面堆積層	遺物種類	器種	法量				石材	備考
										長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
S1	44	図版 29	S2	264	1-1 区 II 2C8a12	2 自然流路 基盤層 Z に類似、 1～2cm 円礫層	—	礫石器	敲石 (投弾)	(6.8)	5.7	(4.7)	(244)	粗粒砂岩	全体に敲打による調整痕、下端から背面にかけて敲打による破損
S2	44	図版 29	S3	321	1-1 区 II 2C8b13 北端	1 自然流路 第 6 層系 6-3	—	礫石器	敲石	11.2	8.0	3.7	(549)	緑色片岩	両端及び右側面に敲打痕
S3	44	図版 29	S4	28	1-2 区 II 2B8v9	1 自然流路 上位層 包第 4 層系	—	礫石器	敲石 (打ち欠き石錘)	(11.1)	5.8	3.1	(304)	緑色片岩	両端に敲打痕、打ち欠き石錘の可能性有り
S4	44	図版 29	S1	196	1-1 区 II 2C8a11 北西隅	1 自然流路 第 6 層系 下位	—	礫石器	敲石	12.2	5.7	4.0	403	細粒砂岩	表面及び両端に敲打痕、右側面は平滑に見えるが未使用
S5	44	図版 29	S8	287	1-1 区 II 2C8a11 南西半	1 自然流路 第 6 層系 下端	—	礫石器	敲石	13.7	4.1～ 6.4	2.3～ 3.7	415	粗粒砂岩	表面及び両側面・片端に敲打痕
S6	44	図版 29	S9	281	1-1 区 II 2C8a10 南半中央	1 自然流路 第 6 層系 6-3	—	礫石器	敲石	7.0	3.3	3.5	162	中粒砂岩	片端に敲打痕
S7	44	図版 29	S6	31	1-2 区 II 2B8v9	1 自然流路 下位層 第 5 層系一括	—	礫石器	敲石	14.1	6.0	3.0～ 3.8	470	粗粒砂岩	石材中央の角面及び両端に敲打痕
S8	44	図版 29	S5	40	1-1 区 II 2C8b9	1 自然流路 3SD 遺構?	—	礫石器	磨石	14.7	7.7	1.8～ 2.3	460	緑色片岩	片端に磨面有り
S9	44	図版 29	S7	224	1-2 区 II 2B8v9	1 自然流路 第 6 層系	—	礫石器	砥石	16.2	6.2	3.2	660	石英質片岩	表面に浅い凹み状の砥面有り
S10	—	図版 29	S10	241	1-1 区 II 2C8b12	1 自然流路 第 6 層系 6-3	—	祭祀具	石棒	(10.5)	(7.3)	4.4	(468)	緑色片岩	片端が欠損、先端部に黒色の付着物有り、写真のみ

和田岩坪遺跡 出土遺物一覧 木製品 (W)

数値の () 付は、残存値を示す。

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構番号層位	遺物種類	器種	部位	木取り	保存処理	備考 長さ・幅・厚さ	樹種	樹種同定番号
W1	図 45	図版 30	木 6	246 W14	1-2 区 II 2B8w9 南東隅	1 自然流路 第 6 層系	農具	泥除	—	柱目	○	長さ 32.5 cm・幅 26.7 cm・厚さ 0.7 cm	イチイガシ	WKY722
W2	図 45	図版 30	木 16	168	1-1 区 II 2C8b12 中央	1 自然流路 第 6 層系	農具	曲柄又鋏	—	柱目	○	長さ (35.4) cm・幅 (9.3) cm・厚さ 1.0 cm	コナラ属 アカガシ亜属	WKY894
W3	図 45	図版 30	木 11 木 15 接合	195	1-1 区 II 2C8a12 北西隅	1 自然流路 第 6 層系 6-3	農具	曲柄又鋏	—	柱目	○	長さ (31.1) cm・幅 3.0 ~ 4.0 cm・厚さ 1.2 ~ 1.4 cm	コナラ属 アカガシ亜属	WKY714 WKY916
W4	図 45	図版 30	木 14	44	1-1 区 II 2B8 x 10 北壁側溝	第 4 層系 褐色シルト	農具	又鋏	—	柱目	○	長さ (47.1) cm・幅 3.5 ~ 5.3 cm・厚さ 1.0 cm	コナラ属 アカガシ亜属	WKY719
W5	図 45	—	木 18	208	1-1 区 II 2C8b12 東端中央	1 自然流路 第 6 層系 泥の下	農具	曲柄又鋏	—	柱目	○	長さ (8.1) cm・幅 3.4 cm・厚さ 0.95 cm	イチイガシ	WKY927
W6	図 45	図版 31	木 7	344 W73	1-1 区 II 2 C 8b12 南半	1 自然流路第 6 層系下半	農具	膝柄	—	又木	○	長さ 鋏台 22.2 cm・柄 (27.5) cm・幅 3.4 ~ 4.4 cm・厚さ 2.5 ~ 2.7 cm	イヌマキ属	WKY721
W7	図 45	図版 30	木 8	82	1-1 区 II 2C8a10 東半 西半 2/4 含む	1 自然流路 第 4 層系 攪乱含む	農具	鋤	柄握り 部	追柱目	○	長さ (23.8) cm・幅 最大 (6.9) cm・厚さ横 2.0・縦 2.0 cm	イチイガ シ?	WkY-716
W8	図 45	図版 30	木 1	216 W2	1-1 区 II 2C8a10	1 自然流路 第 6 層系	農具	一木鋤	—	柱目	○	長さ (93.0) cm・幅 (11.1) cm・短径 2.3 cm ~ 長径 2.5 cm	コナラ属 アカガシ亜属	WKY860
W9	図 45	図版 31	木 13	161	1-1 区 II 2C8b14	1 自然流路 第 6 層系	農具	木錘	—	芯持ち 丸木	○	長さ 16.3 cm・短径 6.2 cm・長径 7.6 cm	タイミンタ チバナ	WKY713
W10	図 46	図版 31	木 19	258 W19	1-1 区	1 自然流路 第 6 層系	工具	膝柄 鉄斧柄	—	芯持ち 丸木	○	長さ (16.0) cm・幅 3.5 cm・厚さ 5.0 cm	サカキ	WKY737
W11	図 46	図版 31	木 17	195	1-1 区 II 2C8a12 北西隅	1 自然流路 第 6 層系 6-3	工具柄	鉄製 工具柄	—	芯持ち 丸木	○	長さ (20.9) cm・幅 4.1 cm・厚さ 3.8 cm、鉄 製の刃先を装着させ る	コナラ属 コナラ節	WKY915
W12	図 46	図版 31	木 12	321	1-1 区 II 2C8b13 北端	1 自然流路 第 6 層系 6-3	建築部材	栓	—	割り材	○	長さ 11.4 cm・幅 9.4 cm・厚さ最大 4.9 cm	コナラ属 コナラ節	WKY715
W13	図 46	図版 31	木 10	320	1-1 区 II 2C8b12	1 自然流路 第 6 層系 6-3		とがり棒	—	割り材	○	長さ (14.7) cm・幅 1.3 cm・厚さ 1.4 cm	ヒノキ	WKY718
W14	図 46	図版 31	木 9	190	1-1 区 II 2C8a14	1 自然流路 第 6 層系 下端	樹皮素材	—	—	樹皮	○	幅 6.7 cm x 7.7 cm・高 さ 1.7 cm・厚さ 0.15 cm	サクラ属 (広義)?	WKY717
W15	図 46	図版 31	木 5	233 W12	1-1 区 II 2C8a13	1 自然流路 第 6 層系	建築部材	壁板	—	板目	○	長さ (57.1) cm・幅 16.2 cm・厚さ最大 2.2 cm、合わせ板、年輪 年代可能か	ヒノキ	WKY720
W16	図 46	図版 32	木 2	222 W4	1-1 区 II 2C8ab11	1 自然流路 第 6 層系	建築部材	柱材	—	又木	○	長さ (98.3) cm・短径 10.65 cm・長径 (13.0) cm、表面焦げ	カナメモチ ビウ	WKY799
W17	図 46	図版 32	木 4	232 W11	1-1 区 II 2C8a13	1 自然流路 第 6 層系	建築部材	柱材	—	割り材	○	長さ (109.9) cm・長径 19.7 cm・短径 19 cm	—	WKY797
W18	図 47	図版 32	木 21	324 W57	1-1 区 II 2B8y13	1 自然流路 第 6 層系	土木材	杭	—	芯持ち 丸木	—	長さ (58.3) cm・径 3.1 cm	イヌマキ属	WKY786
W19	図 47	図版 32	木 22	327 W60	1-1 区 II 2B8y13	1 自然流路 第 6 層系	土木材	杭	—	芯持ち 丸木	—	長さ (48.8) cm・短径 5.3 cm・長径 6.0 cm	イヌマキ属	WKY762
W20	図 47	図版 32	木 20	338 W71	1-1 区 II 2C8a13	1 自然流路 第 6 層系	建築部材 転用杭	杭 (垂木)	—	芯持ち 丸木	○	長さ (67.5) cm・短径 5.1 cm・長径 6.0 cm、 欠き込み有り	アカマツ	WKY791
W21	図 47	図版 32	木 23	334 W67	1-1 区 II 2C8b12	1 自然流路 第 6 層系	土木材	杭	—	芯持ち 丸木	—	長さ (87.1) cm・短径 8.1 cm・長径 10.5 cm	コナラ属 アカガシ亜属	WKY789
W22	図 47	図版 32	木 24	335 W68	1-1 区 II 2C8b12	1 自然流路 第 6 層系	土木材	杭	—	芯持ち 丸木	—	長さ (121.5) cm・長径 13.7 cm・短径 12.0 cm	コナラ属 アカガシ亜属	WKY796
W23	図 47	図版 32	木 3	247 W10	1-1 区 II 2B8y11 北東隅	1 自然流路 第 6 層系	土木材	杭	—	割り材	○	長さ (109.5) cm・短径 9.8 cm・長径 11.7 cm、 建築部材転用杭	イヌマキ属	WKY798

付章

第1節 和田岩坪遺跡出土木材の樹種

能城修一（明治大学黒耀石研究センター）・佐々木由香（明治大学黒耀石研究センター）・村上由美子（京都大学総合博物館）・前田仁暉（京都大学大学院）

1. はじめに

和歌山市和田に所在する和田岩坪遺跡から出土した木製品類と自然木の樹種を報告する。和田岩坪遺跡では和田川南岸の後背湿地に形成された自然流路内から木製品類と自然木が出土した。内訳は、弥生時代終末期～古墳時代前期の木製品類 152 点、樹皮素材 1 点、自然木 57 点と、古墳時代中期～後期の木製品類 20 点、自然木 10 点、時代不明の板材 1 点、自然木 3 点である。

2. 方法

樹種同定は、木取りと加工を記録し、遺物から片刃カミソリで横断面と、接線断面、放射断面の切片を切り取り、ガムクロラール（抱水クロラール 50g、アラビアゴム粉末 40g、グリセリン 20ml、蒸留水 50ml の混合物）で封入しておこなった。各プレパラートには WKY-713～956 の番号を付して標本番号とした。標本は、明治大学黒耀石研究センターに保管されている。

3. 結果

同定不能 14 点をのぞいた総数 230 点の試料中には、針葉樹 8 分類群、広葉樹 30 分類群が見いだされた（表 1）。下記には簡単に木材組織の記載を行い、顕微鏡写真を提示する。

1. モミ属 *Abies* マツ科 写真 1: 1c（枝・幹材、WKY-891）

垂直・水平樹脂道を欠く針葉樹材。晩材の量はやや多い。放射組織は柔細胞のみからなり、細胞壁には単壁孔が目立ち、分野壁孔はごく小型のスギ型で 1 分野に 3～4 個。

2. ツガ属 *Tsuga* マツ科 写真 1: 2c（枝・幹材、WKY-938）

垂直・水平樹脂道を欠く針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急。放射組織は柔細胞と放射仮道管からなり、柔細胞の壁には単壁孔が目立ち、分野壁孔はごく小型のスギ型で 1 分野に 3～4 個。

3. アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. マツ科 写真 1: 3a, 3c（枝・幹材、WKY-887）

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。晩材の量は多い。放射組織は柔細胞と放射仮道管からなり、放射仮道管の水平壁には重鋸歯があり、分野壁孔は大型の窓状で 1 分野に 1 個。

4. イヌマキ属 *Podocarpus* マキ科 写真 1: 4a, 4c（枝・幹材、WKY-930）

垂直・水平樹脂道を欠く針葉樹材。晩材の量は少なく、年輪内に樹脂細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は中型のヒノキ型で 1 分野に 1～2 個。

5. コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科 写真 1: 5c（枝・幹材、WKY-886）

垂直・水平樹脂道を欠く針葉樹材。晩材の量は少ない。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は孔口が水平にスリット状に開き、1 分野に 1～2 個。

6. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 写真 1: 6a, 6c（枝・幹材、WKY-826）

垂直・水平樹脂道を欠く針葉樹材。晩材の量は少なく、早材の終わりから晩材に樹脂細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は中型のトウヒ型で1分野に2個。

7. スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don ヒノキ科 写真1:7a、7c (枝・幹材、WKY-723)

垂直・水平樹脂道を欠く針葉樹材。晩材の量はやや多く、早材の終わりから晩材に樹脂細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔はごく大型のスギ型で1分野に2個。

8. イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K. Koch イチイ科 写真1:8a、8c (枝・幹材、WKY-816)

垂直・水平樹脂道を欠く針葉樹材。晩材の量は少なく、年輪内に樹脂細胞が散在する。仮道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は小型のヒノキ型で1分野に1~2個。

9. クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) J. Presl クスノキ科 写真1:9a、9b (枝・幹材、WKY-907)

やや大型~小型でやや厚壁の道管が年輪内で徐々に小型化しながら疎らに散在する半環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は周囲状で、大型の油細胞をもつ。放射組織は異性で3細胞幅位、不規則に層階状に配列する。

10. クスノキ科 Lauraceae クスノキ科 写真1:10a (枝・幹材、WKY-739)

中型でやや厚壁の丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合して疎らに散在する散孔材。周囲状の木部柔組織に油細胞をもつ。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で2~3細胞幅。

11. イスノキ *Distylium racemosum* Siebold et Zucc. マンサク科 写真2:11a、11b (枝・幹材、WKY-768)

小型で丸い孤立道管が均一にやや疎らに散在する散孔材。木部柔組織は3細胞幅ほどの帯状。道管の穿孔は10段ほどの階段状。放射組織は異性で2細胞幅。

12. ハギ属ヤマハギ節 *Lespedeza* sect. *Macrolespedeza* マメ科 写真2:12a、12b (枝・幹材、WKY-874)

中型~小型で厚壁の丸い道管が単独あるいは2~3個複合して、年輪内で徐々に小型化しながらやや疎らに散在する半環孔材。木部柔組織は早材で周囲状、晩材で連合翼状。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で3細胞幅位。

13. モモ *Amygdalus persica* L. バラ科 写真2:13a、13b (枝・幹材、WKY-940)

小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2~4個ほど複合して散在する。年輪界は採取できていない。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で8細胞幅位。

14. サクラ属 (広義) *Prunus* s. l. バラ科 写真2:14a (枝・幹材、WKY-775)、15b (樹皮、WKY-717)

枝・幹材: 中型で丸い道管が単独あるいは2~3個複合して斜めに連なる傾向をみせて散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で4細胞幅位。

樹皮: 水平方向に細長くのびた紡錘形のコルク細胞が密に配列する外樹皮の組織。

15. カナメモチ・ビワ *Photinia* or *Eriobotrya* バラ科 写真2:16a、16b (枝・幹材、WKY-861)

小型で丸い孤立道管が均一にやや疎らに散在する散孔材。木部柔組織は短接線状、ときに大型の菱形結晶をもつ。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で2細胞。

16. グミ属 *Elaeagnus* グミ科 写真2:17a、17b (枝・幹材、WKY-741)

やや小型~小型で丸い孤立道管が小型化しながらやや疎らに散在する半環孔材。ときに同心円状の障害ゴム道をもつ。道管の穿孔は単一。木部柔組織は短接線状。放射組織は同性で10細胞幅位。

17. エノキ属 *Celtis* アサ科 写真2:18a, 18b (枝・幹材, WKY-852)

大型で丸い道管が単独あるいは2~3個複合して年輪の始めに数列配列し、晩材では小型の道管が集合して斜め方向の帯をなす環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で5細胞幅位。

18. イヌビワ *Ficus erecta* Thunb. クワ科 写真2:19a, 19b (枝・幹材, WKY-944)

やや小型でやや厚壁の丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合してごく疎らに散在する散孔材。木部柔組織は数細胞幅の帯状。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で5細胞幅位。

19. スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T. Yamaz. et Mashiba ブナ科 写真3:20a (枝・幹材, WKY-760)

年輪の始めに大型で丸い孤立道管が放射方向に連なって断続的に配列し、晩材では小型で薄壁の孤立道管が火炎状に配列する環孔材。木部柔組織は短接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。

20. ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科 写真3:21a (枝・幹材, WKY-788)

スダジイに似る環孔材で、しばしば集合状~複合状の大型の放射組織をもつ。

21. コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 写真3:22a (枝・幹材, WKY-871)

ごく大型で丸い孤立道管が年輪の始めに2~3列配列し、晩材では徐々に小型化した厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材。木部柔組織は晩材でいびつな短接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、小型で単列か大型で複合状。

22. コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 写真3:23a (枝・幹材, WKY-773)

コナラ属クヌギ節に似る環孔材で、晩材の道管は薄壁で火炎状に配列する。

23. イチイガシ *Quercus gilva* Blume ブナ科 写真3:24a (枝・幹材, WKY-889)

直径220 μ m以上のごく大型で丸い孤立道管が放射状に配列する放射孔材。木部柔組織はいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、小型で単列か大型で複合状。最大道管径が200~220 μ mのものはイチイガシ?とした。

24. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 写真3:25a (枝・幹材, WKY-736)

イチイガシに似る放射孔材で、道管の直径は200 μ m以下。

25. クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Eucarpinus* カバノキ科 写真3:26a (枝・幹材, WKY-769)

小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合してやや疎らに散在する散孔材。木部柔組織は接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で、小型で3細胞幅位か大型で集合状。

26. ニシキギ属 *Euonymus* ニシキギ科 写真3:27a, 27b (枝・幹材, WKY-949)

ごく小型で丸い孤立道管が密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は単列同性。

27. アカメガシワ *Mallotus japonicus* (L. f.) Müll. Arg. トウダイグサ科 写真3:28a (枝・幹材, WKY-834)

中型~小型で厚壁の丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合して徐々に小型化しながら散在する半環孔材。木部柔組織は接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は単列異性。

28. ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 写真3:29a, 29b (枝・幹材, WKY-854)

大型で丸い道管がほぼ単独で年輪の始めに1列ほど配列し、晩材では小型で丸い道管が数個ずつ放射

方向に伸びる塊をなして散在する環孔材。木部柔組織は晩材で連合翼状。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性で3細胞幅位。

29. クマノミズキ類 *Cornus cf. macrophylla* Wall. ミズキ科 写真3:30a, 30b (枝・幹材, WKY-772)

やや小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合して散在する散孔材。木部柔組織は短接線状。道管の穿孔は20段ほどの階段状。放射組織は異性で4細胞幅位。

30. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. サカキ科 写真3:31a, 31b (枝・幹材, WKY-750)

ごく小型で角張った孤立道管が密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は30~40段ほどの階段状。放射組織は単列異性。

31. ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. サカキ科 写真4:32a, 32b (枝・幹材, WKY-858)

小型で角張った孤立道管が密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は40~50段ほどの階段状。放射組織は異性で2細胞幅。

32. カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科 写真4:33a, 33b (枝・幹材, WKY-755)

中型で丸い厚壁の道管が単独あるいは2個放射方向に複合してごく疎らに散在する散孔材。木部柔組織は接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で2細胞幅、層階状に配列する。

33. タイミンタチバナ *Myrsine seguinii* H.Lév. サクラソウ科 写真4:34a, 34b (枝・幹材, WKY-747)

ごく小型で丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合して散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で10数細胞幅となり、高さは4mmに達する。

34. ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 写真4:35a, 35b (枝・幹材, WKY-900)

小型~ごく小型の孤立道管が年輪内でやや小型化しながらやや密に散在する散孔材。道管の穿孔は10段ほどの階段状。放射組織は異性で2細胞幅。

35. シヤシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. ツツジ科 写真4:36a, 36b (枝・幹材, WKY-793)

小型の孤立道管がやや密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一、あるいは10段ほどの階段状。放射組織は異性で7細胞幅位。

36. イボタノキ属 *Ligustrum* モクセイ科 写真4:37a, 37b (枝・幹材, WKY-744)

年輪の始めにやや小型で丸い孤立道管が断続的に1列に配列し、晩材では小型の孤立道管が単独あるいは放射方向に2個ほど複合してやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で2細胞幅。

37. ムラサキシキブ属 *Callicarpa* シソ科 写真4:38a, 38b (枝・幹材, WKY-849)

ごく小型で丸い厚壁の道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で3細胞幅位。

38. モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 写真4:39a, 39b (枝・幹材, WKY-771)

ごく小型で丸い道管が単独あるいは2~3個複合して疎らに散在する散孔材。木部柔組織は短接線状。道管の穿孔は10~20段ほどの階段状。放射組織は異性で4細胞幅位。

4. 考察

和田岩坪遺跡から出土した弥生時代終末期~古墳時代前期の木製品類の樹種を見ると、針葉樹が7分類群、広葉樹が25分類群と多様な樹種が使われていた(表1)。この時期の鋤鋤や杭に多用されているの

はイチイガシを含むコナラ属アカガシ亜属であった。このほか、イヌマキ属が鋤の柄と杭、加工材に、ヒノキが板材や加工材に、アカマツが杭と板材、加工材に、スギが杭と板材に、スダジイとツブラジイ、クヌギ節、コナラ節が杭と加工材に多く使われている。杭列AとBでは、杭列Aにスダジイやツブラジイ、クヌギ節、コナラ節、アカガシ亜属といったブナ科の樹種とヒノキが多く、杭列Bにはイヌマキ属とアカマツといった針葉樹とアカガシ亜属やシャシャンボといった広葉樹が多く、樹種選択がやや異なる。個別の製品群で見ると、針葉樹は割りやすいため板材に多用されていた。柄にはイヌマキ属やサカキ、コナラ節が選択されており、イチイガシを含むアカガシ亜属に限定される鋤と比べて樹種選択が柔軟であった。建築材は、柱にカナメモチあるいはビワ、壁板にヒノキ、栓にコナラ節を使っているように、材質や加工特性を考慮して選択していた。直径をみると、ヒノキ科の柱材が直径19cmでもっとも太く、杭は直径が4～13cmのものが多く平均5.2cmであった。鋤は破片が多く、放射径を計測できなかった。

古墳時代中期～後期では、イヌマキ属とアカマツが加工材や割材およびヒノキとスギの板材といった針葉樹が木製品類の主体を占め、広葉樹の利用は少なかった。

和歌山県西牟婁郡さみ町の立野遺跡の弥生時代前期を主体とする木製品類と比較すると、立野遺跡では木製品類445点と自然木239点中に針葉樹7分類群と広葉樹34分類群、蔓植物1分類群、双子葉草本1分類群、竹笹類1分類群が見いだされたのに対し（能城ほか2013）、和田岩坪遺跡では、総数230点中に針葉樹8分類群、広葉樹30分類群が見いだされていて、当遺跡の周辺には樹木相の豊かな照葉樹林があったと想定される。ただし、アカマツがやや多く、ハギ属ヤマハギ節、エノキ属、アカメガシワが出土しているため、当遺跡の近傍には二次林もあったと考えられる。またスダジイとツブラジイ、イスノキの存在は海岸に近い当遺跡の立地を反映している。

より南方に位置する立野遺跡では、クスノキやイスノキ、リンボク、ユズリハ属といった照葉樹林の主要な要素が見いだされ、クスノキとイスノキが多用されていた。一方、立野遺跡ではまったく見いだされなかったクヌギ節やコナラ節が和田岩坪遺跡では杭に多用されていた。さらに和田岩坪遺跡では、コウヤマキといったやや内陸寄りに生育する樹種が見いだされた。こうした樹種組成の違いは、立地の違いを反映していると考えられる。立野遺跡の樹種選択を特徴づけていたクスノキとイスノキの利用が和田岩坪遺跡で少ないのは、いずれも西日本の海岸沿いに生育する樹種のため、やや北方の和田岩坪遺跡周辺では資源量が少なかったと考えられる。鋤の樹種選択は対照的で、立野遺跡ではイスノキおよびクスノキ製の板目の鋤や泥除が多かったのに対し、和田岩坪遺跡では、近畿地方の他の遺跡のようにイチイガシを含むアカガシ亜属製の柁目の鋤と泥除のみが出土した。

【引用文献】

能城修一・佐々木由香・村上由美子・小林和貴 2013 「立野遺跡出土木材の樹種同定」『立野遺跡—近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書』：114-125. 公益財団法人和歌山県文化財センター

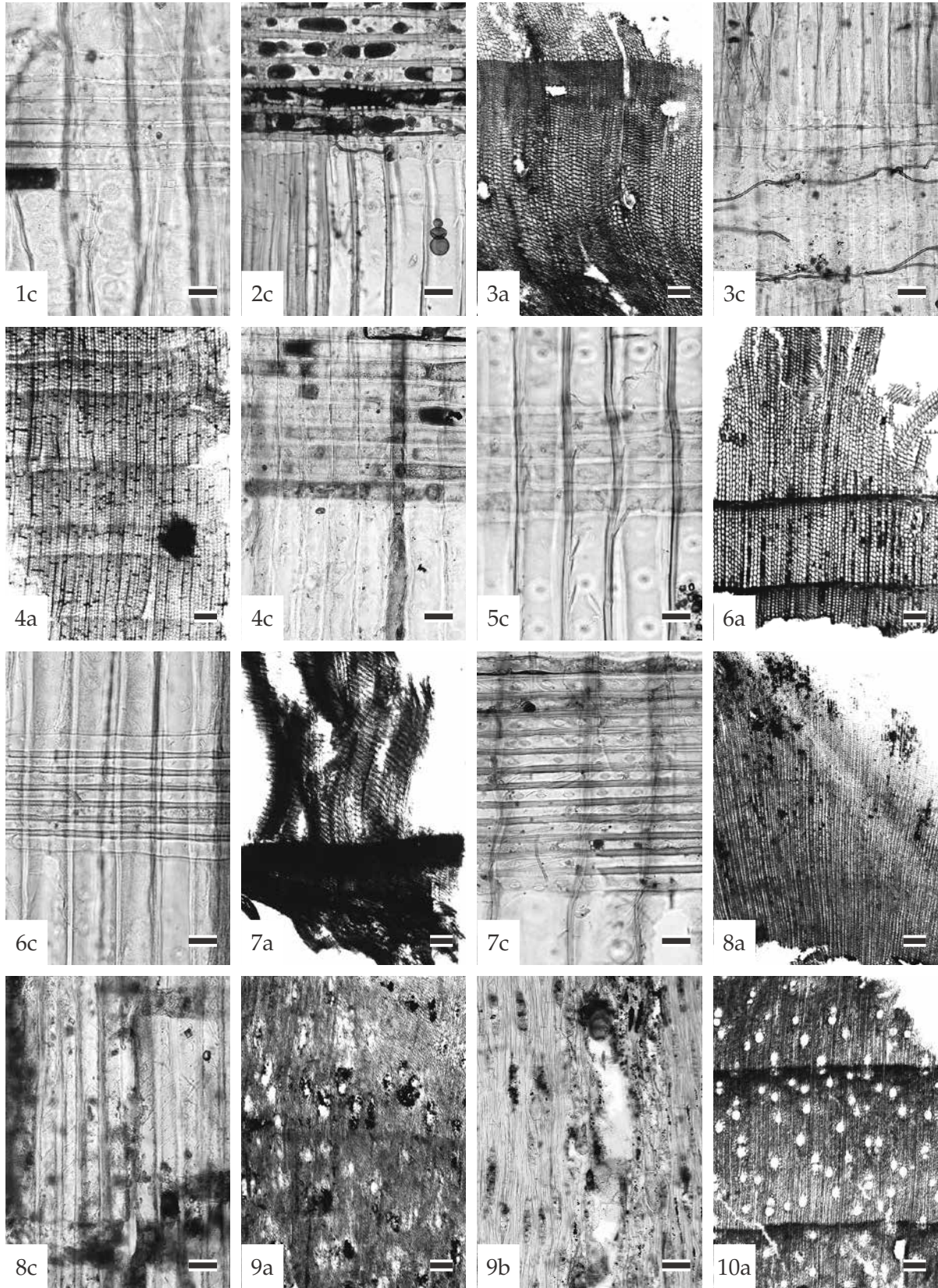


写真 1. 和田岩坪遺跡出土木材の顕微鏡写真 (1)

1c: モミ属 (枝・幹材、WKY-891)、2c: ツガ属 (枝・幹材、WKY-938)、3a, 3c: アカマツ (枝・幹材、WKY-887)、4a, 4c: イヌマキ属 (枝・幹材、WKY-930)、5c: コウヤマキ (枝・幹材、WKY-886)、6a, 6c: ヒノキ (枝・幹材、WKY-826)、7a, 7c: スギ (枝・幹材、WKY-723)、8a, 8c: イヌガヤ (枝・幹材、WKY-816)、9a, 9b: クスノキ (枝・幹材、WKY-907)、10a: クスノキ科 (枝・幹材、WKY-739). a: 横断面 (スケール= 200 μm)、b: 接線断面 (スケール= 100 μm)、c: 放射断面 (スケール= 25 μm).

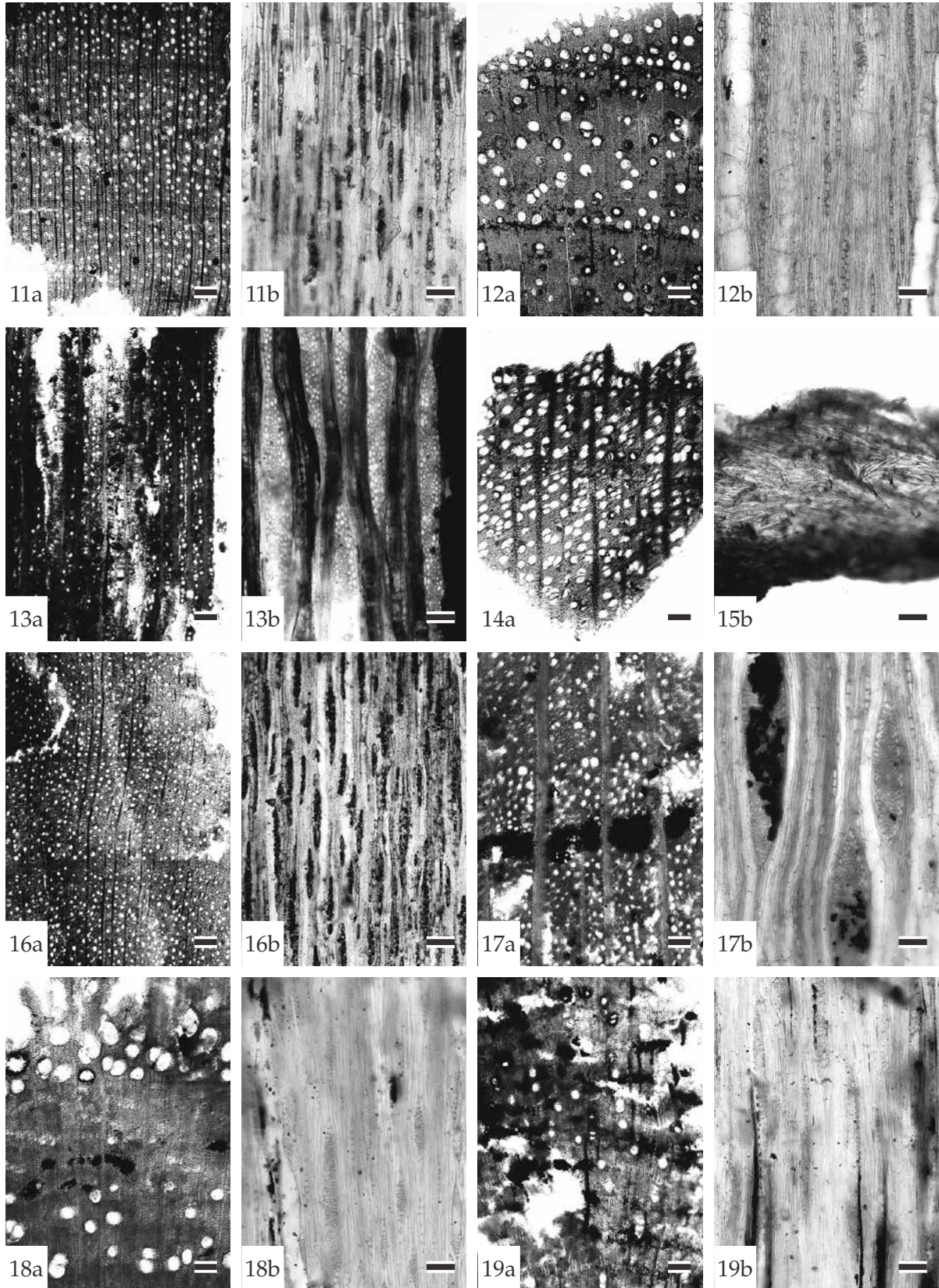


写真2. 和田岩坪遺跡出土木材の顕微鏡写真(2)

11a, 11b: イスノキ (枝・幹材、WKY-768)、12a, 12b: ハギ属ヤマハギ節 (枝・幹材、WKY-874)、13a, 13b: モモ (枝・幹材、WKY-940)、14a: サクラ属 (広義) (枝・幹材、WKY-775)、15b: サクラ属 (広義) (樹皮、WKY-717)、16a, 16b: カナメモチ・ビワ (枝・幹材、WKY-861)、17a, 17b: グミ属 (枝・幹材、WKY-741)、18a, 18b: エノキ属 (枝・幹材、WKY-852)、19a, 19b: イヌビワ (枝・幹材、WKY-944)。a: 横断面 (スケール= 200 μ m)、b: 接線断面 (スケール= 100 μ m)。

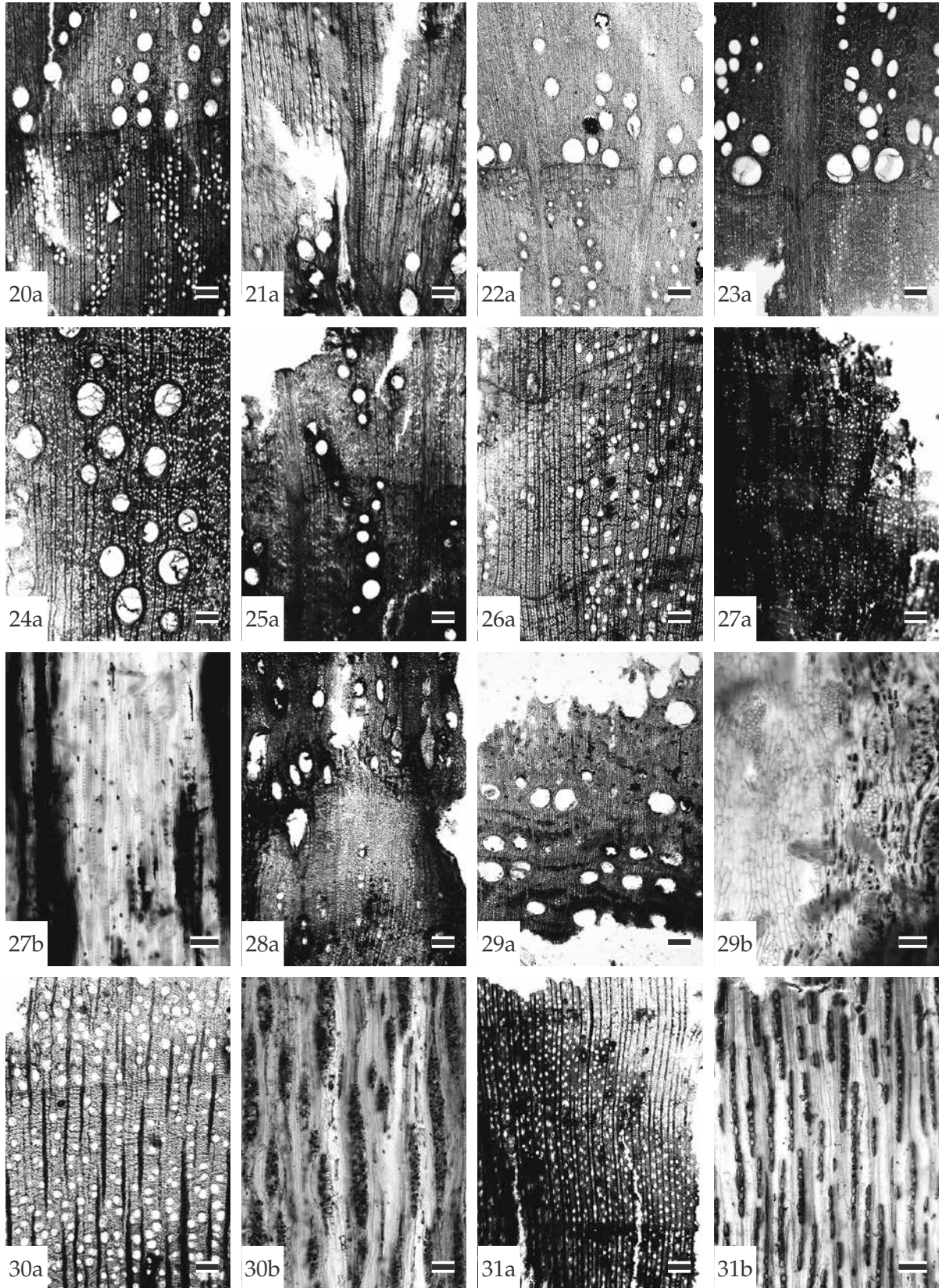


写真3. 和田岩坪遺跡出土木材の顕微鏡写真(3)

20a:スダジイ(枝・幹材、WKY-760)、21a:ツブラジイ(枝・幹材、WKY-788)、22a:コナラ属クヌギ節(枝・幹材、WKY-871)、23a:コナラ属コナラ節(枝・幹材、WKY-773)、24a:イチイガシ(枝・幹材、WKY-889)、25a:コナラ属アカガシ亜属(枝・幹材、WKY-736)、26a:クマシデ属イヌシデ節(枝・幹材、WKY-769)、27a, 27b:ニシキギ属(枝・幹材、WKY-949)、28a:アカメガシワ(枝・幹材、WKY-834)、29a, 29b:ムクロジ(枝・幹材、WKY-854)、30a, 30b:クマノミズキ類(枝・幹材、WKY-772)、31a, 31b:サカキ(枝・幹材、WKY-750)。a:横断面(スケール=200 μ m)、b:接線断面(スケール=100 μ m)。

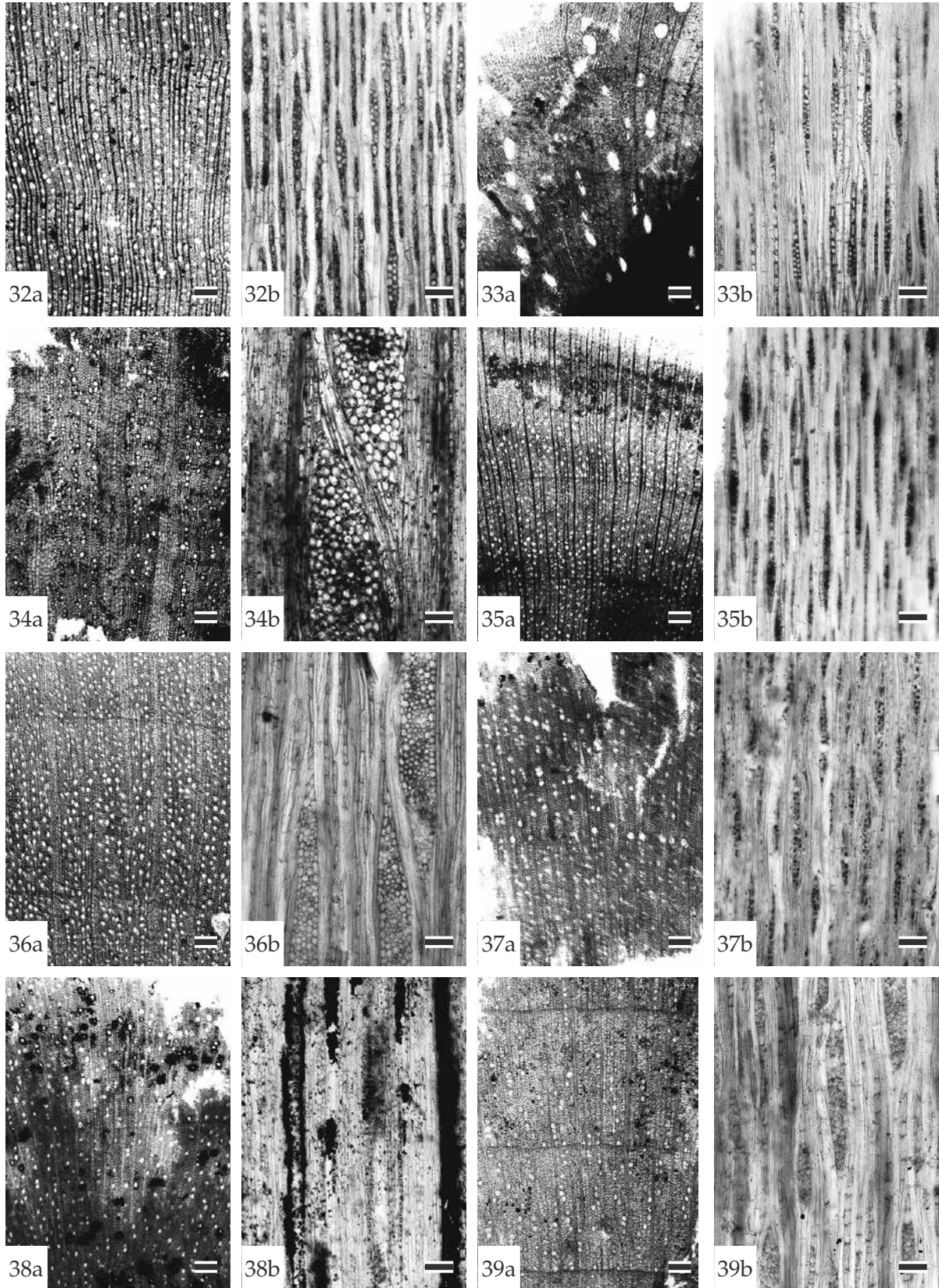


写真4. 和田岩坪遺跡出土木材の顕微鏡写真(4)

32a, 32b: ヒサカキ (枝・幹材、WKY-858)、33a, 33b: カキノキ属 (枝・幹材、WKY-755)、34a, 34b: タイミンタチバナ (枝・幹材、WKY-747)、35a, 35b: ツバキ属 (枝・幹材、WKY-900)、36a, 36b: シヤシャンボ (枝・幹材、WKY-793)、37a, 37b: イボタノキ属 (枝・幹材、WKY-744)、38a, 38b: ムラサキシキブ属 (枝・幹材、WKY-849)、39a, 39b: モチノキ属 (枝・幹材、WKY-771). a: 横断面 (スケール= 200 μ m)、b: 接線断面 (スケール= 100 μ m).

第2節 和田岩坪遺跡における大型種実同定

金原美奈子（一般社団法人 文化財科学研究センター）

1. はじめに

和田岩坪遺跡より1-1区及び2-1区の自然流路から出土した種実類について報告する。出土時期は、弥生時代終末期（庄内式併行期）から古墳時代前期（布留式併行期）である。植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2. 試料と方法

試料は1-1区及び2-1区の自然流路（42地点）より出土した大型種実類である。全て水洗選別済み試料である。

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

3. 結果

(1) 分類群

樹木11、草本5の計16分類群が同定される。学名、和名および粒数を表1に示し、モモの計測値を表2に示す。主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

[樹木]

マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* 毬果 マツ科

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平五角形であり、その中央にはへそがある。
ヤマモモ *Myrica rubra* S. et Z. 核 ヤマモモ科

茶褐色で楕円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は扁平である。
オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核（完形・破片）クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐり、表面全体に不規則な隆起がある。

コナラ属 *Quercus* 果皮（破片）ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、属レベルの同定までである。

クスノキ *Cinnamomum camphora* S. 種子（破片）クスノキ科

黒褐色で球形を呈す。一条の稜線が走りその中央が突起する。

クマノミズキ *Cornus brachypoda* C. A. Mey. 核 ミズキ科

淡褐色で球形を呈す。表面に一本の広い溝がめぐり、数本の細い縦筋が走る。

モモ *Prunus persica* Batsch 核（完形・半形・破片）バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

イヌザンショウ *Zanthoxylum schinifolium* S. et Z. 種子 ミカン科

種子は黒褐色で楕円状球形を呈す。側面に長く深いへそがある。表面にやや大きな網目模様がある。

サンショウ属 *Zanthoxylum* 種子 (破片) ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面にへそがある。表面には網目模様がある。この分類群はへそが欠落し破片のため、属レベルの同定までである。

ブドウ属 *Vitis* 種子 ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

ホルトノキ属 *Elaeocarpus* 核 ホルトノキ科

黄褐色で長卵形を呈す。表面には不明瞭で微細な凸凹がある。

[草本]

イネ *Oryza sativa* L. 炭化果実 (完形・破片) イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。また、数個体には表面に穎の残存 (微細な顆粒状突起) が認められる。

アサ *Cannabis sativa* L. 種子 クワ科

茶褐色で広卵形を呈す。一端には円形のへそ部がある。

ササゲ属 *Vigna* 炭化種子 マメ科

炭化しているため黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状の研究では識別は困難である。

ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 (破片) ウリ科

淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈し、上端は「ハ」字状にくぼむ。藤下によると小粒種子 (雑草メロン型)、中粒種子 (マクワウリ・シロウリ型)、大粒種子 (モモルディカ型) がある。

ヒョウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 種子 (破片) ウリ科

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。

不明種実 Unknown seeds 種子

種実と考えられるが、表面模様、特徴などが観察されず、不明種実までの同定に留める。

4. 出土種実類から推定される植生と農耕

和田岩坪遺跡において同定された大型種実類は樹木のマツ属複維管束亜属、ヤマモモ、オニグルミ、コナラ属、クスノキ、モモ、クマノミズキ、イヌザンショウ、サンショウ属、ブドウ属、ホルトノキ属、草本のイネ、アサ、ササゲ属、ウリ類、ヒョウタン類である。

樹木では、常緑針葉樹のマツ属複維管束亜属は広く分布し二次林種であり、ヤマモモ、クスノキは照葉樹林の構成要素で西南日本の海岸沿いに多い樹木である。オニグルミは谷沿いや谷間などやや湿潤なところに生育し、ブドウ属は落葉蔓性植物で林縁に多い。クマノミズキ、イヌザンショウ、サンショウ属は人為環境やその縁辺に多い。モモは多量に同定されており、食用となる。稲作と共に伝来した栽培植物であり、極めて多くの遺跡から出土し、弥生時代から古墳時代にかけて多くなる傾向にある。計測値の平均値は長さ 23.11 mm、幅 19.67 mm、厚さ 15.08 mm、最大値は長さ 26.45 mm、幅 23.85 mm、厚さ 19.05 mm、最小値は長さ 18.92 mm、幅 15.36 mm、厚さ 11.88 mmであった。ヤマモモとオニグルミは食用となるが、野

生植物からの採取と考えられる。いずれも核となる果実の最内層の内果皮が残存しやすく出土する。モモ核については、大きさを図示したが、長さは26.45 mmまでで中型までの大きさで、幅と厚さのある丸いタイプのものである。金原（1996）に示されるA類にあたり、5世紀の古墳時代中期から出現する厚みがやや薄く大型で皺の稜線が尖ったり小孔を有するB類やC類は混在しない。草本はいずれも栽培植物であり、イネおよび畑作物であるアサ、ササゲ属、ウリ類、ヒョウタン類が出土している。また、ウリ類は、完形ではないものの、長さは6.67 mmで、藤下（1982等）が示す大きさの中型のマクワ・シロウリ型（6.1～8.0 mm）にあたる。なお、食用となる植物を除けば、コナラ属、クスノキ、クマノミズキ、イヌザンショウ、サンショウ属の樹木が分布し、沿岸に生育する樹木と二次林傾向の樹木が分布していた。

5. まとめ

和田岩坪遺跡の大型種実類の同定を行った結果、樹木のマツ属複維管束亜属、ヤマモモ、オニグルミ、コナラ属、クスノキ、モモ、クマノミズキ、イヌザンショウ、サンショウ属、ブドウ属、ホルトノキ属、草本のイネ、アサ、ササゲ属、ウリ類、ヒョウタン類が同定された。

食用となるヤマモモ、モモ、オニグルミ、ブドウ属、イネ、アサ、ササゲ属、ウリ類、ヒョウタン類が検出され、そのうちモモ、イネ、アサ、ササゲ属、ウリ類、ヒョウタン類は栽培植物であり、周辺で水田および畑が営まれていたとみなされる。なお、モモ核は中型の大きさのもので古墳時代に出土する幅と厚みのある丸いタイプ（A類）であり、ウリ類は中型の大きさ（マクワ・シロウリ型）であった。また、遺跡周辺には沿岸および二次林傾向のマツ属複維管束亜属、コナラ属、クスノキ、クマノミズキ、イヌザンショウ、サンショウ属が分布していた。

【参考文献】

- 藤下典之 1982 「菜畑遺跡から出土したメロン仲間 *Cucumis melo* L. とヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl. の種子について」『唐津市文化財調査報告第5集菜畑遺跡』唐津市教育委員会 p. 455-463.
- 笠原安夫 1985 『日本雑草図説』養賢堂, 494p.
- 笠原安夫 1988 「作物および田畑雑草種類」『弥生文化の研究』第2巻生業 雄山閣 出版 p. 131-139.
- 南木睦彦 1991 「栽培植物」『古墳時代の研究』第4巻生産と流通 I 雄山閣出版株式会社 p. 165-174.
- 南木睦彦 1993 「葉・果実・種子」『日本第四紀学会編』第四紀試料分析法 東京大学出版会 p. 276-283.
- 藤下典之 1992 「出土種子からみた古代日本のメロンの仲間、その種類、渡来、伝搬、利用について」『月刊考古学ジャーナル』No. 354 ニュー・サイエンス社 p. 7-13.
- 金原正明 1996 「古代モモの形態と品種」『月刊考古学ジャーナル』No. 409 ニューサイエンス社 p. 15-19.

表1 和田岩坪遺跡における種実同定結果

出土遺物 登録番号	地区	取上区画	遺構番号 層位	分類群		部位	個数	備考	
				学名	和名				
159	1-1区	II2C8b12	1自然流路	第6層系堆積層	<i>Elaeocarpus</i>	ホルトノキ属	核	1	
161	1-1区	II2C8b14	1自然流路	第6層系堆積層	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	噛み痕有1
162	1-1区	II2C8a12 南半	1自然流路	第6層系堆積層	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (半形)	1 1	
168	1-1区	II2C8b12 中央	1自然流路	第6層系堆積層	<i>Myrica rubra</i> S. et Z.	ヤマモモ	核	1	
171	1-1区	II2C8a11 北端	1自然流路	第6層系堆積層下端、第7層系堆積層上端6-3?	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (半形) (破片)	1 2 1	
173	1-1区	II2C8a11 北端	1自然流路	第6層系堆積層下端、第7層系堆積層上端6-3?	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (破片)	1 1	噛み痕有1
185	1-1区	II2C8a12 北端	1自然流路	第6層系堆積層下端6-3	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (半形)	1	
186	1-1区	II2C8b12	1自然流路	第6層系堆積層下端6-3	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	2	噛み痕有1
191	1-1区	II2C8b12 北東端	1自然流路	第6層系堆積層下端	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (破片)	1	
192	1-1区	II2C8b12 北東端	1自然流路	第6層系堆積層下端6-3	<i>Myrica rubra</i> S. et Z. <i>Prunus persica</i> Batsch	ヤマモモ モモ	核 核	1 1	
193	1-1区	II2C8b12 北東端	1自然流路	第6層系堆積層下端6-3	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (破片)	3 1	噛み痕有3
194	1-1区	II2C8a12 北西隅	1自然流路	第6層系堆積層下端	<i>Myrica rubra</i> S. et Z. <i>Vigna</i>	ヤマモモ ササゲ属	核 炭化種子	1 1	ヘソ有
195	1-1区	II2C8a12 北西隅	1自然流路	第6層系堆積層下端6-3	<i>Myrica rubra</i> S. et Z. <i>Quercus</i> <i>Oryza sativa</i> L.	ヤマモモ コナラ属 イネ	核 (破片) 果皮(破片) ヘソ 炭化果実 (破片)	7 2 1 1 3 2	顎付1
196	1-1区	II2C8a11 北西隅	1自然流路	第6層系堆積層下位	<i>Myrica rubra</i> S. et Z. <i>Quercus</i> <i>Prunus persica</i> Batsch <i>Zanthoxylum schinifolium</i> S. et Z. <i>Zanthoxylum</i>	ヤマモモ コナラ属 モモ イヌザンショウ サンショウ属	核 果皮(破片) 核 (破片) 種子 種子(破片)	1 1 1 1 1	
197	1-1区	II2C8a11 西側中央	1自然流路	第6層系堆積層下端	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (半形)	1 1	噛み痕有1
198	1-1区	II2C8a11 北西半	1自然流路	第6層系堆積層6-3	<i>Myrica rubra</i> S. et Z.	ヤマモモ	核	2	
200	1-1区	II2C8a11 中央	1自然流路	第6層系堆積層下端	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	
202	1-1区	II2C8a11	1自然流路	第6層系堆積層下端、東半側細砂質	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	
204	1-1区	II2C8a11 南東端	1自然流路	第6層系堆積層下端 細砂質	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	部果	1	
208	1-1区	II2C8b12 東端中央	1自然流路	第6層系堆積層	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	
214	1-1区	II2C8a10	1自然流路	第6層系堆積層+第6層系堆積層下端	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (半形)	1 1	
220	1-1区	II2C8b12	1自然流路	第6層系堆積層+第6層系堆積層下端	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	2	
237	1-1区	II2C8b12	1自然流路	第6層系堆積層6-3	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (破片)	1 1	噛み痕有1
238	1-1区	II2C8b12	1自然流路	第6層系堆積層6-3	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	噛み痕有1
239	1-1区	II2C8b12	1自然流路	第6層系堆積層6-3	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	
261	1-1区	II2C8a11 南西隅	1自然流路	第6層系堆積層+第6層系堆積層6-3	<i>Myrica rubra</i> S. et Z.	ヤマモモ	核	1	
275	1-1区	II2C8b12	1自然流路	第6層系堆積層下半・下端+第6層系堆積層6-3	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	2	
277	1-1区	II2C8b12	1自然流路	第6層系堆積層6-3	<i>Myrica rubra</i> S. et Z. <i>Cinnamomum camphora</i> S. <i>Prunus persica</i> Batsch	ヤマモモ クスノキ モモ	核 種子(破片) 核 (半形)	1 1 1	
278	1-1区	II2C8a10 北東半	1自然流路	第6層系堆積層下端	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (破片)	1	
279	1-1区	II2C8a10 北東半	1自然流路	第6層系堆積層6-3	<i>Myrica rubra</i> S. et Z. <i>Prunus persica</i> Batsch <i>Cornus brachypoda</i> C.A. Mey. <i>Oryza sativa</i> L. <i>Cannabis sativa</i> L. <i>Cucumis melo</i> L.	ヤマモモ モモ クマノミズキ イネ アサ ウリ類	核 (破片) 核 炭化果実 種子 種子(破片)	2 1 1 1 1 1	顎付1
280	1-1区	II2C8a10 南半中央	1自然流路	第6層系堆積層下端	<i>Myrica rubra</i> S. et Z.	ヤマモモ	核	1	
281	1-1区	II2C8a10 南半中央	1自然流路	第6層系堆積層6-3	<i>Myrica rubra</i> S. et Z.	ヤマモモ	核 (半形)	1	
284	1-1区	II2C8a10 中央	1自然流路	第6層系堆積層6-3	<i>Myrica rubra</i> S. et Z. <i>Prunus persica</i> Batsch Unknown seeds	ヤマモモ モモ 不明種実	核 核 (破片) 破片	2 1 1	
287	1-1区	II2C8a11 南西半	1自然流路	第6層系堆積層下端	<i>Myrica rubra</i> S. et Z.	ヤマモモ	核	2	芽1
288	1-1区	II2C8a11 南西半	1自然流路	第6層系堆積層6-3	<i>Myrica rubra</i> S. et Z. <i>Prunus persica</i> Batsch	ヤマモモ モモ	核 核	5 3	
292	1-1区	II2C8a12	1自然流路	第6層系堆積層下端	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核	1	
320	1-1区	II2C8b12	1自然流路	第6層系堆積層6-3	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (半形)	1	
321	1-1区	II2C8b13 北端	1自然流路	第6層系堆積層6-3	<i>Myrica rubra</i> S. et Z. <i>Quercus</i> <i>Prunus persica</i> Batsch <i>Vitis</i> <i>Oryza sativa</i> L. <i>Legenaria siceraria</i> Standl.	ヤマモモ コナラ属 モモ ブドウ属 イネ ヒョウタン類	核 (半形) 果皮(破片) 核 (半形) (破片) 種子 炭化果実 (破片) 種子 (破片)	2 1 1 1 1 2 1 1 4	炭化
343	1-1区	II2C8a12	1自然流路	1自然流路の下位第7層系堆積層より下の粗砂堆積層II、2自然流路	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (破片)	1	
493	2-1区	II2B8w14・x13		基盤層断ち割り	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr <i>Prunus persica</i> Batsch	オニグルミ モモ	核 (破片) 核	1 1 2	噛み痕有1

表2 和田岩坪遺跡におけるモモ核の計測値

出土遺物 登録番号	部位	個数	備考	モモ		
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
161	核	1	噛み痕有1	22.96	—	13.51
162	核 (半形)	1		24.15	23.03	17.15
		1		19.44	16.01	—
171	核 (半形)	1		23.46	20.37	15.54
		2		26.28	23.19	—
173	核	1	噛み痕有1	20.54	—	13.18
185	核(半形)	1		23.47	22.00	—
186	核	2	噛み痕有1	25.38	20.12	15.35
				23.51	—	17.15
192	核	1		23.48	18.19	14.83
193	核	3	噛み痕有3	—	20.96	15.55
				24.52	—	14.70
				20.17	—	14.24
197	核 (半形)	1	噛み痕有1	22.96	—	15.51
		1		19.52	17.11	—
200	核	1		24.85	20.70	16.00
202	核	1		20.72	17.96	14.27
208	核	1		20.74	17.65	14.48
214	核 (半形)	1		23.86	19.07	14.09
		1		20.69	17.49	—
220	核	2		25.09	23.24	17.38
				26.21	19.22	13.82
237	核 (破片)	1	噛み痕有1	—	15.36	11.88
		1		25.83	—	—
238	核	1	噛み痕有1	22.73	—	13.18
239	核	1		21.39	18.01	13.82
275	核	2		25.41	23.85	18.90
				21.07	17.31	13.55
277	核(半形)	1		18.92	16.04	—
279	核	2		24.93	21.00	15.68
				25.33	20.71	14.74
288	核	3		26.45	20.55	14.08
				23.08	21.29	16.56
				21.67	21.00	14.71
292	核	1		20.72	17.61	13.65
320	核(半形)	1		24.67	19.15	—
321	核 (半形)	1		25.13	20.37	16.02
		1		21.57	18.20	—
493	核	2	噛み痕有1	25.85	23.10	19.05
				21.55	—	15.06

モモ	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
平均値	23.11	19.67	15.08
最大値	26.45	23.85	19.05
最小値	18.92	15.36	11.88

出土遺物 登録番号	部位	個数	備考	オニグルミ		
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
493	核	1		29.63	24.93	24.06

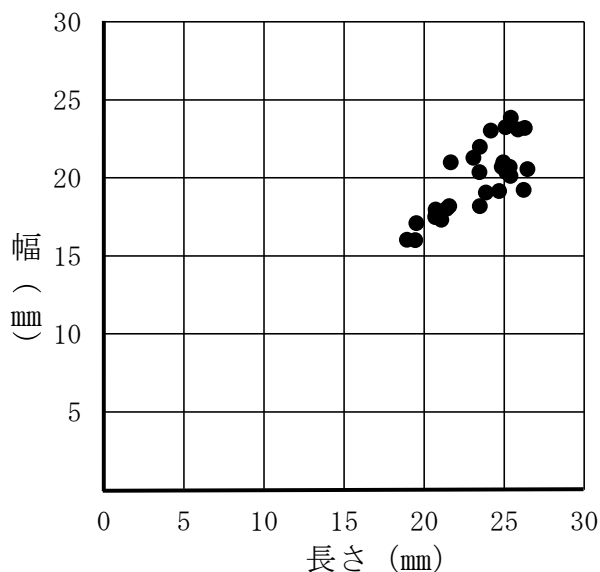


図1 モモ核の計測値分布

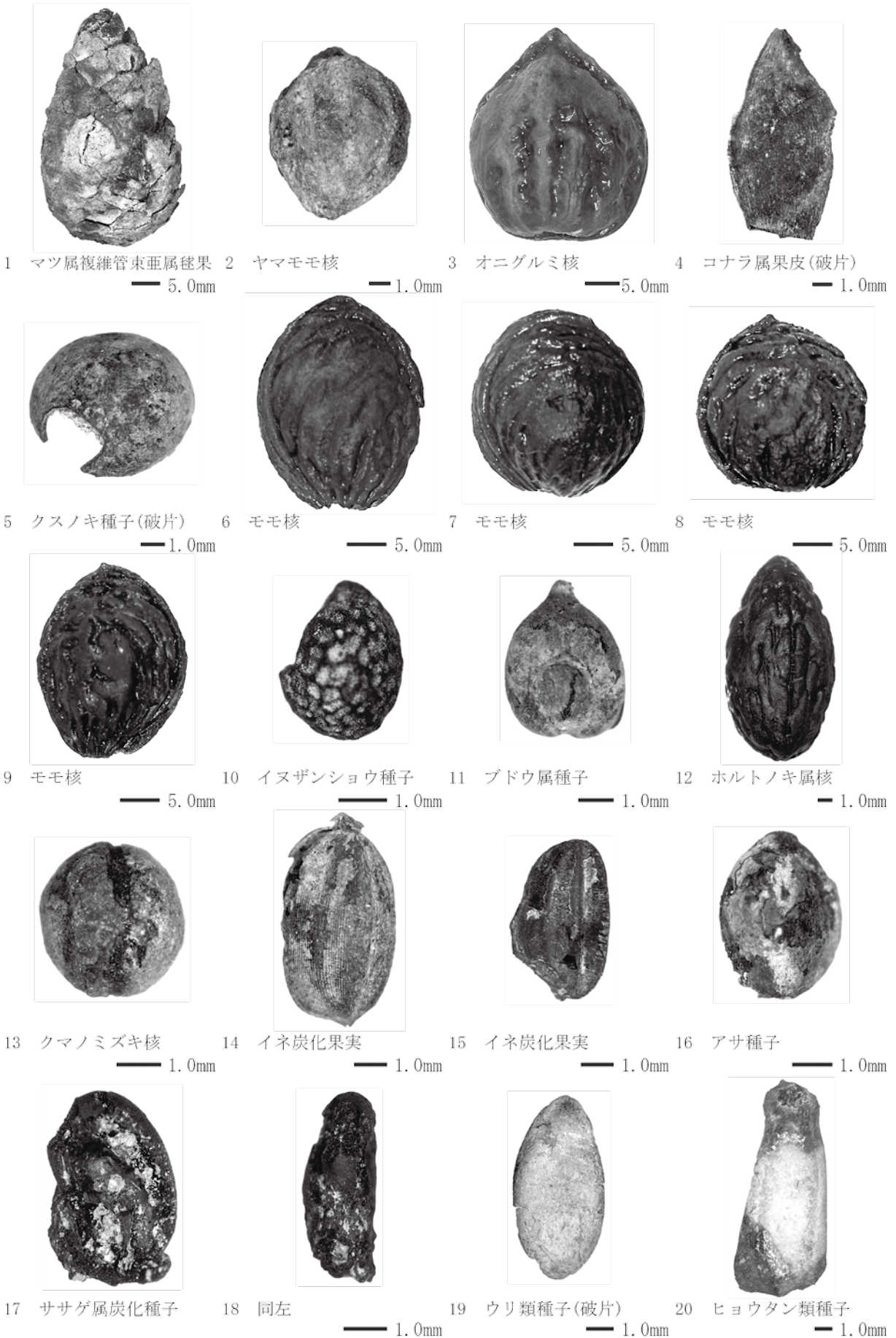


写真1 和田岩坪遺跡の種実



1 調査地遠景（北から）



2 1区 調査前の現況（北北東から）



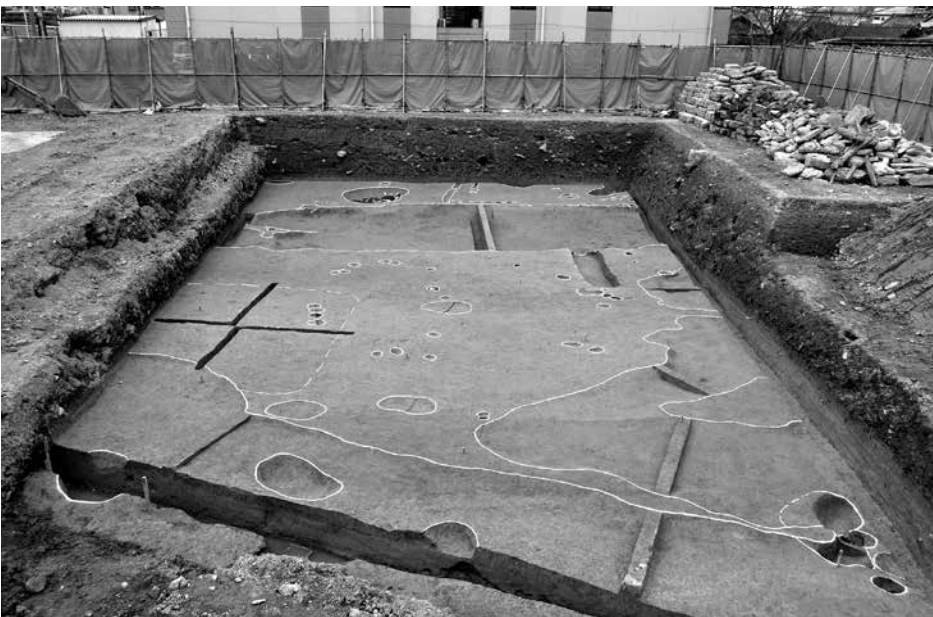
3 2区 調査前の現況（北北東から）



1 2-1区 調査遺構全景（北北東寄り北上空から）



2 2-1区 調査遺構全景（東北東から）



3 2-1区 調査遺構全景（西北西から）



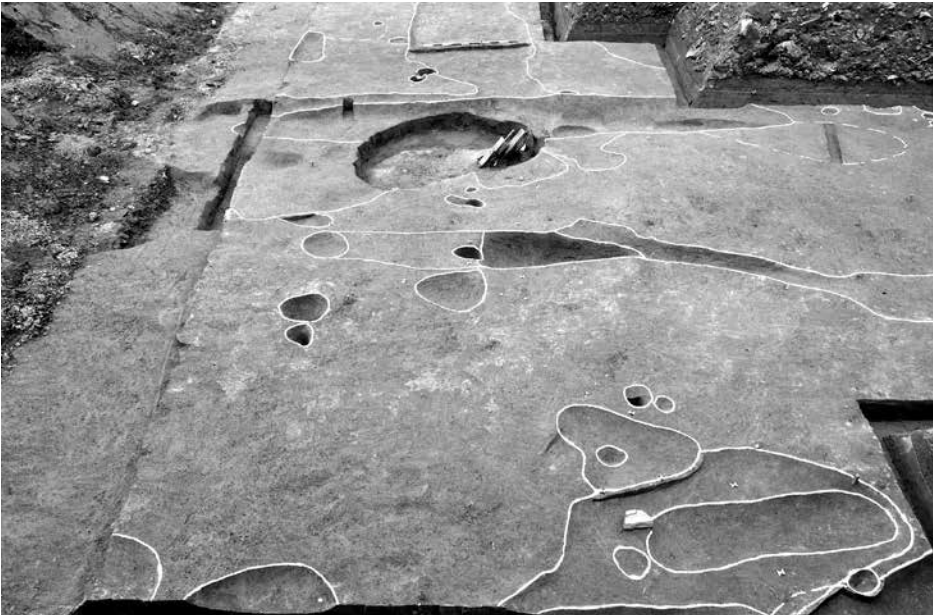
1 2-3区 調査遺構全景（真上上空から）上側が北



2 2-3区南半側 調査遺構全景（西北西寄り西から）



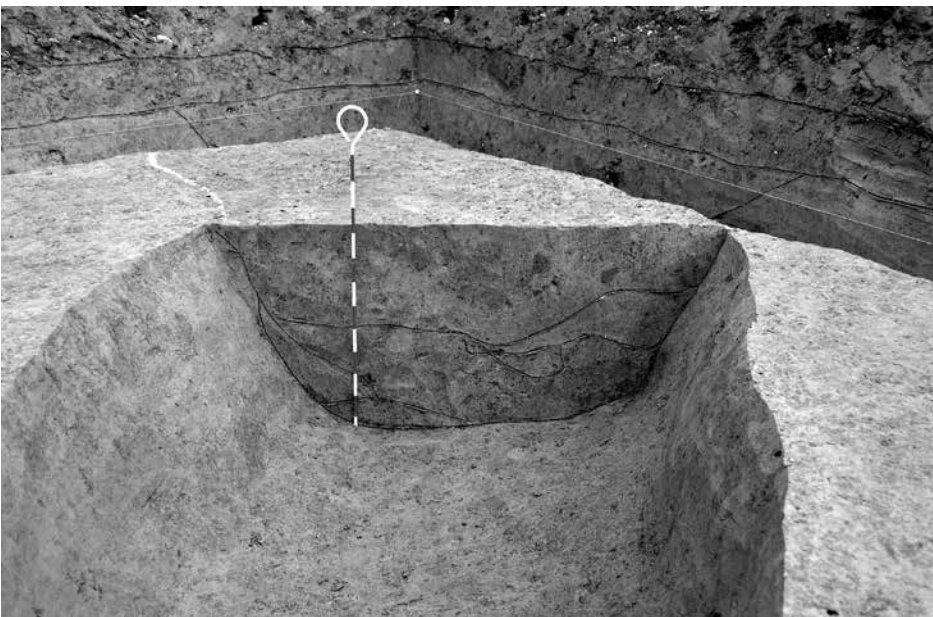
3 2-3区北半側 調査遺構全景（北北東寄り北から）



1 2-3区南半東側 調査遺構全景(東南東から)



2 2-1区 B8s16 12土坑完掘状況と調査区東・南壁断面土層(北西から)



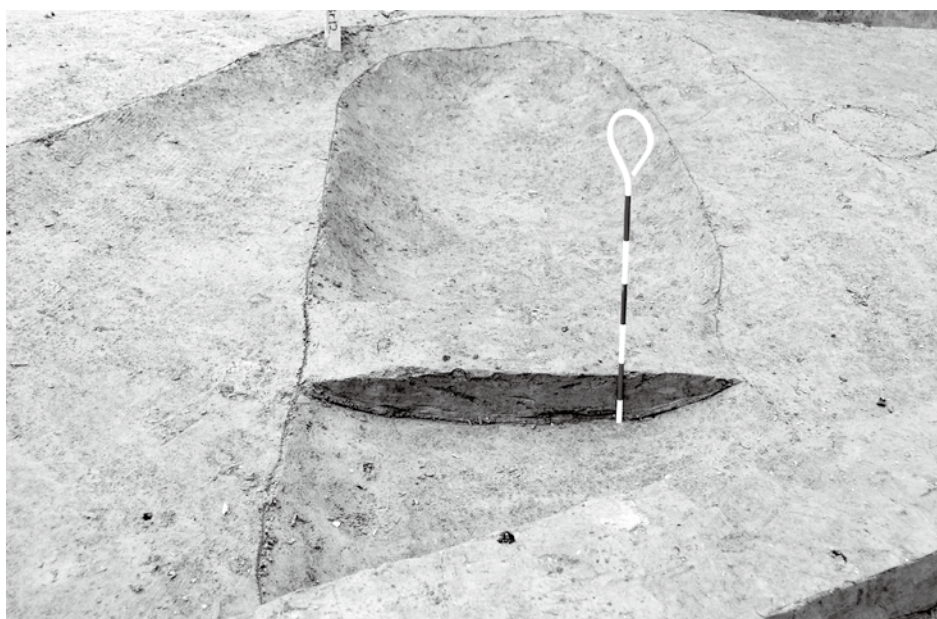
3 2-1区 B8s16 12土坑北東-南西断面土層(北西から)



1 2-3区 B8q・r12 102・109 土坑完掘状況 (東南東寄り東から)



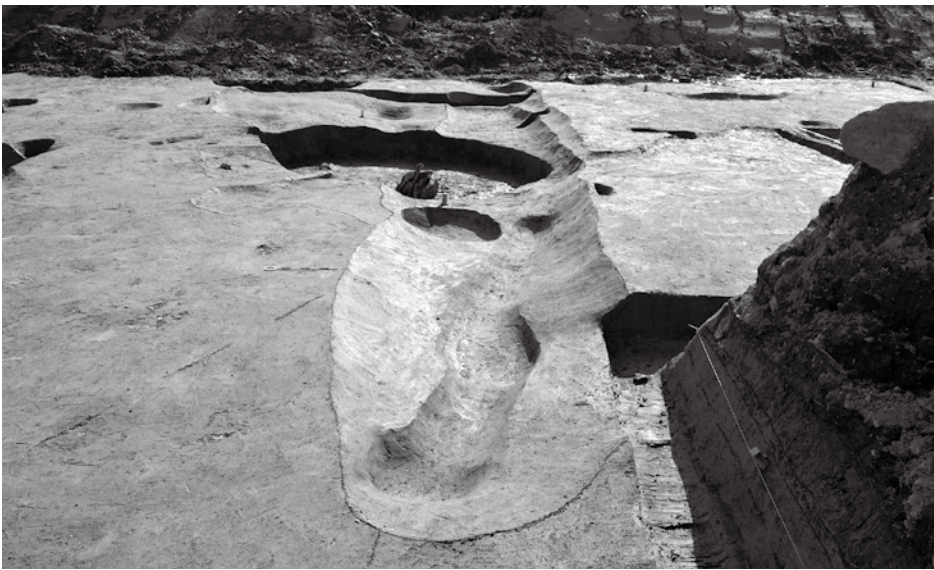
2 2-3区 B8q・r12 109 土坑に伴う標石か (東南東寄り東から)



3 2-3区 B8q・r12 109 土坑東西断面土層 (南から)



1 2-3区 B8s12 107 土坑完掘状況 (東南東から)



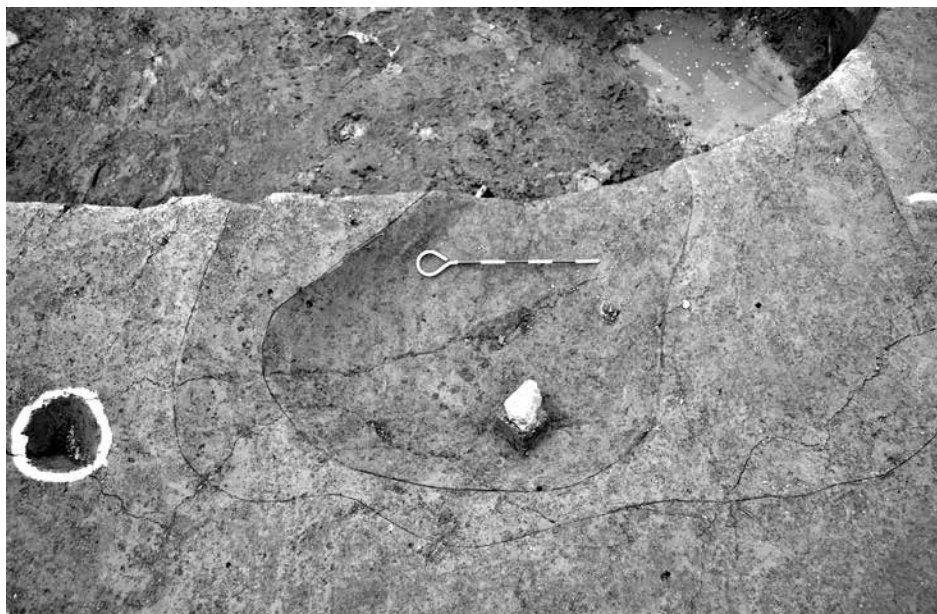
2 2-3区 143 溝完掘状況 (北北東寄り北から)



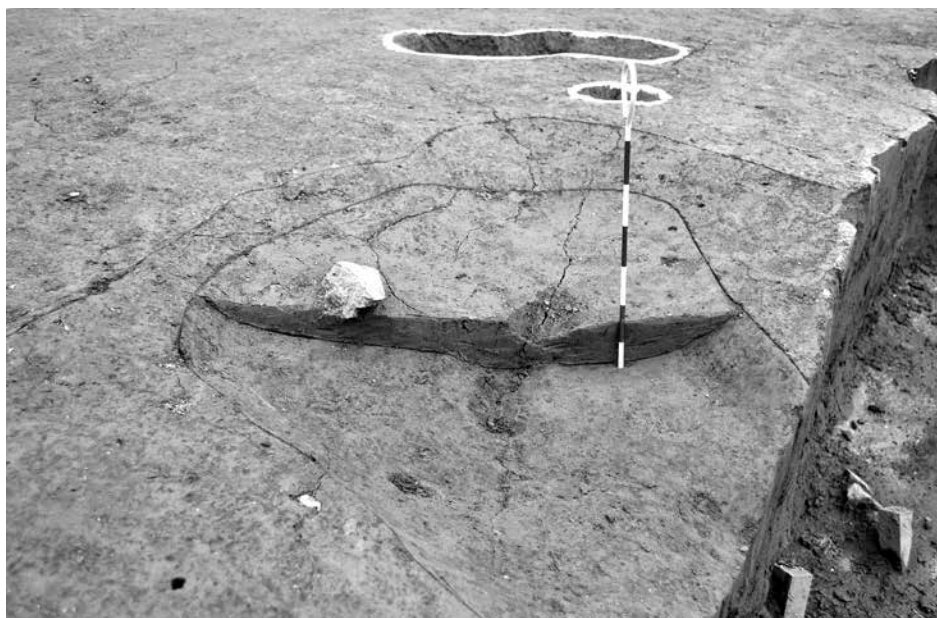
3 2-3区 B8s・t11 143 溝東西断面土層 (南南西寄り南から)



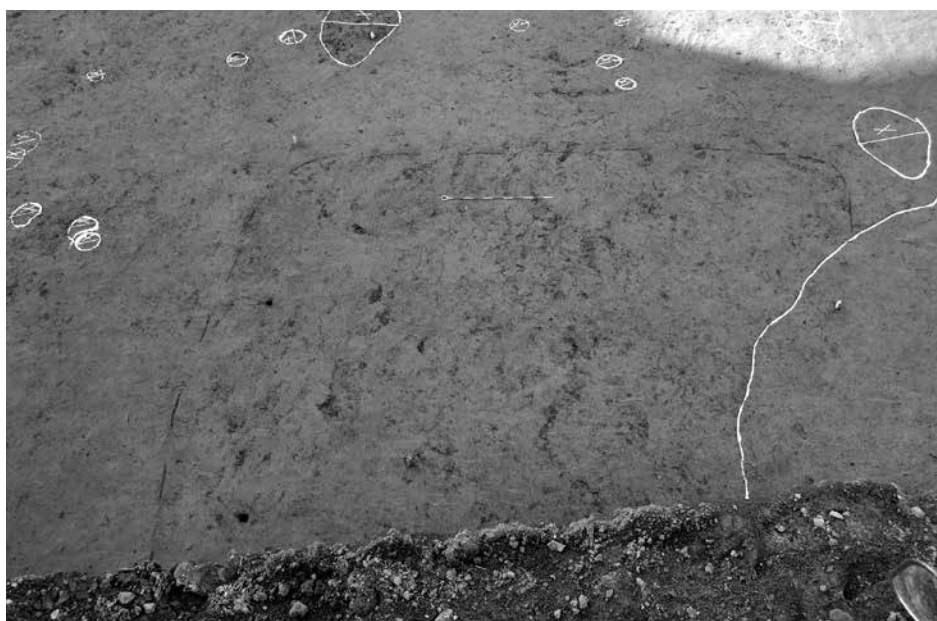
4 2-3区 B8t12 143 溝東西断面土層 (南南西寄り南から)



1 2-3区 B8s12 147 土坑完掘状況（北東から）



2 2-3区 B8s12 147 土坑北東-南西断面土層（北西から）



3 2-1区 B8v13 84 隅円方形状痕跡検出状況（北北東から）



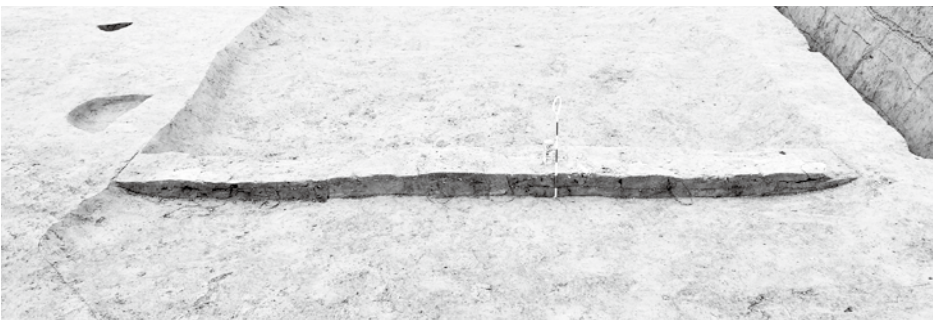
1 2-1区 13区画溝完掘状況(北北東から)



2 2-1区 B8t・u16 13区画溝調査区南壁東西断面土層(北西から)



3 2-1区 B8s・t・u15 13区画溝東西断面土層(南南西から)



4 2-3区 B8u11・12 112区画溝南北断面土層(東南東寄り東から)



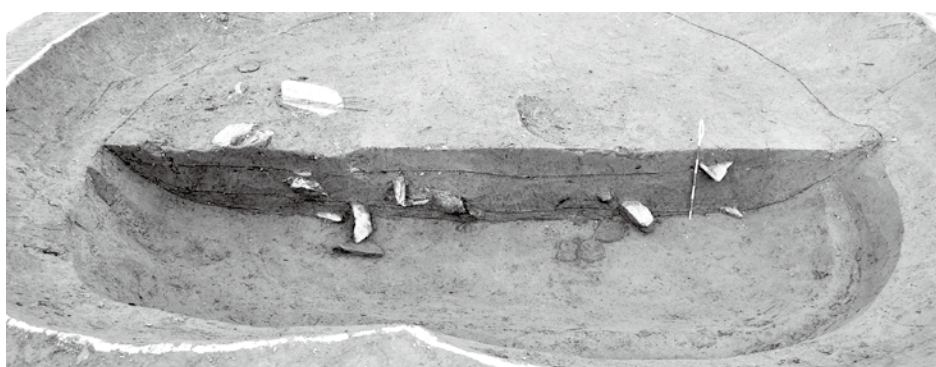
1 2-1区 B8r・s14 14・15土坑上層下位遺物等出土状況(東南東から)



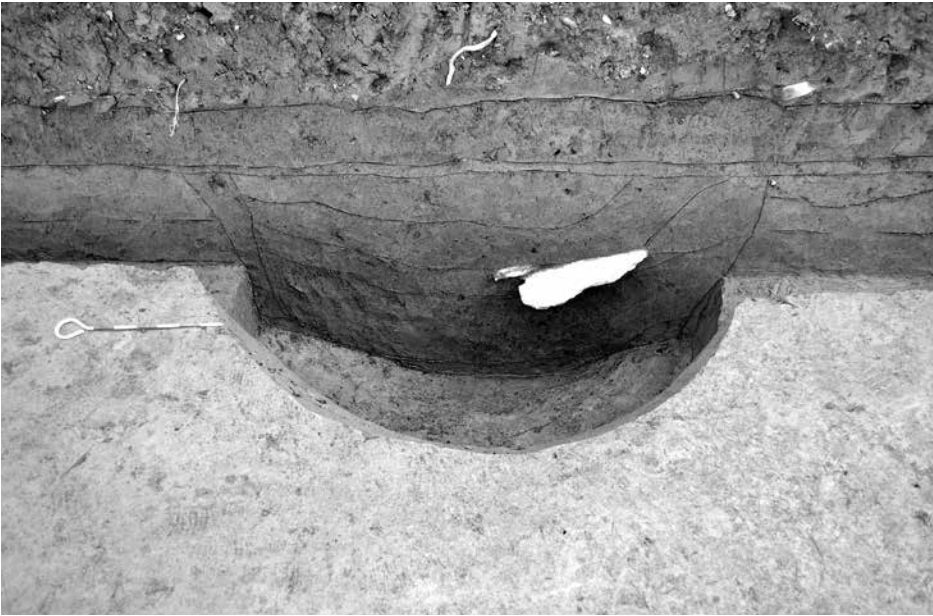
2 2-1区 B8r・s14 14・15土坑上層下位遺物等出土状況(北北東から)



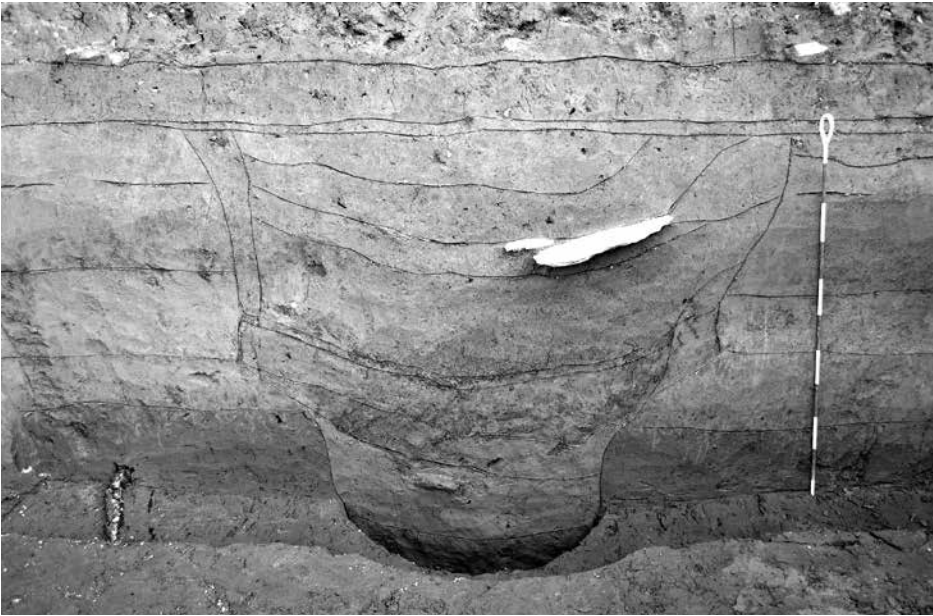
3 2-1区 B8r・s14 14・15土坑上半東西断面土層(南南西から)



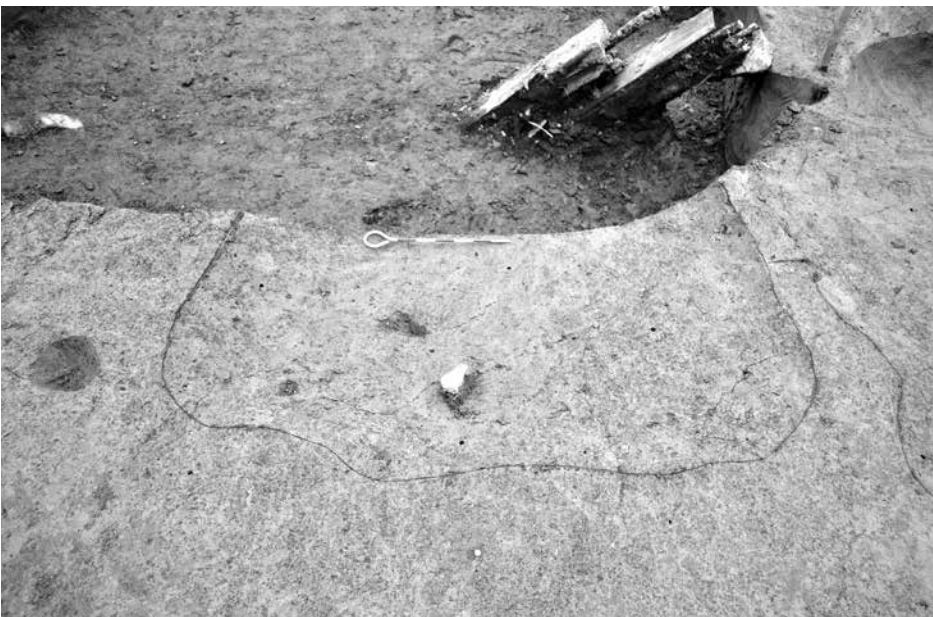
4 2-1区 B8r・s14 14・15土坑下半東西断面土層(南南西から)



1 2-1区 B8r・s16 16 水溜硬化面完掘状況と調査区東壁断面土層（西北西から）



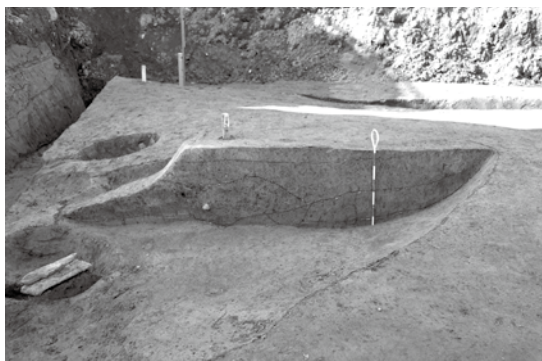
2 2-1区 B8r・s16 16 水溜調査区東壁断面土層（断ち割り後：西北西から）



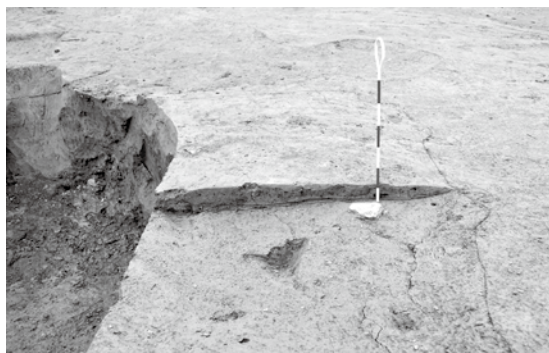
3 2-3区 B8s12 123 土坑完掘状況（東から）



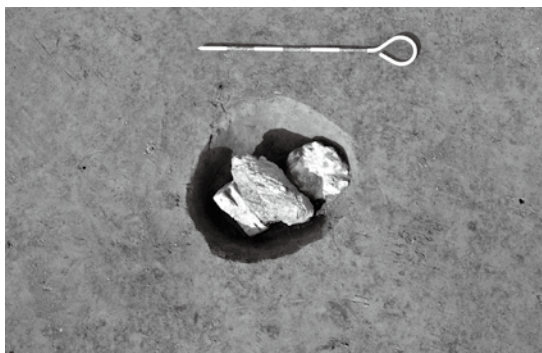
1 2-1区 B8x14・15 92 土坑完掘状況
(西北西から)



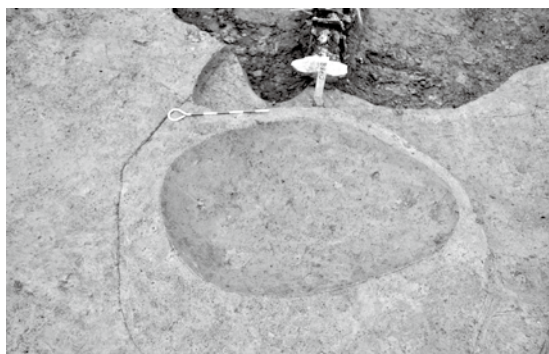
2 2-1区 B8x14・15 92 土坑南北断面土層
(東南東から)



3 2-3区 B8s12 123 土坑東西断面土層
(南から)



4 2-1区 B8u14 63 柱穴根石検出状況
(南南西から)



5 2-3区 B8s・t11 144 土坑完掘状況
(北北西寄り北から)



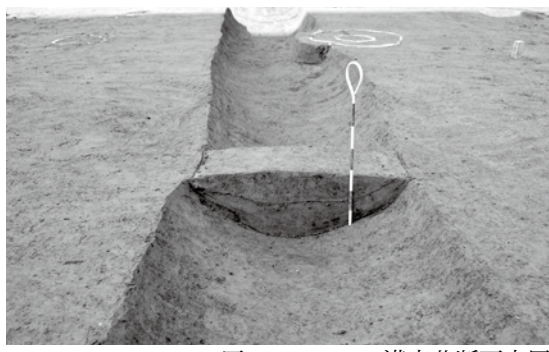
6 2-3区 B8s・t11 144 土坑南北断面土層
(西南西寄り西から)



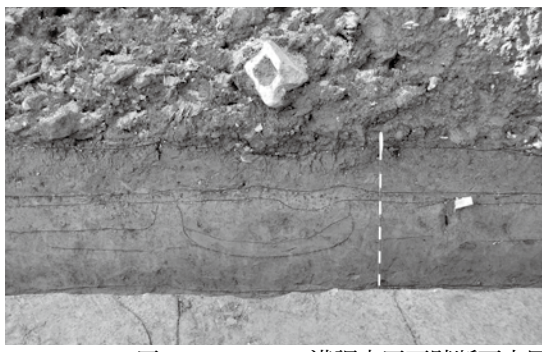
7 2-1区 B8s13・14 17 土坑完掘状況
(南から)



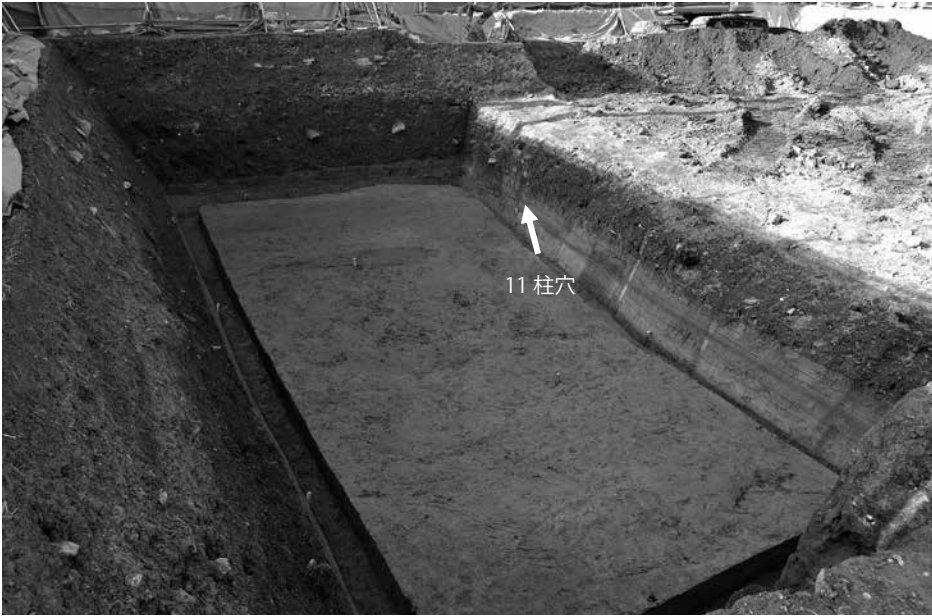
8 2-1区 B8s13・14 17 土坑東西断面土層
(南から)



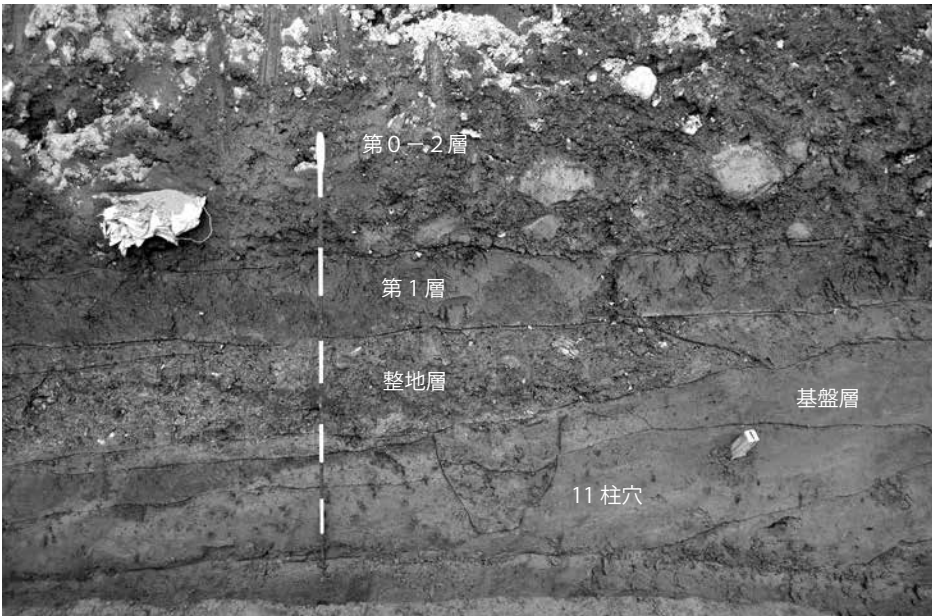
9 2-3区 B8r10 103 溝南北断面土層
(東寄り東南東から)



10 2-3区 B8s10 103 溝調査区西壁断面土層
(東寄り東南東から)



1 2-2区 調査区全景 (南東から)



2 2-2区 B8y16 調査区北壁断面土層 (南南西から)



3 2-2区 B8y16 調査区西壁断面土層 (東南東から)



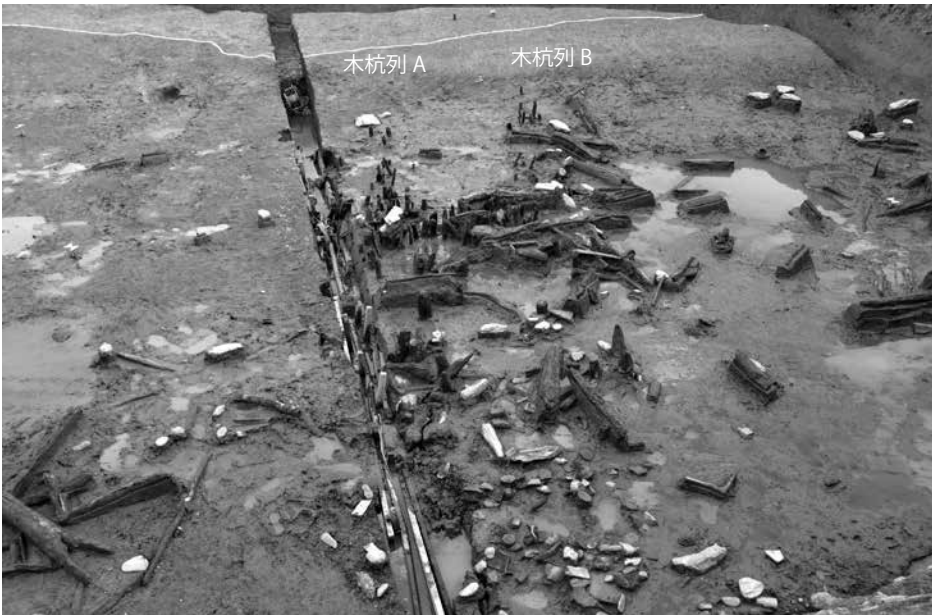
1 1-1区・1-2区 調査地と周辺部の状況（北北東上空から）



2 1-1区 1自然流路第6層系堆積層内 遺物等検出・出土状況（北北西寄り北から）



3 1-1区 1自然流路第6層系堆積層内 遺物等検出・出土状況（南南西から）



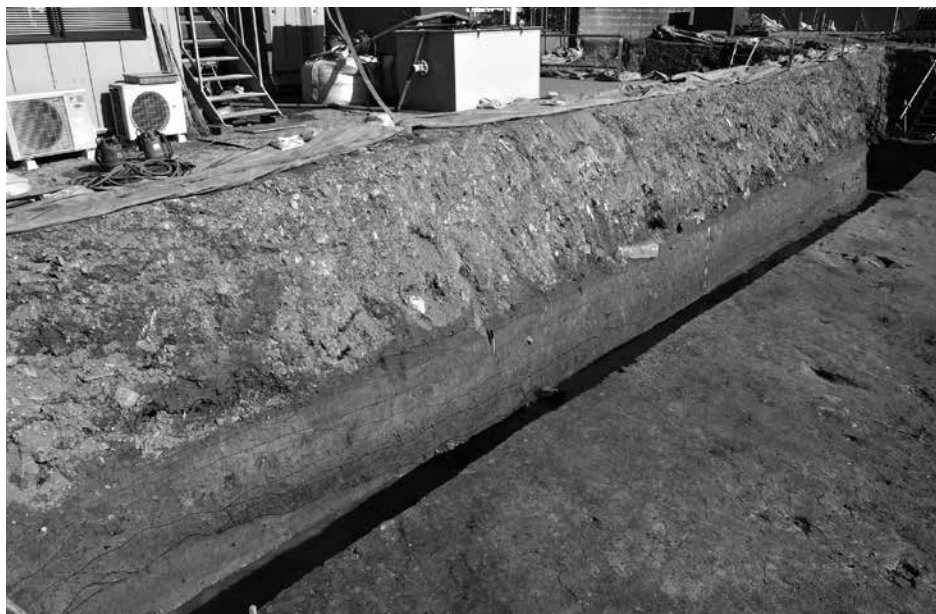
1 1-1区 1自然流路第6層系堆積層内 箭状木杭列等検出状況(西北西から)



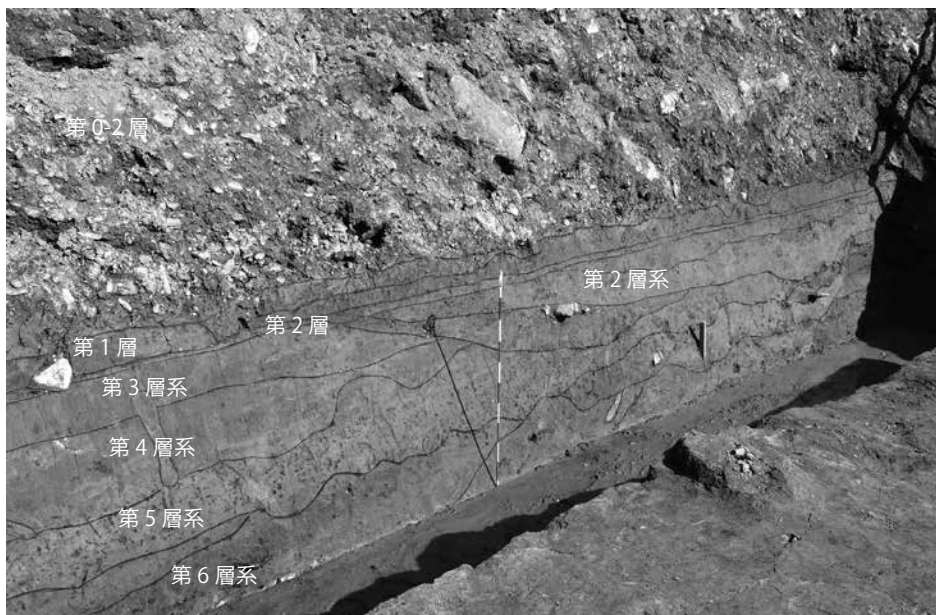
2 1-1区 1自然流路第6層系堆積層内 箭状木杭列等検出状況(東南東から)



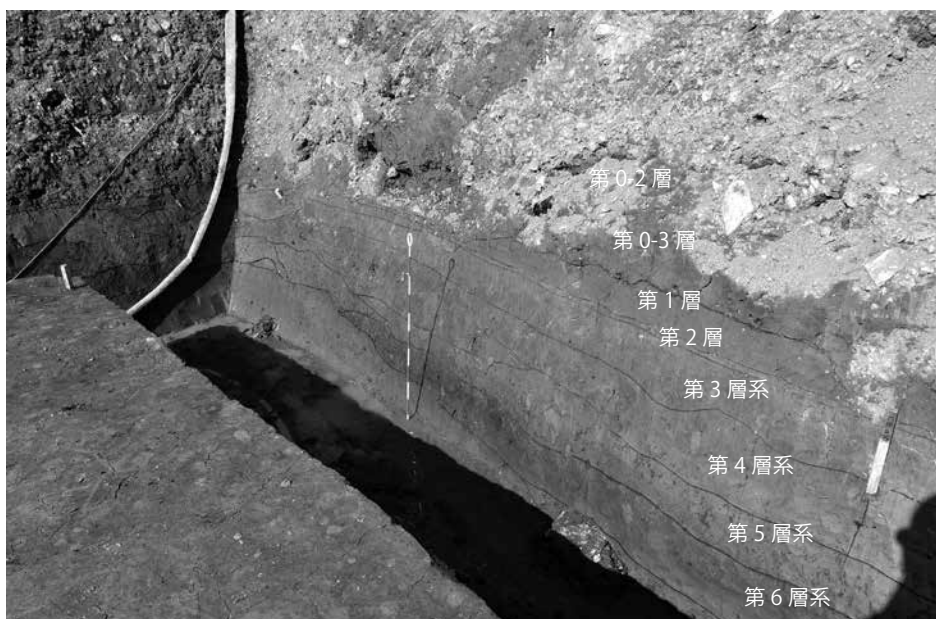
3 1-1区 C8a12・13 1自然流路第6層系堆積層内 箭状木杭列等検出状況細部(北北東から)



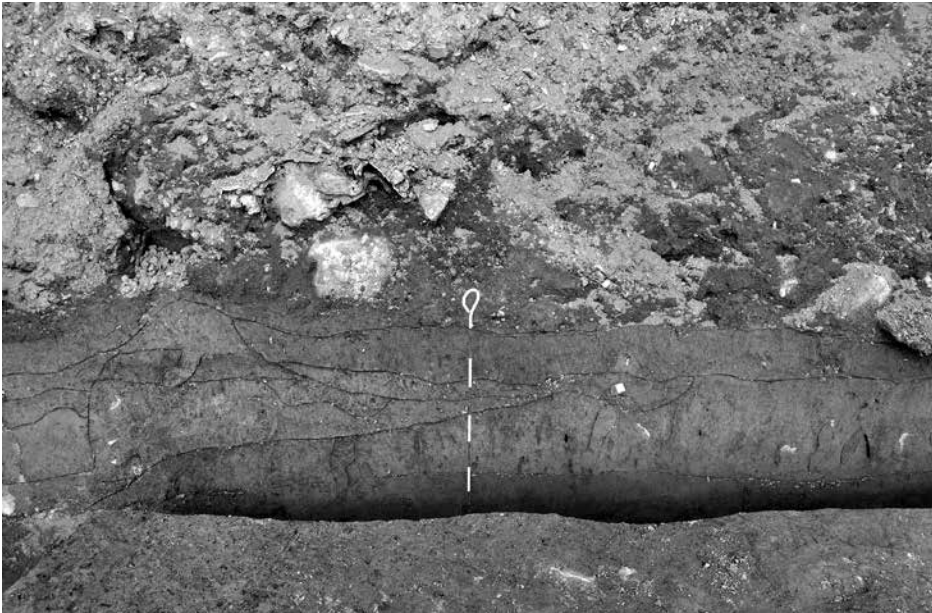
1 1-1区 調査区北壁断面土層（西南西から）



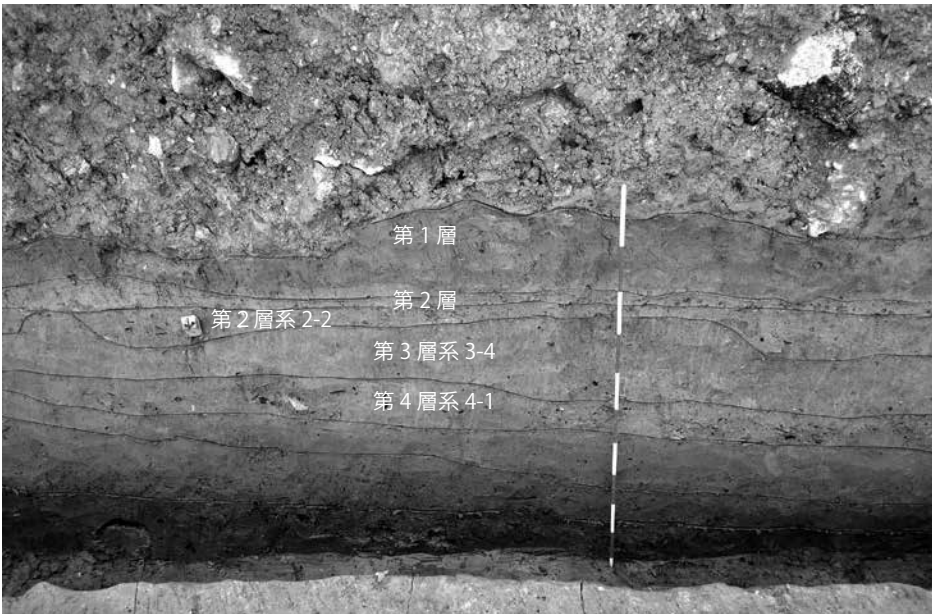
2 1-1区 B8v11・w10・11（調査区北東側） 調査区北壁断面土層細部（西南西から）



3 1-1区 C8a・b9（調査区北西側） 調査区北壁断面土層細部（南東から）



1 2-3区 B8v11 1 自然流路東肩口調査区北壁断面土層細部（南南西から）



2 1-1区 C8a・b14 調査区南壁上半部断面土層細部（北北東から）



3 1-1区 C8a・b14 1 自然流路 調査区南壁下半部断面土層細部（北北東から）



1 1-1区 C8b12 中央～南半 1 自然流路第6層系堆積層下端6-3内遺物等
出土状況(北北東から)



2 1-1区 C8b11 南端 1 自然流路第6層系堆積層内 3木組み構造物検出状況
(東南東から)



3 1-1区 C8b11 南端 1 自然流路第6層系堆積層内 3木組み構造物
杭断ち割り状況(東南東から)



1 1-1区 C8a10 南端 1 自然流路第6層系堆積層内 農具 W8 出土状況 (東から)



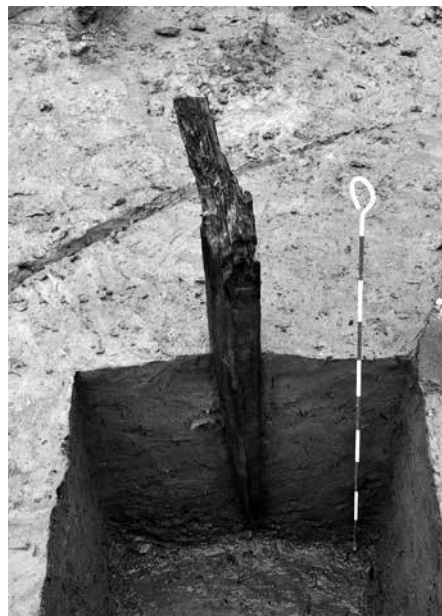
2 1-1区 C8a・b11 南端 1 自然流路第6層系堆積層内 建築部材 W16 出土状況 (南東から)



3 1-1区 C8a13 北東半 1 自然流路第6層系堆積層内 建築部材 W17 出土状況 (北北西から)



1 1-1区 C8a10 西側法面 1 自然流路第6層系堆積層内 遺物等出土状況(東から)



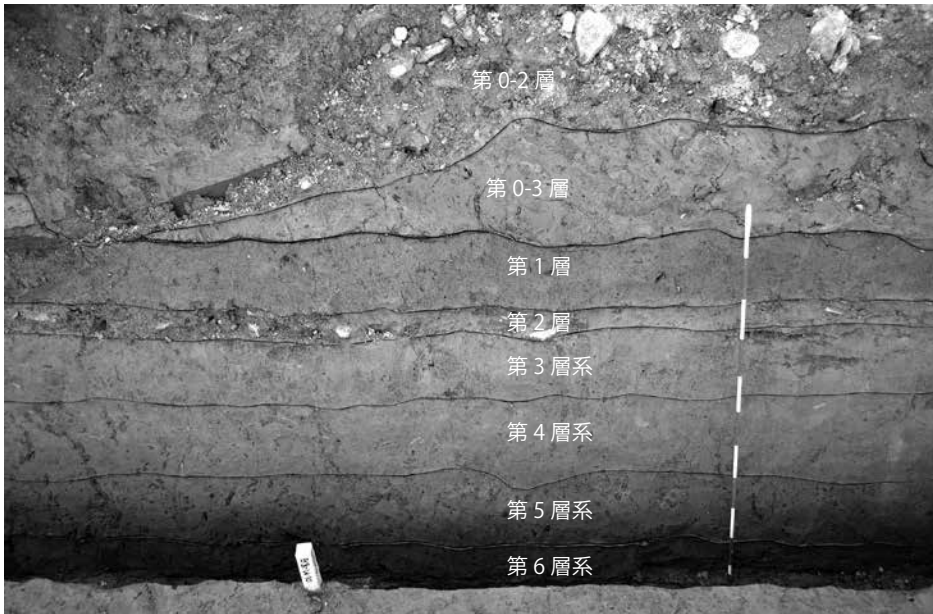
2・3 1-1区 B8y11 北東隅 1 自然流路第6層系堆積層内 土木材 W23 検出状況(南東から)



4 1-1区 C8a12 中央EWトレンチ南壁断面土層(手前、基盤層断ち割り)(北北東寄り北から)



1 1-2区 1自然流路第6層系堆積層内 遺物等出土状況(西北西から)



2 1-2区 B8w10 調査区南壁断面土層細部(北北東から)



3 1-2区 B8w9 南東隅 1自然流路第6層系堆積層内 農具 W1 出土状況(北北西から)

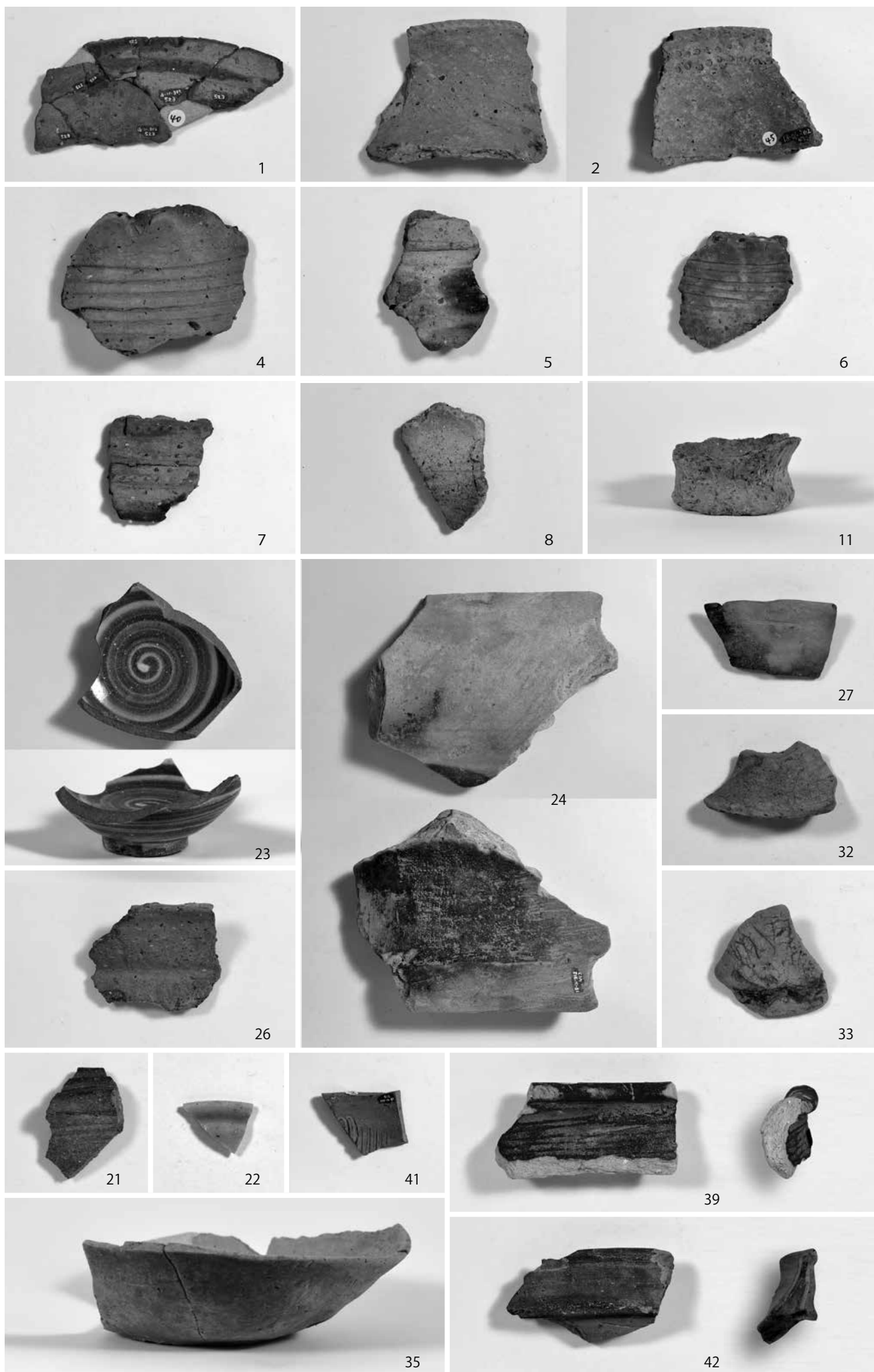


図 27・28 に対応

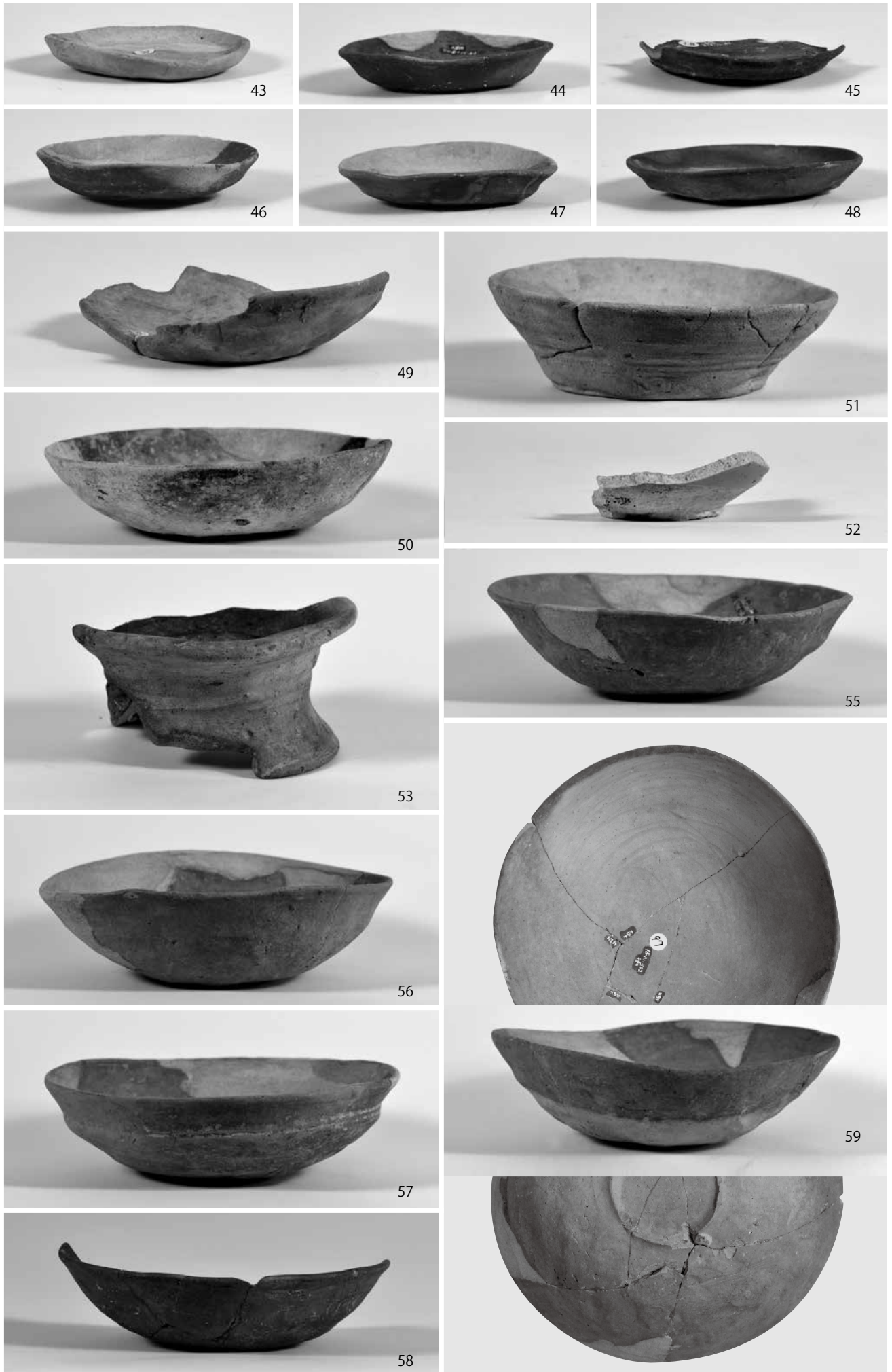


図28に対応

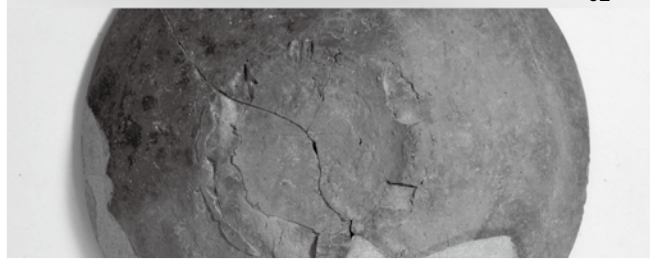
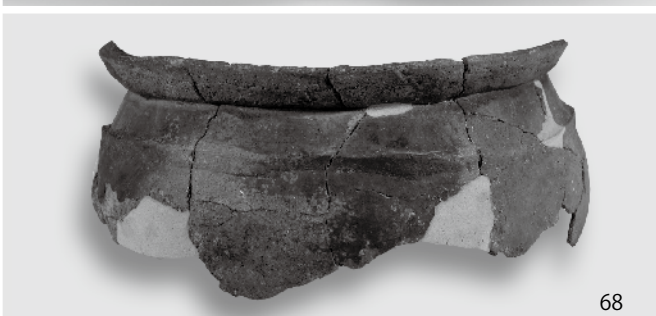
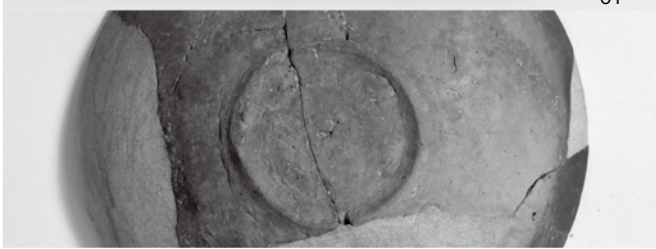
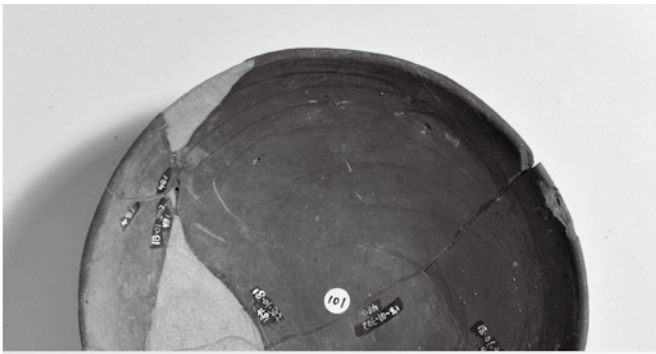


図 28・29 に対応



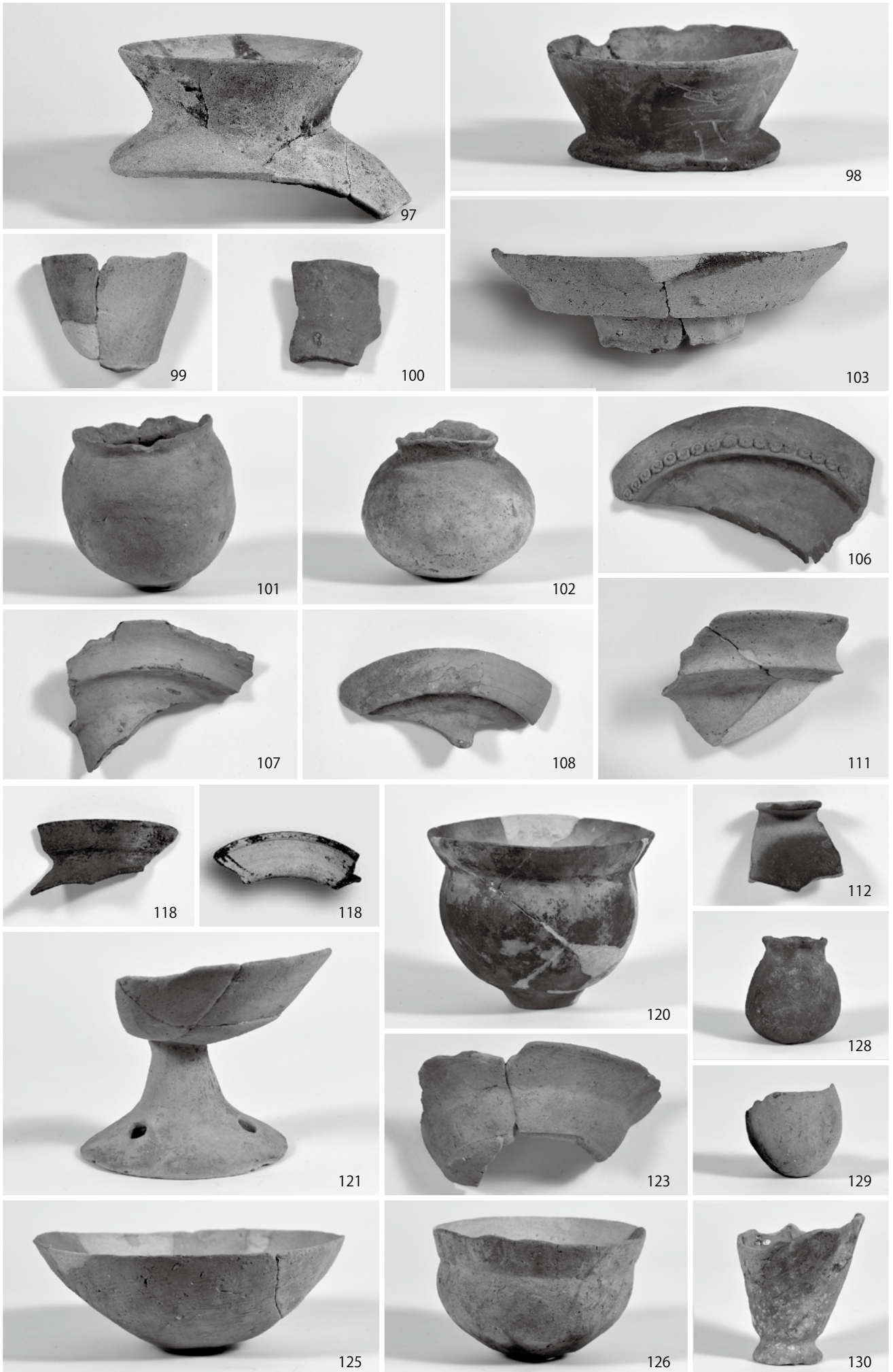


図 38 に対応



図 39 に対応

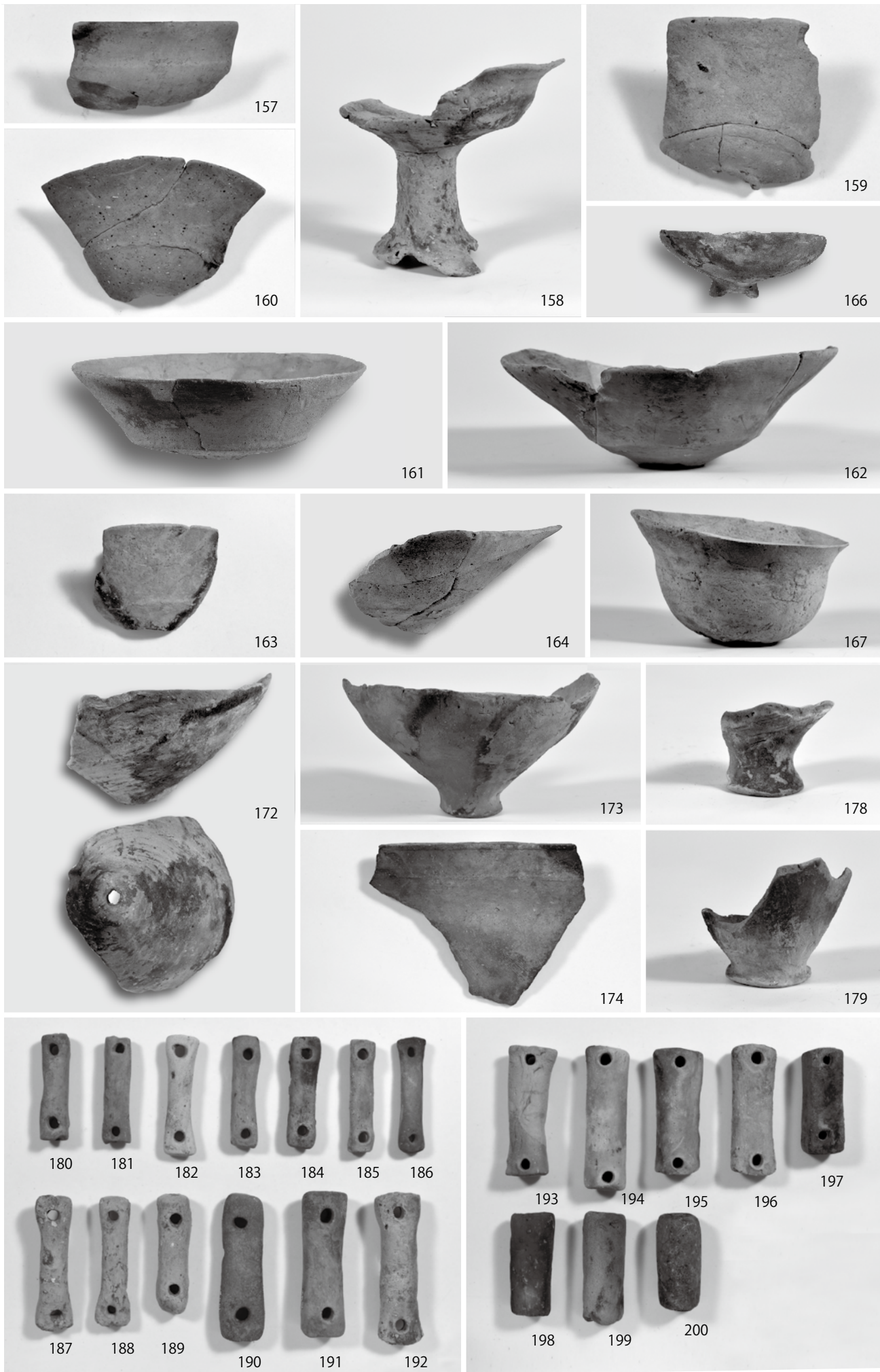
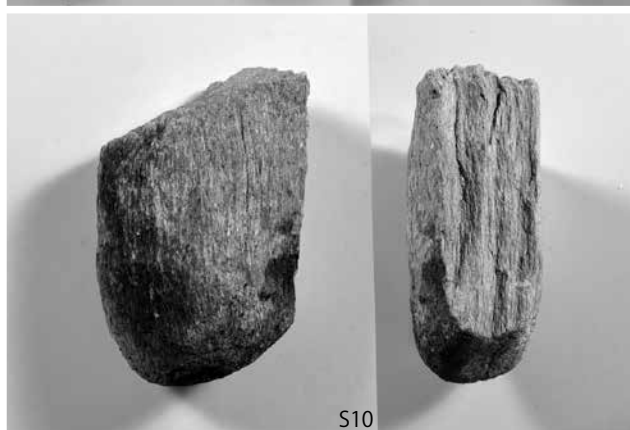
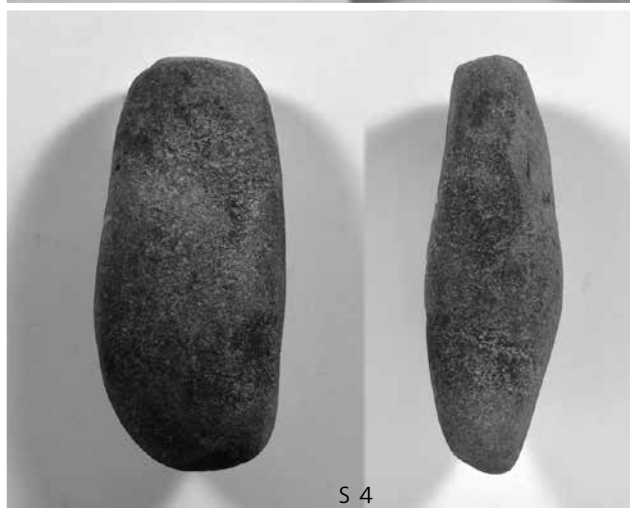
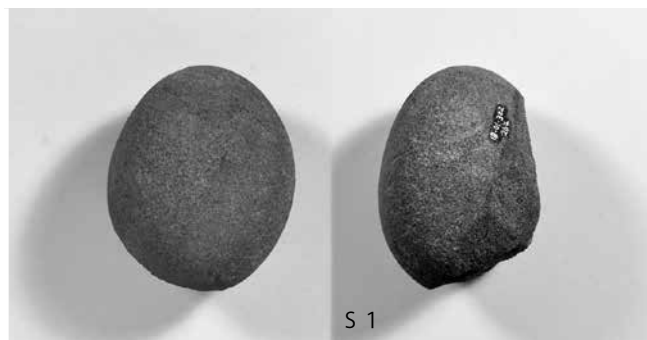


図 40・41 に対応

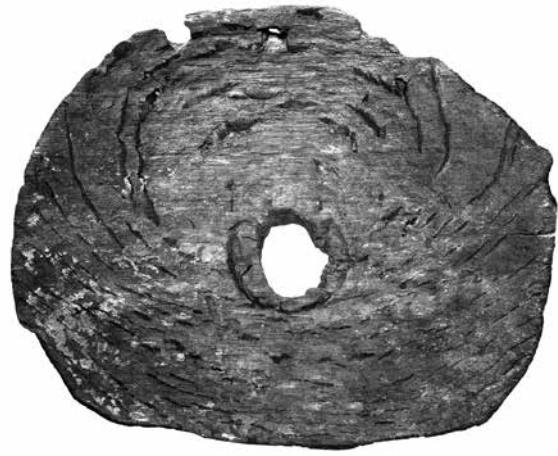


图 42・43 に対応





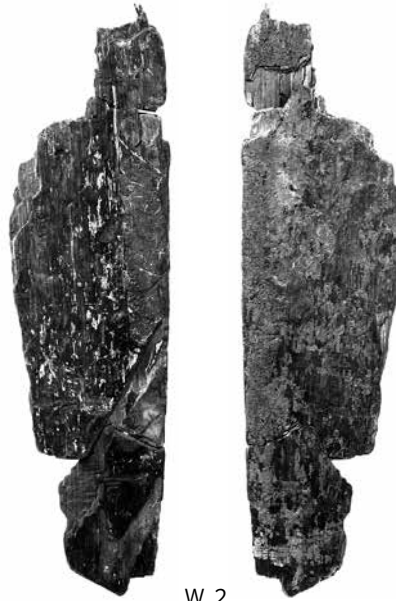
W 1



W 1 内面の隆起



W 3



W 2



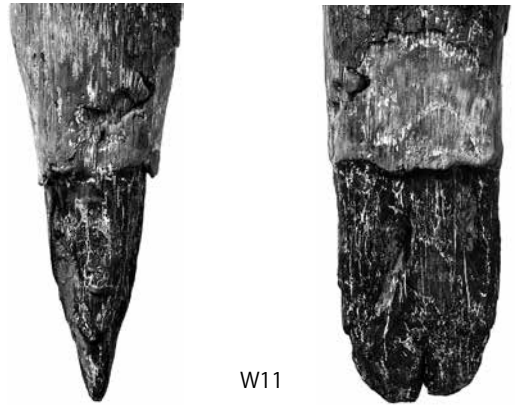
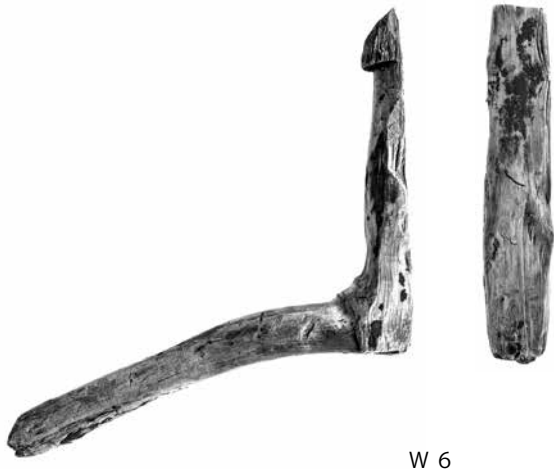
W 4



W 7



W 8





W17



W16



W17



W20



W20



W18



W19



W20



W21



W22



W23

報告書抄録

ふりがな	わだいわつぼいせき							
書名	和田岩坪遺跡							
副書名	和歌山平野農地防災事業 名草排水機場建設工事に伴う発掘調査報告書							
巻次	――							
シリーズ名	――							
シリーズ番号	――							
編著者名	土井孝之、能城修一、佐々木由香、村上由美子、前田仁暉、金原美奈子							
編集機関	公益財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1			TEL	073-472-3710			
発行年月日	西暦2020年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
わだいわつぼいせき 和田岩坪遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやましわだ 和歌山市和田	3020150	302	34° 12' 20"	135° 12' 20"	20181022～ 20190308	921	和歌山平野農地防災事業 名草排水機場 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
和田岩坪遺跡	集落跡	弥生時代	土坑、溝、柱穴、自然流路、 籐状遺構	前期・終末期弥生土器、製 塩土器、土錘、敲石・磨石		前期の弥生土器は、県内 でも古い段階に位置付け ることができ、当該期の 生活様相を探る点におい て注目される。		
		古墳時代	自然流路	土師器・製塩土器・土錘、 須恵器、敲石・磨石		自然流路の上位の堆積層 から古墳時代の須恵器・ 土師器がまとまって出土 した。明確な遺構は検出 できていない。		
		鎌倉時代	水溜、土坑、柱穴、区画溝	土師器、瓦器、須恵器、陶 磁器等		当該期の遺構・遺物は、 少ないながらもまとまり がある。しかし、生活域 の範囲が不明瞭である。		
		江戸時代	特になし	土師器、陶磁器等		遺物全体の中では、非常 に少ない比率を占める。 当該期の生活域の様相が 不明である。		
要約	<p>調査では、大きく西側地区の1区と東側地区の2区で様相を異にすることが明らかとなった。西側地区の1区は大半が下位層の弥生時代前期～後期の遺物を含む埋積に始まり、最終埋積が鎌倉時代もしくはこれに近似する時期となる自然流路（河川）の範囲に当たり、東側地区の2区が弥生時代前期の生活域を含みつつ、主体は鎌倉時代の生活痕跡となる。</p> <p>和田岩坪遺跡周辺は、従来の地理的な理解では低湿なラグーン性低地という生活域の存在の可能性が低いものであった。しかし、今回の調査では、弥生時代前期ないしは鎌倉時代の生活痕跡の存在が明らかとなった。また、地理的な理解の中で読み解かれていなかった南北方向に流向する自然流路（河川）も検出された。</p> <p>また、西側の自然流路（河川）が東側と同じような平坦地になるのが鎌倉時代もしくはこれに近似する時期に入ってからであることも判明してきた。このことは、文献史料等から指摘されている和田川の築堤と当地域一帯の土地開発の時期と関係してくるものと思われる。</p>							

和田岩坪遺跡

—和歌山平野農地防災事業
名草排水機場建設工事に伴う発掘調査報告書—

発行年月日：2020年2月28日

編集・発行：公益財団法人和歌山県文化財センター
和歌山県和歌山市岩橋1263番地の1

印刷・製本：白光印刷株式会社
和歌山県和歌山市雑賀崎2021-3